

移民の生活の歴史 (2)

半田知雄



(注・ここには第4部から第6部まで収録)

目次

(下の数字は原本のページ数)

再刊のことば

第1部 契約移民―金のなる木をさがして

1・第一回かさと丸移民 10

かさと丸のサントス入港／サンパウロ移民収容所の日本移民

2・「配耕」先、六農場の地理 24

3・「配耕」と移民列車 27

4・ブラジル産業史のうえからみたコーヒー農場の地位
ブラジル産業の移り変わり／コーヒー栽培の歴史とサンパウロ州
のコーヒー地帯

5・コーヒー農場における第一回移民 38

コロニア／ズモーン農場の場合／カナアーン農場の場合／フロ
レスタ農場の場合／サン・マルチーニョ農場の場合／グアタパ
ラー農場の場合／ソブラード農場の場合

6・第一回移民の経験―いわゆる「失敗」の原因について 62

7・第二回旅順丸移民 68

ジャタイ―農場／サンタ・マリア農場／サンタンナ農場／第二
回移民の成績とその後の移民輸送

8・移民とはどういうものか―日本の近代化の下積みとなった
農民たち 80

9・ファゼンダ生活の一農年(一九一二―一九二二年) 87
農年の切れ目―出るもの、はいるもの／コルション作り／はじめの

食べ物／コーヒーを入れる／ファゼンダの洗濯と薪取り／鋤の柄のすげ万、その他野良仕事に必要なもの／便所のこと／仕事はじめ―出勤風景／除草の仕事を習う／コーヒー園の食事／たばこ一服／帰宅（プラ・カーザ）／ビツシヨ・デ・ペー（砂蚤）／土曜日／斧つかいの名人／土曜の晩／日曜日／コーヒー園の間作／夜逃げのこと／ブラジルの夏／病人、葬式／パン焼きと豚殺し／日本移民の食生活／新移民とブラジル語／子供のたのしみ／ファゼンダの正月／臨時収入と不慮の欠損／作物のとり入れ／牛車の季節／山たて（コロアソン）／パトロンの農場入り／コーヒー採取（アパンニヤ）／コロノの暮らしぶり／日本人コロノの家！ファゼンダの人的環境／ファゼンダの組織とコロノ制度／フェスタ（祭り）の多い六月／山崩し／総勘定／エンボーラ

10・一九二七年の調査にあらわれた移民の生活 163

第2部 初期移民の都会生活

11・サンパウロ市における初期の日本人 168

12・当時のサンパウロ市 178

13・コンデ街の生活 185

移民にとりつきやすい家庭労働／大工、塗工と家具商／自動車運転手／在留同胞のオアシス、コンデ街

14・ビツシヨ賭けの話 198

15・シネーマ 203

- 16・ フロントン 206
- 17・ あそび 209

第3部 独立小農への発展

- 18・ 独立小農と近代自作農の出現 214
- 19・ 自作農へのあこがれ 217
- 20・ 米作をめざした初期の日本人 221
- 21・ 日本人植民地の三つの型 224
- 22・ 原始林の開拓 225
- みどりの地獄
- 23・ 原始林開拓の先駆者 227
- 測量隊の仕事／ヤマキリ（山伐り＝森林伐採の仕事）／山焼き
- 24・ 新開地風景 239
- 住居／衣服／食物／あらかやまの仕事
- 25・ 初期植民地の一年間 247
- はじめの無知／プランタデイラ／コーヒーの植付け／家づくり
- ／衣服／食物／正月・新年宴会／綿つみ／カザメント（結婚）
- ／天長節／ばった軍襲来
- 26・ 植民地の建設―入植当時の悲惨な経験 262
- 平野植民地の開拓／イタコロミー（第一上塚）植民地の創設／
- ブリグイ植民地／バイベンとブレジョン植民地
- 27・ 地権問題―植民者にふりかかる人為的災難 289

第4部 植民地建設途上の諸問題

(下の数字は本文庫のページ数です)

- 28. 植民地の自治機関と教育 13
- 日本人会・青年会／小学校／青年の夜学
- 29. 移民社会における結婚 45
- 30. 連れ家族の悲哀 59

第5部 地方史―各植民地の歴史

- 31. サントスおよびジュキア線の同胞 67
- 第一回移民と当時のサントス市／サントス市およびその周辺の邦人とその職業／ジュキア線の同胞
- 32. イグアッペ植民地の建設―桂、レジストロ、セツテ・バーラス 98
- サンパウロからレジストロへの道／イグアッペ植民地という名称／桂植民地の開拓／レジストロおよびセツテ・バーラス／初期植民者の生活／産業の移り変わり／植民地夜話／現勢概覧
- 33. 奥モジアナ方面の米作者 139
- 初期の人たち／米作者の特殊ないき方／二種の分益農／初期の米作法／低湿地の米作／台地の陸稻（おかば）づくり／初期の大農とその生活／ジャーナリズムに喧伝されなかった奥モジアナ地方／イーリヤ・

グラランデの悲劇／冠婚葬祭／追補

34・カンポ・グラランデにおける沖縄県人の発展―第一

回移民の足跡をたどって

182

カンポ・グラランデ周辺の開拓／市外と市内の日本人
／変わりつつある生活

35・サンパウロ市郊外の農業と日系農家の生活203

郊外農業のはじまり／郊外農家の生産と生活様式／
元祖自慢／各集団地の歴史／当時の販売法と天秤姿
の野菜売り／初期の運搬機朗とトラックの出現／貧
弱な生活程度／近郊農業の特殊な例外／都会との文
化交流と生活の改善

36・アリアンサ移住地の特色

233

確実なる計画と秩序と統制のある組織のもとに／移
住者は出稼ぎものではなかった／先駆者の苦闘／初
期入植者の生活／移住者が直面した現実／「アリア
ンサ」というところ／「コーヒーよりも人をつくれ」

37・ブラジル拓殖組合の創設になるチエテー移住地

250

移住者の不満と事務所員の苦勞／初期入植者の生活
／入植者は依然として少なく……／市街地（ノーボ・
オリエンテ、現ペレイラ・パレットス）の発展／漬物
のにおい

38・多くの障害をのりこえて建設したバストス移住地

- バストス移住地／移住地の經常方針／開拓の第一歩
 ／植民地の動き／初期移民者の生活／満一年の保健
 状況／市街地および小学校建設／十一年間の入植者
 家族数／失敗した土地選定法／やせ地に栄えた産業
 ／バストス移住地の特色／植民者の精神的傾向／ス
 ポーツのバストス／郷土愛／現在のバストス市
- 39・旧移民の多いトレス・バールラス移住地 296
- トレス・バールラスとアサイー市／移住地の特色／は
 じめて原始林に斧をおろす／入植初年度／開拓二年
 目からの植民者の動き／ブラ拓の指導方針／テーラ・
 ローシヤ地帯の植民地
- 40・北パラナ（パラナ州北部）への発展 318
- 一九三〇年以前の北パラナ／ロンドリーナ地方の開
 拓

第6部 全盛期の植民地

（一九三〇～四〇年）

- 41・全盛期のコーヒー地帯 334
- 42・初期植民地全盛時代の生活……………341
- 植民地の気風／小パトロン気分（住居、食事）／
 つきあい（お産とお葬式）／新しい日本人会／青年会
 とスポーツ／弁論大会／巡回シネーマ／流行歌／東

亜共栄圏の夢と棄民思想／ブラジル育ちは気がきかない／初期植民地崩壊のきざしと青年会の反同化的傾向／おやじたちの不満

43・地方都市の出現と発展 375

ペンソンの役割／町の青年会の役割／学生寄宿舎、

裁縫学校／うどん・しるこ屋／地方都市日本人の職

業別／地方都市の生活

44・戦前の植民地における二世の性格 408

45・ノロエステ線における日本人の勢力 426

46・日本人はなぜ農業に執着したか 433

第7部 移民と風物 (以下の数字は原本のページ数)

47・米食と風呂 532

48・日本移民の食物の特長 538

虫の話 542

草の話 550

初期植民地の気風 556

オスピタリダーデ(旅人をもてなす)／相互扶助と平等主義／もののやりとり

52・ブラジルの田舎者の生活 561

住居とその内部／寝室とあかり／食生活／たばこ／入

浴／洗濯／家禽、家畜、その他／作物／性格、趣味、

教養／服装／女たち

第8部 移民社会の中心地サンパウロ市

53. 一九三三年におけるサンパウロ市の日本移民の
コンデ街の様相／コンセリエイロ・フルタード街
／コンデ・ド・ピエヤールとイルマン・シンプリシ
アーナ街／ピニエイロス区

第9部 深まりゆく移民のなやみ

54. 二つのナシヨナリズムの間にはさまって苦し
んだ移民586
55. ナシオナリザソンと外国語出版物（とくに新聞）
の発行禁止590
56. 新聞と、その果たした役割594
はじめての新聞、週刊『南米』／『日伯新聞』の出現
／『伯刺西爾時報』の登場と「日伯」／その他の新聞
／「日伯」「時報」の対立時代／新聞の果たした役割
／各新聞の特色
57. 一九三三年から四一年末まで609
移民二十五周年祭／移民二分制限法／ポルトガル語
のできない教師は日本語を教える資格がない／十四
歳以下の児童に対する外国語教授の禁止令／日語教
師の生活は苦しかった／だれが親孝行を教えるか／

ただ悶々として／かくれて教えても効果はあがらない／二世教師は植民地で孤立した／早く同化した二世とその親たち／二世の自覚のはじまり／サンパウロ市の日系インテリ青年たち／ヨーロッパ戦争と深まりゆく移民のなやみ／一喜一憂の時代／世の中一般が変わっていく／枢軸国民は敵国人／一九四一年、戦前最後の年

58・太平洋戦争中の在伯同胞 付―戦争中の日本移民の心理状態 625

第10部 戦後の混乱と新しい生活への歩み

59・終戦直後における同胞社会の空気 644

あるサロンでの会話／デマはどうして流されたか／計画的な陰謀も片鱗をみせる／「公報」を待つ心理

60・混沌たるコロニアの状況 649

カンポス・エリーゼオス宮の説得／オズワルド・ク

ルースの暴動／終戦一周年／郵便再開／邦字新聞の再刊／永久帰国者の出現

61・テロ事件とその犠牲者 660

62・ブラジル人側に残された資料による臣連事件の理

解 664

臣連事件に対するブラジル人の態度／ブラジルの新聞に見る臣連本部と臣連実践綱領／デマ宣伝と偽造

写真、その他／脅迫行為のいろいろ／各地指導者の臣連
理解／偏執狂的頭脳の指導者たち

6 3．戦後コロニアの対立抗争はどのように解釈された
か 677

6 4．建設への道 680

6 5．「涯しなき思想旋風を衝いて」――終戦後七年の信
念派の理論 685

6 6．人種的偏見のない明るさ 691

追補 日本移民の人種的差別観

6 7．一世青年と異人種間の結婚 698

6 8．「新来」と「ブラジル・ボケ」 700

6 9．二世と日本文化――逆効果をもたらした教育 704

7 0．日本移民の宗教生活 710

第11部 コロニア統一への動き

7 1．戦災同胞救援運動 724

7 2．トビ魚一行の訪伯――涙で仰ぐ日章旗 726

7 3．サンパウロ市創立四百年祭への協力運動 731

日本館のにぎわい／日本美術紹介としての役割

7 4．サンパウロ日本文化協会の創立 738

第12部 コロニアの現状

- 75・戦後移民の渡伯 付―日本の企業進出744
76・一九六七年五月の皇太子夫妻歓迎について751
77・現代の奥地シチアンテ（北パラナ同胞の現状）

757

ロンドリーナ市のスケッチ／農村をのぞく／シテアンテの生産様式（過去）／シテアンテの生産様式（現在）／奥地の非コーヒー地帯／今後の行き方に対する諸問題／二世の成長とその教育／二世の政治運動／二世の結婚問題／世代の差と教養のへだたり／寺院、盆おどり、その他いろいろな「会」／冠婚葬祭／家庭生活／最後に、さらに奥地の町を

78・単一性から多様性への発展781

二世が大きくなって／土地がやせて／勝ち負けの争いもあって／教育の目標もかわって／自由な選択ができて／階層の分化もおこって／社会的地位の入れかわりもおこって／新しい方向への動きもあって／発展の意味もかわって／発展のための必然的多様化

79・エピローグ785

用語解説789

参考文献794

（注・原本に写真があるが、小さくて不鮮明なので転写せず）

第4部

植民地建設途上の諸問題

28・ 植民地の自治機関と教育

「日本人が三人集まると日本人会をつくる」

「ヨーロッパ人はまず教会をたてる。日本人は小学校をたてる」

「入植」当時は、どこの植民地にも、いわゆる「事務所」なるものがあつた。植民地建設者、土地ブローカー、土地会社等が、土地購入希望者の案内、土地代の徴集、その他事務上の必要からであつたが、同時に、入植者の便宜をはかつて、植民事業をスムーズに進捗させるためにも、なければならぬものであつた。ことに、入植者が奥地生活には全然経験のない初期のころ、あるいは、日本からの「直来植民」であつた場合は特にそうであつた。後期になつて、土地購入者に、ブラジル生活のベテランが多くなると、事務所は駅のある町とか、遠く離れたサンパウロ市にあつても、べつに不都合ではなくなつてく

るのである。

植民者たちは、病人がでたからといって事務所へかけつけ、井戸の水が出ないといつては相談にいき、カメラダ（人夫）が難題をもちかけたといつては事務所の戸をたたく。道が悪いといつては文句をいい、作物のみのりが悪いときは、あんな悪い土地を売りつけたから損をしたのだ、とどなりこむ。事務所はできるだけの世話をし、相談にのり、また、農業技術の指導もする。

しかし、植民者にとって、事務所は、いざという場合にかげこむのにいちばんたよりになるところではあるが、どこかしきいが高い。植民者には、「お役所」という感がないでもない。植民者同士の利害を、なにもかも事務所へもちこむわけにはいかない。ことに教育問題などになると、事務所がいつさいの費用をうけもって、教育の施設をほどこす、という約束はない（例外はあつたらう）。

どうして学校をたてるか、学務局の許可をえるにはどうしたらいいかなど相談にのってもらえるし、ときには、先生の世話ぐらいしてもらえる。しかし、どこに学校をたて、どれだけ月給を払えばいいかなどは、もう植民者の便宜が中心となる。それに、みんなが寄り集まって、勝手な熱をあげ、気楽に飲めるところがほしい。こうした気持ちから、植民地の自治機関が生まれるのである。

日本人会・青年会

「日本人が三人集まるところ、必ず日本人会がある」といわれたほど、日本人は集まっては会をつくった。植民地といっても、必ずしも知人、友人のみの集まりではないから、まず、「親睦」が必要だと考える。親睦とは、おやじたちの飲み食いのことであつた。みんなが親しくなつて、「植民地の向上・発展」につくすこともたいせつだともいう。さしあたって、道路がいたんだ、橋が落ちた、といつても、すぐ郡役所にかけてこんで、工事をねがいでても、そんな費用はないから、自分の住んでいる区域内のことは、自分のいいようにしたらよからう、といわれるだけだ（なるほど、植民者は、まだ税金など払っていなかったらう）。そうすると、植民者一同が協力して、道ぶしんをやらなければならぬ。また、不幸にして病気で仕事ができないような家族ができたなら、「加勢」も必要だ。

みんなのでかけて行って、一日働き、晩には集まつて一杯やる、というのも悪くはない。家をたてるにしても、材木集め、こけら割り、こまいかき、泥こね、十数人集まれば一日仕事だ。ここでもまた一杯やれる。

とにかく、みんなであれば、はかがいくし、あとでた

のしめる。相互の「親睦をはかり、植民地の向上・発展につくす」、日本人会創立の「目的」がりっぱになりたつ以上、ぜひつくらねばならない、という意見がでる。どこの集団地にも「世話好き」がいるもので、隣近所は晩になってから、日曜日などは、離れたところへ、この用事にかこつけ、飲みに行く。「植民地の向上・発展」について一席ぶっている間に酒がでる、御馳走がでるで、けっこうたのしいのである。

植民地の向上・発展のために、ぜひしなければならぬ「事業」は、教育であった。いや、これが子供をもっている親として、いちばん大きな、集団地をつくる目的だったのではないか。「出稼ぎ」にあきらめをつけ、長期作戦でがんばるとすれば、無教育のままではおっついておいた子供たちをどうにかしなければならぬ。「学校ができるといので入植しました」という者すらある。せっかく金を儲け、錦をかざって帰国する日が来ても「無学文盲のカボクロども」をひきつれて、日本へ帰れるだろうか？ どんな我利我利亡者でも、子供たちを徹底的に犠牲にする気持ちはなかった。

ヨーロッパ移民やブラジル人が植民地をつくると、必ず、中央のパトリモニア（予定市街地）に教会をたてる。

日本人はまず学校をたてる、といわれている。

こうして、日本人は、自分たちの集会所や社交場としての「会館」をたてるまえに、まず学校をたてようとするのであった。はじめのころは、学校に集まって村の相談ごとをし、また飲み食いもした。

むろん、青年会もできる。そして、日本人会館よりも青年会館のほうがさきにできることもある。その理由は、「運動会」や「親睦会」などの準備やあとかたづけを青年たちの仕事としておしつけるために「物置き」がぜひ必要だからである。ここで、青年たちはゆっくり話し合える。

ただし、青年会は必ずしも青年たちの自発的な気持ちからだけ生まれるものではなかった。おやじたちの意見や見栄からできることも多かった。なぜこんなことになるのか、それは初期移民たちの家族の構成によるもので、一家のたいせつな働き手として、日曜や祭日などでも仕事を休まれることを、あまり好まなかったからである。さらに、子供ではないから、もう日本語学校へかよわす必要もない。家長と同じように、あるいはそれ以上働いて、一日も早く帰国することに努力してもらわねばならない。それに、家長たちの気になることは、若いもの同士が集まると、どんなことを話し合うかわからない。あんまり知恵がつくと家をとびださないともかぎらない。これはたいへんである。言葉がわからないうえに、気心

もしれないカマラーダをつかう不安のために、家族労働だけにたよつてきた移民たちにとって、この「連れ家族」の青年にでられるくらい大きな打撃はない。彼らを家族員として自分のところに引きとめておくには、彼らの気持ちができるだけ保守的なものにとめておく必要がある。ここに、青年会に対する不安があった。しかし、村（植民地）に、学校ができ、また、おやじたちの親睦・向上を図る日本人会がある以上、青年だけをすてておくわけにはいかない。第一世間体がわるい（青年会といつてもはじめは男子だけ、あとになって処女会ができ、またそのあとで婦人会ができるが、それはずっとのちの話）。

むろん、青年仲間にも、向上心のあるものがあつて子供たちが日本語を習うなら、自分たちはブラジル語（注一）をやるう、などといいだすものがある。すでに、植民地へはいるまえ、ファゼンダ（コーヒー農場）や「契約地（注二）」で家長たちよりも早くブラジル語をおぼえてきた彼らは、町へつかいにやられ、ブラジル人と接触する機会が多い。

もっとブラジル語ができたら、という気持ちは、家の中だけで、いばりちらしている家長よりもつよい。こうして、青年たちのためにも親睦・向上の機関がなければならぬ、といいだすものもある。おやじたちの意志に反しても、青年会が生まれざるをえない。だが、せつかく

会館ができて、あまり集まりがよくない、というのが実情であった。ベースボールをやるにしても、あるいは会場充実のために、椅子や腰かけをそなえるにしても、どうしても金がいる。ところが、家長や主婦の弟だ、いとこだ、という「連れ家族」の青年には金がない。おやじたちにいわせると、食うものを節約してまで青年たちのために金はだせない、必要なら自分でかせいで金をつくれ、というのである。青年会に独立性がないのは、金がないことであり、身分的に家長に従属しているものが多かったからである。そこで、日曜・祭日には、みんなしてカメララダ（日給仕事）にでるか、それとも、土地を借りて、協同で作物をつくり、その収益をもって、会の費用にあてる、という方法をとることになる。が、いよいよ協同作業の日になると、なんとか文句をつけて、青年を家から出さない家長もある。また、家長がうるさいからといって、これ幸い、出てこない青年もある。こうして、青年会はなかなかふるわなかった。そのうち、弁論大会とか、ベースボールの対抗試合とかがあつて、村の評判にかかわるようなことがあると、これが日本人会の問題になつて、「青年をみすてるな！」というような叫びもあがる。

こういうわけで、まだ、まだ、家父長的な雰囲気によかつた初期移民の植民地では、会館があるなしにかか

わらず、青年会の自立性はなかなかのぞめるものではなかった。

学校経営と同時に、たいせつな日本人会の仕事は「天長節祝賀会」の開催であった。フアゼンダにいた時分は、天長節も新年と同様、ただ飲み食いの集まりでよかった。ところが、学校ができる、会長は、学務員の上にたつて何かもつと、おごそかな態度なり地位なりを示さねばならなくなる。それには「天長節祝賀会」を催し、その祝賀の式に、教育勅語を読むか、祝賀演説をぶつかしなければならない。そうして、はじめて植民地日本人会長としての地位が確立すると考えるのであった。

はじめは「明治時代の百姓」のこととて、それほど学問のある人は集まっていなかったから、勅語奉読などは学校の先生にまかせる。祝辞も、先生に相談して、書いてもらったものを読みあげるか、模範演説集でもみつけてきて、これを暗記してまにあわせる。しかし、いつまでもそんなことをしていたら、日本人会長（すなわち村長）の権威がちつともあらわれぬ。そこでなんとかもつと、はなばなしの式にしたい、おごそかな感じをだしたいと思うものがでてくる。それに「来賓」などといって事務所の人たちや町の有力者たちをまねくようになる、村の顔役は「このおれ様」だということを、みとめ

てもらいたい人間もでてくる。そこで、じわじわではあるが、いままで全員一致で推薦してきた会長にかわって、おれがでようという人間のポリチカ（策動）がはじまる。それには、現会長の無学、無能をいいたてるにかぎる。といつても、候補者に、学問、良識があり、指導力もあるというのではない。あの祝辞は学校の先生に書いてもらったものだとか、読み方がなっちゃおらんとか、模範演説集の棒暗記じゃちつとも感じがでないとか、百姓の集まりのなかでは問題にもならないようなことに、ちよつとばかり意見を出す程度ではあるが、そういうことにも簡単に共鳴するものもでてくる。そして、年の終わりになると、総会となり、今度は、「植民者一同の意志によりまして……無記名投票による選挙にいたします……」というところまでもつていく。

そこで、会長、副会長、学務員、書記、会計、その他何々部長の選挙となる。開票の結果はめでたく村のポリチケイロ（策士）が会長に当選する。そうすると、彼を支持していた司会者（もちろん彼も幹部の一人として当選しているのであるが）は立って、「今回、植民者一同の意志によって、会長がえらばれたことを祝し、こうして村の自治組織ができあがった以上、村の名誉と信用を獲得するために、新役員の顔ぶれを新聞紙上に発表することが必要である」と説く。

「幹部にえらばれた一人として、こういうことを提案するのは、いささかおもはゆい感じもいたすのでありますが、これは当植民地がいかになりっぱな組織をもっているかの証拠でありまして、この際、私個人の立場などは無視して、これを世間に発表することが、ただに当植民地だけのみでなく、ひいては在伯同胞一般のためであり、海外にある日本人の誇りを示すものでありまして、ぜひ皆様のご賛同をえたいのであります」とまくしたてる。

こんなところで、「そんなら広告代はいくらなんだ。高かったら金は出したくない！」なんていう人間は一人もいない。「当植民地の各誉のため、在伯同胞一般のため、海外にある日本人の誇りを示すため」みんなだまつて賛成する。そこでまもなく、サンパウロ市で発行している「邦字新聞」には三段抜きくらいの大広告がでる。何々植民地日本人会総会と役員改選による新幹部の顔ぶれが、堂々と活字になる。

『コロニア五十年の歩み』一〇二ページによると、

「これは戦前の邦字新聞の大きな財源であったことは確かである。極端にいうと、コロニア初期の新聞経営は、一に土地売り、二に団体の役員改選広告によって、ある程度なりたったといわれるくらいだ。川柳子が、『新聞に此段謹告候也と申出る』と皮肉ったのは、このころである」とあるように、新聞に役員顔ぶれを発表するのは、そ

の植民地、在伯同胞、海外の日本人などのためではなく、そこに自分の名があらわれるのが、当時の、単純な植民地顔役にとっては、名誉このうえもないことだったからである。

植民地といっても、まだそれほど貧富の差もなく、多くの人の「加勢」をえて家をたてていた時代、おたがいにほこるべきものはなにもなかった。せめて、会長とよばれ、学務員とよばれることが、わずかに名誉心をみたくしてくれるにすぎなかった。

一九二七（昭和二）年、日本総領事館の肝煎りで「在伯日本人教育会」が生まれ、のちそれが一九二九（昭和四）年「在サンパウロ日本人学校父兄会」となり、各植民地の会長や学務員が総領事館へよばれたり、またその後、学校建築に対して補助金などがでるようになる、「おかみ」と交渉をもつ役員の「格」は高められ、また名誉なものとして役員選挙は村の大きな行事となっていたのであった。

ここに笑い話のような事実がある。そこは東北地方の人たちが多く集まっている植民地であったが、ある敵役のところを訪問した知人が、「今度、役員にえらばれたそうですね、なんですか？」ときくと、「ガグムエンだが」という答え。

「ガグムエン？　というと？」

「んだなア、まあ、文部大臣だが」

との答えにすっかり度肝をぬかれてしまった。本人は涼しい顔で、別にふざけている様子もみえなかつたという。「おかみ」との交渉とか、補助金申請などが、役員の仕事になってくると、今度はいままでもよりも名誉心がみたされ、利害関係にもふれるところがあるので、顔役あらそいは、もっと真剣味をおびてくる。

それに、日本の国粹主義がブラジルの二世教育問題に關係するようになる、古い顔役の良識的な言動につきこみ、過激な言論をふりかざして、あらさがしや、あげ足とりに狂奔することになる。新聞紙上に、失言に対する「謝罪」広告や、「除名」広告がはじめたのもそのころであつた。

会長の演説のなかに「不穩な言葉」がみいだされたとか、学務員の思想がなっておらんとかいつて、顔役の地位をわがものにしようとする動きがあらわれてくる。

これはずっとこのことであり、植民地の歴史からは少しそれるが、一九三七（昭和十二）年、総領事館の主催で全伯同胞を打って一丸とする連絡機関を設立しようとして地方の顔役をサンパウロ市に招集し、相談会をひらいたことがあつた（注³）。このとき、どうしたわけか総領事館指名の地方代表者の名前が新聞紙上にすっぱぬ

かれた。

さあたいへんだ。われこそ地方の顔役だと思っていた連中で、指名にもれたものは腹の虫がおさまらない。とうとう自称顔役の反撃にあつて、せっかくまとまった中央連合日会も、再検討ということになって一時おながれになつてしまった。

当時は支那事変勃発直後で、多くのものが愛国心にもえていたはずであつたが、その愛国心も、顔役たちの名譽心のまえには、「滅私奉公」の実をあげることはできなかったのである。

こういつてしまえば、日本人会などは、無用の長物、名譽心のあらそいの場のように思われるかもしれないが、これは一つの末期現象みたいなもので、「日本人が三人集まるところ必ず日本入会あり」も、やはり必要に応じて生まれたものであることは、みとめねばならない。

前にも記したように、当時の植民地は、なにをやるうとしても、植民者の一致協力がなければできなかった。学校をたてるにしても、「自分のところには就学する児童がないからこれには関係しない」といえば、学齢にある子供をもつ親だけが、すべての費用を負担しなければならなかった。保健のために医者と契約するにしても、植民者一同から、月何ミル（二ミルとか三ミルとか）を出

してもらわないと契約はできなかつた。道路修理だって、みんなにでもらわねばならない。奥地では警察もあまり頼みにならなかつたから、ときには自警団も組織せねばならなかつた。こんなことは青年たちにやってもらえ、といったところで、家長の承認がなければできないことだった。なにか事件がおこった場合に、いちいち植民者を招集して、会議をひらいていたのでは、急の場に役立たない。どうしても組織がなければならなかつたし、公認の代表も必要だつたのである。

ブラジル人のなかには、植民地における自治組織を、国のなかに国の組織をつくる危険な傾向としてうれえたものもあつたが、奥地開拓に従事するためには、その名前が日本人会であろうと何々クラブであろうと、こうした組織をもつことが絶対に必要だつたのである。

ことに学校の問題になると、政府が農村各地に多くのエスコラ・ルラル（三年制）をつくるようになったのは戦後の話であつて、昔は、植民地のほうで学校をつくり、これを公認私立としてブラジル人の先生をやとうか、郡のほうへ寄付して、郡役所を通じて学務局から先生を派遣してもらうか、二つに一つであつたが、正式な先生などはなかなかえられなかつた。ことに女教師の場合などは、日本人植民地には腰が落ち着かず、町から通勤したため、休む日が多かつた。結局、日本人の先生に

子供たちの教育をまかせざるをえない。

もともと、日本人が植民地をつくった動機の一つは、「外人に気がねなく暮らすため」であり、「子供たちに日本語を教えるため」であったから、学校経営は日本人会の最大の仕事であったといえる。

その他、地権問題などおこった場合、足なみをそろえてこれに当たらねばならなかったし、「親睦と向上・発展」のための日本入会の役割は決して小さいものではなかった。ただし、いい指導者が、なかなかえられなかったことは、不必要な顔役あらそいを生むことになったのである。

植民地のものしりの第一人者は、たいがい学校の先生であったが、これも、必ずしも正式の師範出や、その他高等教育を受けたものばかりではなかった。中学卒業などはいいほうで中途退学くらいでも先生をやっているものがめずらしくなかった。

それでも、学校の先生といえば、「エンシャーダ（鋏）のひけないインテリ」というように相場がきまっていて、一般的に、植民者よりも教養は高かった。しかも、日本入会経営の学校である。給料が父兄のふところからであるものであってみれば、「カマラーダあつかい」されることに対して、どこにも異議を申したてるところがなかった。先生はものしりとして一応尊敬はされていたが、一面で

は、ブラジルでは自分の力で食っていけないかたわもの
とみなされる場合も少なくなかった。日本人会をおし
て植民者にやとわれた人間だったのである。だから、日
本人会長や学務員のごきげんをとり、また、ときには彼
らの知恵袋としてかげの力となるよりしかたがなかった。
せいぜい青年指導くらいおおせつかり、彼らの支持に
よって植民地内にある地盤をきずくくらいがせきの山で
あった。決して顔役になることはできなかつたのである。
こうして、日本人会は、名実ともに植民地の自治機関で
あり、その会長は、植民地の代表であつた。もし、その
植民地が有名になれば、町の連合日本人会のほうへも顔
をだし、その幹部におさまることもできた。

ところが、町の連合日本人会になると、かなり利害を
異にした多くの植民地、それから植民者を相手に商売を
している町の日本人たちの会を統合するものだから、領
事館などとも直接交渉をもつこととなり、人物もかなり
しっかりしたものでなければならなかつた。ここでは植
民地内のように会長の役を「たらいまわし」にして交替
していくことはできない。そうすると選挙は、各植民地
の代表がでてきて、二、三のものをめぐって行なわれる
ようになる。人望のある顔役のところなら別に問題
はおこらないが、顔役がそれほどの人物でない場合は、
対立は選挙後といえどもなくならない。そこで、あの領

事館の指名代表だとか、自薦代表だとかのさわぎももちあがることになる。

中央（または連合）日本人会の役割はなんだったろうか。

第一は、その地方の各植民地間および他の地方との連絡機関であった。領事館からある通告がある。これを各植民地に伝える役目がある。どこからか調査を依頼される、これを各植民地の代表をとおしてしらべあげる。郡役所からなにかを依頼される場合、または日本人全体として相談にいく場合、中央日会の会長がその地方の日本人全体を代表する。裁判沙汰でもおこった場合、中央日会の手を経てかねがね連絡のある弁護士をたのむ。視察者がある、まず中央口会を訪問して各植民地へ連絡をとってもらったり、スケジュールをつくってもらったりする。

もし領事さんや大使さまの御来訪などとなれば、中央日会長は名誉のガイド役をつとめる。

それから相互親睦をかねて演芸会をやる。これは町の映画館をかりうけてやるので、各植民地の日本人会や有志の寄付をおおぎ、つづいて植民地の人たちを招待する。もし、中央運動場をつくるというような場合は、青年会とも相談しあって、その駅に係のある各植民地の協力をえなければならぬ。ここで合同競技会やベースボー

ルの試合をやる。

さらに、もっと現実的な問題は、教育のことである。正式に日本語を教えるためには、小学校卒業程度の少年少女を収容する寄宿舎つき私立学校をたてねばならない。日本語を教え、日本の教育をほどこしながら、町の中学校へ通わせる機関がほしい。これは一つの植民地だけではどうにもならない。

このようにして、中央日会は各植民地だけでは可能性の少ない仕事をする。しかし、町には町の日会があるから、中央日会のやることは各植民地の日本人会のように植民者の直接利害関係にむすばれるものは少ない。寄宿舎にしても各植民地の日本人が全部関係することはないのである。

ついでに、地方都市にできる連合青年会について記しておこう。連合青年会は町の青年が地方によびかけてくる例が多い。なぜなら、町には経済的に自立している青年が多かったたので、家長の意見にわずらわされることが少なかったからである、また、町に住んでいるという地域的な便宜のために、代表の選挙も案外らくに町の青年がえらばれた。どんな人物でも、植民地にあり、同時に家長のもとで自由がきかない地位にあるものは選挙されて代表になっても仕事ができなかったからである（む

ろん、幹部のなかで町住まいのしつかりしたものがおれば、彼は会長の代理をつとめる。町の青年会は、安い給料で独身者の有給事務員をやとい、郵便物のとりつぎ、領事館へだす願書の代筆などで植民地の人たちの便宜をはかりながら、一万では、だれにも気がねなく、家長たちの「ふしだら」に対して肅清運動などをおこすこともできた。

リンス青年会の活動などはそのいい例である。どこの地方、どこの町においても、青年たちは家長たちに対して批判的な立場をとっていた。

小学校

つぎに、学校や教育の問題にうつる。

「日本人はまず学校をたてた」という。それはどんな学校であったか。

まず、金のかからない学校でなければならなかった。場合によっては、どんな掘立て小屋でもよかった。泥壁にサツペー（茅）屋根でもかまわない。いよいよ生徒が少なければ個人の家でもかまわない。どんなところでもやらないよりましだ、という考えである。

入植二年目、二、三十家族の植民地で、学校をたてることにしたとしよう。

村のものが総出で（むろん男たちだけであり、家族しだいで、あるいは家長だけ、ときには青年もまじる）、休日か日曜を利用して、一室だけのものをたてるのである。

敷地はどうするか、これは「植民者のロッテ」内を臨時に利用させてもらうか、寄付してもらおうかする（植民地によっては、土地売出しの際あらかじめ敷地としてきめてあるところもある）。もらうといっても日本人会は法人として登録しているものなどごく少ないから、法的に所有者となることはできない。だから、たいがい利用させてもらうほうが多い。場合によっては、いくらか借地料を払う。

さて、場所がきまれば、金のかかるものは屋根瓦である。瓦だけはタダというわけにはいかない。だから金が必要ならばサツペー屋根ということになるのであるが、それではあまりにおそまつだからというので、瓦だけは奮発する。一戸当たり五ミルとか一〇ミルとかをださせる。当時としてはいたい出費であったがやむをえない。こうしてできあがる学校なるものは、二、三十人の生徒がはいったならいっぱいになるような小屋である。もし、日本人会の総会や村の催しごとのために必要だからといって、五×一〇メートルくらいのをたてるときもある。瓦代がかさんでくる。

まず大工の心得のあるものが動員される。どこの植民

地にも一人か二人はいるものである。凶面をひいてもらって必要な材木を集める。数名の青年も加わって近くの開墾地で材木を集める。材木はタダで、運搬は多く人間の肩をつかう。かくて骨組ができあがる。大工には日本人会のほうから「寸志」を送る場合もあるが、子供の親だったりすると金をうけとらないものも多い。そこで棟上げには、少しよけいピンガを買い、御馳走も奮発しようということになる。

瓦をあげたり壁をぬったりは、むろん総動員のときにやる。こまいは、山からきつてきた椰子の木を割ってこれを縦にならべ、細い木を横にシツポー（蔓）でしばりつける。壁土には、日本式に藁かサツペー（茅）をきざんだ「スサ」をまぜてこねる。泥は裏表から二回ぬるが漆喰はぬらない。

むろん天井板など張らない。下は土間だから、突きかためる。窓は、小さい小屋なら両わきに二か所ずつ、あるいは三方にわけてつけることもある。大きい校舎なら六か所から八か所つけなければ充分明かりがとれない。掘立て小屋に大きな窓はあつかいにくいから小さくするので数がふえる。もし雨が降りこんだり、日ざしがつよくて不便だと思えば、蝶つがいを上方だけにつけて戸を棒でつき上げるようにする。ガラスなどはないのだから、日よけ雨よけにこれがいちばんむいているのだ。机は土

の中にうめた棒に板をうちつける。腰かけだけはうごかせるように板だけにする。これも少し金がかかる。それに黒板、先生のテーブルと椅子。まだ教壇などはつくない。

学校は大、小によって三日から五日かかればできあがる。むろん休日を利用すれば、できあがるまでは何週間もかかるわけだ。その間に先生の家だつてつくらなければならぬ。

もし「事務所」のほうではじめから充分敷地がとつてあつたとすれば——ここは、当分事務所の所有地である——運動場もつくるし門もたてる。これでできあがりだ。

まだ一般植民者が壁もぬっていない椰子の木の掘立て小屋に住んでいた時代、これでもりっぱな学校である。新年や天長節などには日伯国旗をかかければ、村の中心となつて、いかにも体裁がいい。天長節には式もあげられるし、運動会もやれる。

学校をたてる以上、先生もきまつているはずだが、経営の中心となる先生の給料は植民地のもの全体からださせるというわけにもいかない。そこで学齢児童のいる父兄が先生の給料だけはうけもつことになる。

ところによると、先生には半日だけ学校へでてもらう。午後は百姓をしてもらうことになる。先生だつて家族があることだから、畑さえあれば、家族のものは働け

る。借地代をとるわけにいかないから、だれかの土地を村で借りうけ、これを先生に無料で貸す。蒔き付けや取入れのときには、青年を動員して加勢させる。そのかわり、青年のために、週に何回か夜学でもやってもらう、ということになるのである。

こうなると、教員住宅は学校からはなれたところにてきる。学校につづく土地があればこれにこしたことはない。

また、もっと簡単なことは、植民者のなかから適当な人をえらんで毎日何時間か教えてもらう。あるいはコロノのなかにいる新移民の奥さんか青年にでもたのめば、土地を借りる必要もないし、教員住宅をつくる手間もはぶける。毎日二時間か三時間、学校へ通って教えてもらえば、謝礼も少なくてすむ。

こうして、入植当時の金のない植民地では、あらゆるくふうをめぐらして教育につくしたのであった。

生徒は小さい植民地なら十数人、五十人なんて小うのは百戸近い植民地だ。まだ子供の少ない時代だった（注）^ハ。二十人くらいまでなら、授業はみんないっしょにやる。ブラジル語の先生がくるようになる、午前はブラジル語、午後は日本語とわかる。半分の生徒に書きとりか独習をやらせているあいだ、他の半分に読み方をおしえる。算数だって、一方に問題をだしておいて、他方で

は九九を暗記させる。この時代は新聞も雑誌もみな、ふりがなづきであったから、なんとか本が読めて、四則ができたら上の上。日本人の植民地だから、会話はしぜんにおぼえるだろう。なにしろ、「いろはもわからんうちに色気がつくんじゃけん、ぐずぐずしておれん」というのが親たちのあせりであった。だから日本精神だ、日本文化だ、なんて議論していられるときではなかった。「文化」なんて言葉はそのころだれもつかっていなかったかもしれない。

教室に時計なんかから先生はポケットから懐中時計をひっぱりだしてはながめる。

「おーい、みんな宿題を忘れるんじゃないぞ。家へかえつたら、すぐやっておくんだ。ジャンタ（夕飯）のあとにしたら、ねむうなつてでけん。よし、きをつけ！ 礼。道くさせんでまっすぐ帰れ。日本人にあつたら、ボン・ディアなんて顎をしゃくるんじゃないぞ。今日は！と頭をさげるんだ！」

こうして、二時間くらいで午前の授業がおわり、また午後の授業となるのであるが、生徒が少ないときは、午前中三時間くらいやってやめる。このとき、生徒は弁当もちでやってくる。そして十時ころ昼食をとり、一時間くらい休む。生徒たちは、日本式の弁当箱やにぎりめしだ。おかずは、塩鯛の焼いたものか、マモンの味噌づけ、

ごま塩のおにぎりも持ってきた。ランチのつもりでメリケン粉を油であげたものを持ってくるものもある。おにぎりはバナナの葉にくるんでレンソに包んでくる。かばんなんかもっていないから教科書、帳面、低学年のものは石板や石筆をブラジル式のサツコーラへ入れ、肩にするしてやってくる。みんなはだしで、男の子はいまなら登山帽まがいの白い自家製のボネーをかぶっていた。女の子にはレンソ（ネツカチーフ）をもちいるものもいた。みんな、とんではねて家路へいそぐ。彼らが日常つかっている言葉は、ファゼンダでおぼえたブラジル語と、親たちが家でつかっている方言をませたもの、レンソ、サツコーラ、カニベツテ、シャペオなどはポルトガル語、ホン、チョウメン、コクバン、センセイなどは、日本語だ。

「コーレ、コーレ (Corre, Corre!) 早う走らんか、あとからカローツサが来おるぞ！」といった調子。彼らはまだはつきり日本語とポルトガル語の区別がない。ポルコは豚だが、ミーリヨは日本語ではないのか？ 親たちだつて、「そけえ、センタせえ！」といいながら日本語をつかっていると思つている。それでいて、近所の子供たちが、「おはようございます」と頭をさげると、学校へ行くと日本語のあいさつをおぼえる、といつてよろこんでいた。

「Aさんの子供をみい！ 日本語の学校へださんけ、人の顔をみると、ボン・デーアいいおる。ちつともかわいくなか」というのである。当時、子供を遠い町のブラジル語の学校へ通わせていたのは、むしろインテリに属する人たちで、二世はブラジル人であるから、さきにブラジル語をおぼえるのが順序だ、と考えていた。しかし、彼らは植民地内では異端者だったのである。

植民地の一般の親たちにとって、子供が学校から帰ったあと、夜になって、朗々と読本をよみあげるのをきくことが、いちばんのよろこびであり、安心であった。

青年の夜学

それなら青年たちはどうなのか、青年といっても十四、五歳から三十歳近いものがいた。女が少ないので農村にいながら、なかなか嫁をもらえなかったのである。

十歳前後でブラジルへ来て、五、六年たつものは、むろんまだ邦字新聞も読めない。ふりがなをたよりに読んでみるが、意味のわからないところが多い。だからといってブラジル語の新聞も読めない。朝から晩まで働いて、エンシャードのひき方、マツシャードのつかい方はうまい。そして、おやじたちのうたう日本の民謡や流行

歌などは、なかなか上手だ。「ナツチョラン節」や「オウリョッコウ節」など得意なものである。

十四、五歳の少年は家長の息子であるが、二十歳から上のものは、いわゆる「連れ家族」のものが多い。日本で小学校くらいは出ているが、その後、雑誌も本も読む機会がないから、教養を身につける機会がなかった。彼らにとっていちばんものたりないことは、植民地に娘が少ないことだった。もし近くの家にいる場合は、なんとか用事をつくって菌くらい見にいけるが、遠いところであれば、一人ででかけていくのも気がひける。だからといって、家長たちのようにピンガを飲んでくだまくにはあまりに若い。日曜の午後なんか、仕事を休んでぶらぶらしていると休んだ体をもてあます。そんなときは若いものが数人集まって、しゃべりながら日暮れを待つ。月夜の晩ならなおいい、みんなで歌をうたいながら娘のいる家の近くをいったりきたりする。だが、家へおしかけていってしゃべる勇氣はない。

彼らは夜学をひらいて勉強しようと相談する。週二回もやればけっこうだが、日曜の晩だけでもたしになるだろうという。ブラジル語を教えてくれる人があったらなおいいのであるが、当時は植民地にそんな人間は一人もいなかった、結局日本語だ。

ところがこの日本語がむずかしいのである。当時の高

等小学校の本ときたら漢字がぎっしりつまっている。先生が黒板に書いて、かなをふってくれるのだが、あの漢字をみつめていると、目がかすんでくる。電灯はないし、まだ、どこの家にもアラジンやコールマン・ランプがなかった。みんなが手にさげていく釣ランプを黒板の横にかけ、机の上ののせて勉強するのである。大きなあくびをしたかと思うと、うつぶせにねむってしまうものもある。一人欠け二人かけ、いつのまにか一人もこなくなる。先生は二晩はど待ちぼうけをくって夜学は中止になる。すると代表がやってきて、いまは農繁期で体がつかれていいるから夜ねむくて勉強ができない。暇になったらまたつづけるからよろしくたのむ、という。こんなにして、やめてはまたはじめ、またやめる。どうも長つづきしないのである。彼らは日本語の会話はできるし、ふりがなつきの新聞や雑誌なら、なんとか読める。ブラジル語も少年のときに耳でききおぼえ、おうむがえしにやっていたから会話は上手になっていく。カメラータをつかうのは彼らの役目であるし、町へであれば、ベンダなどで、ブラジル語を耳にし、また話す機会をもつ。馬車ひき（カロセイロ）などをやって、しよっちゅう町へでるものがいちばんさきにブラジル語が上手になる。とにかく、この連中は、ブラジル育ちというほどではないが、移民としての苦勞をしっている。また、外人にまけない働きをし

ようとする心がまえをもち、家長たちより、ブラジル語が上手だという自信と強味をもって次代の家長へと成長していくのであった。

日本的国粹主義の嵐がふいてくるまえの植民地は、実にのんびりしたものであった。それだけ、いくらか気のぬけたような点もあつたかもしれないが、まだ、同化も永住も問題にされていなかったし、子供たちに日本語を教えることは、出稼ぎにきた親たちの不安をとり去る方便であり、ブラジル語だけ話す子供たちには「情がうつらん」から、とにかく日本語で（それが、どんなにくずれていようと）しゃべってもらいたいという気持ちであつた。

それに、ブラジル語の学校では「親孝行」ということを教えんらしいから、日本人の子供には向かん、という考えもあつた。親たちの頭にある「教育」は、日本語でなければ不可能なものだったのである。

青年たちがブラジル語が上手になることはいいことだつた。しかし、子供たちは、まず日本語をおぼえてから、ブラジル語をならつてほしかつたのである。むろん、初期の植民地における一世たちの生活態度は、一面において反同化的であり、また反面では同化認容的であつた。生活様式、ことに住まいでも食物でも、ブラジルの生活で、これがいゝとなれば、どんどんとり入れた。衣服な

どもちろんのこと、「外人」にわらわれないように、女は人のみているところではやがんだり、子供に乳を飲ませないほうがいい、おんぶすることも、いそがしくて、どうにもならないときはやむをえないとして「も、できるならやめるにこしたことはない、と思っていた。こういう意味で、衣食住はとり入れるだけとり入れた。習慣の一部も「外人」にわらわれないようにあらためた。

だが、家父長的な制度や、男尊女卑的な態度の点になると、なかなかゆずろうとしなかった。むろん、彼らは無意識の間に、それが徐々に変化しつつあることには気がつかなかった。ややっこしい親戚づきあいや、近所隣の監視のない自由なブラジルで、しかも場合によっては夫以上に働く妻が、そうそう亭主のいうなりになっているわけにはいかなかった。しかも若いときにブラジルに渡航した移民の妻である。亭主関白が通用しなくなるのもあたりまえだ。そんなわけで、たまに、しとやかな新移民の妻君などをみると、植民地のおやじたちはやっぱり日本式はいいなア、いつの間に自分たちの家庭は、こうもブラジル式（？）になってしまったのだろう、と驚くのであった。

その後、一九二四（大正十二）年、日本政府の渡航費全額支給が実現されると、老人子供までひきつれた移民

が多くなり、その質も変わって、初期出稼ぎ移民たちとはちがった失業インテリなども多くなる。

さらに、一九二七（昭和二）年から三〇年にかけて、日本からの入移民数は、年一万を突破するのであるが、旧移民たちの多い植民地にも、コロノとしてはいつてくが。色の白い女たち、はぎれのいい日本語、新しい流行歌、スポーツ熱心な青年たち、コロノから小学教師になる師範出、大学出の男たち、こうした新移民のあらわれる植民地には、新しい文化的雰囲気ながれ、いままで先輩として尊敬されてきた旧移民たちは「頭が古い」といわれるようになり、旧移民たち自身も「文化移民」のまえに肩身のせまい感さえもつような時代になるのであった。

そして、日本人会、青年会、学校など、従来にないほど活発なうごきをみせるようになる。学校新築とともにブラジル人の教師も就任して、ポルトガル語も盛んになるが、新しい日本語教師をえて、日本語教育のほうもさかんになる。しかしブラジルは一九三〇年のジェツリーオ革命とともに「ブラジル・ノーボ」の新体制があらわれ、そのナシオナリザソン政策によって、外国移民は社会的、文化的活動にブレーキをかけられる。そうするとこれに抵抗する移民の反ナシオナリザソンの運動もさかんになる。かくて、大戦前の極端な日本至上主義的空氣のなかに、日本人会も青年会も、日本語教育も、みなま

きこまれていくのであるが、そのくわしい記述はここにははぶく。いままで詳述してきたことは、主として、ブラジルのナシオナリザン政策と日本の国粹主義的傾向との間に板ばさみとなった移民たちが、緊張した日々をおくるにいたるまでの植民地における日本人会、青年会、および学校のうごきであった。

注

(一) ポルトガル語といわずに、日本人は一般にブラジル話という。ブラジル人にはポルツゲースである。

(二) 四年から六年の間に、コーヒー樹仕立ての請負仕事をしたところ、そこを契約地といった。

(三) 『コロエア五十年の歩み』一〇二〜一〇三ページ。

(四) 十二歳以上は一人前だという考えもあったから、それらの少年少女は多く農事にたすきわった。

(五) 一九二六年の中央日会調査においてさえ、各自作農(シチアンテ)は平均一家族のコロノをかかえていた。平均二家族というところもあった。『農業のブラジル』一九二八年九月号一一八ページ。

ブラジルにおける日本移民の結婚制度は、明治・大正（一九〇八〜一九二六年）を通じて、日本の制度そのままを踏襲したものであるが、移民社会の特質によっていろいろな変化を示している。

この時代の移民は、ほとんど出稼ぎが目的であったから、手足まといになるような種類の家族員をひきつれてくることを好まなかった。老人、子供はできるだけはぶき、それから、なるべく女性よりも男性をえらんだ。第一次移民が未婚の男性に比して、未婚女性の数がもの数でなかったことは、たといそれが例外であったとしても、一般的傾向を知るうえに参考となるだろう。移民たちは早く金をもうけて帰国することは考えてきたが、独身者たちがやがて結婚して、この地で新しい家庭を営まなければならぬことは考えてこなかった。だからコーヒー農場をでて、長期作戦として、借地農、請負農へとうつろにおよんで、いちばんさきに考えなければならぬことは、構成家族を解体した独身者たちが、どうして結婚し、家庭をもつかということであった。

渡伯のために、便宜上、ある家族の一員としてやってきた独身青年が、その家族をはなれた場合は、もう一度、

他の家族に合流して、年季奉公的な労働者となるか、あるいは都会へでて働くしか道がなかった。しかし、言葉ができず、ブラジルの事情がわからなかったあの当時、都会では、ろくな仕事がなかったし、日本人社会のものからは、田園労働をいとうバガブンドとみなされて、嫁をもらう機会をおくらせることになりがちであった。そういうわけで、構成家族員または「連れ家族」の青年たちは、娘のいる家族のほうへ合流することを考えた。のちになると、独立農シテアンテのところへ年季奉公にはいって、いわゆるパトロン（主人）のめがねにかなった有望な青年となつて、娘を与えられることをねがった。もし独身青年が、家長の息子や弟あるいは主婦の近い縁者である場合は、仲介者（なこうど）をたのんで他の家族員女性と見合いして嫁にもらうこともできた。この場合、娘を嫁にやるほうの親たち、または家長は、結婚後は独立生活を営むものか、それとも、家族の人員として家長の家に住みこむことになるのか、いろいろな問いだしがあつて、娘を嫁にやるほうでは、利害関係を考慮するのが普通であつた。せつかくつれてきた労働力としての家族員女性をうばわれることは、ブラジルの移民社会では、大きな打撃だつたからである。

「娘三コント」と噂されたのは、働きざかりの人間を、家族から一人うばわれることは、その家族の「成功」を遅

らせる原因として恐れられたことを示すものだろう。年季奉公が一か年、衣服・食事・医薬等の生活費主人持ちで、五〇〇ミル程度であった時代であるから、三コントとは、一人前の労力を三か年間うばわれるに等しいと計算したのももうけとれる。実際はどうであったかわからないが、結納金を三コントくらい文句なしに出せる家族、あるいは青年のところへなら、娘をやってもいい、ということになる。

ブラジルへ移住すると、日本の家柄などは「ほとんど」問題にされなくなる。お互いが裸一貫でやってきたのである。もしなにかが問題になるとすれば、相手の青年が有能であるかどうかということである。そして、その基準は、現在どうあるかということできまった。

こうなると、娘をもつ親なり家長なりのほうは強かった。条件が惑ければ、有能な青年でなければ、娘をやらないだけの話である。縁談は「降るように」あったのである。十四、五になると、もう結婚の語がもちあがるといわれていた。

仲人の役割は、いかにして娘の親や家長をくどきおとすかにあった。そのためには結婚志望の青年をほめそやすのはもちろん、娘を手ばなしたのちの家族の生活について、娘がいるときと同じような、あるいはそれ以上有利な生活を保証することを条件にした。むろん、有望な

青年であれば、文句なしに、娘をやるう、いや、もらつてくれという親がいないではなかった。しかし、「いま人手を減らされては生活に困るので」というのは、金もうけを目的にやってきた移民社会では、別に例外的なものではなかった。こうした傾向は移民たちの生活が落ち着くにしたがって変わってはくるのである。

そこで、家長の支持のない青年や独立で仕事をしようとするものは、よほどりっぱな仲人がたたないかぎり、たとい目星をつけた娘がいても、なかなか嫁にもらえなかった。ただし、言葉ができて農場の通訳とか監督とかをやっているものは、その地位のために娘をもらうことが、他の独身青年よりもやさしかった。当時は、ブラジル人と自由（？）に交際できる青年といえば、通訳級のインテリであって、移民たちはみな一目おいていた。また通訳たちにしても、独身者が多かったので、今度の移民にはいい娘がいるぞ、というのが大きな仕事のはげみであった。

当時の移民たちは地方色がゆたかであったから、同県人がかたまる傾向がつよかった。したがって、気心のしれた同県人同士で縁組することも、しぜん多かったわけである。娘の親兄弟は青年と知りあいになった場合、同じ方言で話し合うほうが親しみがもてたことは当然である。

よく身もとしらべということがいわれた。それは、どこのだれということがわかれば、将来ながくつきあうために安心ができるし、日本へ問いあわせて、親類の同意をえることもできる。そうした点では同県人がいちばん便利であった。その他は、親や祖先が、どんな生活をしていたかなども「ときには」問題にされた。村でも最下級のものでなかったというのが、当時の移民に安心感を与えるのであった。それから血統しらべでは、家族に悪い病的遺伝性がひそんでいないかどうかもといただした。結核さえも、遺伝的なものと信じるものが多かった時代だったから、これは当然なことだったかもしれない。

このようにして、初期におけるわが移民社会の結婚は仲人をとおして、親や家長間でとりきめられるのが普通であった。むしろ、本人の意志もある程度尊重された。それは家柄が問題にされなくなったこと、初期移民たちが、多くは二男、三男であつて、もともと家のあとつぎが少なく、それだけ伝統的な家父長的権力をふるう地位になかったこと、および、渡航のために連れ家族の同意を求めて同行してきたことなど、いろいろな理由があつて、それだけ伝統的家父長制をはみだした家族であつたことにもよるだろう。それから、女が少なかったということは、女性にある程度、相手の選択の自由を与えることになった。ブラジルに「売れのこり」などはないのだ、

ゆつくり相手をえらぶべきである、というような気持ちがあった。

だが、連れ家族の女性が家長の利益の犠牲に供された話がないでもなかった。そのことは「連れ家族の悲哀」のところを書く。むろんブラジルは広い。たとい連れ家族といえども、逃亡の自由はあった。また、ブラジルの法律は、本人の意志を無視した結婚はみとめなかった。

しかし、移民たちの世界はせまかった。広いブラジルも言葉のわからないものにとっては、決して広いものではなかったし、移民たちは昔なりの義理や人情にからまっつて、むりやり縁づいたものもあつた。わがコロニアの文芸もの（小説）には、借金のかたに連れ家族の娘を嫁にやることを問題にしたものがかなりある。

しかし、コーヒー農場（ファゼンダ）や植民地の生活では、男女を箱入りで生活させることはできなかつた。ことにコーヒー農場の生活では、ブラジル人および各国移民が入りまじつて労働を共にした。したがって若い男女はナモーロの風習をみた。しぜん、日本人同士でも恋愛が生まれた。

もし娘の親や家長が警戒を嚴重にしていたら、謀略的にぬすみだすこともできる。

略奪結婚があつたという話は、決して未開社会におけるような女性の略奪ではなく、愛し合っている男女のた

めに、第三者が手をかして親や家長のもとから娘を連れだすことであつた。

青年会の連中が数人で娘の家へおしかけ、一部のものが何やかや、家長と押し問答している間に、裏口から他の連中が娘を連れだし、トラックに積み、凱歌をあげてひきあげたというような勇ましい話もある。そんな場合ははじめから、相思の男女のほうに世間の同情が集まっているので、こうした「暴挙」も問題にはならなかつたのである。おそらく評判の欲張り家長であつたのだろう。みるにみかねた青年同士の義挙であつたかもしれない。

当時はほとんど仲人を介した「見合い結婚」であつたが、これはおもに遠方にある男女の場合であり、同駅とか同植民地内では、運動会や弁論大会などいろいろな催しごとがあるので、たいがいどこかで顔を見ているし、話し合っているから、見合いをやれば、それはごく形式的なものとなる。また、同植民地内では、娘のいる家へは、青年たちはいろいろ口実をもうけて遊びに行ったから、あの娘はだれに気がある、いや、あの男では首を縦にふらないだろう、というようなことが噂された。自信のあるものは仲介者をたてて親たちや家長に申しこんだ。

ただし、いまごろのように（一九六〇年代）よくつきあつてから、などとはいかない。ぐずぐずしている娘なら、はたのものがくどきおとす。女の少ない時代、せつ

かく射とめた「金的」であつてみれば、亭主が嫁をたいせつにすることはわかっている。たいがい円満な家庭をつくる。ブラジルは女の天国だという話もたんにヨーロッパ的風習のせいばかりではなく、女の少ない移民社会では、しぜんなことだったかもしれない。

問題になったのは、写真結婚と新旧移民の結婚であつた。

写真結婚は、ブラジルでは、ハワイや北米のように、現地でほとんど結婚が不可能なところとはちがつて、それほど多くなかった。さすがは、家族移民を主として迎えた国である。写真結婚をするものは、日本に親兄弟のいる独身青年移民の場合で、ブラジル生活にあまり長くないものが多かった。むろん植民地の女は適当でないという理由から、結婚をおくらせていたインテリなどが、中年になつてから日本の女と写真結婚をするような例外はあつた。

戦前は戦後ほど写真結婚が問題にならなかつたのは、ブラジルの植民地と日本の農村との生活が、それほどかけ離れていなかつたせいでもあつたろうが、写真結婚の悲劇はあまりきかれなかつた。もう一つの理由は、女性の自覚の程度によつたかもしれない。戦前の女性は、いったん結婚したら、たいがい「しんぼうする」ように教育されていたし、また、そういう社会的風習でもあつた。

だから、戦後のように、かなり文通して精神面では理解しあったのちであつても「予想に反した」「こんなはずではなかった」と気がついたとき、さっさとみきりをつけて結婚を解消するとか、はじめから結婚を拒絶するようなことはなかった。

サントス港に出迎えた相手の男が、あんまり日焼けしたカイピラ（田舎もの）だったために、非常なショックを受けたというような話はよくきくことであつた。しかし、相手の男のうぶさ、まじめさ、それに周囲のものとりはからいで、いまさら日本へとび帰るわけにもいかず、結婚生活にはいつてみると、案外ブラジルは気楽なところがあるので、子供もつぎつぎと生まれ、幸福な生活をおくるということになった。

写真結婚よりも悲劇を生んだのは、旧移民のパトロン（主人）の息子に、新移民の娘がむりやり縁づけられると、いうような場合であつた。旧移民の親たちは、自分の生活が安定してくると、息子には日本式な嫁がほしいと思う。新移民の親たちには、ブラジルで一応成功した先輩に娘をやることによつて、自分たちの生活が早く安定するにちがいないという打算がある。そこで、この場合は、見合いをさせはするが、親たちが娘をくどきおとす。娘も戦前的な、親に従順な性質であればあるほど、親たちの貧しい新移民としての家庭を思いやり、家のため、親

のため、嫁にいかがか、という気持ちにもなった。むしろ盛大な結婚式が挙行され、ときには（植民地ではめずらしいことではあるが）新婚旅行までさせてもらえる。

だが、いよいよ夫婦になってみると、なんともはや、トントンカンでおもしろくない。第一、男に教養がないので、話があわない。夢を語りあうことができない。男には楽しい学生生活がなかった。コーヒー園の草取り、豚の世話とカツサ（狩）やペスカ（釣）の話くらいである。日本の映画俳優の名も知らなければ、ベスト・セラーになった小説の話もできない。まして、新婚の感激を、通当な日本語で表現することもできない。新妻をよろこばせるようなウイットもない。そのうえ、うっかり夫の身を案じて世話をやきすぎると姑にやきもちをやかれる。夫の母は、実は日本式な嫁をもらったら、自分がちやほやされて、幸福になるだろうという利己的な期待をかけていたのかもしれない。それでも、問題は、たいがい孫ができるまでであった。泣く泣く落ち着いた嫁も、子供ができるると急に母性愛のほうへ気持ちしが傾倒され、舅、姑の気持ちも変わって、孫がすべての救いとなって、めでたし、めでたしということになる。

同じような傾向は、娘をもつ旧移民の親にもおこる。この場合は、男のほうがはじめから打算のうえでの結婚を自覚していれば、案外うまくいくのだが、それでも、あ

れほどではなかったと思う場合が多々ある。だが親たちが新移民の青年にほれこんでいる場合は、あれやこれやと娘に注意するので、青年のほうものんびりとかまえることができる。辛抱できるといふわけである。気ままな「むこ様」となれるわけだ。

いちばん問題となったのは、なんといっても、日本人外のものとの結婚であつて、そのうちでも、日本人の娘が「外人」と結婚する場合であつた。植民地において、日本人の娘が外人と結婚するのは、ほとんどその家に働いている使用人であつて、ながくいるうちに娘と仲よくなつて、ついには駆け落ちということになる。こういう事件は、親がきびしくて、娘が若い男と接触することを嚴重にコントロールしているような旧式な日本の家庭におこりがちなものだ、という俗説があつたが、ある一面の眞実をうがったものだったかもしれない。むろん、親たちは、外人のカマラーダと正式に結婚するようなことはゆるさないにきまつていたから、そうした道をえらぶよりしかたがなかつたのである。親たちは自分の気持ちのうえから、家庭内に異分子をいれることはどうしても承知できなかったことはもちろんであるが、当時の一般的氣風としては「世間のものにあわせる顔がなくなる」といふのも大きな理由の一つであつた。たとい結婚したらただちに別居させるとしても、どこの馬の骨ともわか

らない外人のカマラーダに娘をやったということになれば、もうその親の評判はがた落ちになってしまふからであつた。さらに不幸なことは、そうした娘が一度日本人の社会から脱落すると、すっかりつきあいがなくなり、夫とともに浪々の身となるからであつた。もともとブラジル人の社会でも、ほとんど友好関係をもたない北東地方からの流れものであつてみれば、日本人の間からぬけだしてブラジル人の社会へいつても、いい仕事にありつく機会も少なく、あいかわらずどこかの農場のコロノになるか、または日雇い人足として働く以外に生きる道はみいだせなかつた。こういうことが評判になつて、例外的に少数のカマラーダとの結婚が、いいふらされ、またおそれられたのであつた。だから問題にされるほど多くのケースがあつたわけではなかつた。ただあとになつて、娘や息子の学友だとか職場で知りあいになつたとかで、身もとののはつきりした外人と結婚するような場合でも、娘や息子が外人と結婚したために、日本人の社会からはなれてしまふのではないかという恐怖は、ながく親たちの頭を支配した。

自由な恋愛の気風は、青年会や処女会の活動がさかんになり、また、植民地にダンス・パーティなどが催されるような戦争直前のころから、しだいに多くなる。しかし、自由な恋愛による結婚にしても、親たちは仲人をた

て、見合いを行ない、結納をおさめ、日本式に形式をととのえてから、式をあげるといふ方法をこのんだ。だから知りあいになり、仲よくなれば、自らプロポーズすることもあり、わざわざ仲介人をたのんで、親のほうから娘の親へ、さらに娘の親から娘へと気持ちをつたえるような手続きをとる場合も少なくなかった。

戦後でも、このような風習はまだつづいている。ただ交際が自由になったので、プロポーズには他人をわずらわせないだけである。ただし都会では、本人同士がそろって親たちの同意を求めるといふふうになってきた。また都会から遠い農村では、いまだに大家族主義を構成して、結婚後も男の両親と同じ様、あるいは棟をちがえても同じところに生活する。結婚して別居するのは、都会のものが多い。

すでに昔のような連れ家族の問題はなくなって、二世同士の結婚が多くなっている。見合いにしても、相当の期間つきあってから、シン（然り）またはノン（否）を決定するような動きがつよい。見合いはむしろ「紹介」ということになりつつある。だから、あの女またはあの男は何回見合いしてもだめなんだ、などということはいわれなくなってきた。

地方農村では二世の時代になっても、日本式の三三九度と「うたい」による式をあげるが、都市では、八〇パー

セント、あるいはそれ以上、教会で式をあげる。そのうちでも、カトリック的にする場合が、サンパウロ市などはだんぜん多い。披露の宴をはぶいて、教会からただちに新婚旅行にでるものも多い。ただし顔のひろい物持ちになると、以前にもまして盛大な披露の宴を催す。

結婚も移民六十年の歴史をすごし、二代目の世代になって、はじめは都会から、だんだん奥地へとブラジル式になっていくことがみとめられる。

今日、老移民たちが問題にしているのは、外人と息子や娘が結婚した場合、自分たちはどうなるだろうか、日本式な自分たちは、彼や彼女とうまくいくだろうか、嫁や婿は同居を承認するだろうか、同居したら自分たち親としての立場はどうなるだろうか、はたして舅、姑として大事にされるであろうか、食物はどうなるだろう、孫ははたしてなつくだろうか、言葉の問題で感情のくいちがいをきたすようなことはないだろうか、そうした心配のために、できるなら二世も二世同士で結婚してもらいたいとねがっている。しかし、二世たちの立場は「結婚は親たちのためではなく、当事者二人の幸福のためだ」と思うようになっていて、譲歩しなければならぬのは親たちのほうである。どこへいってもこの愚痴はきかされる。この点になると、家庭で早くからブラジル語をつかい、ブラジルの的に子供をそだて、ブラジル人となつき

あつてブラジルの生活になじんでいる者のほうがあきらめが早いようだ。一世の立場を固持して二世をどう教育するかと思ひわづらつていたものより、二世の自然的成長の過程へ、自分のほうから合流していった一世移民のほうが、案外早く問題を解決しているように思われる。

30. 連れ家族の悲哀

ブラジルへきて、ひとしれず、さびしいおもい、つらいおもいをしたのは、連れ家族といわれた男女の青年たちであつた。働き手三人以上の家族もの、という渡航条件であつたため、十二歳以上の子供をもたない家長は、自分の弟、妻の兄弟、その他、いとこ、ときには遠い親戚のものを家族員として、いわゆる構成家族をなして渡航した。こうして、家長の子以外の青年男女を、たんに構成家族とか連れ家族とかよんだ。

彼らは母国を出るときの約束にしたがつて、はじめから渡航の方便として、ブラジルへ着いて契約年限がすんだら離別するものもいたし、そうでなくとも気概のある青年で家長のふがいなさをみぬいたものは、さつさと家をとびだして自由の身となつた。

しかし、日本にいたときから、親からうけついだ権力

のある兄とか、あるいは、着伯後も離散しないように、親からきびしくいいふくめられてきたものとかは、あいかわらず家長のもとに、無報酬の家族労働者として働いた。彼らは、成功の暁は、財産をわけてもらおうとりきめもあつたにちがいないが、現実には体裁のいい奴隷にひとしいものであつた。

家長は、彼らの結婚をあまりよろこばなかつた。女子の場合は、いい条件があれば嫁にやつた。男子の場合は、自分の息子ではないから、結婚してまで同居させておくわけにいかない。また、家長のひもつきで独立のみこみもない青年に、嫁を世話しようとする人はでてこない。

娯楽機関のない植民地。家長たちのように、おおつぴらにピンガをあおることのできない連れ家族の青年たち。もし主婦が特にやさしい女性である場合はともかく、女つ氣ときたら、いよいよ少ない植民地である。くたくたになるまで働いて、夜は死んだようになってねるときはまだいい。あれこれと考えあぐんで、ねむれない夜もめぐつてくる。日本が恋しい。父母のもとがなつかしい。友人に会いたい。日本なら、先輩のあとについて遊びにも行けるだろう。親切にしてくれる女性もいたにちがいない。無知なカメララーダのように、一か月かせいだら、町へでてすっからかんになるまで遊び、またもどつてきて働く、あんな自由さえ自分にはゆるされないので。そう

すると、自分には人間と生まれて、その最低の生活すらできないのである。いつそのこと、この家をとびだそうか。家長のやつ、あることないこと、日本の親たちに書き送って、心配させるかもしれない。「どんなことがあっても、この人を親とおもって、決して離ればなれになるんじゃないぞ。いっしょに働き、早く成功して帰ってくるんだ。それが約束できるならいけ、いってブラジルで働け！」と親にいわれてきた。

しかし、きてみてわかったことは、五年たち、十年たつて、いったいだれとだれが成功して帰国したというのだ。しかし、ここの、こうした事情など全く理解できない日本の親たちは、自分が家長のもとをとび出したときいたら、どんな気持ちになるか、家長が書き送ることなど、親たちは決して信じないといいきれるだろうか。

こうしたことに思いわずらいながら、また数年働く。しかし、彼らはやがて、そう思いなやんだことがばかばかしくなってくる。そこで、だまって無一文で家長の家をとびだすものもでてくる。しかし、独身でろくに言葉もできず、社会的信用のうしろだてもない人間に、どんな未来も約束されていなかった。

サンパウロへでも、まだ、コッペイロ、カルピンテイロ時代であった。しかも、当時の地方人は、都会へでる青年に対して、バガブントの烙印をおした。汗をなが

して働くことをきらう反逆者、都会生活に甘い夢をみて農村をみすてるなまけもの、墮落した人間と考えた。たといブラジル語の勉強を目的として都会へでても、農村におけるその青年の信用はゼロにひとしいものとなった。

こうした世評をおそれたものは他の農家へ年季奉公にはいった。エンシャーダー一丁として大の男がとびこめば、農家にはたいした力となる。しかも、食物・衣服は主人もらで一年に六く七〇〇ミル・レイスの給料であった。だから年季奉公にはいる青年には別に下心があつた。しかし、娘の少なかつた当時の植民地は、まじめな青年があらわれたら、ぜひ娘の婿にしたい、などと待ちかまえているところなどめつたになかつた。また、この青年には見どころがあるなどといって風来坊に嫁の世話をするような酔狂な人間もいながつた。二年三年と夢中で働く。娘とも親しくなつて、これならものになるのではなからうかと夢みるころになると、娘はどこかの物持ちのところへ、とついでいってしまう。なぜもつと積極的に、娘にいいよらなかつたのだらうと思つてみても、あとの祭り。またすぐごと場所をかえる。

こうしてあるものは、子供づれの後家のところへ落ちて着いたり、もらい手もないような無知な女を天与の妻としてめとったり、それでも女にありついたよろこびのため、彼らは生まれてはじめての幸福を味わうのであつ

た。また他のものは、一人で独立の自炊生活をいとなんでみるが、孤独な生活のなかで憂鬱症にかかり、ついには、自分の掘立て小屋で首をくくったものもいた。頭が少し変になり、それでも労働力があるものは、ふらりふらりと気のぬけたようなカマラーダになって放浪生活をいとなむようになった。孤独を克服するために宗教にこっぺしているうち、幻覚におそわれて発狂した青年もいた。

孤独、希望のない生活、性的な不満。

後年、新来青年の無頼漢ぶりが評判になったらしいが、彼らの活躍舞台は、どこかで旧移民たちの生活が足場となっていた。だから、どんなに彼らがブラジルの生活に幻滅を感じた結果だといって見たところで、当時の独身者にくらべたら、幸福にも無頼の徒になれたのだといわざるをえない。

女性の場合は、男性の場合とかなり事情がちがってくる。女の少ない植民地では、十五、六歳の少女時代から縁談がもち上がるからである。

しかし、あやしげな家庭内の空気からのがれて、自由な身になりたいとねがう独身女性にとって、世の中は決して渡りいいものではなかった。一人で家をとびだす不安は、男性とは比較にならないものがあつた。

連れ家族の娘が、家長の妹である場合はまだいいが、妻の妹とか、その他の縁者であつた場合は、ともすると

家長のなぐさみものにならないともかぎらなかつた。

みんなが出稼ぎ気分で、がむしやらに働いているとき、農事から家事、出産にわたる妻のつとめは、なまやさしいものではなかつた。肉体の消耗がいちばんひどいのは妻であつた。夫がピングをのんでいばりくさっているときでも、妻は炊事のことから子供の世話まで休むひまがない。むろん、連れ家族の女性も主婦にまけず働く。しかし、独身の若さには、労働にも粗食にもまけない生命力がみなぎっていた。気ばらしにでかける居酒屋一つない植民地の単調な生活のなかで、成功のみとおしもない家長たちにとって、この手近な花に心をひかれるようになるのはしぜんかもしれない。

「すたれもののない女ひでりのブラジルである。せつかく一家のものとして連れて来た以上、自分が初花をちようだいしたところで一生をくるわせることにはならないだろう。いや、使いふるした女房が憤慨してでていくとしたら、これも一興である。どうせ近々に金がもうかつて、いまの生活が一変するような幸福はめぐってきそうもない。このへんでちよつと気ままなことをやってみたほうがとくだ」

こんな自己本位な考えがわいてくれば、どんなむりでもおしとおすようになる。妻が病気になって入院したとか、お産で床についたときなど、いちばんねらわれやす

い。むろん、こんなことは突如としておこることではないから、そんな気配を感じた連れ家族の女性は、相当警戒することにはなるが、なんととっても気配だけでさわざたてるわけにいかない。下手をすれば、妻君のほうから、男を横どりしようとする野心家としてにらまれるようなことにもなる。狩疑心ほど恐ろしいものはない。じわじわと真綿で首をしめるような、いじわるにあわないうともかぎらない。

女同士のいがみあいには、亭主はどうするか、ここだとはばかり、作戦をねって娘をろうらくすることを考えるだろう。

こうして男の犠牲になる連れ家族の独身女性がいた。また、せっかく好きな青年がみつかつて、この人ならいっしょに逃げても心配ないと思っていたやさき、自分の体内に、あの悪鬼のような家長のたねをやどしていることをしって、ついに自殺をとげた少女もいた。

けんか両成敗式に、娘も娘だ、という批評もきくが、叫んでもわめいても、助けにきてくれる人もないような山の中で、若い娘にどれだけの抵抗力があるか、突然おそわれるような場合を考えると、娘も娘だなどといえるものではない。従順を美德として教育されてきた当時の娘たちは、敵に対する心がまえが、今日の女性とはくらべものにならないほどなまぬるいものであった。しかも

「きず物」などという残酷きわまる言葉を平気で口にす
時代であつた。ひとたび痴漢の犠牲になつたことが世間
にしれわたると、同情はされてもまじめに相手にされな
くなる。全く浮かぶ瀬がなかつた。

しかし、女が少なかった初期移民時代は、連れ家族の
娘をだしにして、幸運をつかむチャンスがないともかぎ
らない。縁談は降るようにあつた。だから正気な家長は、
むしろ胸そろばんをはじいて、娘三コントなどとけちく
さい考えよりも、もつと永久的利害を考えて、あとあと
までたよりになるような婿をさがした。だから、連れ家
族の娘の悲劇は、必ずしも一般的なものではなかつた。
実際的には、男性のほうが、悩みは深かつたかもしれな
い。ただ、こうしたことは、数的に実証する材料がない
ので、確言できないだけである。しかし、男性の場合は、
社会的な傾向として多くのものがみとめていたことで
あつた。

第5部

地方史―各植民地の歴史―

31 サントスおよびジュキア線の同胞

第一回移民と当時のサントス市

サントス市は、一九〇八年六月十八日、初めて日本移民が上陸した地点であるが、その年のうちに、すでに日本人労働者の姿をここに見た。彼らは、カナーン農場を逃亡した七、八家族の沖縄県人であった。彼らのあるものは、サンパウロまで汽車でくると急に懐中がさびしくなったので、そこからサントスまでの七九キロメートルを徒歩で行ったものもあった。海の見えるサントス市、故郷の匂いのする港街、ここで働きながらやく故郷へ送金したいと思ったのであった。まもなくフロレスタ農場からも出てくるものがあって、サントスはこの年のうちに、すでに沖縄県人の集合地となる。

あるものはドックの荷揚げ人夫となり、他のものはサ

ントス市背後のジャバクワラ石切場の人夫となって働いた。彼らは郊外のカンポ・グランデ方面にはいり、板囲いでトタン屋根の仮小屋を急造してここに住みながら、女子供は湿地の藪や森林を開墾して野菜畑をつくった。できた野菜は女たちが籠に入れ、頭にのせて市中へ売りに出たのであった。

サントス市は、そのころ五、六万ほどの小都市であり、ブラジルの経済を支えるコーヒーの輸出港として重要なところではあったが、工業のほとんどない都市であって、輸出入商人とドック関係の労働者の都市であった。今日、市内の一部となっているカンポ・グランデ方面は、ながいあいだシャーカーラ（菜園）であり、サントス貧民の住居区域であった。最近、週末や休暇に数十万のサンパウロ人口を吸収しているゴンザーガ、サン・ビセンテおよびガルジャールの海岸アパート・ビル区域の壮麗な姿は當時は見るべくもなかった。

サントスは実直なポルトガル移民小商人と労働者が目につく、おっとりした町であった。タマンコ（サボ一の一種Ⅱ突っかけ）をはいた自由労働者の姿もサントス市の特長であった。ここに沖縄出身の古謝将義（こじや・まさよし）が、邦人旅館「成功館」をはじめたのは一九一九（大正八）年七月一日であった。もつともその前、一九一三（大正二）年に榎常孝（えのき・つねたか）が「ホ

テル東京」を開業したが、ながつづきはしなかった。日本総領事館出張所ができたのは、一九二四（大正十三）年三月二日であった。

サントス市およびその周辺の邦人とその職業

一九二五年のある調査によると、サントス市およびその周辺における同胞の数は、一、六〇〇人であつて、その六割が沖繩県人であつた。彼らの集団住居区域は当時の郊外カンポ・グランデで、野菜づくりをその生業としていたが、ほとんど借地であつた。

なお一九二五年の職業別人口はつぎのようになつていた。

	(漁業)	(蔬菜業)	(職人)	(商業)	(青楼)	(合計)
戸数	六五	二四五	四九	三七	一〇	四〇六
人口	二四五	九四〇	二三二	一九三	三二	一、六三二

サントス周辺の漁業はプライア・グランデに二十家族、サン・ビセンテに十六家族、ポンタ・ダ・プライアに六十家族（さらに離れたサン・セバスチオンに二十家族、ウバツバに五家族）いるが、その他に五十家族くらいは、つねに他から出入りして小屋をつくり漁業に従事していたから、約百七十家族くらいもいたろうといわれる。サ

ントス市内に含まれた漁業者の六十五戸というのは、ポ
ンタ・ダ・プライアを中心としてみたものであるかもし
れない。

プライア・グランデ（2）は今は海水浴場として広く
利用されているが、むかしは漁場であった。日本人漁師
たちは共同で網をひいていた。

サン・ビセンテは、今日サントス市に連続してはいる
が、独立の郡であって、厳密にはサントス市内には含ま
れないが、われわれは便宜上サントス市内の一部とみる
のである。

一九一一年からサン・ビセンテの日本人漁村は、トタ
ンぶきの掘立て小屋の生活からはじまった。はじめは、
竿釣りや投げ釣りですった魚を売り歩いた。やがて床を
高くあげた家屋をつくり、まずしい漁師から網元となる
ものがふえていったのである。

ポンタ・ダ・プライアはさびしい草原であって、ここ
に小屋を建て、小さな漁舟を出して漁にでかけた。とつ
た魚は氷とともに舟底の冷蔵箱に詰めてもどった。市場
（メルカード）へ出すものもあつたが、ときには市内へ売
りに出た。

漁師はいちばんはじめは、自分一人で釣った魚を売っ
て歩いたこともあるが、カマラーダとしてブラジル人漁
船に乗って日給なり月給なりで働くものもいた。つぎに

は網元から舟や網を借りて、約束の値段で買いとつてもらうか、歩合でわけあう。一九二三年からは帰化人となって、正式な漁業をはじめた。それ以前は、いわばもぐりであった。それから各個人が資金を出しあつて引き網をつくり、共同で魚をとることもある。多くの日本人もそうしていつか網元となり、また資本を積んで立派なジーゼル船を買い、またトラックや冷凍車で遠方へ売りだすようになったのである。

筆者は戦前サン・ビセンテの漁師村のある家に、一週間ほど世話になっていたことがある。小さな網元であった。

この辺はそうした日本人が多かった。むしろ自分でも漁に出た。ブラジル人漁師が各戸ごとに五、六人から十人ほど働いていた。彼ら網子たちは、日本人漁師が初期に住んでいたような小屋に寝とまりして、そこで自炊をしているものが多かった。

彼らを使う舟はカノアのようにちっぽけなもので、内海でえびや小魚をとっていた。とつてくると魚とひきかえに現金をうけとつた。夜の夜中でも、二へんくらい漁師はもどつた。商売というものはたいしたもの、「おう！」と言えば、すぐ目をさまして主人は魚をうけとり、金を支払つた。

家は板造りの瓦屋根（近所にはトタン屋根も多かつ

た)。

混地のために床があげてあって、やぐらの上に建っている家のようであった。家のものはその板の間に日本式のふとんをしいて寝るのであった。老人夫婦と女の子二人だけだったから、一間だけでよかったのであろう。一方に一段低い板の間があって、一方は炊事場につづき、他の一方はセメントのタンクになっていた。ここは魚の貯蔵所で、内部はいくつかに区切られ、えび、魚、かきなどを入れたが、まだ電気冷蔵装置はなく、氷詰めであった。漁師たちがもってくるいきのいい魚や、ぴんぴんはねているえびは、秤にかけたあとはこのタンクへ入れられるのである。

夜二回も目をきまますので、夜食がある。食物は日本式のご飯と小魚の塩だき、小さいかきもときどき出してくれた。野菜ものは、わずかに汁のなかにきざみこんだねぎ、きゅうりの漬物であった。主人は必ず小さなおちよこ(カリセ)で三杯くらいピンガを飲んだ。はじめは夜食ができなかつたが、慣れたらおいしく食べられた。この食事の献立ては、昼も夜も変わらなかつた。

主人は朝早くサン・ビセンテの市場へ魚をかつぎ出す。荷の多いときは別にしておいて、村のトラックでサンパウロ方面へ出すようであった。市場では、各漁師は自分のバラツカ(売り台)をもっていた。サントス漁業組合

を創立したのは一九三二（昭和七）年で、当時組合員は六十三人であった。

現在では立派な冷凍場をもち、店をかまえて堂々と商売をしている個人もいる。彼らは冷凍車をもって手広く商売をしている。住宅も大商人らしい体裁をととのえていて、むかしの貧しい漁師たちのおもかげをしのぶことはできない。げんに、有力な網元として知られているものも十指を下らない。だが、戦争中には日本生まれの帰化人たちは、立ち退きを命じられて四散した。戦後になってもどったものが今日手広くやっているのである。

蔬菜栽培は沖縄県人の独壇場であるが、これもはじめはトタン屋根の掘立て小屋、それは、サンパウロ市内のポルトガル人の百姓小屋よりもさらにみすばらしいものであった。じめじめしたところでは、床板を高くあげて住まった。湿地が多く、葉ものはよくできたが、健康にはよくなかった。しかも、女たちは裸足で野菜籠を頭にして売りに出た。また、天秤にして腰をふりながら泳ぐようになかまわった。その働きぶりは人々の目をみはらせた。一九二五年の調査には、二百四十五家族九百四十名とあるように、サントス市における野菜供給者として大きな役割を果たしていたのである。マット・グロツソ州のカンポ・グランデ市と好一对である。

職人には大工が多かったことはどこも同じで、家具製

造所あり、洗濯屋あり、みなせつせと働いた。商業三十七戸とあるのは、内容はわからないが、メルカード（市場）専属の小売り商人がかなりはいつていたろう。サービス業では旅館も三、四か所できていた。「青楼」とあるのは別種サービス業で、日本船のはいる港町であるために、船員たちの遊び場としては欠かすことのできないものであったろう。サンパウロ市でも一九一六（大正五）年ころには、イピランガ街に待合「江戸」をひらいて、先駆移民たちをなぐさめたという記録はある（3）が、サントスほどはさかえなかつた。港町の特長である。

ここで、神田栄太郎の丸神（まるかん）印醤油をあげておこう。ブラジルでこの方面の先がけをしたもので、一九一五（大正四）年ころからはじめた。めずらしいので一時は門前市をなす盛況を呈したといわれる。移民たちの生活に刺身をそえて郷愁をいやすことができたのである。

ジュキア線の同胞

ジュキア線同胞の発展は、一九一二年からはじまった鉄道工事に、沖縄県人の多くが従事したことが端緒であった。当時サントス市にあった四十余名が、まっさきに鉄道工夫となって働きだした。ジュキア線は南サンパ

ウロ鉄道（4）と行って、英国系の会社が敷設したもので、一九二八年にサンパウロ州政府の手に渡って、以後ソロカバナ鉄道の管理下にはいったものである。

工事が終わったのは一九一四（大正三）年である。この鉄道は、サントス市から大西洋岸に沿って、ほとんど一直線に西南へくだり、約八〇キロメートルのペルイーベ駅から西方にはいり、海岸山脈の峡間をぬってリベイラ河岸のサント・アントニオ・ド・ジュキア（現ジュキア）駅へ出て終点となる。延長一六二キロメートルである。

日本人工夫たちは、海岸線の工事から山間へはいったはじめの駅、アンナ・ディアスマまで仕事をつづけてくると、一九一三（大正二）年三月、工事中の数人は、ここで工夫生活をきりあげ、農業に転向したのであった。全部沖繩県人、六家族ほどであった。

元来ジュキア線は海岸地帯であるために、アンナ・ディアスマまでは、あまり肥沃な地がなかった。ここへ来て、はじめて彼らは農耕地を発見したのである。彼らはフロレスやカナーン農場を脱出した若い働きざかりの連中であつた。

彼らはここで、二家族が土地を購入し、さつそく開拓をはじめた。資本不足で、サントスの友人まで徒歩で九二キロメートルを金借りにかけた。しかもその金額た

るや、たった五〇ミル（約十七円）だったという。当時イタニヤエンまで汽車は開通していたのであるが、彼らは一ミルの金も儉約して開拓の資金にあてたのである。

むろん当時のアンナ・ディアスは、まったくの未開地ともいえなかったが、住民はほとんどカイサーラとよばれる海岸地帯の旧土人の血をうけたもので、教育はなかったが純朴な人間であった。地主でさえも文盲がいた。面積もおおざっぱで、たとえば星名謙一郎から登記料を融通してもらって、政府から払いさげてもらった平良松六郎（たいら・まつろくろう）の土地などは七〇アルケールということであったが、実測によると一〇〇アルケール以上あったという。アンナ・ディアスの開拓はほとんど原始林のそれと変わりなく、森林やカツポエイラを切り倒し、焼き払って臨時の掘立て小屋を建てた。家は、むろん、ジュサーラ（パルミット）椰子で囲い、泥壁、屋根はサツペー、椰子の葉などでふいた。

彼らはまず米作を志して開拓を進めた。むろん、鍬で穴を掘ってもみを投げこみ足で土をかける原始的な方法であった。カボクロ（カイサーラ）と同じように木の棒（シユーシユ）を地面に突きさして穴をあけながら、一人で蒔き付けるものもあった。

種子もみは土地のものを買い集めてこれを用いた。できはすばらしかったが、驚いたことには、赤米まじりの

雑多な種類のまぜあわせで、商品になるかどうか見当もつかない代物であった。つぎの年からは種子もみを厳選して統一することにし、とにかく収穫したものは、なんとか売りさばくくふうをしなければならなかった。だが、近くにはまだ精米所がなかった。そこで、まず臼をつくり、それから少しずつ手をつきためるより仕方がない。一俵、二俵とつきあげ、これをついでカイサーラのところへ売りに行くのである。白米一リットル四〇〇レイスでどんどん売れたという。これがジュキア線米作者の最初の運命であった。近くのイタリリー駅に精米所ができたのは一九一七（大正六）年のはじめであって、サントスの資本家ジョゼー・ノビツタによるものであった（5）。

ジュキア線は一九一四（大正三）年に全通した。そしてこの年には、アンナ・ディアスには日本人が二十家族となり、またセードロ駅にも三家族が米作者としてはいり、両駅の半数くらいが土地を購入した。こえて一九一五（大正四）年には、アンナ・ディアスの日本人は八十家族になった。

そのうちヨーロッパ大戦の末期になって、米価騰貴のために米作者の懐が豊かになると、土地斡旋の同胞仲介者があらわれ、各地に自作や借地の米作が誘入された。一九一八年には、アレクリン（現ペードロ・デ・トレー

ド)には九家族の自作農ができ、さらにその翌年は他の仲介者によって、四十家族がはいるというように、どんふえていくのであった。また、この年にはイタニヤエン(当時はコンセイソン・デ・イタニヤエンであって、たんにコンセイソンともよばれた)には二、〇〇〇アルケールの土地を購入(契約)して、五十家族の植民を入れたし、一九一九(大正八)年には、百八家族まで増加したのであった。

この時代のコンセイソンは、まるでジュキア線の中心の観すら呈した。

また一九一九(大正八)年にはペルイーベやプライア・グランデ(今日のモンガグアー)にもはいつたものもあるが、彼らは皆借地農であった。さらに一九二〇(大正九)年ころになると、各駅に日本人農家が見られ、同線を通じて四百十家族の多数にのぼったといわれる。

だがジュキア線の発展は、この地方の自然的条件のためを決して順調にはいかなかった。海岸山脈と海岸地帯砂地の中間に広がる大森林および灌木林は、各所に湿地や沼沢地があり、ことに日本人のはいつたところは、河川交通のところが多く、水害の可能性もあつたが、そういうことは開拓後はじめて実感されることであつた。

一九二〇(大正九)年にプライア・グランデ(モンガグアー)にはいつた八家族などは、「大正植民地」と称し

て多くの後続部隊を迎えるはずであったが、マラリアと作物の「病虫害」のために、事業継続不可能となり、一年そこそこで退去せざるをえなくなった。

また、イタニヤエン（コンセイソン・デ・イタニヤエン）のリオ・ブランコでは、「同志会」なる組織をつくり、ガソリン・ボートによる荷物運搬の請負者までそなえ、全百余家族は初年の増水を克服して意気盛んな開拓事業を進めたが、次年度は大洪水にみまわれ、作物は大減収、むろんすでに払いこんだ分の土地代も棒にふるって「着の身着のまま」蒼惶としてここを脱出せざるをえなくなったのである。かくて一九二一（大正十）年 二、〇〇〇アルケールのリオ・ブランコ植民地も潰滅するに至ったのであった。

最後にあげなければならぬのはペルイーベである。すでに記したように、ここに日本人がはいったのは、一九一九（大正八）年五月であつて、七キロメートルの奥地のファゼンダ・サン・ジョルジュの土地を借りうけた家族がはいったのを手初めとして、さらに駅の北方一キロメートルから三キロメートルの地点にも十家族がはいって米作に従事したが、二年間つづいた「病虫害」のために、ここを放棄するものがあらわれた。一九二〇（大正九）年には、グアラウー耕地と称するところに八家族がはいり、またフロール・サンチスタ農場の奥にあつた

「官有地」にも五家族はいったが、ここは、交通不便のため通路問題になやまされたうえ、「病虫害」がひどく、一人さり二人さつて、一九二四（大正十三）年の上半期までに、全ペルイーベには、日本人の影が見られなくなったのである。こうして、ジュキア線同胞はモンガグアー（プライア・グランデ）からペルイーベに至る海岸線の農業では、マラリア、洪水、病虫害のために、一時は全員退去を余儀なくされ、ついに、山間のアンナ・ディアス以西に移り、そこに定住することになったのである。

私がジュキア線同胞の歴史を書きだして、はたと行き詰まったことは、一九一八年から同二四年の上半期までの足かけ六年間の歴史がさっぱりわからないことであった。記録に残っているのは、今ここに記した、マラリア、洪水、病虫害のため一年あるいは二年にしてつぎからつぎに退去して、一九二四年上半期には日本人の姿は影を没した、ということだけであった。日本人が最後にペルイーベを退去してからすでに四十数年がすぎている。そして当時この地で病苦や洪水と戦った人たちは、あるいは死去したか他へ移動してしまつて、今日、ジュキア線各駅の沖縄県人にたずねても、その噂すら知らないのである。

さいわいペードロ・デ・トレード駅には、第一回かさと丸移民で、リオ・ブランコに入植したことのある古波

蔵巖（こはくら・いわお）という八十六歳の老人がいた。ある人の案内で、町のなかにあるこの老人のシャーカラ（菜園）をたずね、大体のことは知ることができた。ここには他の人から聞いた話も合わせて、彼らの生活を総合してみる。

古波蔵老人はイタニヤエンのリオ・ブランコへ入植した三十家族のなかの一人であった。はいったところは、川を一〇キロメートルほどさかのぼったところ。ボートでのりこんだのであるが、当時日本人はまだ漕ぐことが下手だったので、浅いところへ行くとみんな水中においてあとからおしたものだという。

ここは大森林ではなかった。川の両側は森林になっていたが、水辺から少し離れると灌木地帯で、山伐りにはさほど苦労しなかったが、焼き払ったあとの整理に手間がかかった。カマラーダがいなかったので、みな自分たちで山を伐ったのである。

家はガリカンガ椰子や竹で壁の下地をつくり、屋根もこの椰子の葉でふいた。サツペーも使った。むろん壁土を塗る暇などなかった。まったくの掘立て小屋でがんばったのである。寝台も竹でこしらえた。風呂などなかったから川の水を浴びた。もともと熱い地方で育った人たちであるから、風呂がなければならぬということはない。はなかつたのである。

食料はサントスから米・塩・豆・油などをとりよせる。近くのアンナ・ディアスからはさつまいもや豚肉の供給をうけた。しかしどこの新開地でもそうであるように、米などは砕けやそれに等しい三等米であつて、できるだけ生活費をきりつめたことはもちろんである。

稲の病気の正体はわからないが、害虫はクルケレーという尺とり虫であつたという。

なんとかして一年はがんばつた。しかしそのつぎの年は、屋根まで浸す大洪水のために、四日間は身動きもできなかつたのである。稲は背丈にのびたが、そこへ来た洪水であつた。今度は全滅である。この地方では雨が降らなくても水がふえる。それは山脈の彼方、サント・アマロ方面の水が流れてくるからである。そのうえ、水がひくころになると、マラリアが出る。水たまりに蚊がふえるからである。四十度以上の熱をだしてうなるもの、ふるえるものが、近所となり、そこここにあらわれる。マラリアであることはだれにもわかつた。命あるうちになんとかここを逃げださなければならぬといふので、払いこんだ三分の一の土地代など、だれも問題にせず、ついに総退却となつたのである。

日本人が米作にはいつたといふので、イタニヤエンにはブラジル人資本家が精米所をつくって待機していたほどであるが、一年もつづかなかつた。

この辺はマラリア地帯として有名なところであったが、だれにきいてもどのくらい犠牲者が出たものか全然わからなかった。滞在期間が一、二年であったため、あまり悪化しないうちに出てしまったものか……。ところがレジストロの歴史を書きだして北島研三医師のことを調べてみたら彼は一九二三（大正十二）年四月、当時ジュキア線のマラリア患者救護のために、レジストロからよばれて診察にまわっているうちに、自分もマラリアにかかり、同年九月十七日、すなわち、ほぼ五か月のちに自宅で他界したのであった。

してみると、かなり猛烈なものであったことが察される。おそらく「蒼惶として」脱出した人たちのなかには、北島医師と同じような運命にみまわれたものもいたにちがいない。

ここに一九二六（大正十五）年二月二十七日、ジュキア線日本人会出版の「会報」に発表された金城慎義（きんじょう・しんぎ）の「ジュキア線日本人発展史」の一部を「今日のブラジル」五七七〜五七八ページから原文のまま引用すれば――「之を要するにジュキア線日本人の全盛時代は大正九年、十年を以って其の分水嶺とする。之は歐洲大戦末期米価一俵十二、三ミルに暴騰した結果で、大正八年の末から九年にかけて伯国の各地から風（ふう）を望んで蝟集し其数が四百家族を突破するに至つ

た。而して大正十年以降米価の下落したのと、珈琲及柿の価格の騰貴は、当線日本人を駆って、ノロエステ、ソロカバナに走らせて、当線日本人の意気漸く沈滞の状態に陥り、大正十二年の四百八十二家族から十三年には激減して、四百三十五家族となった。しかし、大正十三年の中頃からの米価騰貴はジュキア線に、一大光明を与へ、やうやく活気を呈するに至ったが、十四年の初頭から穀価の天井知らず未曾有（みぞう）の暴騰は、在住日本人を有頂天に走らせ、奢侈贅沢（しゃし・ぜいたく）の風が漸（ようや）く生ずるに至った。幸に日本人会幹部の尽力によって、大事に至らずに堅実を保ちつつあるが、とにかく、此の年の好景気で、今迄の負債を全部償却したばかりでなく、不景気に襲はれた内奥地方への貸付額二千コントス、郷里送金二千コントス（千コントスは三十万円）以上の多額が流出しているのをみても如何に好景気であったかが伺はれる。

而して本年（一九二六）度は勿論、各事業が拡張せられて、大いに成すところがあった。地主もアレクリン（ペードロ・デ・トレード）、イタリリー、ペードロ・バールロスに激増して来たのは大いに喜ばしい現象である。要するに、ジュキア線の日本人が米作を主業とする以上は（当時の農法によれば）常に新らしい土地を求める必要があるから、古いアンナ・ディアス以東から西漸（せいぜ

ん）して今やイタリリー、アレクリンを中心として活動しつつある。

アレクリン（現ペードロ・デ・トレード）が多数の日本人を吸収したのは、土地肥沃且広大な為で、大正九年三月宜野座岩松（ぎのぎ・いわまつ）氏とバ氏（ライムンド・バスコンセーロス）とが協力して鉄道会社に交渉し、停車場を設けさせてからは、一層その数を増して、米価の好調は益々邦人をアレクリンに集中せしめた。大正十三年の百六十五家族から十四年には二百家族を突破する盛況を呈している。而して大正十三年以降、邦人の店舗も増加し、イタリリーに四ヶ所、アレクリンに四ヶ所を有するに至った。そして、此の両駅とも駅の近在の土地を市街地として分割売買したので、両駅とも其近傍は一つの小市街の観をなして殷賑を極めてゐる。而して此等も皆日本人の盛衰と共に従ふと思へば、日本人も多少肩身が広くなる感がする「これによつて、われわれは一九二五年までのジュキア線同胞の発展のあとを、手にとるようにながめることができる。

一九二五（大正十四）年といえは、前二四年における干害につづくイジドウロ將軍の革命があつたのちであり、ノロエステやソロカバナ地方では、食料品はあがる一方、コーヒーは暴落。邦人農家は四苦八苦の時代であつた。そしてこの同胞の惨状を救うために、上塚・星名などは、

百万円低利資金借入れ請願を日本政府へもちこむことに決して、その運動を開始した年であった。この融資運動には、時の田付七太大使のノロエステおよびソロカバナ地方巡回視察まで伴ったが、翌年になって融通された金額は八十五万円であった。このとき四百家族のジュキア線同胞は、百二十万円（四、〇〇〇コント）の大金を動かしていたのであった。そして、そのうちの二、〇〇〇コント、すなわち六十万円は郷里送金だった。いかに好景気だったかがわかる。

ジュキア線同胞の懐から故郷へ送られた二、〇〇〇コント（六十万円）を、かりに四百家族の懐から出たものとと仮定すれば、一人平均一〇コント（三万円）となる。

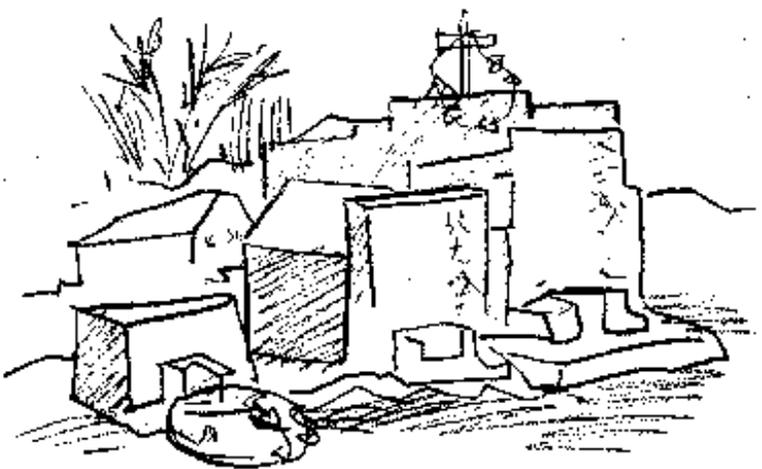
（ちなみに、郷里送金をほとんど義務づけられて渡伯した初期の沖縄県人たちが、この送金思想の重圧によって、出稼ぎ的生活態度をなかなか清算できなかつたことが、その後の発展に大きな障害となったという見解がある。彼らの一面である堅実性に伴う保守的な生活態度は、そこに根拠をもち、そして、これは祖国出発の際にすでに担ってきた運命ではなかつたか、というのである。これはかなり多くの人の支持する意見であつたので、ここにつけ加えることにする）

ともあれ、この時代は、ジュキア線米作の絶頂にあり、その後米価の下落と地力の衰退とは、この地方の産業を

しだいに多角的な営農に発展させ、さとうきびの栽培や
ピंगा（火酒）の醸造をはじめ、また木炭がかなり大き
な収入となりだした。

木炭生産はアンナ・ディアス方面では早くからやって
いて、一九一九（大正八）年七月から同二〇年六月まで
の一年間の生産高は四千六百八十俵、一万二、七〇〇ミ
ル・レイスであった。

「邦人として最初にこの木炭業に手をつけたのは、アン
ナ・ディアスにおいては屋比久孟香（やびく・もうこう）



イタリリーの基地

で在来のカボクロ式焼方の不便なるを感じ、一九二〇

(大正九)年日本式常設窯を設けて、木炭製造に従事する外、同地邦人へもこの製造法を伝えた結果、斯業も亦邦人産業の一として相当の地歩を占むるに至り、大正一三(一九二四年)には全線日本人のみの産額四万俵、価格一〇コントスを算した(6)のであった。

ジュキア線におけるピング醸造は、アンナ・ディアスの開祖の一人、宮城(みやぎ)利三郎がはじめてであって、これもしだいに各地にひろまった。

今日米作よりもバナナづくりで名高いジュキア線で、はじめてこれを栽培した日本人は、一九一四年にセードロにはいった山城柳吉であった。彼はサントス郊外のイタパニョールから一九二五(大正十四)年五千本の苗をもつてきて、これを所有地内の低地に植えつけた。しかし、不幸にして翌年の大洪水でほとんど全滅したが、それでも若干の苗を確保することができたので、これをふやすことにつとめた。バナナ栽培はその後しだいにセードロから近隣一体へひろがったが、本格的な栽培は一九三〇年ころからだと言われる。

一九三三年の「時報年鑑」の調査によつて、一九三二年におけるジュキア線同胞のバナナ栽培状況を各駅別にみると、つぎのとおりである。

駅名

株数

イタニャエン	四〇、〇〇〇
ペルイーベ	
アンナ・ディアス	八二、五〇〇
ラポーゾ・タバールス	
イタリリー	一一二、七〇〇
アレクリン	一九五、五〇〇
イベラー	
マノエル・ダ・ノブレガ	一九、五〇〇
ペードロ・バールロス	一七二、三〇〇
ミラカツ	三七、六〇〇
ビグアー	一二七、六〇〇
セードロ	二四三、八〇〇
ジュキア	二一、七〇〇
計	一、〇五三、二〇〇

(当時は株植えであったが、現在では一本だてであるので「本」で数えている) バナナ栽培はその後ますます発展して、戦前の一九四〇年ころになると、いちばん多いビグアーが百六十万株、つぎのアンナ・ディアスが五十万株となっていた(7)。そして戦後は、ブラジルの輸産物としていよいよ主要な外貨源となり、したがって南亜地方におけるジュキア線の地位も重要性を増しているが、その方面における詳説はここでは割愛せざるをえない。

ジュキア線同胞の約九五パーセントが沖縄県人およびその二、三世であって、彼らがいかに同県人だけの集団を好むかがわかる。これは第一回移民当時からの伝統であった。

彼らの生活が、ブラジルにおいていかに変遷したかは、郷土的伝統的生活を深く研究したうえでなければ、簡単に言い切ることはできないが、古い一世の生活態度、それから、若くして渡伯したもののそれ、および二世とは、かなり明瞭に区別できるようである。古い一世が伝統主義者であることは何県人でも変わりないし、若くして渡伯したものが、案外郷土的なものにとらわれず、二世以後になると、沖縄県人という意識もうすくなっていることは当然で、彼らの集団内部でも、新旧思想の葛藤があることは、結婚問題などをめぐって、われわれもたびたび耳にするとところである。

古い一世がむかしながらのつつましい生活をして勤儉貯蓄主義で働いている姿を、いま第一線に立って活動している人たちは、もはや、古い保守的態度としてこれを踏襲することを好まないし、二世たちに至っては、むしろ「めいわくなもの」と見る傾向がある。

古い生活態度は、そのむかしサントス郊外（今は市内）のカンポ・グランデで、掘立て小屋をつくり、しめっぽいところで泥まみれになって野菜づくりをし、それを頭

にのせて町を売り歩いたいき方であるが、ごくまれにはあるが、いまでもジュキア線の町ではそれを見ることのできる。これは、現在数万本のバナナ園を経営し、多くのブラジル人労働者を使ってかなりな企業家的生活をしているもののいき方ではない。こうした層には、むろん二世も含まれている。そして、二世たちのなかには、いま地方の高校からサンパウロへ移って大学へ通っているものも相当あり、彼らは古い日本的、あるいは沖縄的なものから離脱していく。

もしここでジュキア線における沖縄県人の歴史をたどろうとすれば、自然こういう三つの形をここにも見ることになる。

初期の生活は、イグアツペ植民地（桂、レジストロ、セツテ・バーラス）のそれと変わらない。そしてサントスのカンポ・グランデの生活とちがっている点、また、イグアツペの開拓者のそれと似ている点は、ここが大森林の開拓であったためである。

彼らはここで、ジュサーラ（パルミット）の小屋をつくり、その葉で屋根をふき、土間に椰子の木を割ってつくった寝台に寝、手製のテーブルや腰かけをそなえつけ、焼け山に米や豆や、とうもろこしを植えた。焼け跡の木を集めて豚小屋をつくり、豚を飼い、食用にカイピーラ（地どり）の鶏を飼った。

山頂で鳴きさわぐブジウ（猿）の声に明日の天候を判断し、子供の教育のことを心配し、収穫時には山の上からもみ俵を頭にのせて麓の家まで運んだ。こうした労働のはげしきは、ファゼンダなどとは比較にならないほどであるが、独立農の生活には希望があつた。作があつてもうけたら馬車も買おう。借地ならどこかにいい土地を買っておきたい。現金がはいったら郷里へ送金もしよう。

ただ、ジュキア線同胞の生活が、イグアツペ植民地の生活とちがっていた点は、ここでは彼らが皆独力で建設したことである。病院、売店、精米所、入植者の宿泊所、道路など、植民会社による施設はなに一つなかつた。こういうところは、奥地の「植民地」と少しも変わらなかつた。

彼らの農法が、はじめはカボクロのそれとあまりへだたりがなかつたことは、ここでも木の棒（シューシュ、あるいはソケットとも言った）でもみを蒔いたことでもわかる。このカボクロも当時はフアリーニャ・ダーグア（フアリーニャ、マネーマとも言った）を食べていて、ほとんど原始人の生活をしていた海岸地帯の人たちであつた。

うっそうとした海岸山脈の原始林は、今日でも国道第二号をバスで行くと、いくらかそのおもかげをとどめているところがあるが、そういうところに、点々と借地、あ

るいは自作としてはいつて開拓を進めていったのである。その生活はイグアツペなどくらべても、さらにさびしいものであったことが想像される。森林中で迷子になって二日目にやっと道路のあるところへたどりついたという話もある。

まだトラックはなかったし、馬車を持っているものも少なかった。ところがよくしたもので、彼らは鉄道を充分利用することができた。週に二回、のぼりくだりする貨物列車は、炭でももみでも、もし二十俵以上あれば、どこでも停車してサントスマまで運んでくれたのである。

経済的な協力として、ムシロン（プチロン）を利用することもあったが、アジュトリーオと行って、お互いに労力の交換を行なった。

頼母子講をもつて、ロバを買い、車を買ったこともある。これは経済的な相互援助であると同時に、社交機関でもあって、金額の多少は別として、今日でもなおさかんに行なわれている。

米作、ピング醸造、炭焼き、バナナ栽培というように、いろいろ産業の移り変わりはあったが、今日ではピメントンやバージェン（莢豆）の栽培でもうけているものもある。

粗食と重労働にたえてきた点は、日本移民中沖縄県人が筆頭かもしれない。それは国を出るとき渡航費を借り

て来たので、郷里送金の義務を負っていたためでもあることは、他のところでも指摘したとおりであるが、彼らは先祖代々、恵まれざる土地で支配者の搾取のもとに生きつづけてきたことの伝統でもあろう。

内地からの移民たちは、ブラジルへ来ると、沖縄県人からいろいろな澱粉食を学んだ。「おきなわだんご」「おきなわせんべい」などがそれで、マンジオカの芋や粉をこねてつくるこれらの食物は、もち菓子に代わりになり、また子供たちのおやつのためのおしみにもなった。ただし、これは沖縄県人の発明かどうかわからないといっている同県人もいたが。

豚の飼育は慣れたもので、豚の肉や脂は、ファゼンダ時代から常用していた。ジュキア線では豚を食べすぎて体をこわしたものが多く、医者から注意されたことがある、と話してくれた人もあった。

フェスタには必ず「もち」をつく。結婚、誕生、還暦の祝いなどにもらはつきものである。これは米作をやっているジュキア線の特長であろうか。

沖縄県人の宗教は祖先崇拜と言われているが、べつに神職者がいるわけではない。祖先をうやまう、という気持ちをもっているだけである。墓地をきれいにするのもそこから来ている。「内地人の墓とはくらべものにならないほど立派だ」と評する県人外の人もいたが、必ずしも

すべての墓がきれいに保存されているとはかぎらない（むろん、お骨を移動したあとも見られる）。こうした状態はジュキア線における同胞の移動のはげしさを示すものであろう。ジュキア線ばかりでなく、奥地へ行っても無縁仏の多いのは、ブラジルの特長かもしれない。

彼らは洗骨といって、五年目（日本では四年目だったというが）に墓を掘りかえすときに、アルコールできれいにお骨を洗い、新しい墓、というよりも一種の小さな納骨堂に納める。だからその墓は細長いお棺の感じではなく小さい四角いお堂といった感じ。前面には必ずろうそくを立てるために特別小さな枠ができています。おまいりに行くと、ろうそくの火が燃え切るまで立ち去らない。だがこうした習慣も、二世の代になり、カトリック教徒になると変わってしまう。はじめからがつしりしたヨーロッパ的な墓標をつくる。

祖先崇拜の信仰は、悪いことをしたら先祖さまにすまないという道德であり、また自分の犯した罪は、因果応報で子孫の生活にもかかわるから、悪事をいましめる道徳律はきびしくなる。そういう点は、仏教思想の影響ではなかるうかと説明してくれた人があった。

しかし、これも古い移民たちの信仰であって、若い人たち、ことに二世にはあまり訴えるものがないようである。

祖先崇拜が、もしかたくなに凝りかたまると、血統を重んじるという考えにもなり、子供たちの結婚相手には郷里にあるときの同じ身分の子孫だけを選ぶという傾向ともなつて、若い人たちの反対にあつている。

二世たちの結婚については、いまどこでも問題になつては、もはや親たちの意志を尊重するという時代は過ぎてしまったことを、どの一世も感じている。

同県人だけがかたまる保守的習慣は、ときによると、彼ら同志の社会からも孤立してしまうことがある。

ペードロ・デ・トレードにある十四家族の帰国組集団がそれであるが、彼らは他の同県人ともつきあわず、かつてつちかわれた「帝国不敗の信念」をいまももちつづけ、子供たちには徹底した日本の教育をほどこし、他の二世には全然見られない正確な日本語を話している。彼らは、経済的にも文化的にも、まったく日本人および二世の社会から孤立しているのである。

同県人たちの進歩にも歩調を合わせることができず、ましてブラジルの生活にも同化することのできなかつた保守的感情は、ついに信仰として固定してしまつたのである。そこには人間的なある純真さは感じられるが、それ以上に、なにか宿命的な悲劇を思わせるものがある。ここでもわれわれは、彼らの心情をただ「無知」として割り切ることに躊躇せざるをえないのである。

現在、ジユキア全線（サントス市およびレジストロ、イグアツペ地方をはぶく）にどのくらい日系人がいるかわからないが、一九四〇年における千九十四家族、五千九百二十六人（8）にくらべると、一九五八年の調査はイタリリー、ペードロ・デ・トレード、ミラカツ、ジユキアなど四か所で、四千九百九十七人、そのうち一世は千四百十一人であった。現在ではもっと減少しているだろうという。

ある人は約六百家族で三千人以内とみた。しかも八〇パーセントは二世および三世ではないか、と言う。

注

(1) 「今日のブラジル」 六〇一ページ。

(2) 今日のモンガグアーム、むかしはプライア・グランデとよばれていた。

(3) 「ブラジルにおける第一線に活躍する人々」一六三ページ。

(4) The Southern S. Paulo Railway
Company

(5) 「移植民廿五周年記念鑑」三七ページ。

(6) 『日本人発展史』上巻、三三八ページ。

(7) 同上、三四三ページ。

(8) 同上、三四二〜三四三ページ参照。

32 イグアツペ植民地の建設

―桂、レジストロ、セツテ・バーラス

サンパウロからレジストロへの道

サンパウロ市から西南へ向かって国道第二号を、自動車もしくはバスで一八五キロ（1）を走ると、リベイラ（2）河畔の町レジストロに着く。自動車では三時間ほどである。途中海岸山脈をよこざるので、スピードをおとさなければならぬ。

サンパウロから行くとレジストロの町は、川の対岸になる。近代的鉄筋コンクリートの瀟洒な橋を渡って、約二〇〇メートルほど国道から右へはといったところが、レジストロ市の中心になっていて、ここには日本人経営の商店がたくさんならんでいる。日本様式を加味した古い二階建ての建築なども見られ、サンパウロ州の都市としては、ちよつとエキゾチックな感がする。主として日本移民によって建設された町であることの名ごりである。

だがこれは、ごく最近の話であつて、自動車道路ができる前は、サンパウロからまずサントスに汽車で下り、ここで一泊し、早朝海岸線をとるジュキア鉄道の汽車に乗り、夕方、リベイラ河畔の町ジュキアに着く。ここでまた一泊、それから翌朝、外輪船とよぶ後方に水車の

ついた川蒸気で、ゆっくりリベイラ川を四、五時間ついでやして下り、午後四時ころレジストロの港に着くのであった。サンパウロ市から三日がかりである。

一九二九年からは、海外興業会社（略称海興）によってジュキアーレジストロ間に車道が開設されたが、一九三八年になるとピエダーデ経由の州道が完成し、サンパウロ市から七時間余で行けるようになる。

さらに一九六〇年には、今日の国道第二号がレジストロに達し（3）、かつては三日がかりで行ったところが三時間余で行けるようになったのである。これは、レジストロ植民地にとって革命的なできごとであった。サンパウロ州の僻地にとりのこされた植民地は、今やサンパウロ市の郊外の観を呈するにいたったのである。

イグアツペ植民地という名称

レジストロとセツテ・バーラスおよびリベイラ下流の桂（ジプブーラ）の三集団地を合わせて、昔はイグアツペ植民地とよばれた。みなイグアツペ郡内にあったからである。はじめてこの地方に日本人が足をふみ入れたのは一九一三（大正三）年であった。

イグアツペ植民地は、日本の半官的植民会社「東京シンジケート」がサンパウロ州政府から無償で譲与される

ようになっていた五〇、〇〇〇ヘクタールと（もし官有地があった場合は）ポスト・ド・レジストロ（4）と称するところに市街地を建設するために、さらに五〇ヘクタールを与えられることになり、一九二二（明治四十五年）年、サンパウロ州政府と東京シンジケート代表の青柳郁太郎とのあいだに契約が成立したことによってはじめられたものであった。

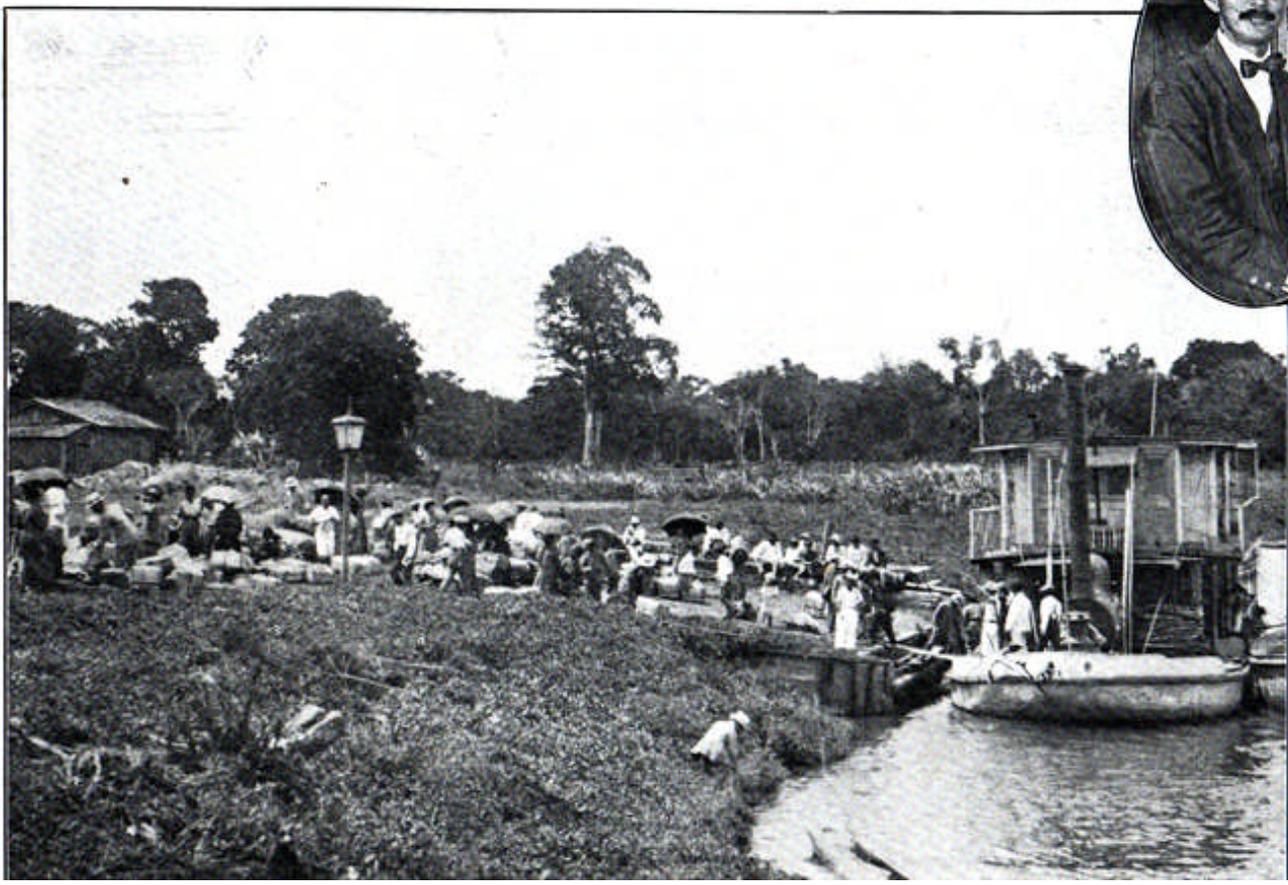
（ここでは、東京シンジケート設立についてのいきさつや州政府との交渉などはいっさいはぶく。その理由は「生活の歴史」という本書の観点からなので、もしその方面に興味あるものは、『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻を見ていただきたい）

東京シンジケートは植民事業着手にさきだつて一九一三（大正二）年、ブラジル拓殖株式会社組織替えされ、さらに、一九一九（大正八）年から、海外興業株式会社に合併された。そして、この年にはじめてセツテ・バラス（5）が加えられて、イグアツペ植民地の総面積は総計七五、八五三ヘクタール、約七十五・六三二町歩となったのであった。

イグアツペ植民地への初入植は、レジストロとイグアツペ市の中間にあったジプブーラ（G i p u v u r a）であった。

桂植民地の開拓

(a) 地民植ロトスダレ (一) 社会式株業興外海



ここは、この植民地創設に力をそそいだ桂太郎を記念して桂植民地とよぶことになったところである。

最初の入植者は、日本から直接入植させるよりも、ブラジルで農業の経験をもつものをえらんだほうが、あとになって入植する直来の人たちのために便利であろうとの見地から、入植者を州内のファゼンダ地帯に求めたのであるが、応募者がなかった。そこでやむをえず、当時サンパウロ市の日本人街と称されていたコンデ・デ・サルゼーダス街へ出向いたところ、やっと最低人員の三十家族を連れ出すことができたのであった。この植民募集の任にあたったのは、会社の現地代表青柳郁太郎その人であった。

一九一三（大正二）年十一月から数回にわたって、三十家族（6）のコンデ・デ・サルゼーダス街の住民たちは、サントス経由、約二十時間の船旅でイグアツペ港に着き、それから小船で桂植民地へ向かったのであった。当時はまだジュキア鉄道が完通していなかったので、やむをえず海路をとったのである。

さて、コンデ・デ・サルゼーダス街、略称コンデ街は、初期サンパウロ市の日本移民居住地として、すでに記したところであるが、ここからイグアツペ植民地の建設に向かったのはどんな人たちであったろうか。その職業から調べてみると、

「第一番に応募したのは、サンパウロ市の鉄工場に働いていた熟練工数人であった。いずれも日本に居たときは、造船所又は海軍工廠（こうしょう）に勤めていた者で、立派な機械職工である。その当時ブラジル人の工場でも好遇されていたが、何分都会生活は、高い家賃を支払わねばならず、野菜もすべて買わねばならず、生活が容易でない。なので、農業には経験がなかったが、方向転換を試みようというのである。その他大工、左官、商人上り、学生上り、或いはコーヒー耕地の生活に失望して耕地を脱走した者などで、中にはサントス着後三カ年に六カ所も諸方転々、遂に落着き場所を見出さず、日本へ帰ろうかどうかと思案にくれて居た念入りな不平家族もあったが、この人は存外素直に落着き、後日手広くさとうきびを栽培して焼酎（ピング）製造によって相当成績をあげるようになった。

誠に不思議なものである」

と青柳の回顧談に見られる（7）。

これらの人々が植民地に到着したころ、植民地にはすでに農業技師二人、医師一人、土木測量師三人、その他庶務係一人が先着していて、会社側の世話人は一通りそろっていた。

会社側では、これら先着植民が、もしなんらかの理由で、半年あるいは一年後に植民地を脱出するようなこと

になったら、この植民事業も一時頓挫することになるかもしれないと考え、これらの人たちを桂植民地に定住させるために全力をつくした。

そこで、現地にあつてこの植民地の創設に力をつくした青柳は、便宜上、郡役所の所在地イグアツペ市に居住することに、ここからガソリン・ボートで一時間半で行ける桂植民地を監視することにしたのであつた。

イグアツペ市は歴史は古いが、その当時は「死の町」といわれたほどさびれていたところで、住民も甲斐性のあるものは、みな他へ移動し、残った男たちは出稼ぎにでて、家にいるのは老人や女子供たちというようなところで、

「営業としては、わずかに二、三の小精米所と種々の雑貨店と二軒のホテルがあるだけで、また電燈もなく、市街区域を牛がぞろぞろ歩いていて、夜などは散歩もできないところだつた。

他との交通は月二回サントス往復の、五百トンの小蒸気船があるだけで、郵便物も一週三回サントスからとどけられるだけで、サンパウロ市の日刊新聞は、二日もしくは三日後でなければ入手することができなかつた。ただ、電信局があつたので、日本との電報通信は自由にやれた（８）のであつた。

ところで桂にはいった三十家族の植民者は、会社側の

予想どおりに自作農として、与えられるべき地区には
いったただちに開拓に従事しようとはしなかった。彼ら
は農業に経験がなかったし、資本もなかった。だから
じめは、カマラーダとして会社の建築、あるいは試験農
場でのいろいろな仕事をやった。そのうち会社では分益
農（一種の小作）制度をもうけてこれを試みたところ、希
望者でたちまち満員になった。

会社からは土地十五町歩を無償提供し、瓦ぶきの住宅
をつくり、また必要な道路もつくる。その代わり、植民
者は自分の経費で米なりさとうきびなりを作る。そして
収穫の二割五分を会社におさめ、残りの七割五分を自分
たちの所得にするというシステムであった。

どうしてこのような方式で農業をいとなむことを植民
者たちが好んだかという点、「分益農では収穫皆無のとき
でも、一時無駄働きをするだけで、自分の金をつぎこま
ないでもすむそうである。それほど当時はみな自作農を
おそれた（9）」のであった。

さいわい、この分益農は好成績で、さとうきびを作っ
たものは、砂糖やピンガで儲け、米作者は一町歩からも
み七十俵（一俵四斗五升入り）もとり、いちばん成績の
いいものは、百俵もとったという。マラリアにもかから
ず、彼らは健康で働くことができた。草創時代なので、会
社の職員も植民者も、みな一体になって協力したからで

あつた。

この三十家族の成功は、その後の植民にとって大きな刺激となったことはいうまでもない。コンデのバガブンド（そのように地方の人たちは彼らを軽蔑していた）さえやれたのである。イグアツペへはいつて自作農になるう！ 移民たちはファゼンダ以外に独立農へ向かう道がひらかれていることに希望を見出すことができた。出稼ぎから定住へ！ イグアツペ植民地は、日本移民にはじめて定住への方向を指し示したところに大きな意義がある。

植民者の生活は、まず当時ここにあつたカボクロ（旧住民）たちの小屋を改築した合宿所から各自のうけもち地区へ山伐りに通うこと、山の焼き払い、小屋がけ（瓦だけは会社が提供したという）、作物の蒔きつけと、その順序はどこの開拓地にも見られるものであつた。

だが、ここがサンパウロ州の奥地と少しばかり違つていた点は、リベイラ河畔の低地であつたため、わりあい大木がなかつたことであるが、とくにジプブーラは低地が多かつたので、山伐りよりも山焼きのほうに苦労した。それに、ブラジル生活に経験のあるものが集まっていたとはいえ、まだ原始林の開拓には全然経験がなかつた。斧の使い方もカボクロから習つたものである。

低地にはナカチロン（野ぼたん科の灌木）があり、こ

れは高台（モーロ）にもあったが、少し種類が違っていた。

低地のものはナカチロン・デ・ブレイジョ、高台のものはナカチロン・デ・モーロといった。サンパウロ郊外でクワレズマという木である。前者は濃い群青、後者は紫・コバルト・白と花の色が変わっていくもので、一本の木に三色の花がつく。どこか「つつじ」のような観もして美しいものであるが、これが湿地ではなかなか枯れきらず、火をつけて焼き払う場合、葉先だけバリバリと燃えてしまつて、枝や幹のほうが残つてしまう。そうすると、もう一度この燃え残りを集めて、小山をきずき点火するのであるが、それがまたうまく焼けない。山焼きにはみな苦勞した。

こうして、木の幹や枝の散乱した焼け野へ米を植えつけるには、日本の農法ではどうにもならない。ここでもカボクロのやり方を学んだのであった。

長い棒の先をとがらして、これで穴をうがち、腰にしぱりつけた小さな袋からもみを二十粒ほどつまみだしてはこの穴に放りこみ、足でかるく穴をふさぐ。畝などはずくらず、自分の居所から前後左右に蒔いていくのである。こうした仕事に慣れているカボクロは、長い棒を使って穴をうがち、あまりかがまないで、もみをうまく穴に放りこむ。穴はむろん、地面にさしこんだ棒の先を

クルツとひねるのでじょうご形になる。ここへもみを投げこむ。この棒は奥地で使用したカバデイラとは違って、ただの木の先をとがらしたものである。カボクロたちはこれをシューシュ(Chuchu)とよんでいた。カボクロの農法はシューシュで蒔いてナイフで穂先を収穫するのである(Plant and docom Chchu, colhe com canivete)。

むろん日本人は、日本式の鎌を使って稲刈りをしたし、できるだけ土地を整理し畝をつくって蒔きつけもした。なぜなら、カボクロ式播種法では、除草に不便だからである。カボクロたちの原始的農法では、除草はほどほどにして、のちにはナイフで穂先を摘みとるのであるから、畝をつくることに意をもちいなかった。彼らは最少限度の労力で自家用飯米をとればよかった。自分でつくった手臼について食べたのである。それに彼らの常食は魚の塩だきとマンジオカの粉(Farrinha da água)であったから、米は少量でよかったのである。フリーニャ・ダーグアについては他のところで述べる。

植民者の住居については、ちよつと前にもふれたように、会社から瓦を供給されたものであるが、いよいよ自作農にはいると、自分でいろいろくふうした。屋根は瓦でも、壁は、ほとんどジュサーラ(パルミット)を使った。これを幾本にも割り、芯をこそぎおとして縦になら

べ、また、これをさらに細く割ったり、あるいは竹（バンブー）を割ってこ（ゝ）ま（ゝ）い（ゝ）をかき、これに壁土を塗るのである。湿地に家をつくるものは、この土地の習慣にしたがって、高いやぐらの上に家を建てた。カボクロたちはこのやぐらの下をほとんど利用しないが、日本人はここを囲って炊事場や食堂に使った。むしろ洪水の場合は、みな二階へ避難したのである。

レジストロでもそうであるが、この二階建ての家が、いかにも日本式に見えるながら、正面にベランダがあり、横から木の階段をのぼるようになっているところはカボクロ式、あるいはカイサーラ（10）式だといえるだろう。



ジブブーラの植民者の家

瓦がないところでは、屋根もサツペー（茅）やジュサー

ラの葉でふき、セードロ材などを割って、こけらぶきにしたものもあった。

壁は後日白く石灰で上塗りをした。

寝台は、ジュサーラで一間いっぱいの床をつくり、この上にイグアツペでできるピリー（11）のごさを敷いて、ふとん（コルション）のないあいだは、ここに日本から持ってきた敷きぶとんや毛布を敷いて寝た。親子なら、みな一つ間である。もし、やぐらの上に家を建て、床が板張りであったら、ここにござや敷きぶとんを敷いて寝たのはもちろんである。

衣服は、男なら地下足袋に巻ゲートル、女はスカートの下にズボンのようなものをはいた。これは虫（蚊やぶゆやあぶ）よけのためであった。男女とも、まもなくブラジル式労働靴をはいた。カボクロはみな裸足であったが。

マラリアにかかったものもあったというが、この地方のものは、悪性ではなく、本当のマラリアかどうかかわらないといわれている。さいわい、医者もついていたので、アミーバ赤痢などの予防にも万全を期したので、病気のほうはあまり心配がなかった。

食物は、はじめは白米をイグアツペ市から購入した。すでに精米所もあって、この地方は、かつてはサンパウロ州でも有名な米の生産地だったのである。青柳が日本

人の植民地として、ここを選んだ理由のうちには、ここが海港であったこと、そしてなによりも米の生産地であったことによるといわれている。したがって、ここではじめて栽培したのは在来のブラジル米であった。

さとうきびも前から栽培されていたので、砂糖があり、ピンガがあった。日本移民はここで農業に着手するとまもなく、さとうきびを植え、ピンガ醸造もはじめた。

新開地のあらやまには野菜はあまりできなかつたが、そのかわり、ここにはパルミットがありあまるほどであった。それに川では魚がたくさんとれた。

酒があり、米があり、野菜の代用品としては美味なパルミットがあり、そのうえ魚が豊富にあつたのであるから、これで日本移民もがんばれたのである。

今日でもリベイラ川のマンジュエバ（12）は有名で、十一月から三月ころまでの漁期には、川の兩岸のいたるところにマンジュエバとりの網がはりめぐらされていて、航行するボートやランチがこれをよけて通るのに苦心するのであるが、当時は、今日では想像もつかないほどたくさんとれたといわれている。ペネイラ（竹篩）でボートにどんどんすくいこんだ。購入するとしても、二〇リットルの缶にいっぱいがはじめは五〇〇レイス、高くなっても二ミルくらいだったといわれる。日本人は、こ

れを干魚にしてたくわえた。あまりとれたときは肥料に用いたという。いきのいいときは刺身にしてもうまい。ただ、とつてから時間がたつと味が変わるのが欠点である。だから、「マンジューバはまずい」といえば、「それはいきのいいのを食べたことがないからでしょう」といわれる。

長さ一〇センチくらいで、きれいな小魚である。

日本人はすぐ味噌をつくったから、食料にはまあ不足はなかったといっているだろう。

さらに、土地の住民カボクロが、長くこの土地に住みついた人たちであったため、怠惰ではあったが、善良で外来者とはすぐ親しくなったので、労力の補給にも便利であった。また、彼らと親しくつきあえば、取り入れ時などには、お互いに「プシロン（ムチロン）」といって、手伝いにも来た。しかし日本人は、彼らの生活に好奇心をいだいて来てもらうよりも手伝いに出かけたほうが多かった。これは彼らと親しくするのにいい機会だったのである。プシロンは収穫時のことであつて、相互扶助の労働ではあったが、一種の収穫祝いをかねたものであつて、あるときは手もち弁当、あるいは早目のアルモツソをしてから、稲の収穫に隣近所のものが集まってくる。収穫はナイフで稲穂を摘みとり、腹のところにくくりつけた袋に満たしていく。それを竹の籠なり、ジュートの

袋なりに詰めて家へもちかえる。床板のある家ならそのサーラいっぱいひろげる。土間の家なら布を敷く。布のないものなら土間にそのまま稲穂をひろげる。

夜になるとこの稲穂の上で、靴のないものはタマンコばきで、ファンダンゴという足ぶみのはげしい踊りを踊るのである。夕飯後のたのしみであるが、この辺では別にご馳走はないから、だれも夕飯はあまりあてにしてこない。カボクロたちの食物は川魚の塩だきにマンジオカの粉をまぶして食べるだけだ。豚など殺してふるまうことは、たまにしかない。一杯飲んで踊るのがたのしみなのである。女たちもいくらか飲む。むろんカフェーもだす。うすぐらいカンテラの光のもとでビオロン（ギターのような六絃琴）が、ブブン、ブンブンなりだす。マルカドルという音頭とりが指図し、音頭をとる。あとはワツシヨ、ワツシヨで対の男女が踊りまわるのである。このファンダンゴの足ぶみで、稲の穂は立派にもみになる。

たくさん稲穂があれば、ふみおとしたもみを片すみに寄せて、また穂を敷きかさね、みんな一杯ひっかけてから音頭とりの合図でまた踊る。昼のあいだ手伝いの人間は少なくとも、飲んで踊りたいものは、夕方からそつとプシロンの群れに加わるから夜のにぎわいはたいしたものだ。小さな掘立て小屋が二十人、三十人の人間でいっば

いになる。夜のふけるのも知らず踊りまくるのである。

プシロンに学んだわけではないが、日本人も入植初期には、お互いに「加勢」しあった。労力の交換であって、これはアジュトーリオ（13）といった。家造り、収穫などは、お互いに助けあったのである。

日本人は稲を日本鎌で刈りとり、これを細い棒をならべた台（バンコ）の上でたたきおとし、もみのよりわけには皿で空中へ投げあげて風にふかせたり、ときには、唐箕（タララ）も使った。バンコもタララもブラジルではむかしから使われていたが、カボクロたちはあまり用いていなかった。

こうして草創時代の生活を記述していると、いかにものんびりとした牧歌的なものになってしまいそうであるが、当時は、ひとたび、自分たちの地区の仕事に移ればそこは、まったく原始林中にぽつんとひらけたところで夜は野獣の声におびえ、壁の割れ目からさしこむ月光に目をひらき、夏の豪雨には、雨もりにあわてて物を片づけ、もし川べりに近いところであれば、増水に心をいためたのであった。

ここは海岸から直線距離にして二〇余キロメートルほどであり、山のふもとには貝塚もあるところ。おそらく太古には海水がはいりこんでいたものであろう。それだけ低地が多く、リベイラの流れは、いたって緩慢であつ

て、洪水のおそれも十分あった。両側に二、三メートルも伸びあがるビリー・ガッスーという、かやつり草のよ
うな藺草のしげるところを、川はうねうねとひろがり、
したがって、上りにはモーター客船で二時間半もかかる
のである。しかも、イグアツペ市は人口が少なく、市民
の食料などはカボクロのそれと大差なかったから、食料
品なども十分ととのわないことがあり、そういうときは、
節米のためにおかゆをすすりながら、原始林の重労働に
たえていかねばならなかった。

作物の植えつけがすむと収穫までの小銭稼ぎに炭焼き
はたいせつな仕事であった。

一九一四（大正三）年五月、はじめてここを訪れた山
田揚之助（のちの海興支店長）は、「とにかく、何から何
まで植民地創設の気分のみち、はじめて日本から来た僕
には、物珍らしさと同時に、海外植民のなみ大抵な決心
覚悟で行われるものでないことを深く思われされた。然
し当時の職員も植民者も鞏固な信念、奪うべからざる面
魂、なかなかたのもしく感じられ、深更床に入りて後、僕
は破窓をもるる月 光を眺めて、独り言い知れぬ感慨に
涙を絞った（14）」

とのちに感懐をもらしている。

植民者の定住を保証するためには、どうしても、ここ

に医局、精米所、売店、宿泊所等が必要であることは当然である。会社はそれらの設備をととのえたうえ、学校もたて、のちには植民者の寄付もおおいでカトリックの教会もたてた。ジブブーラの売店は品物が豊富にあり、しかもイグアツペ市よりも安いというので、わざわざ舟でここまで買物に来る市民もあったほどだという。その他肉屋ができ、郵便局までできて、さながら小さな町になろうとしたのであるが、第二次大戦で「海興」が清算されたのちはすっかりさびれてしまった。むろん、清算にかかったことだけがその原因ではなく、車道の発達のために船の便が悪くなり、しかも、ここは外部との直通道路がなかったために、生産物の運搬に不便であったところから多くの不在地主ができてしまったのであった。現在では港にも船が着かず、一軒の貧しい居酒屋（ポテキン）と旧小学校が廃屋になってしまったあと、もとの宿泊所が小学校に利用されているだけである。ブラジルで最初に日本人が建てたカトリック教会堂も、運動場をへだてた山麓にいまはさびしくそびえて、ときたまイグアツペ市からパードレが来てミサをあげるだけである。かつては事務所勤務の人たちのほかに、多くのブラジル人と三十五家族の植民者を擁していた桂植民地も、いま（一九六八年）は、ただ九家族がとり残され、むかしをしのぶよしもない。本部のあったところから二キロ半の下

流には、かさと丸第一回移民でコーヒー農場からサンパウロ市にでて、そこから最初の入植者としてここ桂植民地へはいった只野利助未亡人の家族が農業をいとなみながら、川べりの家で、いかにもこの地にふさわしいひなびたベンダ（飲物・食品店）をいとなんでいる。未亡人は八十五歳だということだった。

ジプブーラでは柳沢一家が、二階建ての家にまだがんばっていて、ここだけはランシヤ（定期客船）がとまる場所として、一般の人に旧日本人植民地のおもかげをしのばせている。

レジストロおよびセツテ・バーラス

すでに記したように、一九一九（大正八）年からブラジル拓殖株式会社と海外興業株式会社に合併されると、この年にセツテ・バーラスが加えられ、イグアツペ植民地の三集団地ができあがったのであった。ここでは、レジストロとセツテ・バーラスを同一地域として記述することにするが、レジストロ市街地から車道でセツテ・バーラスの入口まで一八キロメートル弱の距離がある。ちなみに、レジストロがイグアツペ郡から独立したのは一九四五年であり、さらに、セツテ・バーラスがレジストロから分離して独立した郡となったのは、一九五九

年であつた。桂は今日でもイグアツペ郡内にある。

レジストロ植民地へは、一九一三（大正二）年ブラジル拓殖会社の先発隊三名がまず草分けとてはいつた。藤田克巳ほか二名であるが、これは「会社が交付を受くべき官有地の実地踏査のため」で、「この年には未だ何等の具体的着手はなく、一九一四年九月二日初めて地図の上で官有地の仮交付が行われた」と、『レジストロ郡現勢概覧』（一九六三年刊）にでていようように、本当の植民地創設は一九一四（大正三）年、三家族の初入植者をみた年になる。すなわち、桂が初入植者を迎えた翌年にあたるわけである。セツテ・バーラスは一九二〇（大正九）年からはいつたが当時はレジストロから船で四時間もかかつてのぼつた。はじめの入植者は船つき場から八キロメートル奥へはいつた四家族であつた。

さて、海外興業株式会社、略して「海興」がもつとも力をそそいだのは、三植民地の中心となつたレジストロであるが、ここが本格的に開拓されはじめたのは、ブラジル拓殖会社が海興に合併される一年前、すなわち一九一八年からであつた。

海興は、はじめから植民地事務所をレジストロにおいた。そして一九二二年ころ、ここに南米第一と称された

精米所をもうけたのであった。

いま桂をも含めたレジストロおよびセツテ・バーラスの入植者数を、一九一七年から一九三一年までの十四年間にわたって記してみると（15）、

レジストロ	六七九家族	三、〇八八人
セツテ・バーラス	三二九	一、八二〇
桂	五二	二一三
計	一、〇六〇	五、一三一

そして、この年間には「出植」者も多い。

レジストロ	三二六家族	一、四〇三人
セツテ・バーラス	一一三	六七〇
桂	二三	一三七
計	四六二	二、二一〇

であって、おどろくべき植民地脱出者があった。米作の連作で地力が減退し、米価の下落で営農が行き詰まったとき、はじめはサンパウロ州奥地のコーヒー景気、つぎには綿花景気のために、彼の地へ移動したもので、今日水郷として誇るリベイラ河畔のレジストロ植民地も、当時は輸出向き永年作物がなかったために同胞間に好評

を得ることがむずかしかつたのであつた。一九二六年ころ、レジストロに旅行したある同胞の話によると、「旅費や資本のあるものは、皆奥地をめざして出て行きましたよ。わしらは、動くにも金がないので、まあ、こんなにして辛抱しているわけです」という植民者の告白を耳にした、ということであつた。

むろん、レジストロもコーヒー栽培をはじめた。しかし、この湿度の高い地帯は、コーヒーの適地ではなかつた。そして、この地方では奥地よりも一年以上早く成樹になつたにもかかわらず、老朽するのも早かつた。味の上でも、奥地とは比較にならなかつた。一九三三年ころは、コーヒー園をもたない家族はないほど、一時はレジストロもセツテ・バーラスもコーヒー栽培地帯の觀を呈したのであるが、たちまち生産が減退して、コーヒー栽培の適地でないことが証明されたのであつた。

一九一九年、お茶氣違いといわれた奈良県人の岡本寅蔵がブラジル在来の支那種の茶をレジストロに試植し、さらに一九三四（昭和九）年にはセイロン島からアッサム種を入れてからは、レジストロもお茶の産地となるのであるが、コーヒーが消えたのち、一時はサンパウロ州の南部海岸地帯にとり残された辺鄙な日本人植民地として、はじめのころのはなやかさは失われていたのであつた。

レジストロの町は一九一八年に当時のブラジル拓殖会社（一九一九年から海興）によって創立されたといってもいい。それ以前は、二家族のブラジル人と、一家族のシリア人が住んでいただけであった。ここは市街地建設のために個人から買収されたものであった（政府との契約では、もし官有地であった場合は会社のために無償で与えられることになっていたのではあるが）。そして、二百町歩以内のこの地域を整理するためには、この地域内にいた三家族の立ち退きで、多くの費用を要したといわれる。

会社は日本植民到着に先立って、職員住宅、医局、植民の宿泊所、売店等を準備した。そして一九二二年には精米所も建設が終了したのであった。

いま、一九二一（大正十）年に発行された永田稠（ながた・しげし）の『南米写真帖』を見ると、レジストロの港に、ジュキアから下ってきた川蒸気から日本直来の植民たちが上陸している光景がでているが、船つき場は、船が横づけになる道路の果てのところ以外は、すべて雑草におおわれ、近くはほとんど森林である。

植民たちは、柳行李や信玄袋を船からおろして、通路のへりへならべている。鳥打ちやカンカン帽をかぶった男たちのあるものは、木綿の背広や詰襟の服を着ているし、他のものは、白いシャツとズボンだけのいでたちで

みな右往左往している。婦人たちは、日傘やこうもりをさして、その髪形はひさしがみの結髪、ブラウスに長いスカートのものや、ワンピースを着ているものもある。女の子は折り襟の短いワンピース。男の子は鳥打ちや小学校の制帽をかぶっている。

同書の五八ページには、レジストロ港の風景で、遠くにレンガ造り、白亜の事務所や宿泊所が見え、手前右手には、建てかけの大きな家が足場に囲まれたまま見えている。その左側に四輪の馬車（一頭びき）が見え、水辺にはランチがつながれている。写真の説明文には、「……更に数十万円を投じて精米所、製糖所を建築してゐる……現に四百五十家族を入れ満員の実況だ。新墾土地焼払ひの煙が遠方の天にあがって居る」とでている。

初期植民者の生活

レジストロやセツテ・バーラスの開拓は、どこの植民とも共通のもので、地区測量と道路開設が終わったあとは、まず、自分の土地の一角にテントか椰子の葉の掘立て小屋をつくって、ヤマきりをはじめるのである。ここも約一〇アルケールが家族分の単位であって、初年目には二、三アルケールをひらく。ヤマきりは、ブラジル

人労働者を雇っていつしよにやった。はじめはマツシャード（斧）も使えない植民たちであった。森林の大木を小さな鋸で切っているのをブラジル人が見て、笑ったという話がある。ヤマきりはなんととってもカボクロが先輩であった。ヤマきりが終わり山焼きまでの一、二か月は、住居づくりであるが、それにはまず、敷地を片づけ、木の根を掘りおこし、柱をたて、家の骨組をつくらねばならない。はじめのうちは、たいして長もちのする木材を選ばない。それでも、ブラジル人に教えられてエンブイアなどを主な柱に用いた。壁は、ほとんどジュサーラ（パルミット）を割って、それを縦にならべ、また横のこ（、）ま（、）い（、）にも使った。両側から壁土を塗る暇がないときには、はじめは内側からだけ塗った。丸や四角の格子窓をつくったものもいた。壁下の骨組をそのまま残すのである。こうすれば戸がいらないし、夜はジュートの袋でも内側にたらしておけば風はふせける。こうした試みは、彼らが日本からの直来植民であったことと、ジュサーラ椰子が豊富にあったことから思いついたものであろう。

屋根はトタンを使ったもの（原始林にはサツペーがなかった）、ジュサーラの葉、あるいはガリカンガまたはインダイヤー椰子の葉を使ったものなどいろいろであった。はじめからこけらぶきにしたものもいた。

むろん、ブラジル式の切妻、家の中は上間であった。板が手にはいりにくい初期には、ジュサーラを割って寝床をこしらえた。そして一家のものが、みな一つの間に寝たのである。寝床は地面から四〇〜五〇センチあげてつくり、ジュサーラの上にイグアツペからくるピリーのござを敷いた。むろん、とうもろこしがとれてからは、その皮でコルシオンをこしらえて使ったのである。

食物もレジストロとて他の新開地と変わりはない。ただ、ここではパルミットが多かったことが、野菜のない時代にはおおいに助かった。また、リベイラ川からは植民地全体にマンジュエバが供給できた。

手びきの板で家具や風呂もだんだんくふうした。

労力の補給には、善良な土地のカボクロがいたので、彼らを雇ったし、また、いろいろ彼らから学ぶこともできた。のちになって、さかんに二階建ての家にしたレジストロの住居が、いかにも日本的な感を与えるようになったのも、低地のカボクロの家屋様式をまねたことによるだろう。

彼らは昔から、マンジオカを植え、豚を飼い、川魚を食べていた。稲もいくらか栽培していたことは、ジプブーラのところで述べた。彼らが当時常食としていたマンジオカ粉は、バイアやアマゾナス方面の人間のものと同じように、フアリーニャ・ダーグアという種類のもの

で、いわゆる毒マンジオカによって製造するものであった。

その製法は、まず小川のそばに水たまりをこしらえ、その中に一週間ほどマンジオカを漬けておいて、表面を腐らすのである。それから皮を手でこそぎおとし、「おろし」にかけてつぶす。「おろし」は、ブリキのおろし板を張りつけたロールをハンドル（マンニベーラ）でまわしながら、そのおろし板にマンジオカをあてていただくのである。つぎには、このドロドロになったマンジオカを、蒲の葉でつくったアンペラや苞に入れて、気ながに毒汁をしぼり取る。こうしてできたマツサ（水分をのぞいた摺り芋）を平鍋（フォルノ）で焙じるのである。アマゾナス地方とはいくらか製法が違っているが、できあがったものは、ざらざらした砕け米のような粉である。これを魚のスープや干し肉、あるいは山の動物（カッサ）の肉の煮物の汁にまぜて食べるのはどこでも同じである。料理はただの塩だけが普通であった。彼らは土鍋を使ったし木鉢（ガメーラ）および手製のしゃもじ（コンシヤ・デ・パウ）などを用いた。

彼らは、ジュサーラの棚にピリーのござを敷いて寝ていた。塩とマッチさえあれば、その他のものはあまり買う必要がないから、自然あくせくと働かない。もし働きのでて給料をもらえば、その金を使い果たすまで飲んで

食べて仕事にはでてこないという習慣があった。それに
なかなかカツギヤで、きょうは何々の聖者の日、あすは
どういう聖者の日といって、仕事を休む。働くとぼらが
あたるというのが、その理由であった。善良で、めった
に人と争わないが、のんびりしすぎて働くことは好きで
なかった。彼らの生活は文明人から見れば、土人のそれ
とあまり変わらない。日本人とつきあっても、人種的に
は奇異な感を受けなかったというから、彼らにも相当土
人の血がまざっていたことは想像がつく。そうした理由
によるのかどうか、レジストロの人たちは、いまでもカ
ボクロというかわりに「土人」という言葉を使う。この
ごろでは、カボクロでさえカノア（丸木舟）にはモーター
をつけ、家にはラジオをそなえている時代、土人という
言葉を耳にすると、ときにはショツキングでもあり、む
かしを知らないものには耳ざわりである。

カノアといえ、ブラジル人にいわせると、ここでカ
ノアをこぐことを日本人に教えたのは彼らだったという。
この地方のものは、みんな立ったままカイをあやつる。
一人の人間が坐ると、すっぽり腰がはまりこむような幅
のせまい、しかも縦に長いカノアをスイスイと気持ちよ
くこぐのである。われわれなら、ひよつと体を動かした
ら、くりつと転覆するようで、安定感など全然ないよう
に思われる。現在では、遠い旅にはほとんどモーターを

つけて走っている。

彼らカボクロたちは、すぐ日本人と親しくなった。彼らとのあいだにトラブルのあった話は聞かない。

レジストロもセツテ・バーラスも、まだ日本的な習慣がかなり残っている。朝、味噌汁でごはんを食べることは、寝室の板の間をみがいていることとともに、外部のものにはめずらしいが、その反面、なんとなくブラジルの、というよりもカボクロ的な匂いが強い。彼ら植民者たちの話すブラジル語が、この地方独特の口調（ソタツケ）であるばかりでなく、いかにも性格がのんびりしているように感じられるからである。おそらく、土地の人間の温和さのために、ここでは気分のうえでも無理なくこの地方の生活に順応し同化していったのではないかと思われる。

レジストロやセツテ・バーラスにかぎったことではないが、日本人のところでも長く働いたブラジル人は味噌汁が好きになったり、風呂を好むようになったりする。自室に風呂をすえているブラジル人もいるという話も聞いた。これは例外的なことではあろうが……。

こうして早くからブラジル人と親しんだレジストロでも、はじめて日本人に接したブラジル人は、日本人の習慣にはびっくりした。

レジストロには、いま八十幾歳かになった老人と六十

七歳のブラジル人がともにレジストロ生まれで、最初に日本移民が来たときのことから知っているものがある。八十歳になるものはもうかなりもうろくしているというが、六十七歳になるアントニオ・リベイロ・ガット・ジュニオール（16）という男はしゃんとした男であった。筆者は彼に会って、昔話を聞くことができた。面白いのは、はじめて日本人およびその生活に接したときのいろいろな印象であった。

直来の日本植民がはじめてレジストロに着いたとき、彼らはすっ裸になって、川にとびこんで泳いだのだという。これにはみんなびっくりした。土人以上である。なんとという野蛮な人たちだろう！ さっそくイグアツペの警察に訴えた。ところが警察からは野蛮な日本人を逮捕に来るどころか、「なに、それは習慣の相違なのだ。会社のほうへ注意して、以後そういうことをさせないようにする」という答えだったそうである。

日本人が裸で水浴したという話は、よほど有名だったらしく、イグアツペでも聞いた。むかしここへ船で着いた桂植民地の入植者も、船がサントスからイグアツペに着くと、すっ裸で海へとびこみ、おおさわぎになり、まもなくサンパウロの新聞、しかもオ・エスタード・デ・サンパウロに載って問題になったというのである。レジストロの事件が新聞にでたかどうかの真偽はたしかめてい

ないが、当時ブラジル人は男でも人目につくところでは絶対に肌を見せなかったし、まして女性の目につくようなところで裸で泳ぐなどということは想像もできないことであつたらう。野蛮人だ、土人以上だとさわぎたてた様子が目に見えるようである。

アントニオの話にもどる。

日本人のところへ行っておどろいたのは、一家のものがみな同じ寢床に寝ること、それから一つ風呂につきつぎとはいることだった。子供を背中におんぶするのも変わっていたが、あのはきもの（下駄）がめずらしかった。まるで小さい腰かけ（バンコ）である。たいらな板の下に二本の歯があるのでそう感じたのである。「いまでもはいているものがある」という。「それから、日本人の摺揆。まあ三度はかがむね」

結婚式や葬式で変わったものを見なかつたらうか、ときいてみたら、「ああ、あるある。日本人はお墓へたべものや飲みものをそなえた。あとでカボクロはビンの中身がピングであることを発見し、それから葬式や墓参りがあつたあとはこつそりでかけていって、あのピングをご馳走になったものだ！」

といかにもたのしそうに言うのであつた。

日本人がだれも彼もあらそうように二階建ての家をつ

くりだしたのは、入植後数年たってからである。しつかりしたものは五年後、八年後に建てた。二階建てといつても、カボクロ式に前面のベランダに横から階段でのぼるものや、ただの二階建て、それから中間に腰屋根をつけて屋根を二重にしたもの、または、入母屋造りなどいろいろあった。

屋根は丸瓦、こけら、なかにはサツペーでふいたものもあるが、掘立て小屋時代とはちがって、サツペーぶきでもどこか日本のかやぶきをおもわせるほど、ていねいにふいてある。柱もいい材料を選んで、ときには末代物ともいえそうながつしりした良材を使っている。壁は全部ジュサーラであるが、パウ・ア・ピツケの場合のように、地面にじかに立てるのではなく、木組のあいだにていねいに壁の下地を組むのである。壁土は内と外から塗り、その上に漆喰をかける。泥には日本式にす(、)さ(、)を入れた。はじめは、日本式に家にはいるときは外で用いた履き物をぬいではいることもあったが、土間の場合もあって、多くはそのままはいった。土間の場合は食事や炊事場だったのである。そのかわり、二階だけは日本式の板の間で、いつも雑巾でピカピカにふきこんでいた。夜はここに日本式敷きぶとんを敷いて寝るのである。間取りはきまっていないが、老人や夫婦の間には神棚や仏壇がしつらえてあった。

こうした建築は農村ばかりでなく、レジストロの町にもあった。現在でも数軒残っている。そして、二階へあがるときは、相変わらず階段の下で靴をぬぎ、スリッパにはきかえてのぼるのである。二階には座敷もあるが、たいがい板の間にベッドを置いている。

だが、この和洋折衷の様式も、子供の代になって新築されるときは、もうすっかりブラジル式になってしまう。もし変わらないものがあるとするれば、老父母たちのための一室だけを多少日本式にするだけである。

産業の移り変わり

ここで、ちよつとレジストロおよびセツテ・バーラスの産業の変遷について記述することにしよう。

はじめは全イグアツペ植民地が、米作をめざしていたことは、桂植民地の建設のところでもちよつとふれた。米とともに砂糖とピンガもつくった。

米作は海興の方針であったが、おそらく、サンパウロ州政府も米作奨励のために、この地方に広大なコンセツソンを与えたにちがいない。当時の州政府は、サンパウロ州のコーヒー農場主が中心となった共和党（PRP）が主力であつて、なによりも必要としたのはコーヒー園労働者であつた。だがコロノ移民たちに、後日独立農に

はいる希望を与えるために、州立植民地（NCE）を各地にもうけていたのであるが、多くはコーヒー地帯をはずれたところで、食糧品生産を奨励することが主眼であった。けっして自分たちの競争相手としての植民地をつくらせようとしたのではなかった。

東京シンジケートが、サンパウロ州政府から土地を無償でゆずりうけるときの話合いで、どのような方針をだしたか、その点は明らかでないが、現地代表の青柳が、当地を米作地としてほれこんだこと、さらに一九二三年までは、会社の方針としてコーヒー栽培者に対しては入植をゆるさないことにしていたということは、政府との取決め（口約）もあつたからではないかと思う。むろん、とりかわされた契約条文では、そのことには全然ふれていない。

米作やピンガづくりは一九二二年ころが全盛であり、コーヒー栽培は、一九一八年ころからひそかに試みるものがあり、一九二三年になって会社もみずから試験場にこれを栽培し、一般植民にも積極的に奨励したのであった。そして、一九三八年ころがその全盛期であつて、以後は衰微したのである。

戦前は（一九四〇年ころまで）養蚕もやったが、戦後は茶が主となり、それにバナナ、パイナップルなどの栽培がなされている。

一九三二年、セツテ・バーラスの吉村茂（よしむら・しげる）が日本の福岡から藺草の苗を輸入し、以後セツテ・バーラスのみでなくレジストロにもひろがった「花ござ」の生産も見逃がすことのできないものである。

植民地夜話

植民地を訪れてむかしの苦労話を聞くには、夕食後がいちばんいい。入植当時、野菜がなくて草の若芽を食べた話から、カザメント（結婚式）のご馳走、葬式におけるお経の話、戒名のこと。それにいちばん苦労した山のなかのお産の話まででる。

カザメントのご馳走については各所で書いたから、ここでは葬式だけにふれておく。どこでも、だれかお経をあげるものがいて、まあ、お経のない葬式はめつたになかったという。むろんその当時は、何宗でなければならぬとはいわなかった。この地方では浄土真宗が多かったが、他宗の人でも、みなおなじ素人の「ブラジル坊さん」にお経をたのんだ。戒名もつくってくれた。

またレジストロの町には、医者で皆から信頼されていた北島研三ドクトールがいた。この人は、クリスチャン（新教）であったが、この人なら仏教徒でもなんでもよることのでたのんだ。お経の代わりに聖書をよんで、讚美歌

を歌ってもらった。宗旨よりも人間を信頼した植民地初期の雰囲気かしのばれる。

墓の話になる。

レジストロの墓地を訪ねると、古いものはほとんど日本の石塔で、最近のものはカトリック的である。

いまレジストロの近くにそびえているサン・フランシスコ・ジャビエル教会（カトリック）は、一九二八年五月一日に起工されたものであるが、そのはじめは、日本の有志から贈られた一万八千円の金が基になってできたものだつたという。

お産の話がでたとき、亭主みずからとりあげた例が案外多いのおどろいた。山のなかの生活では、当然かもしれない。

それから、とりあげ男の話もでた。俳誌『木蔭（7）』に、鶴孫の、

呼ばれ来しとりあげ男 葦（にら）の花

という一句があつたことによる。日本人は、よく車道から家へ通じる路べりにらを植えている。

「お前経験があるならやってやれよ。人助けだ！」とすすめられて、とうとう「とりあげばあ」ならざる「とりあげ男」にされてしまったのであろう。

レジストロには有名な産婆さんがいて、移民五十年祭には日本政府から功労者として木杯をもらっている。も

う金婚式もすませた八十歳以上のおばあさんだが、四十年間に二千人以上とりあげたという。そして、その半数はブラジル人だったというのである。昼のうち、この老婆を訪問していたので話ははずんだ。

夜中にたたき起こされたことがよくあったという。すると産婆さんが乗馬ズボンに身をととのえるあいだ、旦那さんは牧場へでて馬をつかまえる。馬に鞍がつくと、産婆さんはかばんを背中にかけて、片手に手綱、片手にカンテラをさけ、山道を馬でとばすのであった。「わたしらはまだ若かったんで、夜中にたたき起こされるのはつらかったですよ」というのは旦那さんの述懐であった。

「真つ暗な川を、カンテラの光でカノアで渡ったこともあります。行く先はカボクロの家でしたが、まだおしめ一枚つくっていないんですよ。むろん貧乏人からはお金をもらいませんでしたが、こんな人たちにはおしめまでもっていつてやりました」

と八十歳の産婆さんは元気な声をはりあげるのであった。もうだいぶん耳もおい。

「あの産婆さんには、親子三代で世話になった人もいますよ」と、夜、話に加わっていた家の奥さんもつけ足すのであった。

（教育については、レジストロ、セツテ・バーラスといえども特殊なものはないので、ここには略し、一般植

民地論のところ（でふれるだけにする）

現 勢 概 覽

最後にレジストロの現勢をつけ加えて、この一編を終
わることにする。

一九四八〜五一年度から、二人ないし三人の日系郡議
がでてゐる。

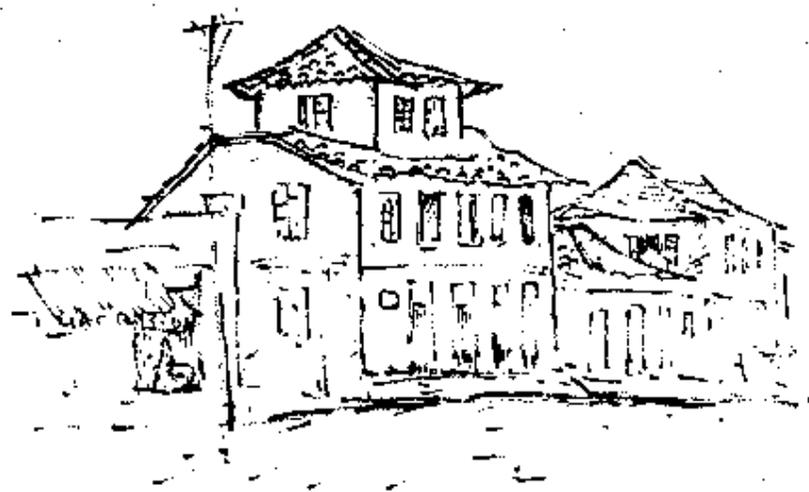
日系の宗教団体、社交・スポーツ団体も数多い。

レジストロ市の全人口は日系も含めて、一九六〇年に
は四千九百十三名であつて、商店・工場数は二百五十七
軒であつた。

一九六三年ころの個人調査（18）によると、レジス
トロ郡の日系人口（ただしセツテ・バーラス郡に属する
ラポーザおよびイトパミソンの日系人約三十家族を含む、
という注がついて）

一世七百三十九名、二世千百七十八名、三世八百四名、四
世四名、合計二千七百二十五名、総家族数にして四百四
十一、そのうち農業者二百五十七、商・工業百八十四と
なつてゐる。そして帰化人が二十九名いたのである。

なお参考のため、一九五八年の実態調査によるレジスト
ロ（セツテ・バーラスも含む）の日系人口は、三千四百
十五人である。一世移民は九百七十七人であつた。



レジストロ市街に残っている日本式(?)家屋

注

- (1) 直線距離では一六一キロメートル。
- (2) リベイラ・デ・イグアツペ川が本名。
- (3) サンパウロクリチーバ間が全通したのは一九六一
年であった。
- (4) ポスト・ド・レジストロは、レジストロ登記所と
いう意味。いまはポルト(港)とよんでいる。
- (5) セツテ・バーラスは、一九五九年レジストロから
独立して郡制がしかれた。

(6) 『レジストロ郡現勢概覧』(一九六三年)によると、

二十八家族となっている。

(7) 『日本人発展史』下巻、一六ページ。

(8) 同上、一六ページ参照。

(9) 同上、一七ページ参照。

(10) カイサーフは海岸地帯のカボクロのことである。この田舎ものには土人の血がまざっているのが特長だったので初期の入植者は「土人」ともよんだ。しかし、けっして土人インジオではなかった。

(11) 三メートルくらいのびる泥海の三角藪（いぐさ）。

(12) ある辞書によると、いわしの一種（アテリニードス・A t e r i n i d a s）だという。一〇センチくらいの小魚で、とりたては透明である。川に産卵し、海で育つといわれる。さしみ、てんぷら、塩干しにする。

(13) アジュトリーオはプシロンと同義にも使う。

(14) 『日本人発展史』下巻、一八ページ

(15) 『伯刺西爾年鑑』後編、二七ページ。

(16) A n t o n i o R i b e i r o G a t t o
J u n i o r .

(17) 『木蔭』一九六八年三月（二三三号）。

(18) 『レジストロ郡現勢概覧』中の最終ページにでている松村栄治氏の調査によるもの。

初期の人たち

コーヒー農場（ファゼンダ・デ・カフェー）における半奴隸的生活をのがれ、「米のなる木」の栽培に向かうことは、日本移民にとって、百姓本来の道に戻るよろこびと希望を与えるものであった。

ここでは、リベイロン・プレット以北の、奥モジアナ地方のコーヒー農場へコロノとしてはいった移民たちがやがて米作をめざして、はじめはミナス州のコンキスタ方面へ、つぎにはグランデ河（リオ・グランデ）の左側地帯を、西へ西へと地域を拡大しながら、どのような農法で、どんな生活をしていったかをしらべてみたい。

（ちなみに、現在（一九六八年）では、さらに西方に向かって、アララクアラ線ジャーレ駅から、サル・ジョゼー・ドス・ドウラードス河の方へ発展しつつあり、米作とともに、綿、とうもろこし、大豆、落花生などの多角農に進んでいる）

奥（アルタ）モジアナ地方は今日でこそ、この地方におけるコーヒー栽培の衰微とともに、ブラジル人地主たちも、どんどん米作にうつってきて、その栽培面積か

らみれば、日本人のそれとは格段の差であるが、サンパウロ州における近代米作の先駆者としての日本移民の活躍は、みのがすことのできないものである。とくに、三角、ミナスのコンキスタは、この地方の米作発祥の地として、われわれにはわすれがたい。

ブラジルにおける米作の歴史は、むろん日本移民にはじまるものではなかった。すでに一五三〇年代、サン・ビセンテを開拓したポルトガル人たちは、さとうきびや小麦とともに稲の栽培をこころみていることが史書に記録されている。東洋貿易の先駆者であったポルトガル人は、早くから米食を知っていたのである（1）。だが、日本移民がブラジルへ渡来した当時は、まだ東南アジア、とくにラングーン方面から米を輸入して、国内生産の不足分をおぎなっていた。ファゼンダにはいった日本移民が栄養失調になやみながらも、労働に耐えてきたのは、この米のおかげであった。

第一回かさ丸で、グアタパラ農場へはいった移民たちは、あの広大な低温地をながめて、米作のことを考えた。

また、リオ・グランデ沿岸サンパウロ州側のイガラパーバ駅ウニオン農場には、一九一二（明治四十五）年五月から通訳・臼井介仁（うすい・かいと）が新着の日本移民をひきつれてはいったが、同移民中の八田一藤

(やつだ・かずとう)は、この地方の米作に先鞭をつけた一人であった。一九一六年からさとうきび栽培に主力をそそいで、一九六四年五月八日、七十七歳で世を去るまで同地に活躍した人物であるが、彼はどんなに失敗しても米作を断念できなかった。彼は自己の所有地以外にもひろく借地農もいとなんでいたのであるが、地元側の支配人が「もし、さとうきび栽培に主力をそそいでくれたら、どんな援助もおしまないだろう」といったと伝えられている。日本人の米作に対する執念の一端がうかがえて興味深い。

また、対岸のミナス州内では、コンキスタ駅ラジェアード農場に、一九一六(大正五)年三月、通訳・滝沢仁三郎(たきざわ・にさぶろう)が、やはり移民をひきつれてはいり、「同地方における米作の有望なるを看取り、耕地内に初めて之が試作をおこない、好成绩をあげた(2)」という。さらに滝沢は「同耕地内における米作をもって満足せず、そのおどろくべき強健な体躯を利用し、剛壮な意気に乗じて、リオ・グランデ沿岸の地を探検し、その結果として、富岡漸(とみおか・すすむ)と共にメランシニア耕地に着眼した」と『ブラジルに於ける日本人発展史』は書いている。このようにしてこの地帯では、すでに一九一八(大正七)年頃には、専門米作者九十七家族、コーヒー園内間作で米作をやるもの八十

九家族、その生産量は二万六千余儀であったといわれる(3)。さらに一九一九年の下半期には、二百家族の新来者を迎え、家族数四百、米作地三千六百余町歩、収穫高もみ十万に達したのであった(4)。

当時、モジアナ鉄道のミナス側への延長線であったコンキスタから、河を下ってモジアナ鉄道左枝のウニオン鉄橋あたりを三角形の底辺とし、これをミナス州ウベラーバ市に至って頂点をむすぶ三角地帯を、日本人は俗に三角ミナスといていた。むろんブラジル人のいう三角ミナス(トリアングロ・ミネイロ)とは、リオ・グランデからリオ・パラナイバのあいだにはさまった広大な三角地帯を指すのであるが、日本人の文献、たとえば『伯刺西爾時報年鑑』などは、前者を指しているのである。

とにかく日本人のいていた三角ミナスとは、今日の地図で見ると、コンキスターデルターウベラーバをむすぶ三角形の内外だったようである。

しかし、この三角ミナス方面の米作は、
「ブラジル大地主と契約しておこなう米作の請負、これら請負者との契約による小作、および地主との直接契約による小作の三種であり、土地を購入することは至難であったのみならず、米作者には概して土地購入の意思が

なかつたので、地主（土地所有者）となった者は（略）極めて少数であつた（4）」

のである。すなわち滝沢も富岡も、ブラジル大地主と契約を結んで、その配下に日本人分益農をかかえて米作をやつたわけで、資本はブラジル大地主が出したものである。

ここで、こまかい記述にはいる前に、この地方に日本人がはじめて産業組合（農業協同組合）なるものを組織したことを特記しておこう。第一次大戦の直前から終戦にいたる時代、三角ミナスには千五百から千六百人の同胞が米作をいとなんでいたので、協同組合の組織が必要となり、日伯産業組合（Sindicato Agrícola Nipo-Brasileiro）なるものを設立した。資本金一〇〇〇コント（二千株、毎株五〇ミル）ではじめることになり、申込み千株、このうち、六百二十七株に対して三一コント余の払いこみがあつた。当時組合法がなかつたので、株式組織になつたわけである。本部をウベラーバにおき、売店をコンキスタにもうけて、盛大な開業式を挙行したのが、一九一九（大正八）年十月十日のことであつた（5）。しかし、まもなく戦後の不況とともに組合員の移動がはげしく、そのうえ「種々不測の困難起り組合はまもなく破産倒壊してしまつた」。うわさによれば、幹部の不始末などがあつたというが、

戦後の不況と日本人が土地所有者でなかったために、ほとんど移動してしまっただのが、その主な原因であつたろう。

一九三三年版の『伯刺西爾時報年鑑』にのっているコンキスタ地方の記事を左にあげてみると――、

「この線一帯における最大集団地であると共に最古の歴史をともなつて、コンキスタの名は邦人の耳にかなり親しみ深いものである。当駅附近からリオ・グランデ河に沿うてデルタ駅までに至る一帯が、いわゆる三角ミナスと称せられ、米作好況時代には同胞の米作者が蝟集して、いたるところの耕地にその姿を絶たなかつたが、歐洲大戦後の不況に際して、たちまち四散してしまい、今日では辛くも昔日のおもかげをしのぶに足るだけである。単に米作のみに終始した跡は、白蟻のあらずがままに残されたこれらの土地に現われて、うたた感慨にたえざらしむるものがある」と記されている。

コンキスタは当時人口五千といわれたが、今日でも発展する気配がなく、ブラジル人はさびれた町の代名詞のようにみなしているという。曰く、「この町もコンキスタのように衰微してしまつた」と。

日本人は不況後、イガラパーバ、イツベラーバ方面へうつり、さらにサンパウロ州リオ・グランデ流域を西方へ西方へとひろがって、いまやアララクアラ線ジャーレ

ス方面へ集団しつつある。

米作者の特殊ないき方

はじめにも書いたように、米作に志した人たちの生活は、ノロエステ方面へ集団地生活を目ざしていった人たちのいき方とは、かなりちがっていた。

彼らは、コーヒー農場生活の時代から、米作にあこがれ、日本人だけで集団して「村」をつくろうという考えとは別に、日本人特有の米作技術を生かし、米の飯をたらふく食べながら金をもうけ、できるならば数年ののちには、一万なり二万なりの金をもうけて帰国しようと思っていたのである。

むろん、ここで筆者は、ミナスやモジアナの米作者が一時的な出稼ぎ者で、ノロエステやソロカバナの植民地建設者たちが永住希望者だったなどというのではない。当時は、永住などを考えるものはほとんどなかった。ただ、コーヒー農場に失望した移民たちは、金もうけの早道として、一方では歩合や借地による米作を志したものがあり、他方では小土地所有者となって、コーヒー栽培に向かったものがあらわれた。そして、小土地所有者のほうに、一定期間、その土地にふみとどまることを余儀

なくされたのに反して、分益農や借地農は度々移動したために、生活の上でも別なコースをとったにすぎないことを指摘したのである。

リオ・グランデ沿岸の日本人米作者は、だいたいにおいて、分益農、あるいは請負師による間接的分益農、小借地農、大借地農と移り変わっている。むしろ小自作農もいたし、のちには自己所有地内で大農を営むものも出てくるのであるが、大部分は分益農や借地農であった。耕作法からみれば、初期の鋤うえ、つぎには牛馬耕、それから機械化農へとうつり変わっている。

地勢や地質はさまざまで「バルジョン」低湿地、「カンプ」草原、「セラード」灌木林、「クルソーラ」優良農耕地」などにわかれている。クルソーラは、かつてはコーヒー園であったところが多く、カンポやセラードはたいがい牧畜用地であった。クルソーラは表土が深く、深耕に適している。

二種に分益農

ここでは、初期にさかんであった分益農（日本人は小作といった）と請負師による間接的な分益農とについて記してみる。

小分益農の特長は、いわゆる「鍬うえ」による粗放農であつて、草原、雑木林、あるいは原始林の開墾から家建てに至るまで、費用は全部分益農（小作）の負担によるものであつて、収穫の七五パーセントをとりまえとするものである。地主のほうでは、食料供給のため、店の保証人となり、また必要な資金（場合によつては人夫賃）も貸与してやる。そして収穫時になると、歩合米のみも二五パーセントを、畑から自費で自分のところへ引きとる。また、分益農が地主に自分の取り分を売る場合の運賃も地主が支払う。あるいは地主の馬車なりトラックなりに運ぶ。ただ分益農が他の商人に売る場合だけ自費でやれる仕事である。地主のほうでは地代のかわりに収穫物の二五パーセントをうけとるのである。

この分益農でも、場所によつては土を掘り起こしてたがやした。また地主の機械を使用して、かなり手広くやるものもあつた。その農法については、牛馬耕、あるいは動力前の機械農を説明するところにゆずる。

つぎは初期の大農といわれた請負師の米作についてべる。これはコーヒー樹仕立ての請負とはちがつて、配下に多くの分益農をかかえてやる仕事である。

機械類は、ほとんど地主から借りて耕作し、収穫米の三三パーセントくらいを地主におさめ、配下の歩合作者

には、条件次第で四〇〜五〇パーセントをとらせた。その差引き残高は自分のものにするという方式である。

むろん契約によつて地主には食料供給のために、商店の保証人になつてもらうが、どちらが機械を動かし、土地の荒起こしをやるかなどで、歩合作者のとり前もきまるわけである。いずれにしけも、歩合作者は、自分の労力または費用で住居を作つた（7）。

滝沢や富岡が、請負人として米作をいとなんだというのは、この大農式米作であつて、彼らのもとに多くの日本移民が、間接的分益農をいとなんだわけである。

このような方式による大農は、非動力時代に無資本者がやつたもので、一九三〇年前後になると、分益農やこれを利用する請負農より借地農のほうが多くなる。地主のほうでも平年作の場合なら歩合でやらせるほうが収入もより多くあがるが、不作のときは収益が激減するし、また自分らがもらうもみが悪質のものばかりというようなことにもなりかねない。しかし、借地では平均した借地料がとれるし、借地人のほうでも借地料さえ払えば、どんどんいい機械を買つて自由に使える。米作者に資本ができてくれば、いろいろな点で地主にかかわりの多い分益農から借地農へうつるようになるのが自然である。

動力による機械化は、例外として一九二六年ころすでにトラクターを動かしたというものもあるが、一般化する

るのは一九四〇年ころ、すなわち第二次大戦直前である。そしてこのころから日本人の米作も本格的になる。

初期の米作法

日本人の米作は、はじめはコーヒー農場のコロノ時代にコーヒー園内に間作としてこころみ、また、食糧生産のために農場側から貸与された余作地（ロツサーダ）ではじめたのであった。

前にかかげた一九一八（大正七）年ころの報告にも、三角ミナスでは「専門米作者九十七家族、コーヒー園内間作をやるもの八十九家族」とあるように、新移民たちはこの米作地帯にはいると、さつそくコーヒーの樹間に米作をしたのであった。

間作または余作地の米作が、この地方におけるもつとも初期の米作であった。その栽培法は、豆やとうもろこしのそれと別に変わったものではなかった。「つぼ蒔き」とか「鍬うえ」とかいつていたものである。

一人が、鍬（エンシャーダ）を持って穴を掘っていくと、そのあとから他のもの、多くは女だが、ニリットル入りのブリキ缶（ラッタ・デ・バーニヤ）からもみを二十粒ほどつかみ出しては、さきの穴になげこみ、片足で

土をかけ、かるく踏んでおく、という方法であった。そして、蒔きつけたあとは、ただ鍬による除草だけで実りを待つのであった。

彼らの生活はファゼンダのコロノとしてのそれであるから、ここにはくりかえして述べる必要はなからう。

米作専門のものでも、はじめはこの鍬うえ法でやったものである。掘りおこす必要のない土地がたくさんあって、鍬さえあればいくらでも仕事ができたのである。彼らは日本人が「小作」といいならした分益農であって、土地代として収穫物の二割から二割五分を地主におさめればよかった。すべてを自費でやった。住居も自分でつくったのである。ただ最初の一年間の食料は地主に保証してもらい、あとで清算するものであった。

ところが一九一五〜一六年ころには、すでに牛馬による耕作がはじまり、二畝蒔きの播種機もあらわれたというから、一家族で五、六アルケールをたがやしていた米作専門家は、早くからこの「機械」を使っていたことになる。

彼らも、はじめは分益農（パルセリア）でやった。そして牛馬や「機械」を地主から借りて耕作したのである。その場合は、収穫物の三割から四割を地主におさめたのである。

彼らの生活は自家製掘立て小屋のなかで、コロノ以下

のものであった。

低湿地の米作

初期の米作者のなかにはバルジョンを開拓したのもかなりあった。

低湿地はブレジョンであるが、ブラジル人も日本人もバルジョンとよんでいた。雨期になると浸水し、乾燥期になると草原と化するところである。多くは川べりであった。

分益ではいるものも借地ではいるものもあった。ここでは無資本のものとして分益農の場合をあげてみよう。

彼らは、まず低湿地に近い台地に、泥壁の小屋をたてた。棒をならべて囲いをつくり、これに木舞（こまい）を組んで、すさのまじった泥を内側か、あるいは外側からぬる。もしその土地に数年定住する者なら、両側から時期をちがえてぬるだろうが、借地や分益ではとにかく雨露をしのげる程度でいいのである。屋根は、サツペー（茅）、ジャラグアー牧草、もし椰子の木が多ければこれを二つ割りにして、瓦のようにたがいちがいにならべる。もしはいったところが草原なら、草屋根以外に方法がない（地主との契約で瓦ぶきにしたところもあった）。ここ

ではサツペー小屋をつくったとしよう。ベッドは細い棒をならべた棚にする。敷きぶとんは、ファゼンダからもってきたとうもろこしの皮を袋につめこんだやつである。

かまどは土できずく。契約によって地主からレンガを供給されていれば、それできずく。むろん、みな土間である。戸などは、ジュートの袋をひらいたのを、のれんのようにたらししておく。

食物は、米、干鰯、とうもろこし粉（フバー）、メリケン粉、マンジオカ粉、玉葱、にんにく、砂糖（マスカーボ）、塩、豚の脂、干し肉、コーヒーなどで、まだ味噌、醤油はない。ブラジル人カマラーダ（独身者の日雇人夫）と同じ食事をとるので、日本食は不便である（カマラーダには別棟の小屋をつくる）。風呂は、あったりなかったりだ。大きな酒樽でも買えたら、これを風呂桶にして、別に湯をわかして入れてあびる。風呂小屋などは、建てている暇がないから、棒の柵をつくって囲う。ブラジル人カマラーダは、川で行水する。便所は、穴をほって棒切れやジュートの袋でかげをつくるか、あるいはファゼンダ式に自然を利用する。夜は石油のカンテラをとぼす。ブラジル人も日本人も皆裸足であった。

なによりも蒔きつけをいそぐので、生活上の設備は、仕事のあいまにやろうということになって、草原の開墾

をはじめるのである。

まず、草を刈るか、なぎ倒さなければならぬ。日本式の鎌はきしゃやで、仕事はかどらない。カマラーダたちは、ブラジル式のフォイセ（鉞鎌）を使う。フォイセに慣れていない日本人は、除草用の鋤でなぎ倒す。カマラーダも、主人も、いつしよに働くのである。湿地では、はじめから鋤で土をおこすより、草をなぎたおして切り株の上に散らしておいたほうが早く枯れるし火をつけて焼き払うときにもよく燃える。ところでこれは乾燥期のことであるから、四、五日もたてばもう火がつく。草原はすさまじい野火のいきおいで、五、六町歩は、みるみるうちに燃えつくされるのである。草原が焦土と灰の土地にかわると、草の根をとり去って、耕作地にしななければならぬ。

土地がかたいか、やわらかいかによって耕作法はちがっていた。やわらかい土地なら、草の株を起こしただけで、そのあとに鋤でもみを蒔いた。しかし、かたいところは、掘り起こして土をやわらかにくだかなければならない。これにはかなり人手がいった。人夫をふやさなければならぬ。

人夫たちの小屋の増築は、人夫たちが自分でやる。壁土もぬらない掘立て小屋だ。棒切れのせまい棚にざこ寝である。家の主婦は炊事に手をうばわれてしまう。

まだ鋤はない。エンシヤドン（唐鋤）より幅の広い鋤をふるって人力で土を掘り起こすのである。掘り起こしたあとは、分益農であるから、地主の農場からラバを借りてきて馬鋤をとおす。使ったのは三角マンガと言って三角形のワクに木の棒の歯がついているもの、二頭のラバに引かせて畑のなかを行ったり来たりする。これは日本でも使った農具だ。これがすむと、カルピデイラと称する除草機を利用した畝立てをする。この畝にもみを蒔き、さらにカルピデイラで土をかける。これは一頭のラバでまにあう。まだ自動播種機はつかわなかった。このように同じところでも、つぼ蒔きと畝蒔きを併用した。こうして蒔きつけがすむと、こんどは稲ののび具合を見て、鋤を持って時々除草する。

雨期になって水がでてくると、もう除草の仕事はなくなる。カマラーダもいらなくなる。しばらく暇なときがくる。井戸を掘らなければならない。家の近くに野菜の種子をおろしたり、豚小屋をつくったりする（とうもろこしはフアゼンダからもってきた）。

いかにモジアナでも、日本人がポツンと一家族だけで米作にはいるということのはめつたになかったから、隣近所の同胞を訪問する。やがて正月がくるから、餅もつかなければならぬ。餅はコーヒーを粉にする臼でつく。日本酒がなく、数の子や昆布はなくても、餅だけはつい

た。どんなところでも、正月と天長節（天皇誕生日）を祝わない日本人はいなかった。

ところが、雨の多い年になると、稲ものびるが、水もどんどんふえてくる。移民たちは、まだ近くの川が、どのくらい氾濫するのかわからない。稲が背丈にのびた。すると水がそれを追いこさんばかりにふえてくるのである。いよいよ出穂だ。やがてボツボツみのりだす。となると、水についたところから、魚がよってたかって稲穂を水中に引きこむのである。さあたいへんだというのでボートを漕ぎながらの稲刈りがはじまる。よくみのればみのるほど稲の穂は水面にかたむいて魚の餌食になってしまうのである。

「五町歩の稲がたったもみ八俵だったんですよ」と苦笑する初期米作者の話聞いた。洪水でほとんど全滅したわけである。

こうなると、地主の保証で食料を供給してくれた店の支払いもできない。地主に泣きついて、もう一年浸水の少ない土地を開墾するか、思案がつかなければ借金をふみたおして夜逃げということになるのである。

だが、幸いにして、洪水にもあわず、稲がみのったとする。今度は稲刈り、稲たたきである。稲刈りには、日本人は日本の鎌を使う。ブラジル人はブラジル鎌を使った。刈った稲は集めてきて、たたき台にたたきつけても

みをおとすのである。ブラジル米は穂先をものにたたきつけられ、サラサラと穂からもみが離れるので、稲こぎの必要はない。細い木の棒で目のあらい棚をつくる。棚は細長く、数人がならんで稲の束をうちつけられるようにするか、それとも数個つくる。棚のまわりはコの字形に、コーヒー園で使った布を張りめぐらして、もみが遠くへとばないようにする。むろん棚の下にも布は敷いてある。

収穫は、刈ってもみにするまで一日に一人二、三俵だから、二、三アルケールの人は四、五人から十人くらいまでの人手でやる。一アルケール（約二町五反歩）は、いいところで、もみ百俵くらいだ。二、三百俵の小百姓は一週間以上かかってぼつぼつ収穫する。もみのえりわけは、風でとばすこともあるが、唐箕も使った。唐箕にかける前にペネイラ（篩）をとおして、ちぎれた穂は、日本式の穀竿を使ってたたいてもみを穂からはなした。

面積に比して収穫量は少なくても、無肥料でやる上に労働賃金がやすい（食べさせて二ミルくらい）時代だったので、けっこうもうかったのである。

ところが、雨期がすぎて、氾濫した水がぼつぼつひくころになると、こんどはマラリアがでだすのである。間歇的に熱が出る。体がガタガタふるえだす。一日一日と衰弱して、仕事ができなくなる。人夫を使えるうちはま

だいいが、それさえできなくなると、もうみのった稲を目の前にして寝込んでしまうか、それともカマラーダにまかせきりで十日の仕事を二十日でやらせ、うんと賃金をしぼられることになるかである。カマラーダだって病氣をおそれて、逃げだすから少なくなるのである。

こうして低湿地の仕事は、ほとんど収支がつぐなわれないことがわかってくるのであった。その上、湿地につくったブラジル米は、精白するとくだけが多いので、商人がよろこばない。せつかくとれた米もうんと値段をたたかれる。これでは浮かぶ瀬がなくなるのである。

台地の陸稲（おかぼ）づくり

ある日本人が、ミナスのウベラーバ近くで、偶然高いところへもみを蒔いたら、案外上出来だったので、ブラジルでは高いところでも米がとれるというので、マラリアの多い低湿地をぬけだして、高い耕作地（クルツーラ）へ米をつくりだしたのだという話が伝わっているが、これは、そういう経験をしたものもあつたというにすぎず、日本移民は、すでにコーヒー園の間作に稲をつくって、ブラジルでは「おかぼ」がよくできることを知っていたのである。むしろ、初期には、マラリアの多い湿地に米

作をこころみる日本人の多かつたことは事実である。だがこれは初期のことであつて、のちの米作者は台地の方をえらぶようになる。

ここでもはじめは分益農であつた。しかし米作で一もうけしようとするれば、やはりいい農具と多くの人夫を使つて手びろくやらなければならぬ。分益農でも、少し大きくやるにはコーヒー農場で数年働き、小金もたまり、農場（地主）の信用もできて、ファゼンダから農具や牛馬を借りて発動機以前の「機械化」農をやらなければもうからない。荒鋤や耕転機は当時アルゼンチンで小麦栽培にもちいるのと同じものを地主に購入してもらつて使用したというものがある。

「機械」を使つて手びろくやるとすれば、人夫の賃金などは自分で支払わなければならぬので、無資本というわけにはいかないのであつた。ただし食料は、地主の保証で商人から作物のできるまで借りたのである。

まず、草原やセラード（灌木林）を切り払い、やき払つて、そのあとはエンシヤドン（唐鋤）で抜根しなければならなかつた。そうしなければ、荒鋤も耕転機もおせなかつたからである。ただ蒔きつけには、大きい地主のところでは、自動播種機があつたので、ラバにひかせて簡単に蒔きつけた。しかし収穫機はなかつたから、手で刈りとつて棚でたたき、唐箕であおつたのである。

もし原始林であつたら、契約によつて山伐りは自分でしない場合、地主と費用を折半にしたのである。原始林の仕事は、のちのノロエステ方面の仕事と少しも変わったところがない。

だから、米作の仕事も、草原、セラード、原始林と、それぞれやり方がちがっていたわけである。しかし、第二次大戦後のように、大木の切株に鉄の鎖をからげてトラクターで抜きとるとか、ブルドーザでおしまくつて木の根をとりのけるなどという動力時代の機械化農とは全然別であつた。

そういうわけで、分益農（パルセリア）も、いろいろな費用や食料を差し引くと、作不利もあつて小面積ではたいした利益は考えられなかつた。だから、やすい賃金で人夫をたくさん使い、手広くやつてもうけようとした。

初期の大農とその生活

第一次大戦中の好景気時代にも、すでに、数十アルケールの米作をやつたものもあるが、多くは、一九二〇年ころから三〇年の恐慌時代までの人たちの仕事であつてその後はトラクターがはいりだして、営農は一段と大きくなり、それが今度の第二次大戦まで続いた。そして

大戦後は、ブラジル銀行の融資とともに、多くのものが大農へ向かうことになったのである。

ここでは、トラクター以前の大農について記述することにしよう。

大農といっても、今日からみれば知れたもので、せいぜい一〇アルケール（二十五町歩）であって、例外的には四〇アルケールなどというのがあった。（一九三三年グアラーの中野益男は、五〇アルケールからもみ四千俵を収穫した）。

大農の種類には、さきに述べた請負師としての大農もあるが、ここでは一家族でやる分益農あるいは借地農について述べる。

開いたのはセラード（灌木林）が多かったが、カンポ（草原）もあった。切って焼き払って抜根し、アラード（円盤の荒犁）をとおすのであるが、そのあとは、デステロアデイラという小さな円盤が、一列に八個、十二個あるいは十六個とならんでいる碎土機をとおす。

アラードのほうは、普通牛が四頭、デステロアデイラのほうは六頭、八頭つけてうごかした。これは機械に乗っている人間以外に、カンジェイロという先導者がついた。長い竿の先に、槍先のような金具と、しゃりん、しゃりんと音のする金輪のついたもので、前列の牛のくびき（カンガ）をたたきながら、牛を誘導していくので

ある。この棒はフェロンと言った。カンジェイロとはカ
ンテラ持ちという意味であるが、ここでは先導者である。

こうして土くれを砕いたあとは、プラナデイラ（地な
らし）というもので地面のでこぼこをならしていく。あ
とで播種機の使いいように地ならしをしておくのであ
る。この地ならしにもちいる道具は、三メートルくらい
の丸太（主に椰子の木）の両端に鎖をつけたものを、四
頭くらいの牛に引かせて畑を引きまわすのである。

ときには四角な箱のような枠に、横に四枚ないし六枚
の板がカンナの歯のようにさしこんであるグラードとい
うものを使った。

つぎは播種機である。人間が乗って、機械を二頭の牛
にひかせて動かした。二列ずつ自動的に種子が蒔けるよ
うになっていた。

こうして種子蒔きが終わると、今度は、馬またはラバ
に引かせた除草機（カルピデイラ）を一畝ごとにおし
て除草するのである。むろん稲株に密着した草は、その
あとで人間が鍬でけずりとして歩くのである。

ただし、まだ収穫機は使っていなかったので、収穫だ
けは、小農も大農も同じように人手によって行なった。
こうして、農具はほとんどブラジル式、もしそういつ
て語弊があるとすれば米国式で、日本式のものには三角マ
ンガ、唐箕、稲刈り鎌、それからちぎれ落ちた稲穂をた

たく殻竿くらいなものであった。

アルケールの借地料は二〇ミル・レイスくらいであったという。

アルケールの出来高はもみ百俵（一俵六〇キロ）から百五十俵であったが、百俵をきれることももちろんあった。無肥料栽培だったので一定していなかった。

カマラーダ（人夫）は、ミナスやバイア方面から出稼ぎにくるブラジル人であって、農業者（ラボリスタ）は町の宿屋へ行って、彼らの宿賃を支払って農場へ連れていくのであった。こういうことが習慣になっていた。宿屋のほうでも、出稼ぎ人には、あと払いで泊めていたのである。

カマラーダたちは急ごしらえのサツペー小屋に十人、十五人と寝かせた。むろん主人と同じく既成ベッドなどはない。細い木の棒の棚にざこ寝である。敷きぶとんなどは各自がくふうした。ジュートの袋をでこぼこの木の棚に敷いただけで寝るものもいた。ほとんど着のみ着のまま、裸足の出稼ぎ人であった。黒人、半黒人、そして白人もまざっていた。

日の出から日没まで働いて、夜は寝るだけである。カマラーダ小屋にはランプなどなかった。みな小さなカンテラをともしたのである。

主婦は炊事のほうに手いっぱいである。食物は豆、マ

ンジオカ粉、油飯等で、ときには、とうもろこしの粉をこねてアングーにした。また、メリケン粉に砂糖と重曹を入れてだんごにし、油で揚げてコーヒー時間のパンのかわりにしたが、コーヒー時間だからといって、必ずしもアングーやだんごをだすとはかぎらない。

食事には干し肉を煮て食べさせたり、ときには豚肉もだした。大きくやっているものは、牛を屠って自家製のシャルケ（干し肉）をたやさなかつたところもある。だが皆が皆そうしたわけではなかつた。干し肉は店から買いた家では豚をころして油をとり（綿実油はまだなかつた）、肉は大きな鍋で煮て空缶につめ、上から油をはって保存した。豚の油カスは、マンジオカの粉で、ファロット（焙じたもの）をつくって食べさせた。野菜は要求しなかつたから、あまりだきなかつた。こうして、主婦がカマラーダの食事をうけもっているのです、自分たちも、自然ブラジル式の食物をとるようになっていくのであつた。

食事時間は、ファゼンダのそれと同一であつて朝コーヒーだけで仕事にできれば、九時にはアルモツソである。十二時にはカフェーでだんご（ボリンニャ）をだすこともあつた。三時から、三時半ころは夕飯（ジャンタール）である。さらに日没後、仕事をしまうと、カフェーをだした。このときもだんごを出した。このだんごは日本人

間に広く行きわたっているもので、日本人だけのものではないかもしれないが、カフェーだけに物足りなく感じた日本人は、このだんごを間食にした。むろん、さつまいもやマンジオカのあるときは、これを煮て「おやつ」にしたこともある。とにかく、こうして晩飯ぬきの生活をしたのである。

この夜になって食事をしないという生活だけでも、晩は日本式のご飯に味噌汁で、ゆっくりやろうという植民地の生活とは、かなりへだたりがあった。

こうして、カマラーダを使い、彼らとほとんど同じ生活様式をとることから、自然、ポルトガル語も上達した。また、カマラーダをたくさん使っていると、いつなんどきどんな事件が突発しないともかぎらないので、パトロン（主人）の立場にたたされた移民たちは、ほとんどピストルやフアツカ（山刀）で武装していた。小農とちがつて、自分では鋏をとらないのである。いわばコーヒー農場の支配人や監督と同じようないでたちで、毎日カマラーダに接していたわけである。こうした点で、彼ら移民たちも、ブラジルの農場の、上層部の生活態度や処世法を生かすことになる。カマラーダたちは主人に威厳があると見れば従順に働く。一度なめられたらおしまいである。彼らは強いものには決して手向かわない。また、「月夜の晩ばかりじゃないんだぞ」などとタンカを切って

復讐をちかうような陰険なところは彼らにはない。彼らが生命のやりとりをするときは、酒を飲んだときか、あいに女がはいったときである。「ブラジルの百姓は、カマラーダが使えるか使えないかで勝負がきまる」とマカーコ・ベリーヨ（老猿Ⅱベテラン）たちはいつている。今回（一九六八年）、この歴史を書くために、この地方を旅行してみたが、ここにはモジアナ米作地特有の旧移民タイプのものを面白く感じた。すなわち、対ブラジル人のつきあいに、一般のものが実によく慣れているということである。だから他の地方の集団地の人たちよりも、あらゆる点でブラジルの的であり、言いかえれば、ずっと同化しているということである。

目からはいったブラジル語ではなく、耳で聞いて口調をまねたブラジル語は、たとえ文法的なあやまりはあっても、この地方特有の発音と口調（ソタツケ）なのであつて「私はブラジル語の本が読めない」と言っている者も、話すとなるとほとんどブラジル人であった。

ところで、彼らの家庭生活であるが、もちろん分益や借地農であつてみれば立派な邸宅はない（借地農でも現代の企業家は町に住居をかまえているが）。ただレンガ造りに瓦屋根くらいのところはあつた。むろん、漆喰などはぬらない。寝台は板の自家製、時たま、鉄製スプリングつきの寝台をもちいるものもいたが、むしろめずらし

かった。その他の家具もごくそまつなガラスなしの戸棚くらい。食堂には、父母の写真のひきのぼしや、顔役なら日本人会の感謝状くらい額にいかけてかかっている。カレンダーはまだ日めくり時代である。ただ主人夫婦の寝室には仏壇などこしらえてある。こんなものは泥壁の家に住んでいた時代にはなかったが、在伯年限も十年以上となり、すでに一家には仏もでたので、祖先をまつる気持も手つだい、このレンガ屋にうつるようになってから思いついたものであった。

風呂は、大きな酒樽に湯をわかしてはいつていたが、さいわい駅にドラム缶があつたので、駅長に無理をいつてわけてもらつてきた。これで五右衛門風呂ができたので、日中汗まみれになつた体をゆつくり洗いながすことができる。カマラーダが多くなつてから、炊事専門の男をやとつた場合は、夜は自分たちだけで、日伯混淆で、フエイジョン（豆）やカルネ・セツカ（干し肉、シヤルケともいう）のほかには白いご飯や味噌汁もつくる。子供たちは相変わらずフエイジョンがいいというので食卓はにぎやかである。だが、日本食も皿とさじで食べるときはブラジル式のどんぶり（チジェーラ）を使う。精米所があるので米ぬかを買つてきて、ぬかみそもつけている。

夜は筒ほやのランプをつけた。読物は、週刊の邦字新聞、同胞社会のできごとよりも、「日本近信」というのが

三面をにぎわしていた時代である。雑誌は『キング』や『婦人倶楽部』が絶対優勢であった。ブラジル語の読物はまだはいっていない。

土曜の晩などは、主人がカマラーダ小屋へ行つて、みんなにピンガを一杯ずつふるまう。カマラーダたちのなかには、ビオロンやサンフォーナ（アコーデオン）の上手なものがときにはやってくる。彼らは、くらいカンテラのもとで、けっこう音楽をたのしんでいる。もし、近くにブラジル人の家族がいるようなときには、楽器をかっいで訪問にでかける。むろん土曜の晩から日曜の夕方にかけて、町へ息ぬきにでるものもある。もし月末のパガメント（支払い）のあとであったら、三々五々多少おめかしして遊びに行くのである。

ジャーナリズムに喧伝されなかった

奥モジアナ地方

奥モジアナ方面では、フランカ線のほうは別として、これよりもおくれて敷設されたリベIRON・プレットーイガラパーバ線のほうでは、モジアナ線につきものと思われている石山などという観念は全然えられない。こちらには起伏のごくなだらかな、むしろ平地といつてもいいくらいの地形であつて、かつては、すばらしいコーヒー

の樹海におおわれていた沃土である。さらにサプカイ・ミリン、パルド河が多く支流をあつめて、グランデ河にそそいで、一口にリオ・グランデ流域とはいきれない広大な地域を形成し、テーラ・ローシヤの沃土は「ブラジルのウクライナ」といわれているところである。表土の深いことおどろくほどで、十数年たがやしてなお無肥料で作物のできるところが多い。筆者はこの地方を旅行して、ブラジルにも近代農業にふさわしい、こんな立派な土地があったのかとおどろかさされたほどである。ただこの地方に日系人の土地所有者が、他の地方とくらべて少ないのは――、

(一) 米作一本槍で転々とところを変えて行ったこと、
(二) この地方に定住するにはぜひ多角農をいとなまなければならぬが、それには、少なくとも一〇〇アルケール(二千五百町歩)は持たなければならぬということ(8)
(三) 地主がこの沃土をなかなか手ばなしたがないということ、

などがあげられる。しかしもし早くから定住の気持ちがあつたなら、機会があつたのである。現に多くの日本人が、シチアンテとして五〇アルケール、一〇〇アルケールと土地を所有し、牧畜とともに米、大豆、とうもろこし、綿、落花生その他の多角農をいとなんでいる。父子一族で一、五〇〇アルケールを所有している日本人も

いる。また各都市には、米作者相手の精米所、あるいは綿作者相手の精綿所をもち、自らも農耕地を經營しているものがいて、数こそ多くはないが、このモジアナ地帯は他の地方に見られない落ち着きを示している。

この奥モジアナ地帯が、ジャーナリズムのうえであまり喧伝されなかったのは、いわゆる「植民地」なるものがほとんどなく、したがって日本人会や教育の問題などで、サンパウロ市に代表を送ってさわぎたてるようなことが少なかったことによる。しかし「日本人は三人よれば日本人会をつくる」といわれたほどに、ここでも各地に日本人会ができ、また小学校もたてて日伯両語を教えていた時代もあった。カニンデー駅の場合（9）がそうであった。ただ日本人だけの集団地とはいっても、それはブラジル人の大農場内のことである。しかも多くのカメララーダを使って仕事をしたことは、しやにむに生活をブラジル式にしたので同化も早かったわけだ。こうした生活から、どんなタイプの人間が生まれたかは、先に記したとおりである。

イーリヤ・グランデの悲劇

ここでは未開墾地へ米作にはいった移民たちが、どんな苦勞をしたかの一端を知るために、一九一六―一七

ころ、リオ・グランデ内のイーリヤ・グランデ（大きい島の意）へはいった「小作人」たちのことを記しておく。

ここはミナス州に属し、ウベラーバ駅ガイローバ農場内にふくまれていた。島は河川内にあっても、ブラジルでは海軍省の管轄であるが、農場とともにジュンケイラ一族の権利に属していた。ここには各地から四十余家族の日本人が分益農としてはいったのであるが、ほとんどマラリアにかかり、死者も多数だしたので、逃亡につぐ逃亡で、一時は四家族ほどになったが（一九二七年ころ）、やがて全部この島を見すててしまった。さらにその後にはいったものも同じであった。

（ただし、今日（一九六八年）では、もう昔日のマラリア島も全然病気が絶えて、りっぱな耕作地となり、ブラジル人以外に、日本人も六家族ほど、六キロ手前のミゲローポリス町から、管理耕作に従事しているが、みな数十アルケールの大農家で、労働者は全部町から毎日トラック（パウ・デ・アララ）で親方がはこび、八時間制の日給労働となっている）話を一九一六―一七年のむかしにもどそう。

イーリヤ・グランデは、リオ・グランデ（グランデ河）のなかにある四〇〇アルケールほどの島で、土壤は黒みがかった砂まぎりのミストで、低地ほど砂が多く、高台にいくと、マサペーと俗称する黒い粘土質の土になって

いる。島以外がテーラ・ローシヤの赤土であるのにくらべると独特な地質である。

移民たちはサンパウロ州側からはいったのであるが、こちら側の川幅は二二〇メートル、ミナス側は六〇〇メートルである。いまは渡し（バルサ）があるが、当時は舟（ボート）で渡った。おそらくカニンデー駅のほうからはいったものが多かったであろうといわれている。今日栄えているミゲローポリスの町は、むしろイーリヤ・グ



リオ・グランデ沿岸からイーリヤ・グランデを望む

ランダの開拓のころから、ぼつぼつ町らしい形態となつて商店もできたのだという。

当時、島はまだ全部原始林におおわれていて、比較的

少ない低湿地に近いところが灌木林（セラード）、それから低湿地の草原であった。

日本人はこの低湿地からセラードにかけて開拓をはじめ、いくら大森林のほうへも開拓をすすめた。彼らは日本人によって「小作」といいならされている分益農であって、地主から食料品を供給されていたが、ほとんど家族員だけの労働によって耕作したもので、手びろくやったものも五町歩くらいなものであった。はじめはみな元気で開墾し、作物のうえつけに励んだ。住居は湿地に近い台地にたてた。肥沃な土地であったので、バクリー椰子が多かったから、森林の雑木で家の囲いをつくと、この椰子の葉で屋根をふき、泥壁もぬった。かまどだけは、地主から供給されたレンガできずいたようである。ブラジル人もいっしょにはいたので、パンがまもつくったろう。

渡河の便が悪かったので、日本人は森林中の大木を切り倒して丸木舟をこしらえた。ここを、あとで再開墾した人の話によると、五人がかりでやっとかかえるようなタンボリンの大木の根を引き起こしたという。いかに大森林であったかが想像されよう。ずっとあとまでケイシャーダ（猪）が多かったというし、一三、四メートルもある大スクリー（蛇）を殺したと語る人もいる。

とにかく、元氣一杯の日本人は、みんな協力して丸

木舟（むろんブラジル式）をつくり　これを「はやぶさ丸」と名づけ、餅をついて進水式にそなえ、ピンガ六リツトルを買ってみんなで祝ったほどであった。

ところが雨期がすぎて、いよいよ収穫のころになると一人寝こみ、二人寝こみ、ちようど平野植民地の開拓者たちと同じように、ついには四十家族の日本人中、働けるのはたった一家族だけという状態になった。マラリアの発生である。当時は、薬といえばキニーネ、それにバルダンの注射だけであった。しかも、このころになると薬は、ほとんど用をなさなかった。なぜなら、地主側から配給されてくる食料が少なかったことと、ブラジル食に慣れていなかったために、かぼちやや莢豆の塩煮をおかずにしたたり、ごはんにごま塩をふりかけて食べていたような状態で、肉類や油ものを、あまりとっていないかったのである。近くの川には、ドウラード、ピラカンジューバ、ピヤパーラ、クリンバターなどの川魚が沢山とれたが、漁師はいなかったし、また釣りなどしている暇はなかった。案外、投網も釣り道具もなく、またブラジルの漁法も知らなかったのかもしれない。さらに考えられることは、マラリアを恐れて水辺に長くとどまることをさけたのかもしれない。しかしマラリアは、この島のいたるところにあった。すでに、住居は用水の便を考えてか、湿地に近いところにたてていたのである。

どのくらいの死亡者をだしたのか、誰も知らない。ただ、死骸を遠い町の墓地まで運んでいく健康な人たちがいなかったため、畑のすみ、森林の陰につきつき埋葬したのだという。筆者は、どこかにそれらしいものが残っていないかと思いつつ、案内の人にも聞き、自分でもそこそこ見まわしてみたが、それらしいところはない。ただ、畑にアロードをとおしていると、湿地に近いところに、レンガが転がりだすことがあるので、その辺が住居だったことが想像されるというのである。あとになって遺族たちは、ここにきて「お骨」を掘って行つたと語り伝えられている。現在、ミゲローポリスの町には、数百の無縁仏の遺骨をあつめた大きな「慰霊塔」が建っている。移民五十年祭（一九五八年）に二百名ほどの有志の寄付で建てたものであるが、おそらくここにねむっているものも多いにちがいない。

とにかく、マラリアにおかされ、多くの犠牲者をだすようになる、稲の収穫も人手に渡さなければならなくなるし、食料、医薬等で地主にたてかえてもらった金も返済するみこみがたたなくなってしまうことである。はじめは多く夜陰に乗じて逃亡した。しまいには、まっ昼間でも逃げだしたといわれる。舟がまにあわなかったか、あるいは時間外は舟を出すことを禁じられていたのか、たらいに乗って川をわたって逃げたものもあったと

いう。管理人は、もう衰弱して労働力のなくなった移民たちが、よろけながら逃亡するのを、ただ見まもっていたといわれる。こうしてこの島から、ついに日本人の姿は消えてしまったのである。

だが、リオ・グランデ沿岸で、マラリアにやられたのは、イーリヤ・グランデばかりではなかった。筆者は、とくに犠牲者を多くだしたと伝えられているイーリヤ・グランデをえらんで、初期開拓者たちがいかに苦闘したかを示そうとしたにすぎない。

冠 婚 葬 祭

この地方の生活の特長については、すでに各所で記述してきたので、ここで特別総合することはしないが、書きもらしたと思われるものを少し追加しておく。

日本人があつまった地方では、むかしから天長節（八月三十一日）を祝い、運動会を催し、ご馳走持ち寄りでにぎわったことは、モジアナといえども例外ではなかった。このときだけは「おこわ」をふかして持つてくるものもあった。日本酒の「おみき」がわりにピンガを飲んだ。

正月のことは前に書いたのではぶく。必ず祝ったのは正月と天長節だった。

それから結婚式。結婚はむろん仲人婚で、先輩の知人や親たちがとりきめた。見合いもしなかったという例も多い。娘の少ない移民たちの社会で、しかもお互い遠いところに散在しているのである。もし、いい相手が見つかったとなれば「善はいそげ」でばたばたととりきめられた。

いよいよ結婚式となれば、通知を受けた友人知人が、遠方からみな馬でかけつける。豚を屠り、鶏をつぶし、ピంగాやビーニョ（ブドウ酒）でにぎわうのであるが、好景気時代はビールをおしげなくぬいた。

三三九度と「たかさご」はほんの形式だけ。なければどうもかつこうがつかないが、正式か略式か詮議している暇はない。サッペー小屋の結婚式である。立派な家があったって、その地方の顔役にでもなると形式を重んじるようになるのだが、初期にはそんなことは誰も問題にしなかった。たいせつなのは飲んで歌ってきわぐことであつた。

はじめは、「アー、コリヤ、コリヤ」で手をうち、のどをからして歌い、自慢の民謡踊りもするのであるが、夜のふけるにしたがい無礼講となる。「さあ、飲め飲め、うんと飲め、おれがついでやるだ」「なんだ、なんのうらみでおれの杯をうけないんだ」「うらみだって？てめえみたいなのヒョットコやろうになんのうらみがあるものか」

「このやろう、おれをみくびってうけないんだなっ」こんなふうにして、まるで子供みたいな怒鳴りあいから、つかみあいの喧嘩がはじまる。

「喧嘩のないカザメント（結婚式）なんかカザメントらしい気分がでなかったものですよ」と当時を回顧する老人もいた。

こうして夜明けまでカザメントはつづく。新婚旅行にもでられない新郎、新婦は、よっぱらいの相手をしてサービスにとめなければならぬ場合も多かった。

葬式は仏式といえるが、坊さんがいたわけではないから、埋葬に際して誰かがむにやむにややる。お棺もたいがい手製だった。また二輪馬車（この地方ではカリニンヨといひ、なまつてカリンともいう）もない時代には、タンカにつけて墓地までかっいで行くのである。ファゼンダからカローツサを借りてくるものもあった。この地方のカローツサは四輪で、四頭から六頭のラバが引いた（北東地方から来たカメララーダたちは、敷布に包んで両端を担い棒にしぼりつけ、二人が前後にならんでかっいで行ったものである）。

日本人はたいがいたんかに乗せ、四人でかわるがわるかっいで。町へ行ってからお棺を買っておさめる場合もあった。会葬者にはピンガをふるまったことはどこも変わりがない。

とにかく、冠婚葬祭の形式はほとんど問題にされずどうにもかつこうがつかないところだけ「うたい」をやり「念仏」をとなえた。墓標は卒塔婆がなかったから、ブラジル式の木の十字架に、俗名、享年を記し、表側には南無阿弥陀仏としたためた。

十字架の南無阿弥陀仏や移民墓地である。この木の墓標は風雨にさらされると数年で字が消えてしまうから、遺族が遠く移転すると、みな無縁仏と化するのであった。こんにち、どこの町へ行っても、日本人の多いところには、たくさん日本式石塔がたっている。一方で、子供たちが学校の先生やブラジル社会の影響をうけてカトリックになっていくのに比して、いまさかに新しい立派な仏式石塔がたちつつあるのは、世代の変わり目として興味深い。カトリック的十字形の墓石に日本的戒名が刻まれているのは、親子両代の宗門の入れ替わりを示しているようである。

追 補

本編のはじめに当地方の人口移動についてふれたが、現在の分布状態については一九五八年の調査のなかから随意に数字をひろいあげて、はじめは西方へ、さらに西南方への移動状況を示す。ただし、これは目だった中心

地だけをとりえたもので、くわしくは『ブラジルの日本移民』二巻を参照されたい。ここでは生産状況も一目瞭然である。

なお参考のため、一九三三年の『伯刺西爾年鑑』を見ると、当時でもモジアナ全線の同胞借地農は、ブラジル第一位で、五百五十四家族、それにコーヒー樹仕立ての請負農が第二位で二百四十六家族、コロノは第一位で二千八百八十一家族を擁していた。ただし米作者には借地農が多いが、リオ・グランデ沿岸のいわゆる米作請負農や分益農は、ほとんど見当たらない。

さらに、当時パウリスタ線では、ビラドウロではコーヒー農場内の借地米作が盛んになりだしているが、調査にはグアイーラの名はなく、バレットスは日本人十家族ほどで、米作者は不明である。アララクアラ線リオ・プレット駅は、コーヒー樹仕立ての請負農が主で、米作もはじめていたと思うが、綿作以外のことはでていない。ジャーレスはまだ存在しなかった。

三角ミナスのコンキスタは一九二〇年ころまで日本人米作の中心であった。そしてウベラーバは「日伯産業組合」の本部があったところ。

◇一九五八年現在

	日系人	一世	市街地	農村
コンキスタ	五三	七	一	三四
ウベラーバ	五五三	一四三	二九三	二六五

◇左の三地方はサンパウロ州リオ・グランデ流域で第一次大戦中からふえたところ

イガラパーバ	二七六	九五	一四七	一二九
イツベラーバ	七四八	二三六	二二〇	五二八
グアラアー	一〇六	三一	四六	六〇

◇その他さかえたところ

ミゲロポリス	一、〇七五	三〇四	一五四	九二二
--------	-------	-----	-----	-----

◇現に増加しているパウリストア線

グアイーラ	一、六三七	五〇六	三五一	一、二八六
バレットス	二、二八八	六六五	九一五	一、三七三

◇アラフラクアラ線

ジャーレス	三、一四三	九二七	六二八	二、五二五
-------	-------	-----	-----	-------

調査から丸十年を経た今日、人口が大きくふえたことはもちろんだが、市街地と農村人口の割合はすでに逆転しているだろう。おそらく、農村四〇パーセントに対して都会六〇パーセント、あるいは七〇対三〇くらいまでいっているだろうといわれる。農業者も事業家になると

都市に住居をかまえるものが多くなる。

注

(1) オトニエール・モータの研究によると、米をヨーロッパにもちこんだのはイスラム教徒だという。イタリアの百科辞典に米のことがでたのは一四六八年である。ブラジルでは一五八七年バイアでアルケールについて四〇〇六〇アルケール(柁)とれたという(面積のアルケールはサンパウロでは約二町五反歩。柁目は五〇リットル。バイアのもの不明である)。Rev. do Arquivo Municipal 7-1943, p. 133
(S. Paulo)

(2) 『日本人発展史』上巻、四一九ページ。

(3) 同上、四二〇ページ。

(4) 同上。

(5) 同上。

(6) 『米作をめざした初期の日本人』参照。

(7) 『今日のブラジル』を参考書として書いた。

(8) イツベラーバの大農・前田常左エ門氏の説である。彼は父子一族で一、五〇〇アルケールをもっていて、精米所も経営している。

(9) 『今日のブラジル』 六五三ページ。

34 カンポ・グランデにおける

沖縄県人の発展

—— 第一回移民の足跡をたどって

サンパウロ州のコーヒー農場で失望した第一回移民たちの耳に、サントス方面からすばらしい金儲けの仕事が伝えられてきた。マット・グロツソ州の鉄道工事がそれであった。一日働けば、日本で一か月は働いたほどの給料がもらえる。旅費（補助金不足額）、支度金などを高利で借りてきた出稼ぎ移民たちにとって、これは見逃がすことのできない機会であった。

このニュースは、すでにブラジルを見捨ててアルゼンチンへ渡った人たちの耳にも伝えられた。移民たちは、マット・グロツソ州に、最後の「約束の地」（テーラ・デ・プロミッソン）を見出すことができたのである。

だれもマット・グロツソ州がどんなところか知るものはない。ただブラジル国内であることだけはわかる。船で行くのである。幾日かかるか、そんなことはどうでもいい。金鉱発見の報告を得たバンデイランテスのように彼らは距離など無視していさみたった。

イツー駅のプロレスタ農場を出た沖縄県人、それから他の農場をとびだした鹿児島県人など七十五人（内女二

人（1））がサントスに集まってきた。彼らは、鉄道建設会社が雇い入れた小さな貨物船に乗りこむ。船には、鉄道敷設に必要な資材が積みこんであった。大西洋を南下し、ラ・プラタ何にでて、さらにアルゼンチン領を通り、パラグアイ川をさかのぼって行くのであった。モンテビデオ沖では暴風にみまわれ、九死に一生を得た。ブラジル領ポルト・エスペランサ（希望の港）へ着いたのは、サントスをでてから二十六日目であった。ここが目ざしてきたマット・グロッソ州の鉄道建設の基地であった。日本人の工夫たちが来たというので、一同は鉄道敷設会社によって記念撮影まで行なわれた。一九〇九（明治四十二年）のはじめころであった。ところが、彼らよりも半年前すでに二人の日本人が、誘拐されるようにしてここにいたことがわかった。グアタパラ組の移民でリオカラブエノス、アッスンシオンを経てポルト・エスペランサへ送られてきた鹿児島県人独身者二人であった（2）。

さきにあげた七十五人組につづいて、鉄道工夫としてマット・グロッソ州へはいりこむはずの一団があった。

やはり第一回移民のフロレスタ農場の沖縄県人、およびズモーン農場引きあげの移民二十三家族、合計五十七名をひきいた通訳大野基尚が、ノロエステ線アラサツバ駅奥のチエテー河畔にそったバクリー駅から、イタプー

ラ方面の建設に向かったものがそれであった。

「四十年史」によると、一九〇九（明治四十二）年七月から、その年の末にかけてころのことであった。しかし、マリア患者の続出で死亡者もあらわれ、大野監督夫人も罹病したので、沖縄県代表と計り、半年ほど引きあげたが、一時は五十七人中就労するもの七、八人にすぎなかったといわれる。彼らはついに、マット・グロツソ州へは足をふみこむことがなかったが、第三回移民のなかからも、さらに工夫があらわれて、彼らはマット・グロツソ州の鉄道敷設を、パラナ河方面から進めたといわれている。

だが、マット・グロツソ州へ本当に腰をすえた先駆者は、むしろペルー移民であった。しかも彼らがみな沖縄県人であったところに、あとで南マット・グロツソの雄都カンポ・グランデ市が、沖縄県人の一大集団地となった理由がある。今日（一九六七年）カンポ・グランデの成功者の一人として名をなし、多くの同県人をひきつけた仲尾権四郎はペルー移民であった。

一九一〇（明治四十三）年、移民としてペルーに到着した沖縄県人独身者数名は、八か月の滞在後、チリーに渡り、さらにアンデス山脈をこえてアルゼンチンに移り、ブエノス・アイレスでブラジルのマット・グロツソ州の鉄道工事の話聞き、断然ブラジル入りを決したので

あった。ラ・プラタ河からパラグアイ川をさかのぼり、ペルー出発後六か月をすぎたとき、やっとポルト・エスペランサへ着くことができた。一九一一（明治四十四）年七月のことだったという。それからただちにカランダザール駅付近からパンタナール（沼沢地）のものすごい蚊や毒虫やマラリアと戦いながら、鉄道の土盛り、およびレール敷設の仕事をはじめたのであった。

鉄道敷設の仕事は、十五人くらいが一組になって一〇キロメートルくらいのところをうけもち、各組には炊事係の女がいたという。したがって、第一回移民の工夫たちには七十五人中女が二人であったという話（3）や、あるいは、男二十六人と女十人が第一回移民の工夫たちであったという話（4）も、そのころ集まってきたいろいろな人たちが、それぞれ別な組にわかれ、夫婦ものが各組に配されたのではないかと思う。六十年の歳月を経て記憶はうすれ、あるいは、つぎつぎと語り伝えられているうちに、二組が一組の記憶となったり、その他いろいろな記憶違いもおこったことであろう。とにかく、一九〇九年から一九一〇年にかけて、多くの沖縄県人その他が、鉄道工夫としてポルト・エスペランサに集まったことは事実であった。そこから、十五人くらいがツルマ（組）にわかれて工事に従事した（5）。

なぜ多くの移民たちが工夫を志望したかといえは、は

じめにもちよつとふれたように、むろん、給料がよかつたからである。普通の労働者が日給三ミル以下（二ミルとか二ミル五〇〇とか）であつたとき、工夫の日給は五ミル・レイスであつた。これは日本金三円ほどで、沖縄では小学校の代用教員の月給にくらべることができた。一日の給料が一月の給料と同じだという魅力は、彼らをこの重労働にかりたてる大きな原因であつた。当時のブラジル紙幣は兌換券であつた。会社（6）は普通、ポンド金貨で支払っていたが、日本人は紙幣でうけとり、かえつて、他の工夫たちからうらやまれたという話も残っている。

工事は、気候・食物に慣れないうえに、つぎつぎとキャンプを移す生活のなかで、トロツコや、ときにはラバによる車、牛車で土を運び、枕木をならべ、ハンマーでリベットをたたきこむ仕事である。体は汗でぐしよぬれになる。蚊やぶゆにせめられる。体力の消耗ははげしくけつして生やさしい仕事ではなかつた。しかし、仕事はあせらずにやる。無理をしたら必ずへたばる。だが、一度マラリアにでもかかると、もう体が動かない。高熱、ふるえ、そしてどつと寝こんでしまう。病気だからといってすぐ医者に見せられるわけではないし、栄養食がとれるわけでもない。食料はきまつたものだけ。カルネ・セツカ（干し肉）、豆、米飯、だがなによりも野菜物が足りな

い。玉ねぎがそれを代用するが、一個一ミル・レイスもする。しかも、遠くから無蓋車で運んでくるので、割り当てがきままっている（7）。だから、たまには椰子の木の「芯」を食べる。生肉は鹿や猪、アンタ（バク）、ときには牧場の子牛も失敬する。どの組にも鉄砲だけはあった。

しかし、どんなに用心しても、あのパンタナールの工事では、つぎつぎとマラリアに倒れるものがあつた。ところが葬式等はやれるはずがない。あの草原と原始林、駅までは何百キロもあり、人間一人（土人は別として）住むものもないところに、墓地はなかつた。といつて、キャンプからひきだした死骸を、レールのわきに埋めるわけにもいかない。日本人が考えついたことは茶毘（だび）に付すことであつた。

焼いた、焼いた。薪を積みかさねて黒こげに焼きあげひろいあげた「お骨」は袋に入れてキャンプにもち帰り保存する。体がつづかず、命あるあいだにひきあげようとするものが出ると、彼に託して、あるいは日本へもち帰ってもらうか、または墓地のあるところまでもつていつて埋葬してもらつたのである。

日本人が五、六人かたまつて、レールづたいに歩いてみると、他の組の工夫たちは、「日本人たちよ きょうも死骸を焼きに行くのか？」とたずねたといわれる。

ある組では十人近くの犠牲者をだした。

男たちの仕事もつらかったが、各組の女性の苦労もなみ大抵ではなかった。朝、男たちがでかけると、食事時間の十時ころまで、原始林や草原のキャンプに一人とり残されるのである。米とぎ、薪ひろいでキャンプをでて帰ってみると、キャンプには野獣がはいつて寝そべっている。鹿だ！　と思っても、やはり気持ちが悪い。もし人影でもあれば、なお恐ろしかった。土人たちがキャンプをつけまわして、食物の残りをあさるのである。一糸まとわぬ人間が、キャンプのまわりをうろついて、棄てた食べものをひろって、手づかみで口へもっていく姿を見るのは、身の毛もよだつおもいであった。彼らは文明人に危害を加えない。もし加えることがあれば、徹底的に掃討されることを知っていたのだろう。

とにかく、女性といえども、いつでも野獣や蛮人の襲撃にそなえる覚悟がなければならなかった。

日本人キャンプ外には、ブラジル北東部から流れてきた気の荒らい連中がいた。ちよつとのいがみあいでもすぐ命のやりとりである。当時は、みな護身用に武装していた。黒白はピストルが解決する。「マット・グロソソの制裁はコルト四四番」といわれていたのである。ストライキに参加しなかったという理由で、他の区のツルマのものから一斉射撃をうけて即死させられた日本人班長もあつた。

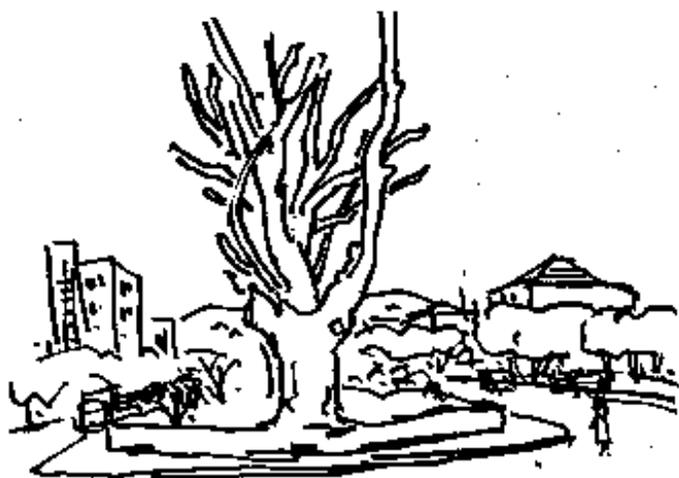
かくて、つぎつぎと多くの犠牲者をだしながらも、一九一五（大正四）年には、カンポ・グランデから二つ手前の駅、すなわち、リーバス・ド・リオ・パルド駅とのちょうど中程の地点で、イタプーラ（8）から北上していった工事隊とであって、一応、ノロエ・ステ鉄道はポルト・エスペランサから南下もてきた工事と結びあつて貫通が実現したので、ここはリガソン（連結）駅と命名されたまま一九六七年の現在でも、まだ牧場のなかのひっそりした駅となつて残っている。

こうして、一応工事が終わると、第一回移民の生き残った者たちは、あるいはアルゼンチンへ下り、あるいは日本へ帰ると弥して、サンパウロを指してノロエステ鉄道を南下し、七十五人組などは、夫婦者一組と独身者一人を残すのみとなつてしまった。この夫婦ものは、残つて鉄道の仕事、薪や枕木の供給をつづけることになつた。この人たちが、この地方でいちばん古い沖繩県人である。

カンポ・グランデ周辺の開拓

カンポ・グランデにとどまつて最初に腰をすえたのは先にも記したペルー移民たちであつた。彼らはリガソン駅で鉄道が連絡する前後の一九一四〜一五年ころから、

市内へ進出しだした。市内といっても、当時は一本の街路に十数軒の家があったのみ。しかも泥壁の草屋根が多く、みすぼらしい町であった。しかし、すでに兵営やその他の役所もできる計画があったのであろう。この町はどの駅よりも活気があるように思えたし、地形もよく、また周囲には他に見られない鬱蒼たる森林がつづいていた。どこか将来を暗示するものがあつたにちがいない。また宅地などは、必ず家を建てるという条作さえ守れば安く買えた。こうした状況のもとに、多くの同胞はここに落ち着くことになったのである。まず、後続部隊のために旅館ができ、飲食店、バーなどもあらわれたのである。



カンボ・グランデ市の一部

カンポ・グランデに日本移民が経済的基礎をすえたのは、近くの原始林開拓であった。ペルー移民たち数人はチリー、アルゼンチンと移り変わったのち、マット・グロソの鉄道工事に従って、この高原カンポ・グランデと周辺の森林を見つけたとき、まったく、ここでこそ、自分たちの将来は明るくひらけるにちがいないと思つた。土地は安かつた。しかも、遠くから輸送してくる食料品はみな高かつた。そして、まだどこにも農業らしい農業はいとなまれていなかったのである。鉄道工事でいくらかの現金をにぎると、彼らは毎日毎日土地さがしに周囲の森林地帯をうつろいた。遂に見つけたのが駅から東北へ五キロから八キロメートルの地点にひろがるすばらしい森林地帯で、しかも、すでに入植したブラジル人家族がいて、原始的農業をいとなんでいた。土地の様子もわかつた。地主が土地を売りだしていることもわかつた。彼らはこの肥沃な土地を確保することに決心したのである。地名は、マッタ・ド・セグレード。かつて一九一七（大正六）年の三月から、六月、八月というように入植者がふえて、その年には七家族がはいつた。これがこの植民地の草分けである。彼らは、ただちに掘立て小屋をつくり、山伐りをはじめたのである。全部沖縄県人であつたことはいうまでもない。独身者三人の共営の一人、仲尾権四郎も六月の入植者であつた。それか

らつぎつぎと入植者がふえて、歩合作や若干のコロノを含めると、いつも二十家族前後を有する沖縄県人植民地として存続してきた。最近になって、内地人が借地その他ではいるようになったが、戦前の全盛期は沖縄県人だけの植民地であった。

マツタ・ド・セグレード。名からしてちよつとおかしい。訳して「秘密の森」。町で殺人を犯したり、窃盗を行なったりしたものが逃げこんだところだともいい、いやここは追い剥ぎのかくれ場だったともいう。実際、ある悪党は、この辺にがんばって、町から地方へ帰る人間から必ず通行税をまきあげることになっていたのだという。日本人？ おそらく働いて金をためるのを待ち、ごっそりまきあげるつもりで手をつけなかったのではないかといわれている。シケイロの豚が肥えるのを待たれていたようなものだったろうと笑うものがある。

とにかく、人の命のやりとりなど朝飯前の新開地、しかも町から五キロ以上もはなれた森林中で生活するなど正気の沙汰ではないと考え、入植を断念するよういさめるものが多かったといわれている。

しかし土地はよかった。普通テラ・ローシャといわれるが、砂まじりのミスタである。地形もわるくない。ここで一作とることがまず命のつなである。なにはさておこ、山焼きが終わるとさつま芋を植えた。これはいざ

という場合なくてはならない食糧品だ。むろんマンジョカも植える。じゃが芋は種子が少ないから小さく切って植える。それから、なんとしても米を植えなければならぬ。ところがいい種子がない。近くのブラジル人農家へ行ってみると、あることはある。だが、めちやくちやな混合米だ。蒔いてみると、約十種類の稲がまざっているのが驚いた。これでは種子とりからはじめなければならぬ。そこで二年目にはフェロン・プレットというやつを選別して、これを種子にすることに決めた。こうして、やっと白い飯が食べられるようになったのである。むろん、まだ精米所などはない。だからカボクロ（土着人）的に白について食べる。しかしそれまで一日一回の米食がやつとである。あとはさつま芋だけが食糧だったのであるから、朝晩米の飯が食べられる喜びはたいしたものであった。故郷への便りにも自慢して書くことができる。それに各自はさとうきびを植えラバズーラ（9）をつくり、ピンガ酒をつくるようになったのである。新開地にピンガはなくてならないものである。自家製のピンガ樽を食堂の一角にすえ、卓上には壇詰にした透明な液体をおく。さあ、矢でも鉄砲でももってこい！ だ。これがあれば、どんな苦労にもたえられる。植民地内だけでも工場が三つ、四つ建つ。これは商売にもなる。一時カンポ・グランデのピンガがサンパウロ市にもその名を

ひびかせていた。それからカフェーも植えた。マツト・グロツソ州政府では、日本人がりっぱなコーヒー樹を育てている、というので、マツタ・ド・セグレードをあたかも模範農場でもあるかのように宣伝したという。また、ミリーヨがとれるごとに、豚もふえる。内地人より地物を好み、豚料理の上手な沖縄県人にとって、これはすばらしい繁栄であった。

この植民地の歴史を見ると、やはり敗北者が不在わけではないが、成功して帰国したものの多いのに驚く。彼らは、できあがった農場を同郷人に売り渡して帰国するのであるが、これが在日本およびブラジルの同県人にどれだけ刺激になったかわからない。

マツタ・ド・セグレードが開拓されはじめると、これにならって、つぎつぎま他にも植民地がひらけていく。

市外と市内の日本人

移民たちは原始林だけを目ざしてカンポ・グランデに集まったのではなかった。一九二〇年から一九二二年以後まで、ぼつぼつ兵營が完成され兵隊がふえていくと、馬糧の牧草や野菜のはけ口もでき、町にも人口が増加する。町の近辺にも多くの小農家が生まれる。彼らは互い

に資金を得るために、「たのもし」をやった（カンポ・グランダのたのもしは今日でも名高い）。ラバを買い、荷馬車を手に入れる。男たちは牧草や野菜をつんで兵舎へ向かう。女たちはバシール（大きな金だらい）に野菜ものを入れ、頭にのせて町を売り歩く。まだ雨がふればどろんこの道である。町へでるにも裸足がいちばんいい。腰をふりながら泳ぐようなかつこうで、早朝から野菜売りにやってくる女たちのいさましい姿が見られた。野菜売りが終わると、彼女たちは洗濯女にも早変わりする。

現在ではほとんど市場、あるいはこれに隣接する露天市場（フェイラ）で野菜や果物を売っているし、このフェイラが多くの日系人で占められているので、カンポ・グランダといえば、近郊の野菜づくりとフェイランテ（露天市場の販売人）のように考えられがちであるが、戦前までは町を売り歩くものが多かったのである。

カンポ・グランダ周辺の農家に野菜づくりが多いことは、いまもむかしも変わらない。また、一九三三年の聖州新報社の『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』によると、三十七家族の「薪業」というのがでている。ただこれだけを見れば、なんのことかわからないだろう。だから同年の『伯刺西爾年鑑』のほうには「薪炭」としてある。鉄道工夫以来の伝統であって、機関車へ供給する「薪」のことである。当時、まだ汽車は薪をたいてい

たのであった（いまはジーゼル機関車に変わっている）。また一九三三年ころには、十人の鉄道従業員がいたし、七軒の理髪店というのもちよつとこの都市の特長であったが現在はずっかり変わってしまった。当時こまめに働いて郷里送金のつとめを果たした沖縄県人たちの生活が思いやられる。

カンポ・グランデが、かつてはブラジルの各地から流れ者の集まる気の荒らい町として毎日のように殺人事件が伝えられたことは、ここに移住しようとするものに多くの警戒心をおこさせた。しかしそれは、新開地に特有な「女」に関するもので、一般に色町のできごとであり主として「カマラーダ」たちのあいだにおこったことであつた。

さらに、ここは全マツト・グロツソ州の牛飼いたちが集まるところで、ばくちも盛んであつた。一時、ばくちの名人として天下になりひびいた儀保蒲太こと一八（いっぱち）が、カシーノを経営していたことがある。大野基尚著『フラジルにかけた虻』（一三三〜一三六ページ）には、「天下ご免のとばくの親分」として、面白いエピソードが語られている。一九二六年ころ、ノロエステ旅行中の田村七太（たつけ・しちた）大使は、一夜「一八」をホテルに招いて「数かぎりない秘術」を見せてもらったが、歓談時を久しゅうしたのち、

「ブラジルまで来て、ばくちをやるなどケシカランことだが、そんな腕をもっている君にやめさせるのはおしい。君だけに限ってだよ。今後もその道に精進して天下を席卷してくれ……大っぴらに許可を与えるぞ」

と酒気をおびた大使が戯言を弄したといわれる。

しかし彼は小柄で、親分肌といえる人間ではなく、最後まで故郷の父母をおもい、肺をわずらったのちは、サン・ジョゼー・ドス・カンポスの結核療養所で療養し、一九三五年さびしく息をひきとっている。勤儉貯蓄主義者の多い沖縄県人のなかで、第一回移民、十三歳で渡伯し数奇な運命をたどった異例として、ここに記しておく。

カンポ・グランデは、先に記した仲尾権四郎、それから沖縄協会の重鎮・大城武盛、その他古くから商業に進出しているものもあるが、二世には事業家よりも医者、歯科医等の自由職業のものが多し。政治方面への進出は一九五八年に最初の日系市会議員を出してから、なおひきつづき一人だけであるが、この点はさびしい。

教育の方面では、早くから小学校をたてている。一九一八年（10）、県人会創設とともに開校した。父兄十二、三名で生徒もまた一二、三名であった。校舎はいまの駅の近くで、五メートルに七メートルくらい。はじめは草屋根の小屋ですますつもりであったが、金が集まったので板造り瓦屋根の校舎にしたのだという。一九二二年

の独立百年祭まで、この校舎でがんばってきたのち、市中の現在の場所に新校舎を建築したのであった。

一九二〇年ころ、カンポ・グランデの日本人は約五十家族で、その九八パーセントは沖縄県人であった。一九五八年の移民五十年祭当時は、カンポ・グランデ市および周辺の全家族は六百に達し、他県人もその二五パーセントくらいに達するようになる。しかしカンポ・グランデが沖縄県人の集団地であり、また沖縄県人の力によって大きく発展したことに変わりはない。

現在当市には、伝統的な球陽協会の流れをくむ沖縄協会と中央日本人会があるが、共にりっぱな会館を持って種々の文化的活動をいとなんでいる。

彼らは正月や小学校の卒業式などに、徹底的に飲めや歌えで一日をたのしむ。マツタ・ド・セグレード植民地の卒業式は有名で、子供の運動会から大人の歌舞音曲まであり、老若男女集まって盛大に祝う。

カンポ・グランデ市の両会館のホールにはりっぱな舞台があり、ここでは沖縄特有の蛇皮線と太鼓にあわせた「沖縄踊り」が見られる。いまなお、南の島のエキゾチックな香をただよわせながら、どこか「能」のきびしさと「日本舞踊」のあでやかさをとりまぜたような美しい踊りを、フェスタ（祭り）ごとに見ることができると。

変わりつつある生活

だが、こうした一世たちの郷愁にあふれる文化活動に對して、二世たちはどうであろうか。彼らの多くは、もう日本語も沖縄方言もわからず、ポルトガル語を自由に話し、ブラジル人の生活様式を身につけブラジル式近代的一般ダンスや音楽を好む。二世たちのなかにはもう親たちがどんなに苦勞してこの土地の生活に根を張ろうとしてきたか、そんな移民の歴史などはまったく知らぬ顔に、ブラジル人として成長していくものが多い。

ここに二世に対する一世移民の不滿があり、いまだに勤勉努力主義をぶづける一世に対する二世の批判があつて世の移り変わりのきびしきを見出すことができる。

冠婚葬祭も、むかしは主として沖縄式であつたが、いまではだんだんカトリック的になつていく。戦後多くの日本人小学校が、公認私立としてブラジル人の教師のみによつて指導されるようになったことが、いつそう早く同化の傾向を進める原因であつた。ただ埋葬後七日ごとの墓参を七回かさねること、洗骨は四年目であつたのがブラジルの習慣にしたがつて五年目の掘りかえしのお墓に行なつてりっぱなお墓におさめるなど、ブラジル式と変わるところがないが、むかしの気持ちをそのまま伝え

るものとなって今日も残っている。

食物などは（戦前からの人たちを中心としていうのであるが）、ブラジル式でもなければ、日本式でもないという中途半端な段階を早く通りこして、かなりブラジル式になっているが、ただ米食だけは「白いご飯」が多いように思われる。また、内地人のように「風呂」に執着しない点など、早くからブラジルの生活様式に慣れた理由かもしれない。

カンポ・グランデにおける沖縄県人の定住は、同県人が集まって気楽に生活できた点にあった。それがいつのまにか「永住」となって落ち着いてしまったのであって彼らが集団したことの意味は大きい。が、またそれだけ一面では孤立した集団にならざるをえなかった。そこでは自分たちの伝統的生活を守ろうとすればするほど、保守的傾向を招く危険もあった。

こうした傾向を打破していく役割をつとめるのは、一方では広くブラジル人の社会の空気を呼吸することのできる二世であり、とくに高等教育をうけたインテリたちであるが、これは主として都市生活の方面において役割を果たしている。

他方農村においては、二世よりも、むしろ戦後になってブラジルに移住した人たち、とくに青年開発隊とよばれる独身青年たちである。その他、サンパウロ州の旧地

帯から抜けだして、マツト・グロツソ州に新しい技術をもつて乗りこんでいく内地移民たちの活動である。

ブラジル一般が過去の略奪農から抜けだして、近代的農業に向かいつつあるとき、孤立した集団は、内部的には二世の成長により、外部的には他の地方からの移動者によって切りくずされ、いまや古い殻を抜け出して、新しい発展をせまられているように見える。かつてはピнгаからコーヒーへと発展していったマツク・ド・セグレード植民地を見ても、過去の繁栄を物語る荒廃した大地に、新しい機械化農業が、いさましい発動機の音をひびかせて更生の活動を開始している姿が見られる。

筆者は第一回移民のあとを追ってカンポ・グランデの歴史に執着した。むろん、カンポ・グランデだけが日本移民のいるマツト・グロツソではないし、今日では北東はクイヤバー方面から西南はドウラードスからポンタ・ポランにいたるまで日本人の発展は、ほとんど全州に及ぼうとしている。だがここでは全マツト・グロツソ州の邦人史を書くのではないから、カンポ・グランデの沖縄県人のたどってきた生活のあとを記述するにとどめ、沖縄移民のこの地方における生活を代表させることにした。

注

(1) 一説によると六十二人で、そのうち二組の夫婦ものがあつたという。『コロニア五十年の歩み』二〇ページ。さらにこのなかには第一回移民着伯六か目前に、英国船でマゼラン海峡を通過して航伯したものもまざっていた。

彼はパンタナールの工事で皮膚病にかかってたおれたという。同上、一七〜一八ページ。

(2) 『コロニア五十年の歩み』一八〜二一ページ。

(3) 大城幸喜氏夫婦談。

(4) 大城武盛氏の調査による。

(5) 『コロニア五十年の歩み』二〇ページによると、内地人だけの班一つと、沖縄県人だけの班二つ、合計班が三つだったという。

(6) 鉄道工事を請負っていた会社は、はじめは英国系、のちにはフランス系であつたという。

(7) 食料は一人当たり三〇ミルで、これは給料から差し引かれることになっていた。

(8) いまはかつての変更線が本線。

(9) レンガ形にかためた粗糖。

(10) 一九一七年説もある。『コロニア五十年の歩み』二二九ページ。

35 サンパウロ市郊外の農業と

日系農家の生活

郊外農業のはじまり

コーヒー農場へ契約労働者としてはいった日本移民は、農場の契約が満期になったり、また二、三年ここにふみとどまつていくらかの資金を得たものは、ノロエステやソロカバナ方面の新開地の独立農を目ざして進んだ。はじめから土地所有の自作農へいけないときは、コーヒー（樹）仕立ての四年ないし六年の請負い仕事をして、資金ができる土地を買って独立した。こういうコースは、当時の日本移民の主流をなすいき方であつたといえる。

むろん、一方には、コーヒー園の労働中に間作や余作地で米作をこころみ、その有望なことを知って、三角ミナスからリオ・グランデ沿岸の米作におもむいたものも多かつた。そしてこれは一つの大きな支流と見ることが出来る。

しかし、サンパウロ市郊外の野菜づくりにおもむいたものは、日本移民の大きな動きからみると、ごく小さな流れにすぎなかつた。

ここに野菜づくりの先駆者があつた。すでに一九〇八

年の第一回移民中には、サンパウロ市内ではあったが、モツカの競馬場の近くで鞍谷誠一（五十四歳）という自由移民の一人が、家屋付きの小さい畑を借りて野菜つくりをはじめている。香山六郎の『移民四十年史』によると、彼は北米の日本人が野菜をつくって成功したことを知っていたので、ブラジルでためしてみようと思ったのであった。しかし、当時は、コウベやセボリーニヤ（細ねぎ）やサルサ（パセリ）やシコーリア（苦菜）くらいが市民の野菜であった時代だったので、大根や白菜やほうれん草などの日本野菜をつくったとて、売れる道理はなかった。

かごに入れて街へ売りにでると、「キ・エー・イツソ？」（なんだね、これは？）ときくほどであったという。この男は、あとで気がふれて、ガラスの破片や紙屑をかごに入れて野菜だ、と街を売り歩くようになった。そして、まもなくサンパウロ市の慈善病院（サンタ・カーザ）で亡くなったという。かなしき野菜つくりの先駆者であった。

本当の日本人郊外農業は、一九一一（明治四十四）年にはじまったという記録が残っている。サンパウロ市外北方にあるサンタンナとやはりサンパウロ市西北二〇キロのジャガラ―山麓のタイパスの野菜つくりである。

一九一三年にはサント・アマール線（郊外電車）のブ

ルックリン・パウリスタ停留場からはいったモルンビー方面がひらかれ、一九一三年から一四年にかけて、今日のブラガンサ街道三五キロのマイリポラン（当時はジュケリー）に近いところヘグアタパラからでてきた十家族が五〇アルケールの土地を購入して入った。のちにじやがいもの産地として有名になったモイーニョ・ベリヨの「コチア村」へはいったのは、一九一四年であった。

サンパウロ市の近郊農業に日本人が進出することになった動機はさまざまである。市内ではすでに、アメリカの日本人野菜づくりの成功者にならって、第一回移民がブラジルの土をふむと同時にはじめている。その後、コーヒー農場からサンパウロ市へとびだしてきた初期移民のなかには、市内で就職ができず、郊外のブラジル人経営のシャーカーラ（農園）に仕事をさがしだし、農業労働者として働いたものもあつた。彼らは偶然近郊農業に片足をふみ入れた人たちであつたが、のちには本式に近郊農業へ移っている。さらに、モルンビーの例にもあるように、大工として郊外の仕事にたずさわっているうち、ブラジル人に勧められ近郊農業にはいったものもあつた。当時は、コーヒー農場の仕事に失望して、なにかいい仕事はないものかきき耳をたてていたものがたくさんいたから、だれか変わった仕事をはじめると、必ず他のも

のがそのあとを追った。はじめから近郊農業の将来を考えて着手したものは、ほとんどなかった。

なかには、大都会の近くなら、いざ病気というような場合はいい医者にもかかれるだろうし、子供の教育などもなんとか道がひらけるかもしれないと、ただ漠然と大都会の近くを選んだものもあった。

さらに、奥地の粗放農業にあきたらず、サンパウロ郊外で狭い土地でもいい、日本式に耕してみたいと思ったものもいた。

しかし、こうした考えに反対するものは、いくらでもいた。ブラジルのような広いところへ来て、なにを好んでせせこましいサンパウロ郊外の百姓などをしなければならぬのか、あんなところへはいっていく人の気が知れない、というのである。そしてこれは、多くの移民たちの考えでもあった。

奥地の人たちは、サンパウロ市の住民、とくに若いものをバガブンドだと思っていた。そのことについては、サンパウロ市における移民の歴史のところでもふれておいた。郊外の農業者に対しても、なにか偏見をもっていたように思う。『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、三三〇ページには、

「これら邦人の大多数は、かつて旧耕地地帯、或はノロエステ、ソロカバナ方面に居ったのであるが、大いに儲

かるという噂を聞いて集って来た人々で、確実な方針のもとに資金と技術とを持って転住した分子は甚だ稀と見てよい。従って常に有為転変を繰り返しかえしている有様である。恐らくサンパウロ市の発達と共にまだまだ増加するであろうが、一面、優勝劣敗は一段と激しくなるであろう。その結果、サンパウロ市民は結構な野菜が豊富かつ安価に提供されることになり、甚だ喜ばしき次第に相違ないが、そのために邦人農業者は多大な犠牲を払わねばならぬのである」と評している。

犠牲を払うとは、借地農が多いために定住性がなく、したがって農民はそこに落ち着いた生活ができないということであつた。そして「発展史」の筆者は、サンパウロ市郊外については、サン・ベルナルドの瑞穂（みずほ）植民地だけを「他に類例のない堅実な発展をしている」ところとしてあげているにとどまる。そして、このような考えは、戦前まで多くの人の頭にあつたようである。

だが、コチア産業組合や南伯（スール・ブラジル）産業組合、その他多くの組合の発展とともに、サンパウロ近郊の農業は、奥地の地力減退も手伝って、わが移民史のなかで主要な地位を占めるようになる。

ここで郊外農業発展の社会的客観的条件を求めるとすれば、サンパウロ市の人口増加と歩調をあわせることになる。

一九世紀から二〇世紀のはじめにかけて（それはちやうど日本移民がはじめてブラジルの上地をふんだころである）、コーヒーの生産過剰による経済界の不況は、資本の都会進出をうながし、ことに第一次大戦（一九一四―一八年）後は、工業の中心地となったサンパウロ市の人口は年々飛躍的に増大して、一九〇〇年の二十三万九千八百二十から一九二〇年は五十七万九千三十二、一九四〇年は百三十一万八千五百三十九人となるのである（2）。そして、それまでのサンパウロ市の庶民の生活もだんだん向上し、消費市場としての価値も高まってくるのである。

郊外農家の生産と生活様式

一九一〇年代、サンパウロ市の周囲には、山脈地帯以外はすでに原始林は見出されなかった。かつては市民に対して食糧を供給していた周囲の農業も、無肥料の略奪農のおかげで、地方は減退し、荒地しなり、かろうじて再生林となったあとは、ふたたび薪や炭をとったので、バルバ・デ・ボーデ（山羊のひげ）と称する、牛馬も食べないひげ草がはびこった草原となっていた。コーヒーという輸出産物のなかった郊外の土地は、ただ衰退の一路をたどっていたのである。日本人はここで農業をはじめ

めようとするのである。

そのころ、市内または郊外で、ポルトガル人たちは、ごくわずかな土地をたがやして、コウベ、セボリーニャ（細ねぎ）、サルサ（パセリ）、シコーリア（苦菜）、それからシュシュー（はやとうり）などをつくっていた。土地はよさそうであった。もし日本人が本式に栽培しだしたら、もつといいものを大量に生産できることが予想された。サントナやモルンビーの野菜づくりは、こうした予想のもとにはじめられた。

市内や市の周囲の野菜づくりは、ほとんどポルトガル人の独占的な仕事のようなものであったが、郊外の百姓となると、まったくのカボクロ農業であった。セラードを切り倒し、火をつけて焼き払ったあとには、とうもろこしやマンジオカを植え、わずかな豚を飼い、草原にはやせ牛を放ち細々と暮らしていた。彼らはファゼンダのコロノたちよりも覇気がなく、まして新開地の人たちのような成功を競う気持ちなどもっていなかった。こうした環境のなかで、日本人は野菜づくりの近郊農業をはじめたのである。

ジュケリーの例にもあるように、当時の日本移民はほとんど無一文で、移転費まで地主からだしてもらった。そのような時代であったから、借地農よりも分益農のほうがよかった。収穫物のあるまで、近くの町のベンダ（店）か

ら地主の保証のもとに、食料その他の必需品を掛け買いするのである。そして地代のかわりに生産物を分けあうのであった。むろん、小金をもっているものは、借地をして、いわゆる半独立農にはいった。しかし両者とも耕作法はべつに変わったものではなかった。

まず土地が決まったら、なにはさておき、家を建てなければならぬ。数家族共同で契約する場合は、家造りも協同でやれた。もしポツンと一家族がはいるときは、はじめは、数時間でできあがるキャンブ小屋のようなものを建てるか、あるいは近くのカボクロの家の納屋にでも泊めてもらって家造りに通わなければならぬ。

土地は原始林ではないが、カンポ（草原）や、セラード（灌木林）であった。まずカンポの草をなぎ倒し、小屋がけのできる程度の広さのところを片づける。一〇メートル四万もあればすむ。道具といえば、フォイセ（長い柄の舵鎌）、エンシャドン（唐鋏）、エンシャード（鋏）があればいい。近くのセラードから材木を切りだして柱をたてる。

棟木、梁、垂木など、みなセラードから持ってくる。屋根組みに日本人は日本から持ってきた鉋やのこぎりを使った。壁は木を縦にならべ、泥壁にするために都合のいいように、少しいねいにこまいを組む。この仕事には針金が必要だが、できるだけ山の蔓（シポー）を使っ

た。

屋根はサッペーがいちばんいいし、幸いサンパウロ郊外の荒地や草原にはサッペーがあつたので助かつた。

むろん、家を建てはじめるまえに、どこから材料をとりにだすかを調べておいたので、仕事の順序はわかつていた。

屋根は切妻がほとんど全部で、ときには横のほうへ庇（ひさし）をおろして、これを炊事場や風呂場に用いることもあつた。間取りは、はじめは二つくらいに仕切る。すなわち、寝台と食堂兼炊事場といったもので、のちには横へ庇をおろして炊事場を独立させる。全部土間であることはいうまでもない。寝台には、山の細い木を切ってきて棚をつくる。テーブルはもちこむか、さもなれば、荷物を詰めて運んだ箱（二〇リットルの石油缶を二個入れるもの）を解体して、土間に埋めこんだ枠付きの四本の棒の上にならべて釘づけにする。腰かけも、椅子のないときは、このようにすえつけのものをつくる。その他空箱でも木の切株でも利用できる。むろんこうした小屋は、生活ができるというだけの殺風景で趣味のないものであることはもちろんである。夜は石油ランプがあればいいほうで、カンテラをともしたこともある。

風呂は、いちばんいいのは小川のほとりにドラム缶をすえ五右衛門風呂にすることであるが、はじめのうちは

行水でまにあわせる。便所は裏のやぶかげに穴を掘って、ちよつとした枠の囲いをする。板のない時代は穴の上に棒をならべた。

たいがい小川（コーレゴ）の近くに家を建てるので、まだ井戸はない。マラリアの心配がなかったので、気楽であった。小川では、飲料水をとるところと、洗濯場および食器や食物を洗うところを区別しておく。

フオゴン（かまど）は泥できずく。サンパウロ郊外の土は砂に粘土が多くまざっているから、フオゴンをきずくには楽である。ところによつては石をならべて石垣のようにきずき、それを泥でかためる。

食器をしまっておく棚も細い棒でつくる。戸棚は空箱である。たいがい家の横には、小さな棒棚をこしらえ、そこでまな板を使ったり、洗いものをしたりする。すぐ使った水を棄てられるので都合がいい。

食物は豆（フェイジョン）を油で煮て、日本式の白い飯にかけて食べる。日本式にして、味噌汁と小米（くだけ）の飯ですごしたという者もいる。

カフェーは欠かすことができない。ブラジル式にする
と朝食はとらないから、メリケン粉でソーダだんごをつくり、油で揚げてパンの代わりにする。これでは時間がかかるし不経済だと思えば、フアリーニャ・デ・ミーリオというフバーよりも上等な、とうもろこしのさらし粉を

カフエーとまぜて、ちようどそ（、）ば（、）が（、）き（、）のようにして食べた。そのうちさつまいもでもできれば、それが朝のカフエーの食べものとなり、また午後のおやつにもなる。

ピングは欠かすことができないのはもちろんである。まだ樽では買えないからガラフォン（四リットル入りの大壺）で買う。タバコは、コールド（縄タバコ）や「きざみ」を手巻きにして吸った。ヨランダという三〇〇レイスのシガーロもよろこばれた。一箱二〇〇レイスのものもあつた。

家造りは四、五日で全部終わらなければならぬ。手伝があつたりして人数が多ければ、三日くらいで仕上げぬ。

畑の仕事が待っている。

草原ばかりでは土おこしがたいへんである。だから、セラードも少し切つて焼き払わなければならない。セラードには、豚の飼料のためにとうもろこしを植える（ここもむろんあとでは掘りおこして耕すが、初年には手がまわらないから、とうもろこし畑にする）。小川に近い草原は、草をなぎ払い焼却したあとは、エンシャドン（唐鍬）で掘りおこす。このカボツカ（土おこし）の仕事がいちばんたいへんなのである。家族の者だけではいくらかもできないから、近所のカボクロを雇ってくる。日給は

一ミル五〇〇から二ミルだった。こちらで昼食をだせば一ミル五〇〇くらいが相場だった。女なら一ミルでもいい。そのかわり、仕事はゆっくりやる。だいたいカボク口は、土地を耕すなどという仕事はあまりやっていないので、やはり骨がおれる。仕事がつらいので来なくなる場合があるから、カボツカ賃はだんだん値上がりする。しまいには請負い仕事になる。

最初の年は、カッポエイラと耕作地をあわせて、一族三人ないし四人、一アルケールか一アルケール半ひらければ上々である。耕作地が主になれば三人家族で半アルケールくらいのもものもめずらしくなかった。

はじめは、あまり手のかかる仕事はできない。だから掘りおこした土地は四分の一アルケールもあればいい。日本人はコウベ、セボリーニヤ（細ねぎ）、サルサ（パセリ）などポルトガル人の作物はあまりつくらない。それよりもキャベツ、にんじん、さや豆、なす、きゅうりなどを好んでつくった。これらは自分たちにとって多少経験のあるものだったので自信があった。きゅうりには「手」がかかった。カボクロ式では地べたにはわせるので形がくずれたり、虫がついたりしやすい。また自家用としてねぶか、大根、白菜などをつくったことはいうまでもない。

こうしたこまごまとした野菜づくりも、そのうち、

じゃがいもで儲けたり、ピメントン（ピーマン）で儲けたりトマトで儲けたりすると、その評判はたちまち遠近にひろまって、そこここで大量生産をはじめるのである。ひとぼくち打とうとする単作者もでてくる。じゃがいも、トマト、いちごなどは、もったもこれに適するものとして発展するのである。馬耕がはじまり、苗床のつくり方も上手になる。

元祖 自慢

各地には、それぞれ「元祖」自慢が残っている。はたしてそれが元祖なのかどうかわからないが、その土地の人は元祖だとがんばる。コチアはいもの元祖である。

『コチア産業組合三十年の歩み』を見ると、雑多なカボクロいもを選別し「オウロ・デ・コチア」をつくったことになっている。コチアよりも早くひらけたジュケリーの連中はコチアいもを種にして植えたというから、あるいはそうかもしれない。むろん、バタチーニヤ、またはバタタ・イングレーザ（ともにじゃがいもの通称）はずっと前からブラジルで栽培されていたから、日本人でコチア村よりも早く植えたものがいても、不思議ではない。そういうえば、郊外のバタタづくりはタイパスが元祖だという記録もある。

「大正元年（一九一二年）十一月当地に入り込み、始めて自発的に馬鈴薯栽培を試みたが、好運にも当地方が、頗る馬鈴薯に適していたので、それから他人にも教へ、今日の隆盛をみるに至った」

と『今日のブラジル』（一九二九年版）の五五二ページにでている。

トマトは、一九二四年ころからイタケーラで栽培をはじめた。イタケーラはトマトの元祖だという。いちごもイタケーラでは早くからやっていた。スザーノのイチゴ栽培は有名だが、元祖調べからいうと、どうなるのか。ずっとあとの話になるが、モジー・ダス・クルーゼスのコクエイラ区で、農学士・揮旗深志（ふりはた・ふかし）が扁平桃の栽培に成功し、今日の桃づくりのさきがけをしたことは有名である。

各集団地の歴史

この辺で、サンパウロ近郊農業における日本人集団地について、もう少しくわしくその創立年代とともに地理上の位置を調べてみよう。

一九一一年に、サンタンナとタイパスがひらけたことについてはすでに記した。

サンタンナはサンパウロ市の北端、中心より八キロであつて、電車(3)のほかにも、当時はカンタレイラ線(4)で荷物を運ぶこともできた。グアタパラ農場からでてきた八家族のものが、土地を購入して野菜づくりをはじめたこともすでに記したとおりである。

タイパスは、サンパウロ市の西北二〇キロのところ、交通運輸はサントス・ジュンジアイー線の郊外列車である。一九二七年の調査によると、自作農九、借地農三十一家族であつた(5)。最初に日本人がじゃがいも栽培をやつたところとして知られている。草分けの馬見塚竹蔵(まみづか・たけぞう)は一九二八年からピング醸造にはいったという。

モルンビーは一九一三(大正二)年、鹿児島県人の大工二人が、サント・アマール線のブルックリン・パウリスタへ家屋建築の仕事にでかけたとき、外人からモルンビーで農業をするようにすすめられて、ここで野菜づくりをはじめた。はじめは、ピニエイロス川を渡つたところの平地を耕していたが、だんだんモーロ(丘)のほうへ開墾をすすめた。

当時ピニエイロス川(いまは運河)カナル・デ・リオ・ピニエイロスという)は、ずっと手前にあつたもので、彼らが小学校を建てたあたりが、いまの鉄橋の、ブルックリンから行くと川向こう左手のたもとなつてい

る。一九二七年には二十九家族であったが、そのなかの五家族をはぶくと、他は全部鹿児島県人であった。土地所有者は三家族で、面積は一一・五アルケールであった。丘には古い茶畑があったので、そのあとを整理し、製茶をやるものもいた。サンパウロ市では、日本人が茶をはじめめる前にこの辺で茶の栽培をやったもので、モロコのほうはやぶのなかに古いお茶の木がたくさんあった。

ジュケリー植民地は一九一三年から一四年にかけて、グアタパラ組の十家族が、五〇アルケールを購入してはいつたところである。今日ではブラガンサ街道三五キロにあるマイリポラン（旧ジュケリー）に近いところであるが、当時はカンタレイラ線の終点カンタレイラ駅からはいつた。サントス・ジュンジアイー線（旧サンパウロ鉄道）のジュケリー駅（現フランコ・ダ・ローシヤ）からもはいれたが、山脈地帯の山道がけわしかったので、カンタレイラ駅を選んだのであった。土地は五年払いの無利子。

地主のポルトガル人フェリッペ・ファグンデスは、食料品購入のために店の保証人になってくれたほか、ムダンサ（移転）費から種物を買う金まで貸してくれたという。

植民地の大恩人であった。

代表者は秋村長寿（あきむら・ながとし）であって、は

じめは秋村植民地とも呼んだが、同志十人のため個人名をとることはいさぎよしとせず、ジュケリー植民地とあらためたといわれる。

コチア（モイーニョ・ベリーヨ）は、一九一四年、山形県人・鈴木貞次郎の世話で数家族がはいり、つぎつぎと発展し、一九二七年には八十家族、そのうち高知県人が三十家族もいたので、高知村の観があった。そのころ土地所有者は十三家族、借地は四十七家族であった。

近くのビーラ・コチア（町）は今はシダーテ（市）であつて、アスファルト道路が通つていて、バスでサンパウロ市ピニエロスから三十分であるが、むかしは徒歩でピニエロスへでるか、あるいはソロカバナ線コチア駅（現イタペビー）へでたものであつた。一九一八年ころは、もう肥料を使って収穫量をあげ、じゃがいもの種子も良種を選別して植える、ようになっていた。

フレゲジアー・ド・オーはサンパウロ市の北西にあたり。中心から約八キロ、一九二〇（大正九）年にひらけ一九二七年には五十三家族にふえたが、一家族の土地所有者の他は皆借地であつた。

バルエリーはソロカバナ線に属し、一九二一年にはじめて日本人がはいってじゃがいもをつくつた。

イタケーラはセントラル線で、まだ当時サンパウロ郡に属していた。一九二三〜二四年ころ、獣医・石橋恒四郎が土地会社と契約してコロニア・ニッポニカを売りだしたところである。トマトやいちごをやり、のちには桃で有名になった。一九二七年には二十家族に達した。

その後の発展地をあげれば数えきれないだろう。一九六〇年ころ郊外日系人は五万といわれていた。

当時の販売法と天秤姿の野菜売り

近郊日本人農家の生産物が、主としてサンパウロ市民の食糧品を目ざしたものであり、サンパウロ市の人口増加とともに販路もしだいに増大していき、のちには、リオ・デ・ジャネイロ市から、その他の地方都市にも販売網は伸びていったのであるが、はじめのうちは実にわずかな消費量であった。農家の販売方法は、じゃがいもなどははじめは、ピニエロスやその他の市場の仲買商人の手を経て、小売商人に渡した。野菜は天秤棒でかついで、直接販売もやった。

その後、組合や仲買商人の手を経てだすもの、あるいはフェイラ・リーブレ（自由市場）で個人販売をするものなど、さまざまな方法によるようになったが、戦後は天秤棒はほとんど見られなくなった。

一九三〇年ころまで、サンパウロ市内のポルトガル人野菜売りは、手押しの一輪車か、ラバー頭に引かせた馬車であった。場所によっては、こうした野菜の売り方をした日本人もなかにはいたが、これは農家の仕事というよりも、市場で仕入れたものを売り歩く、野菜売り専門の仕事であった。それでも市内の空地で野菜をつくっていたポルトガル人たちは、馬車や手車でみずから売りにでかけた。ポルトガル人の野菜売りはほとんど男であった。

これに反して、朝早くから天秤で野菜売りにでかける日本人は、女性のほうが多かった。ブラジル人やポルトガル人でもたまには天秤を用いたが、日本式に「しなう」ものではなかった。天秤をかついだ日本女性のいせいのいい姿は、おもに市の下町に見られた。わが畑から直接かつぎだすもの、あるいはイタケーラのように、駅からサンパウロ市へ汽車で送って、そこから市内をかつぎまわるものなどがいた。

農村にもトラックが普及するようになり、フェイラへ売りにでるものは相変わらずつづけているが、日本女性のいせいのいい天秤姿はもう見られなくなった。

初期の運搬機関とトラックの出現

初期に郊外の農業をいとなんだものは、少し大量に出荷すると、メルカード（市場）の仲買商人に値段をたたかれてべそをかいたが、その運搬にはどれだけ骨を折つたかしれなかった。

まだ道路が悪かった。牛車さえ、うまく通らない山路は、みなラバの背で運んだ。いわゆる十頭、二十頭のトロツパであった。生産量が多いときには、トロツパ雇いに苦勞した。競争で賃金をあげたので運搬費が高くなった。ラバは一頭につき、やつとじゃがいも二俵くらいしか運べなかった。しかも二〇リットル枘二杯が一俵であったその時代は、一俵（一袋）が七五キロであったから、場合によっては二俵も積みなかった。山坂の多いジュケリー植林地などは、生産物の運搬にどれだけ苦勞したかわからない。平坦なところなら牛車を使った。六頭、八頭びきのカーロ・デ・ボーイであった。当時といえども、さすがに市内は牛車では運べなかったから、カントレイラ駅とか、あるいはピニエイロスの市場までであった。

市内は馬車で運んだ。馬車（四頭ないし五頭びき）の多い時代で、よく市場の片すみには、ベベドウロと称し

て直径二メートルくらいの杯形鉄製の水飲み場があった。そのまわりには、いつも馬車が停まっていた。一九二六〜三〇年のワシントン・ルイス大統領時代は、自動車の普及とともにりっぱな車道が、まだアスファルトではないが、つぎつぎに建設されていった。車道の開設とともに運搬の不便もなくなっていく。

そのころは、十八俵（一トン）積みのフォード・トラックが活躍した。そして市の入口の税務署のポストで、一台五ミルの税金を支払った（6）。

耕作法もすすんだ。ラバに引かせるアラード（鋤）が使われた。そして、

「一九二三年ころから、（屠殺場残物の）臓物肥料から化学肥料にかえ、手製の鋤を、輸入品のアラード（鋤）とダラーデ（馬鋤）にかえ、いちはやく、噴霧機で消毒液をまきだした」

云々と『コチア組合三十年の歩み』四七ページに見えるから、これをコチア村が率先して実行したとしても、そのころから生産技術も、おどろくほど進歩し、それが一般化していったにちがいない。コチア村における一九二六年の調査によると、一戸平均の耕作面積は二・・三アールケールであり、2軒に1台トラックがあったという。おそらく、それ以前とくらべると三倍以上の生産力となっている。ここで郊外の日本人農業家もはっきりとカボク

口農業に訣別したのであった。

しかも一九二七年十二月十日には、コチア産業組合の創立という歴史的事件も起こっているので、この一九二〇年代の後半は、わがコロニア史の転換期だったといえる。やがて三〇年以降は、世界恐慌の波に翻弄されるのであるが、これを前後として、日本政府からの旅費全額支給移民も多数送られ、一九二七年からは年数一万をこえて、奥地植民地はその全盛期を迎えるのであるが、近郊農家にも新しい人間が流れこんで、いろいろ刺激を与えるのであった。

貧弱な生活程度

日本移民がサンパウロ近郊農業に進出した一九一一年から一九三〇年まで、すでに十九年を経過し、多くのものが十数年をここで過ごしているし、トラック持ちの農家もあらわれたのであるから、生活もかなり改善されただけではなかった。しかし、まだレンガ造りのがっしりした家に住むものは、ごくわずかであった。借地農が多かったせいでもあるろう。「畑はりっぱだが、みすぼらしい住居のある風景」が相変わらずつづいていた。

『コチア産業組合三十年の歩み』に転載されている「日伯新聞」三浦鑿（みうら・さく）の「イモ礼讚」の一部に

は、「家屋はお粗末」という一章がある。

「日本人の常として借地の間は、決して家に金をかけぬ。そのうち出ていくのだという気があるから、住いに金をかけることは馬鹿だとされている。

コチアも御多分にもれず、畑のりっぱなのに引換えて、家屋はお粗末至極だ。文字どおりほんの雨露をしのぐと
いうだけで、家具さえも満足なものを持っていない。そのうち移るのだからといつても、たいてい七年か十年はかかるのだから、その間の生活を、家を小綺麗にし、できることならうまい物を食って、現在の生活を樂しめばよかりそうに思えるが、どこの日本人もこればかりは決してやらない」と、一方では日本人の勤勉を礼讚しながら、このように生活をおろそかにすることをなげいている。

しかし、これは警告としてはいいが、現実的には、ぼつぼつ生活の改善は行なわれているのである。初期のサツペー小屋はなくなって瓦屋根になるし、レンガ造りではなくとも、壁もていねいに塗られる。とくに、イタケーラのように、面積はせまくとも自作農であつて、多年性の果樹をやりだしたところは、ながく落ち着くつもりであるから、ぼつぼつレンガ建ての家をつくった。しかしこここの入植は一九二三年から二四年にかけてはじまったのであるから、三〇年ごろは、まだまだ準備時代

であった。多くのものは泥壁の家に住んでいた。住宅はこれから十年たたないと、全体的にはそろわないのである。

しかしそういううちにも、小学校だけは、どこでもレング建てるのりっぱなものをこしらえた。もし、これに日本人会ないし青年会の「会館」が付き、教員住宅もそえられると、ここが日本人集団地の中心であることが一目でわかるようになる。

見渡すかぎり緑の耕作地、点々と見える灰色の掘立て小屋の住居、そのなかで、きわだって美しい白壁の小学校、これが日本人集団地の風景であった。

近郊農業の特殊な例外

ただし、家屋の種類についてくわしく述べると、特殊な例外があった。それは、借地にしても自作にしても、ここは人跡未踏の地ではないから、ときどき借地や購入地内に古い家屋のあることもあった。そういうところでは、わりあいゆつくり生活ができた。パンかまどなどもでき、パンも焼けたし、変わった食物をくふうすることの便利もあった。これは奥地の新開地では経験できないものであった。

もう一つ、近くのブラジル人は、むかしからそこに住

みついたものが多く、カメララーダ（日雇い）にでるような人間でも、現に地主であったり、あるいは地主の子として育ったものがいて、貧乏はしていても、むかしからの生活の規範を守っていて、善良な人間が多かった。彼らは白人も混血児もおしなべてカボクロとよばれていた。

もしこういう人間のいるところへ、二、三家族の少数日本人が住みこむような場合は、彼らの社会圏へはいつて生活を共にすることさえできた。植えつけや収穫の場合など、ムチロンという共同作業をやった。となり近所のものがどやどや集まってきた、その日一日手伝いをするのである。そして仕事が終わってからは夕食を共にする。ときにはバイレをもよおすこともあった。景気のいいときは豚を屠ってうんとご馳走をつくった。こうして彼らの生活圏にとけこんで暮らせば、貧しくともけっこう楽しい生活をくふうすることができたのである。しかしこちらの事業が発展して彼らをカメララーダに使うようになれば、もう小企業家になってしまいうので、そういうこともなくなる。しかし、ひきつづいて彼らから豚の殺し行、保存の仕方を学び、簡単なブラジル料理くらい教えてもらえた。彼らの主催するバイレには招かれて行くし、日本人のほうでも青年会のバイレに彼らを招いた。ムチロンまたはムシロンは、初期には郊外の日本人社会にもあった。日本人は「加勢」といった。「ゆい」のこ

とである。家造り、蒔きつけ、収穫のとき、たまには病気で仕事がおくれた場合にもやった。しかし日本人の場合、一家総出ではなく、家長とか青年とかが一家の代表としてでかけ、女は夜のご馳走づくりの加勢に加わった。こうした共同作業は、各自の経済力に差ができると、使用人が多くなり、また家などは自分の好みに従っていろいろくふうをするから当然消滅する。そのかわり共同事業としては、組合のほうで対外的な出荷・販売・購入などが強化される。

都会との文化交流と生活の改善

近郊農業の発達は、消費市場である都会の発展と歩調をあわせてきたのであるが、一九二五年から三〇年くらいのあいだには、子弟をサンパウロ市の寄宿舎にだして中学へ通わせるものもいくらかできるようになる。移民で来た青少年たちは、昼間働いて夜学に通い、ポルトガル語を勉強したのであるが、寄宿舎に泊まって昼の中学へ通うなどは思いもよらぬことであった。それがこのころになると、奥地のコーヒー持ちの農家からばかりではなく、サンパウロ近郊のじゃがいも地帯やトマト地帯からも、こうした学生があらわれたのである。彼ら学生たちは、都会生活のなかで見聞するブラジルの生活を、帰省

ごとに村の人たちに語り伝えることができる。

こうして、農産物を通して都市と交渉をもつばかりではなく、文化的な面でもつながりをもつようになる。生活のうえでも、もはやカボクロの様式を抜けだして、近代的なものにならざるをえない。一九二九年ころからぼつぼつ郊外バスがあらわれて、都会との交渉が頻繁になる。

三〇年ころまでのサンパウロ市の日本人は、やっとコンデ・デ・サルゼーダス街から抜けだして、コンセルイエイロ・フルタード、イルマン・シンプリシアーナ（現ジョーン・メンデス広場）のほうへ進出しつつあったときであるが、農村出の客を相手にすることが多かつたし、農村からでてくるものは、郊外のものが多かつた。

このころはすでに中央市場（カンタレイラ街）ができ、この近くに日本人の店や宿屋もあらわれた。また、ピニエイロス区には、一九二一（大正十）年に、はじめて日本人の下宿兼雑貨店ができたというが、一九二七年ころには雑貨商二、洋服店一、機械修理師一があらわれ、他は大工、理髪師、タクシー運転手などであった。ここにはじめて日本人が集まったのは、場末であるために家賃が安かったからともいわれるが、郊外農家の発展に刺激されたことも明らかで、雑貨商というものは、食料・小間物と共に日本品を売る店であった。

ここにあげた調査は一九二七年のものであるが、この年の暮れにはコチア組合が創立され、一九二八年からはピニエイロスへの進出があり、一九三三年刊の『伯刺西爾時報年鑑』によると、ピニエイロスの日系人口は、進出から五年後数倍に飛躍している。これはなんといいても、近郊農業の発展を示すものである。

ところで筆者がここで関心をもつのは、都市との交渉が頻繁になって農村の生活もだんだん変わってくるということであるが、どのように変わったかをここで調べてみなければならぬ。

まず住居から見れば、さきにも簡単に記したように、初期の掘立て小屋から、定住一步手前の少しばかり手のこんだ住居へ進むようになる。レンガ造りの家もでてくるが、土間はレンガ敷きや板張りとなり、家の掃除も行き届くようになる。寝台はスプリング・ベッドに変わる。テーブルや戸棚も、むかしのもののように手製や知人の大工をわずらわせてつくったものもあるが、奥地のように材料が自由に使えるところではないから、自然既製品を買うことになる。ガラスのはいった食器棚もあらわれる。衣服は、とくに婦人のものが従来の田舎独特のものから都会風のものになっていく。これは奥地でもそうであるが、このころから都会の「流行」が農村へも侵入しだしたのであった。しかしこうした流行は、婦人の

フェスタ着（晴着）や外出着のほうが早く影響をうけても、日常の着物になると相変わらずサッコ地とって白い空袋を利用したブラウスやスカートをつくることが習慣のようになっていた。質素や儉約を旨とした一世移民たち、ことに主婦の服装は晴着以外ほとんど変わらなかった。

食生活には面白い現象が起こった。トマト生産が盛んになると同時に、日本人の食生活に、それまでになかったトマトがはいつてくるのである。サラダにトマトを使う。油飯はトマト入りとなり、以前はコロラウで色づけしていたじゃがいもなどの煮ものにトマトを使いだす。そしてトマト使用とともに、イタリア料理のマカロナーダがはいつてきて食卓をにぎわすのである。むしろ、あらゆる農家に一挙にしてこれが普及するのではなく、またトマト栽培とともにトマト・エックス（マツサ）が工場で大量に生産されるようになれば普及は徹底しないが、とにかく日本人のトマト栽培は、日本人の食生活を豊富にしたばかりではなく、ブラジル人一般の食生活にも影響をおよぼしていくのであった。

それから、日本品輸入商の活躍とともに、「こんぶ」や「わかめ」「いりこ」「数の子」「しいたけ」なども安く手にはいるので、正月などはどここの家でもご馳走づくりに日本品を購入した。

各集団地に小学校・会館が建つと、これを利用する各種の巡回興行がさかんになる。浪花節は掘立て小屋時代からまわっていた。映画も露天上映をやり、入場料のかわりに「はな」をもらった時代もあったが、学校や会館ができると準備も簡単になり、上映にも効果があがるようになり、たびたびまわってくる。トラックの普及で遠方からでも人が集まってくる。うすぐらい田舎道を、人間を満載したトラックが会館めがけて集まってくるのも植民地の一風景だった。

邦字新聞（当時は週刊）は交通の便がひらけるとともに取り次ぎも早くなり、日本人雑貨店では日本の雑誌、書籍を販売していたので、農家へもゆきわたるようになる。

このようにして、都市とのつながりの強い近郊農家は、サンパウロを中心としてすこしずつ新時代の空気にふれるようになる。

まだ、いも成金、トマト成金の生活は現われず、一九三〇年からの一時的停滞は見られても、やがて新しい発展の段階を迎えるのである。

注

(1) 辞書にはキャベツとあるが、葉を下のほうからかいで食べるもの。玉にはならない。

(2) Aroldo de Azevedo: Regi
esse Paisagens do Brasil
1954, p. 191.

(3) むかしは早朝、あるいは未明にフェイラ（露店自由市）通いの電車があった。

(4) 軽便鉄道であった。

(5) 『今日のブラジル』五五二ページ。

(6) 同上、五六一〜五六二ページ。

36 アリアンサ移住地の特色

確実なる計画と秩序と

統制のある組織のもとに

アリアンサ移住地は一九二四（大正一三）年十月一日、

第一アリアンサの土地二、二〇〇アルケールの購入登記とともに生まれた。

創設および経営の主体となったのは、長野県「信濃海外協会―後の信濃移住組合―」である。そしてこの移住地建設に指導的役割を果たしたのは、日本力行会長の永田稠（ながた・しげし）であった。その他、現地における輪湖俊午郎（わご・しゅんごろう）、北原地価造（きはら・ちかぞう）などの努力に負うところが多い。

この植民地が「官製」と見られたのは、長野県知事本間利雄（ほんま・としお）によって建設が提唱され（1）、最初の資金が県下の市長、郡長その他有力者の寄付によったからであり、のちには政府お声がかりのブラジル拓殖組合（移住組合連合会ブラジル代行機関）の責任下に移り日本政府から多くの補助金をうけているからであるか。

移住地建設宣言の趣旨をみると―、

「日本は南米に向って、完全な移住地を作る事に於いて各国に先鞭をつけねばならぬ。移住者をして安全に確実に定着させ、何等の脅威を感じしめず、且彼地に於て本国に居っては望むべからざる程の地主たらしめ、本国に居ると同様の幸福を享受せしめねばならぬ。

それには、従来の移住態度を根本的に変改する必要がある。

移民は決して徒手空拳で行かshめてはならない。資本の後援あり、確實なる計画と秩序と統制ある組織のもとに送らねばならぬ。然らざれば、志や誠に壮なりと雖も成功は覚束ない」

云々とあるとおり、「移住態度を根本的に改変する」ことのなかには、むしろ従来の出稼ぎ的な態度の否定があり、「本国に居ると同様の幸福を享受」できる移住者とするために「確實なる計画と秩序と統制ある組織のもとに」送られ、移住地に確實に定着することであった。一万円儲けたら、五万円儲けたらと、「成功」を夢見てブラジルに渡航し「移民会社として入れねばならない義理」のため、モジアナの石山コーヒー園へたたきこまれ、「賃金奴隷の如く」働かされる移民の奨励ではなかった。それは、わが移民史十六年後にして、はじめて試みられた日本の中産階級の移住だともいえる。

当時の日本の中産階級は、国内においては決して明るい将来を期待することができなかつた。

「すでに学校の卒業生は各方面に就職難の声おこり、農村では追々小作争議や年貢の不払不納同盟などの各処に起るあり。都会は中小商工業者の経営困難、其倒産者を続出するに至り、また労働問題は随所に起り、罷業だ怠業だとの騒ぎが多くなり、やれ共産運動だ、無産運動だと各方面に社会的諸問題が勃発して世相すこぶる不安な

るものあり、人心は動揺して国歩困難なる徴現れて来た（3）」
そういう時代であるから、中産階級中でももつとも不安定な層の人々を海外に移住させることは、政治家の目からは国策としても必要だったのである。

しかし、理想としての「国家百年の大計（4）」がどのような樹立され、完成したかは別として、この植民地がブラジルの日本移民の文化生活の面で、大きな影響を及ぼしたことは後にふれるであろう。直来インテリ移住者の多いことでも、ブラジルの各植民地の筆頭であったかもしれない。

こころみに、ありあんさ移住地十年史刊行会編『創設十年』のなかの“異色ある人々”をのぞいてみると、入植者のなかにどのような人々がいたかを知ることができらるだろう。ここでは単に入植前の社会的地位・学歴・職業などについてだけあげてみる。

「北米の排日的傾向をみて日本民族の安住地をブラジルにもとめて再移住したもの」、「朝鮮総督府鉄道局技師」、「日本における航空界の先駆者、陸軍少尉」、「農大園芸科出身で植物遺伝学の研究をやっていたもの」、「陸軍主計大佐」、「宮内省づとめの高等官」、「蔵前商工出身でのち移住地の測量にたずさわったもの」、「高等師範出の二等郵便局長」、「陸軍獣医少佐」、「東大工科出の三菱造船所技師」、「川崎造船社長平生鈞三郎（はちさぶろう）門下

生で剣道四段者」、「北米カリフォルニアにおける”ブラジル北米村”建設会の先駆者」、「歌人」、「ジャーナリスト」、「満洲守備隊長、陸軍大尉」、「俳人・工学士」、「医者」、「実業家」、「郡会議員」、「移住地で天体気象観測をはじめた、もと税務官吏」、「国学者・牧師」、「外語出の通訳」、「東亜タバコ会社支店長」、「東京物理学校出身の陸軍技術審査部員」、「高浜虚子直弟子の俳人」、「台湾総督府の高官・法学士」、「小学校長」、「樺太庁警察医」などが見出されるが、くわしく調べたら、僧侶、神主までいる。

軍人、学者、実業家、官吏、芸術家、宗教家等にぎやかなインテリ的色彩は、どこの植民地にも見られなかったところである。

移住者は出稼ぎものではなかった

彼ら移住者たちは、契約労働移民ではなかった。だから入植の動機がフアゼンダから植民地建設に向かったものとまったくちがったものだというところを見逃がしてはならないだろう。

すでに筆者は、植民地建設の動機を説いたときに、彼ら移民たちが、集団的独立農へあこがれたいろいろな理由をあげておいた。

ブラジルが移民たちにとって、出稼ぎ―送金―帰国と
というような簡単なコースでは所期の目的が達せられない
ことをさとり、同時にコーヒー農場では落ち着いて長期
戦をかまえることができないことがわかると、いわゆる
「同族集団への逃避」というような方法を選んで、はじめ
て安心して長年働ける道を見出したのであった。

これに反して、移住地建設の動機を見ると、日本の近
代化―資本主義化の過程において、いやおうなしに下降
的傾向をたどらなければならなかった中産階級の人たち
が、ブラジルで新天地を開拓しようとする「意気に燃え
て」移住してきたものであった。そこには、はじめから
何万円儲けたら帰国しようというようなけちくさい考え
はなかった。移住促進の母体となった海外協会―名が変
わって移住組合は、「従来の移住態度を根本的に改変す
る」ことから出発した。そして、そのためには移住者た
ちを「確実なる計画と秩序と統制ある組織のもと」に送
らねばならなかった。だから移住者たちも、なにからな
にまで、組合の事務所にたよるような態度をとったのも
当然であって、こうした点にアリアンサ（その他チエ
テー、バストス、トレス・バーラス）移住地の特色も見
られるわけである。

先駆者の苦闘

土地購入のため奔走した永田稠が一九二四（大正十三）年十二月八日帰国の途についたあとは、輪湖、北原等が現地の開拓準備に着手した。北原はまず、同年十一月二十日部下とともに「三六キロ」の地に拠点をかまえ、小屋を建て井戸を掘り、食糧生産のために三アルケールをひらき、稲ととうもろこしを植えつけ、地区測量をする一方、きたるべき移住者たちの宿泊所の建築をいそいだ。

移住地開拓の先駆者北原地価道の本城「三六キロ」の家は、「壁なしで三カ月も放置され、日中は山蜂の猛襲で毎日何十カ所も蜂の洗礼をうけ、夜は折から雨期にはいったため、連日の豪雨で夫妻は濡（ぬ）れぶとんをかぶって家じゅうを逃げまわらねばならなかった。時に電光一閃（いつせん）、雷音はゴウゴウとして天地を覆（くつがえ）さんばかり、夫妻相擁して創設の苦悩をあじわったこと幾度であった事か。あとで、ようやく周囲の板張りをし、豪雨の洗礼だけはまぬがれるようになってほと一息ついたところ、こんどはコオロギとネズミの乱舞が、昼といわず夜といわず、足はかむ、顔に小便をひっかける、神武創設も一難去って、また一難というところ（5）」

といったぐあい、その忍苦の生活がしのばれる。

最初の入植者はレジストロからの二家族、日本からは一九二五年八月下旬に四家族があった。こうしてやがて

入植者がふえ、一九二六年の第五次入植者とともに二、二〇〇アルケールの土地分譲が終わった。

この年の四月には、鳥取移住組合との協同で第二アリアンサ移住地一、二〇〇アルケールを購入し、十二月には、これも全部売り切れとなり、こえて一九二七（昭和二）年二月には、さらに一、三〇〇アルケールが追加され、富山移住組合との協力で第三アリアンサが生まれ、これも一兩年をでないうちに、入植者でいっぱいになる盛況であった。

初期入植者の生活

初期（一九二五年ころ）の植民者がはいった当時は、共同宿泊所の近くを、夜はオンサ（豹）が彷徨するといっているので、少しの物音にもきもを冷やした。

こんな話がある。

「日曜学校の帰りの真っぴるま、鶏の悲鳴が聞こえるので、いそいで行ってみると、小馬大のオンサ（豹）が鶏をくわえて逃げていくので、それ、オンサだ！ といって家の戸締まりをしてから鉄砲を持って戸外にとびだす。家には大小の犬が三匹もいるのだが、吠えるだけで、恐ろしがつてそばに寄りつかず、なんのたしにもならない。仕方なしに近所の声援をえてカッポエイラ（荒地）に突

進んでいったところ、オンサは物凄い形相で数メートル前方に焰の如き真紅な口をあけて　いまにもいどみかかろうとしてけいけいたる眼光をこちらへ向けている。自分分は夢中で一発あびせたが、当たったのか、当たらないのか、一散に家へ逃げ帰った。

急をN君のところへ告げた。彼は日本刀をひっさげて、いさましくやってきた。みんなは鉄砲、フオイセ（錠鎌）、日本刀をわきにかかえてカッポエイラを縫っていった。犬の悲鳴が連続的に聞こえてくる。みんな悲壮な気持ちで奥へ奥へとはいっていった。二、三町はいったと思われるころ、大木の下に中馬のような怪物が鮮血にまみれて寝ている。死んでいるか生きているのか不明なので、フオイセの先でふれてみたが動かない。みんな近よって動かそうとしたが、重くて動かない。ようやく大勢でかっついできた。Iさんが皮をはいでくれた。きつそく事務所へもって行って北原氏に見せた。なにしろ腹を打ち割ったら、なかから猫が一匹、鶏が一羽丸のまま出てきた。あ那时候、日曜学校の子供でもあつたら、たしかにやられていたにちがない」（神屋信一）

そういう時代だったのである。さいわい、人間が豹に食われたという話は聞かない。野獣が多かったという証拠に、バクの話をつけ足そう。

「K君がぼくを山へ案内したときの話。K君は先にたつ

てぼくをふりかえり、ふりかえり、アンタの足跡、アンタの足跡というので、心中、なんだぼくの先を歩いておりながら、おれの足跡がわかるか、けったいなことをいうやつだなと、内心憤慨しながらついていった。

これはあとでわかったことでしたが、アンタ（バク）という動物の足跡があることをK君は親切に教えてくれたのであった」（瀬下登）

その他、タマンドア（蟻食い）をたたき殺した話、女一人で鹿をとった話などたくさんあるが、このくらいにしておく。

家は事務所のはからいで、はじめから板張りの瓦屋根、創世紀を夢みていたロマンチストには意外だったらしいが、結果としては指導者の卓見に感服したということである。病気や害虫の予防にどれだけ貢献したかわからないだろう。水にはかなり不便を感じたようだ。これもマラリア予防などのこともあって、高いところに井戸を掘ったからで、三〇メートルも掘りさげて水がでなかったという話もある。しかし、森林伐採が進むと、水はふえてくるのであって、当初涸れ井戸だったものが、のちには水深一五メートルにも達したという。

食料品はみな事務所のアルマゼン（売店）から買った。移住者たちは現金を事務所へあずけておいて品物で受けとっていたのであった。

最初は全部乾物（干鱈、干し鰯、干し肉等）で、砂糖などは絶対に白を売らないようにしていたが、病人だけは証明書があるかぎりは売った。すると仮病者がふえてあわてたということである。

いちばん困ったのは、生肉と野菜がなかったことである。だから、猿でもタツ（きゆうよ）でも、豹でも山猫でも、なんでも食べた。むろん、いまだったらのども通らない代物だった。

野菜は椰子の新芽、タンポポの葉、さつまいもやかぼちやの茎、その他食べられるというものは皆食べた。日本人は食用きのこを発見するのでも有名である。

医者がいないので、病気のとかがいちばん困った。なにもかも事務所だよりの時代なので、主任はトラックの運転手、測量師、売店の当番、農業指導のうえに産婆、医者も代行したのである。原始林では、うじ（ベルネ）が人間にはいった。あぶのようなやつが人間の体に卵を生みつけるのである。それがうじになる。小さい竹の子のような形だから、日本人はタケノコ・ビツショとよんだ（6）。これが、あるとき赤ん坊の眼窩内にはいった。そこで事務所主任のわかドクターをよぶと、たばこのやにで膏薬をこしらえてはつてくれた。二、三日すると「うじ」は死んで、押し出すことができた。にわかドクター

の名声がとみにあがったというわけである。

もう一つ原始林にはフェリーダ・ブラーバ（ライシュマニア病）といつて、通称森林梅毒なるものがあつた。これは気長になおさねばならなかつた（いまでは、いい注射液がある）。

日本人の生活になくってはならない風呂は、さいわいアリアンサ時代は材料があり、大工もいたので、りっぱな風呂桶ができた。一軒で風呂がたつと、隣近所がもらいにいく。これが植民地では、話に行く口実でもあつて、風呂屋はおおにぎわいということになる。

どこの植民地でも同じような話を聞くのであるが、最初の入植者たちは、利害を超越して助け合つた。

「まあ一口にいえば、K氏を家長とする一大家族といった感だつた」「最初の入植者に一貫していたことは人によつて意識的であつたか無意識的であつたかの相違はあつたろうが、なにかしら新しいものをつくりあげようとする熱意に燃えていた。だれでも金銭というが如きに對しては超然としていた」（瀬下登）

「ぼくらの同船（入植者）はひじょうに多かつたが、野菜など、どンドン持つてきてくれ、つぎの船できた人たちには不足を告げたようだつた」（神屋信一）

「……………荷も着かないので心配していたら、先住者（先の移住者）たちがなにからなにまで用意して迎えてくれ

たので、涙がでるほどうれしかった」（石戸義一）

「最初の一年くらいは超打算で純共産のような感じだったが、どんどん人がふえてくると、野菜が盗まれる。先住者が気の毒がって貸した炊事道具を返さない。毛布は借りっぱなしというように、ずいぶん変わっていった」（北原地価造）

「とにかくみんなが一致協力、協意協調の精神が徹底しておったことは事実だが、あれもあの環境から推意すれば、また当然であったかもしれない」（北原）

「現在でも当初に協力してきた人との精神的連鎖がどこかにあるために、これらの人々が多数織りこまれている所ほど、その区はいまなお円満にいつている」（神屋）
こうして、移住地の人口は年々ふえていったのであるが、一面では、「あまりに協会―組合―が入植者を可愛がりすぎたと同時に農業指導上一大欠陥があった（7）」りして、発展途上いろいろな問題が起こっている。

移住者が直面した現実

いかに「確実なる計画と秩序と統制ある組織のもとに入植させようとしても、いざブラジルの原始林のただ中にたたきこまれると、確実なる計画も、統制ある組織も、そうかんたんに物をいわなかった。ただ、出稼ぎ移民の

ように、自力でどうにかしなければならぬという覚悟は必要としなかったかわり、「組合」にたより、その保護と統制によって、「理想的な移住地」をきずかねばならぬ立場におかれた。組合側では、移住者たちのために、道路をつくり、仮宿泊所をもうけ、住居建築の世話をし、営農方針を与えた。いたれりつくせりである。指導者側から見れば、文句のありようはさすがになかったのである。

しかし、日本において組合本部が考えていたように、ブラジルの開拓事業は、簡単にいくものではなかった。日本での計画は、どんなに想像をたくましくしても、しよせん日本という国土の状況から生まれた論理によるものであって、雨が降れば交通がとだえ、病人が出ても医者もよべず、豊富な（ブラジル人の立場から）食物も口にあわず、労働者を使用するにも言葉が通ぜず、生水を飲めばアメーバにやられ、米作をやればマラリアにかかるというようなところでは、多少でもブラジルの生活に慣れた移民たちよりも、移住者たちは苦労が多かったのである。

はじめのうちにはなにかも事務所だより。事務所にはブラジル生活のベテラシがいて、入植者以上に苦労をかさね、後続の入植者を世話していた。

しかし、やがて集団地としての形もとのい、アリアンサ会（いわば植民地の日本人会）が生まれ、また産業組

合が成長していく過程において、植民者と移住組合とのあいだに相克が起こり、第一、第二、第三というような広大な地域における連絡組織になると、分裂・合同はどうしようもなかった。一家言をもったインテリ代表が多かったため、「船頭多くして船山にのぼる」の感なきにしてもあらずであった。ことに教育問題がからまってくると、ブラジル事情と言葉（ポルトガル語）のわからない連中が、日本的な頭で理想論をふりまわすので、伯主日従、日主伯従、原則の旗色とりどりで、永田理事のかかげる旗印「コーヒーをつくるより人をつくれ！」も難航また難航であった。しかし、さすがにインテリの多い植民地だけに、そこには涙ぐましい献身的努力もあつた。

“アリアンサ”というところ

アリアンサ移住地といえ、すぐ信濃移住組合を思い出すので、長野県人ばかりかといえ、そうではなく、ここには全国から移住者を迎えている。鳥取を主とした第二でも、富山を主とした第三でも同じことである。もし熊本移住組合のピラ・ノーバの一、六〇〇アルケールその他を加えると、全アリアンサは七、二〇〇アルケールといわれていた。ブラジルの大農場にくらべれば、三、四の農場にすぎないが、一〇アルケール（二十五町歩）単

位の小農集団としては大地域である。

産物は、そのころコーヒーが主で、つぎは米作、養蚕も一時は盛んであった。豆、とうもろこしは自家消費程度、本格的養鶏はずつとあとのことである。

教育問題や日本人会の問題（ここではアリアンサ会）はアリアンサだけの特殊な問題ではないから、一般植民地を論じるところで総括的にあつかうことにする。

衛生問題については、一九二七年中央医局に医師が招聘され、はじめは、第二、第三は分局であつて、週二回の回診があつたが、一九三一年からは第二アリアンサにも医局ができ、専任の医師も招かれ、つぎつぎと施設も完備していった。

また宗教に関しては、創設者永田稠がプロテスタントであることにもよるが、指導的地位に立つもののなかにも新教徒が多く、一九三二年には「アリアンサ・キリスト教会」の会堂が落成し、三月二十七日にはその献堂式を挙行している。入植七年目である。

しかし、一九二六年七月二日の入植者などは、入植とともに宿泊所屋外で朝夕二回の礼拝を行ない、また日曜学校をひらいたりして宗教教育にもはげんだ。ちなみに、一九二九年六月から一九三九年四月までに洗礼をうけたもの四十二名で、そのときのアリアンサ・キリスト教会の会員は百十四名であつた。

植民者の生活は、奥地における文化的植民地の生活として評判をとったほど、移民たちの旧植民地に比べるとはなやかなものであった。そこから「銀ブラ植民」などという羨望のまじった名称まで生まれたのである。

「コーヒーよりも人をつくれ」

それならインテリの多い植民地として、他からうらやまれ、ときにはあざけられもした植民地は、その後どんな動きをしたか。

多くのインテリたちは、もともと百姓ではなかったし、コーヒーの不況や地力減退などのために畜産方面にくらぐえすることもできず、かなりのものが植民地を見捨てた。国家百年の計は、移住地の繁栄となってあらわれてはいない。しかし、コーヒーを作るかわりに人をつくる、という方針は彼らの子弟のなかから多くの人材を生みだして、それが後世コロニア（日系人社会）の中心人物として活躍するにいたることは、決して徒花として終わらなかつたことを示している。三十年一日のごとくアリアンサにふみとどまって、文化的な「新しき村」の建設に努力している弓場勇の仕事のごときも、アリアンサが生んだ特殊産物であるともいえる。

注

- (1) ありあんさ移住地十年史刊行会編『創設十年』三ページの梅谷光貞の序文。
- (2) 補助金に関しては、むしろ、この移住地のみではないが、他では建設後に学校や組合がうけた。
- (3) 『創設十年』一二二ページ。
- (4) 同上、一三〇一五ページ。
- (5) 同上、四二二ページ。
- (6) ミアチスⅡようそ病。
- (7) 『創設十年』三二二ページ。

37 ブラジル拓殖組合の創設

になるチエテー移住地

移住者の不満と事務所員の苦勞

長さ一六〇メートルの鉄筋コンクリートの橋で名高いチエテー植民地は、日本政府のお声がかりの集団地として、バストスやトレス・バールラスとともにわが移民史上で特殊な地位をもつ。その第一市街地は、かつてノーボ・

オリエンテとよばれていたが、第二次大戦後は、ペレイラ・バレットス市とあらたまり、奥ノロエステではかなり繁栄した町となっている。ブラジル拓殖組合の経営にかかるもので、堅実な方針のもとに徐々に発展した日本人集団地であった。

一九二九（昭和四）年四月三十日、有限責任ブラジル拓殖組合の所有地として四万六、六九〇アルケールが登記された。ただし、その前年の八月九日、日本から来た責任者が土地売買契約を結んだ日をもって植民地建設日とし、これが入植記念日ともなっている点を見て如、いかにも各県の「海外移住組合連合会」（これが前記のブラジル拓殖組合、略してブラ拓となる）が主体となった植民地であることを物語っている。平野植民地などのように、開拓者が植民地へのりこんだ日をもって入植記念日としているのと対照的である。

だが、たとえこの植民地が、日本の移住組合連合会が主体で創設されたものとはいえ、その内容は決して移民たちの植民地とくらべて特殊な性格をもったものとはいえない。『チエテー十年史』にある連合会の土地選定条件を見てもわかるように、コーヒーを主作として標高四五〇メートル以上であるべきこと、一地区（ロッテ）を一〇アルケールとして分譲するために適当なところを一万アルケール以上えらぶとなっているのがそれである。

ただ多くの植民者を予定していたために土地を広くしたというにすぎない。また、ブラ拓によって計画され、徐々に実現されていった諸施設は、それまでの移民たちの経験に基づいてできるだけのことをしたものである。ここでは、ブラジルにおける日本移民の生活の歴史という観点から、植民地初期の機構や計画の詳細にわたって記述することをさけるが、この開拓史を見ると、古い移民たちがひらいた植民地と、いかにそのいき方を異にしているかがわかる。もし、おおげさな表現がゆるされるとしたら、入植初年から二年目くらいまでの間は、事務所（経営者側）と植民者たちとの闘争の歴史のようにも見える。どこの植民地にも事務所と称するものはある。しかし、植民者たちは、ここへいろいろ依頼にはでかけるが、当然自分たちの世話をするものだという予定のもとに文句をいいにくことはなかった。ここでは、植民者たちは、自分たちは移住組合のメンバーの一人である、世話人たちが自分たちの便宜のために働くのは当然である、と考えていたように見える。なにもかも事務所だより、すべての不都合は事務所の怠慢だと見る傾向が初期には強かったようである。こうしたところにこの植民地―移住地と称した―の特殊性があったといえるかもしれない。むしろ入植三年目ころからは、こうした傾向はうすらぐようであるが、かつてファゼンダにはいった初期移民た

ちの苦情や抗議が思いだされて、契約労働移民も植民も、はじめは皆同じ傾向をとったことがわかる。

また、直来植民とブラジル国内からの植民が、いつも並行して入植したことも、こうした移住地の特色（バストスもそうである。ただ両者の違いは、バストスは直来者の倍以上がブラジル在住移民、チエテーはその逆に直来者のほうがほぼ倍に近かった）といえるだろう。直来植民者たちのみによっていとなまれる生活のうえに、ブラジルに適した生活様式をもちこむことになる。

さて、最初の入植から、植民者たちの生活を叙述することにしよう。

日本からは、一九二八（昭和三）年九月から翌年の二月までに四家族の植民を送り届けているが、当時まだ入植の準備がととのっていないなかったので、ひとまずアリアンサ植民地のほうで旅装をとき、待機することになったが、あるものはここで一作とるまで働いた。

日本から直来植民がはいったのは一九二九（昭和四）年六月一日であった。そしてこの年には、ブラジル国内からの入植者一家族を加えて、合計三十四家族を迎えたのであった。実はこの年、四百家族が入植するというので、現地にあるものはその下準備に奔走していたもので、三十四家族の入植はひどい番くるわせとなったのである。現地の事情も知らず、はじめから多数を入植させること

の無謀を日本の関係者に忠告したのであるが、それが容れられず、てんてこまいをしていたのに、いよいよ準備ができてみると、たった三十四家族の入植者であった。

この年は三十年来の豪雨があり、チエテー河の渡舟は危険にさらされて中絶することが多く、そのうえ、まったくの新開地ときているので、労働者は遠方から招かなければならず、マラリア地帯であるという評判から、仕事をサボるもの、移動していくものが相次ぎ、労力の不足に悩みながら、道路の開設、山伐り、宿泊所建造にはげんでいたのであった。

日本側からの説明によると、植民者が少なかったのは、「開拓資金調達難、渡航資格制限の過酷、募集宣伝の不徹底」等。しかも現地からの通信、その他によつてマラリアのある不健康地としての噂も伝わっていたからでもあろうと「十年史」は書いている。

こちらでは日本側の要求どおり、この年に四百家族の入植者があつても困らないように、木造トタン屋根の宿泊所もつくり、道路をひらき、山伐りまでして待っていたのである。

「入植者を迎うるに万端の準備を進めた苦心の程は当時の実状から考えてみて、全く不足がましい非難を加える限りのものではなく、却つて満腔の敬意と感謝とを当時開拓の衝に当つた人々に捧ぐべきであらう」と「十年史」

が記しているとおりチエテー植民地の建設にいちばん骨を折ったのは、最初にこの開拓の仕事を受けもった事務所
の役員および従業員たちであった。チエテー初期の経営主任は、アリアンサの理事をしていた輪湖俊午郎以下、アリアンサからおもむいた青年十数名と測量技師の中島一男であった。

しかも、彼らが雨期もかまわず伐採した山は、その年にたちまち木の芽がふきだして再生林となり、入植者の不平の種となったのであった。入植者の側に立ってみれば、再度の伐採で費用はかさみ、生活が苦しくなるばかりでなく、時間の浪費、生産の停滞、だまっていられる性質のものではなかつたろう。

この年（一九二九年）の七月一日に到着した直来入植者の手記がある。入植六日目のものだという。

「フオイセ（柄の長い鉈鎌）をかつぎ、一同山へ行く。目下伐っている三アルケールを全部ロッサ（ここでは新芽や枝を切ること）することは容易にあらず、此の山は一、二月頃に伐りたる為め此の不必要の労力を要してロッサの必要あり。若し普通の六、七月頃の山伐り時季に為せばロッサの必要なく焼き得るものなり。事務所に不当をなじれば日本の本部より一度に四百家族来るとの通知あり、ために急ぎ準備したるが為めなりと。故にこの失態は無経験のためにあらず、日本の本部の命令によ

り止むをえずなしたるものにて、責任は彼にありと言う。このロツサを土人（土着人の意ならん）に為さしむれば、一アルケール三〇〇ミルを要し、移住者自身なす時は一アルケールを為すに二十五日乃至三十日を要す。この山伐り時季を失したるために要する無駄の労力と危険と費用は実に莫大にしてこれを組合員に負担せしむるは絶対に不可なりと信ず。何れかの方法により弁償せしむるの要あり、万一本年中にロツサし終らず残したる時、来年度為す時は新芽伸び焼け過ぎコーヒー植えるも土の焼け過ぎある為め發育悪く、のみならず今年一アルケール耕作なすと三アルケールなすと、四年後に実に大なる差の出来るは当然にして、その間の間作物の収入にても大なる差違なり。山はロツサ後一週間位かわかし然る上焼くものにして、焼き跡の整理に一アルケールに付き十日乃至一ヶ月を要し、今年此の状態にては三アルケール全部の植付を為すことは非常に困難ならむ（2）」

結局この問題はのちにブラ拓が責任をとって補償金を支払って解決をみたものである。

「十年史」の筆者が、当時の「草分け」の談話を記しているが、日本からの直接入植民の苦心は、右にあげたロツサの問題ばかりでなく、ブラジルの事情が皆目わからないので、使用人のいいなりに給料を支払って、手持ちの資金をどんどん使いはたし、住居造りにもはじめから金

をかけ、井戸の水に不便を感じるなど苦労は多かった。

「私たちは四年（一九一九）の六月一日に入植して収容所におちつき、それからカツポエイラ（再生林）を叩いて、先ず家造りにかかったが、慣れないというものは致し方ないもので、わずか半アルケール位のカツポエイラをたくのに一カ月もかかり、小屋のような家をたてて、いよいよ自分の地区（ロッテ）へ移ったのが八月十七日ころだった。その当時製材所はまだ出来ていなかったのも、板類はみな手挽のものを一ダース四八ミルも出して買う始末、瓦はバーラ・ボニータ産が五五〇ミル（一千枚）だった。割合に安かったのは亜鉛引鉄板（トタン板）で、だからこれを利用した人も沢山ある筈だ。こんな調子だから、他の事は推して知るべしで、ゼニのかかること予想のほか、今の人たちには想像もつくまい。それでもこれがブラジルの百姓だという観念からシヤニムニよそ目もふらずに突進また突進で、カツポエイラを叩いてコーヒ―植付に努力したものだ。その当時伯人力マラーダをやとうとロッサが請負いでアルケール三〇〇ミル、跡片付けにもう三〇〇ミルくれという。山伐りが同じく五五〇ミル。みな知らんものだから言うなりどおり、唯々諾々として払っていたもので、今から考えるとバカらしくて話にならん位だ。一番苦痛だったことは井戸水に不便だったことと、医者を一々アリアンサから呼ばねはな

らなかつたことだろう。物価の高かつたことはあの当時としては無理もないこととして一応はあきらめもつくが、この二つの不便と苦痛は一寸わすれられない。病気は主に子供へくるアメーバ赤痢だつたようだ。一番初めにやられたのが、たしか和歌山県人H君の三歳になる男の子だつた。これは、当時墓地がなかつたから、アリアンサの墓地まで運んで埋めた。たしか七月の末ころだつたと思う。その他、急性結膜炎が多かつた。どの家へ行つてみても、眼をまっ赤に腫れただらした大人・子供の一人や二人居らない家はなかつた。今から考えると矢張り草分け植民として人の想像も及ばぬ苦痛をなめ、笑えぬような失敗もし、悲喜交々至るといった思い出が、すべて愉快と言つては少し変だが、まあ誇らかな感をもつて言い得ると思う」

ここには第一の手記に見るような、不合理なものに対する怒りは感じられないが、新入者の苦勞のほどはうかがえる。しかし、チエテーの川に近く、マラリアの発生も充分可能性があつたにもかかわらず、これらの苦勞が平野植民地のような悲劇的なものにならなかつたところは、すでに多くの経験を積んだのちの植民事業であつたことを示している。水の不便は、マラリア予防のために低地に住居をかまえることをゆるさなかつたことにもよるが、初期には川べりの土地は売りだしていなかつた。

だから、苦労は苦労でも人命を失うにいたらなかったことは、経営者の成功といえる。「忘れられない苦労の一つ」も、アリアンサには日本人医者がいたのであって、ただ距離が少し遠かったというだけであつた。

初期入植者の生活

彼ら初期入植者が、どんな家に住み、なにを食べていたかのこまかなことはわからないが、すでに瓦もあり、トタン板もあり、手挽きではあつたが板もあつた。そして事務所にはトラックもそなえられていた時代である。だから、普通の移民たちが、それまで独自でいとなんだ植民地の第二期の住居にあたるものを、入植とほとんど同時につくつたことになる。

ただし食物にいたっては、直来の植民者たちは、ブラジル式のをほとんど食べなかつた。コーヒーなしで朝から米の飯をかつこんで山へ行く生活であつた。売店の物価表を見ると、白米、砂糖、フェイジョン(豆)、ミールヨ(とうもろこし)、小麦粉、豚脂等はでているが、コーヒー、干鱈、干し肉等はでていない。測量隊のブラジル人夫が等量に要求したという米、豆、砂糖、干し肉中の干し肉がでていないのは、たとえば食べたものがあつたとしても、その量はごく少なかったものに違いない。翌

一九三〇年になって、干鱈がキロ三ミル・レイスとなつてでているし、マカロンがキロ一ミル八〇〇であらわれている。干鱈は焼いて食べるか汁やその他日本式の料理に使ったものにちががなく、マカロンは日本式うどんの材料であつたらう。物価表のなかに、松やにや苛性ソーダがはいっているのは、すでに洗濯石けんの自家製造がはじまっている証拠になるうか。そうするととうもろこしの収穫とともに豚も飼いはじめていたことになる。こうした傾向は、アリアンサ植民地との交渉があつて、第一回入植者が見学に行っていることもあるし、主任輪湖の指導にもよつたらう。食生活その他に、チエテー植民地は割合めぐまれていたにちがいない。

第一回入植者をむかえた一九二九年六月一日から一か月半をすぎたころ、事務所がその事業行程をブラ拓本部へ報告したもののなかに、食料品にふれているところがあるが、

「末ダブラジル生活ニ不馴レナル為メ（食料品）使用法ヲ知ラズ衛生保健上ニ害アル場合少ナカラザルヲ以テ簡単ナル料理法ヲ筆記シタルモノヲ渡シテ読マシメ居レリ」とある。いたれりつくせりといふべきである。

ただ、チエテー河に近かつたから、ときには川魚くらい食べられたことと思う。少し生活に余裕ができると、マラリアをおかしてまで釣にこる人間もでてくるのであ

るが、初期のものには、そんな暇はなかったにちがいない。

ところで植民者は、それぞれ開拓資金なるものをもつて入植した。これが得られないために、日本から多くの植民が渡航できなかつたことについては、すでに記した。

それなら、いくらくらい持ってきたのか。「十年史」一三ページによると、合計三十五家族（一家族は直来入植者ではなかつたので、ここにはいっていない）分二四一コント三八四ミルであつて、平均一家族あたり六コント八九六ミル余であつた。内訳を見ると、三三コント余のものが一家族、二二コント余が一家族、九コント余が四家族、七コント余が三家族、六コント余が七家族、五コント余が八家族、四コント余が十家族、そして四コント以下のものが一家族あつた。そして、開拓第一年度の平均出費は左表のとおり、計六コント三二五ミルであるから、結局、六コント以下の開拓資金所持者二十六家族は多少にかかわらず窮迫をみたわけである。

開拓第一年度平均出費額

山伐費 三アルケール（アルケール五二〇ミルとして）

一、五六〇ミル

建築材料費

一、〇二五

大工手間

三〇〇

井戸掘り手間

八〇〇

アルマゼン（売店）支払い

一、五三〇

其他支払い

一、一一〇

計

六、三二五

しかし、前にも記してあるように、山伐費三アルケールの費用は、カツポエイラになっていたため、二重、三重の費用がかかるので、必ずしもこの表どおりにはいかなかったろう。まだ土地代の支払いがないだけ楽だったといえるかもしれない。

とにかく、こうした状態のもとに入植初年も十二月になると、おくれればせながら、陸稲、とうもろこし、コーヒー等の植えつけも終わるのである。しかし、植えつけ時期の最良とされている九、十月を過ぎていたので、コーヒーは問題外として、あまり多くの収穫はのぞめなかった。米、豆等はすでに播種機（プランタデイラ）が

あつて、一個三〇ミルで売店で購入できた時代であつたから、むかし（十年前）に比べてかなり仕事もはかどるようになっていた。

その他衛生状態については、十二月にはいつてマラリア患者が二人でたが、死亡者はなかつた。

開拓二年目（一九三〇）は、直来入植者二十三家族、ブラジル内から一家族、合計二十四家族にすぎず、相変わらず四百家族のためにひらいた森林は、大部分がカツポエイラとなつて残っていた。それでもこの年の八月九日には、最初の移住地建設記念祭が行なわれた。

当日の状況は、

「記念式は（このときすでにできていた）小学校の運動場において、午前八時参集、まず、開会の辞につき、君が代斉唱、祖国遥拝後、ブラジル国家を斉唱し終つて、来賓の祝辞あり、チエテー会（植民者家長会）代表の挨拶ののち、万歳三唱して式を閉じ、午前一〇時前から直ちに余興に移っている。当日は遠くアラサツーバ方面からのブラジル官憲、有力者やアリアンサ方面からも来賓参列、入植以来、最初の記念日の事として、移住者も非常な意気ごみで、日頃のウツプンを一度にふきとばした観があつた」と「十年史」は記している。

記念祭二日間の余興プログラムを見ると、

初日は午前十時から午後十二時まで

一、小学児童遊戯

二、仮装行列

三、隠し芸

四、娘手踊

五、青年団劇

六、活動写真

二日目は午前九時から午後十一時半まで

一、一般競技

二、隠し芸

三、娘手踊・舞踊

四、青年団喜劇

五、活動写真

などで、費用は総額二コントほど、すべて寄付金によつて支弁された、という。

入植者は依然として少なく……

この年の十月七日にはジェツトーリオ・バルガスの三〇年革命があつて、植民者を不安におとしいれたが、十月二十四日には平穩に歸した。一方、ブラ拓事務所による

医局・薬局の設置も実現し、製材所・瓦工場もでき、移住者の自治組織もととのつて、植民地としての発展も順調に進みだす。

だが入植者は依然として少なかった。

一九三一年度は直来入植者はわずかに三家族。そしてブラジル国内からの入植者が十三家族であった。

さらに一九三二年になると、

「満洲事変に引続く上海事変などの影響を受け、日本から直来の移住者を多数迎え得る見込みも無いところから、在伯邦人に呼びかけて大いに入植を勧誘しようという事になり、七月頃から人を派して各地に宣伝を開始したものである（3）」

こうしてブラ拓が有利な条件でブラジル国内で入植者を募集したために、この年は国内から六十三家族の入植者があつた。そして直来移住者は七家族にすぎなかった。有利な条件とは一〇アルケールを七コントとし、入植に際して土地代前納額をそれまでの二コントから一コント二〇〇にひきさげ、そのうえ、生活資金として一コント五〇〇ミルを入植と同時に貸してくれるといふのであつたから、わずかなたくわえがあればだれでも入植できることになつていたのであつた。

さらに、一九三二（昭和七）年になると、「ブラ拓本部では十年計画建直し案」が実現して、いっそう国内入植

者の便宜がはかられた。その「案」の決定によると、

一、土地の肥瘦にしたがい、一、二、三等級として各各価格を定め、従来の如く一地区（ロット）一率の価格を廃したこと

二、土地代は一旦無利子貸付の形となり、これを十カ年に或る一定の割合（4）をもつて年賦償還せしめる事とし、その延滞については利子を徹すること

三、これにともなう生産資金貸付は伯貨貸付として二カ年据置三カ年賦払、償還延滞利子、貸付利子を徴すること、

四、土地代前払金（在伯邦人入植者に適用されたものは廃止

五、入植金（在伯邦人に就き）を徴収すること

こうして、一九三二年度は直来二十家族、国内からの入植者百二十八家族を得たのである。

やがて、一九三五（昭和十）年六月二十六日には、ノーボ・オリエンテ橋もできあがり、その後は市街地もどんどん発展するのであるが、ここでは入植当時の状況を主とする関係上、このあたりでチエター移住地の年代記的記述をうちきり、植民者の人口・生産面をのぞいてみることにする。

まず、人口のうえから見ると、入植三年目、一九三二

(昭和七) 年末までには、百四十三地区(ロット)一、五一〇アルケールが分譲され、入植者は百三十家族五百二十人に達した。これに事務所職員、従業員、契約者、コロノ、市街地居住者その他合計九十一家族三百四十三人をあわせると、二百二十一家族八百六十三人の人口を擁する植民地となったのである。

一九三一〜三二農年度の生産は米が首位で、もみ八千二百五十袋を収穫している。そのつぎがとうもろこし、豆等であるが、すでに綿が二十家族によって八アルケール余が試作され、五七八アローバを収穫している。

市街地(ノーボ・オリエンテ、

現ペレイラ・バレットス)の発展

これは一九三一年末に売りだして、一年後(一九三二年十二月末現在)では戸数六十二戸、人口二百九を数え、雑貨店三、菓子店四、理髪・洋服店各三、運搬業四、ホテル業・パン屋各二、肉屋・豆腐製造各一、鍛冶屋・飲食店・家具製造・西洋洗濯・雑穀仲買・薬局・ペンキ屋各一、電気業者一、歯科医一で、必要なものはほとんどとのつたが、農家の生産力がまだ微力であったために、はなばなしい動きは見られなかった。

だが、モーター発電による電灯がともったことは画期

的なことで、直流五キロワットで二十七戸に対して四十二灯の電灯を供給することができた。ただしこれは一九三三年一月二十三日からのことである。

こうして一応市街地がととのうと、ブラジル人労働者もどんどんはいってくる。かくて一九三四年五月ころには市街地の片隅には遊興所　―　バイロ　―　もあらわれ、またこの年の十二月にはカトリック教会も建立されて、ブラジルの都市らしい姿となった。

一九二八年から多くの人間がはいりだし、カマラーダたちが働いていたにもかかわらず、六年間も彼らの遊興所が近くになかったということは、ついにカマラーダの婦女殺害事件をひきおこすことになり、そのため犯人を追撃した青年の一人も命を失った。この事件では日本婦人一人、同青年一人、それに犯人のカマラーダ一人、計三名の生命を失ったのであった。

漬物のおい

チエテ―移住地ははじめ、日本からの直来植民を主として受け入れるはずであったが、これがうまくいかず、そのために国内からの植民者を多く迎えたことは、その後、直来の入植者がふえるようになってからも、利点が大きかった。食生活において事務所が料理法まで教えな

ければならなかったなどは、保健上の必要によることであつたが、旧移民がどんどんはいり、ブラジル式生活が普及しだしたことは、植民地初期の生活を維持するうえに大きな力となつた。また、一時米作を主とし、また植民地内に精米所もでき、初入植から三年目には市街地もできて、味噌、醤油が自由に手にはいり、そのうえ、菓子屋が三軒もでき、飲食店（バー）まであらわれたことは、植民地としては、驚くほど早く便利になつたものといえる。二年目からは小学校もでき、教育の面でもそれほど多くの犠牲を払わずにすむようになった。

こうなつてくると、多少にかかわらず直来植民のいる植民地の例として、今度は、多くの点で日本的な生活様式に逆もどりしたことも想像される。

ただし、市街地も植民地も、その建築様式にそれほど特殊なものが見られないのは、国内からの植民が多かつたせいである。むしろ窓の戸を横にあけたてする「引窓」様式、戸袋、板の間、玄関などが農家にはかなり見られた。しかし、これらも直来者たちがやってみただけで、レジストロのような一般化はなかつた。「十年史」の写真によつてその住宅を見ても、玄関はむしろブラジル式ベランダであり、新築のものほどブラジルのである。

家の近くにバナナ、パイナップル、マモン、マンガの木を植え、記念写真にはバナナの葉かげを選び、ときに

は大きなバナナの房を横において写している。ブラジルで生活しているものの誇りを示しているようだ。家の裏のマンゲイロンなどはフアゼンダのコロニアにあったものそっくりで、モイロン（割木の杭）をめぐらし、シケイロは屋根に椰子の割木をならべている。

「十年史」には俳句がたくさん載っているが、筆者がいかにもチエテーらしいとみたのは、ブラジルのというよりも、きわめて日本的なものであった。たとえば、ちゃんちゃんこ着て春眠の老母かな 吉川耕花 若いものがどんなにブラジルのなっても、老母の生活は少しも変わらない。アリアンサかチエテーでなければ見られないような日本農村の姿である。

干してある漬物石や冬の蠅 吉川寿楼

カルネ・セツカ（干し肉）やにんにくのはいった油物を食べている人たちの生活では、想像もつかない感覚である。（5）

注

- (1) 入植記念日はのちに変更されたと聞く。
- (2) 『チエテー十年史』一二ページ。
- (3) 同上、三一ページ。
- (4) 『日本人発展史』下巻、六四ページ参照。

(5) 本編は主に『チエテー十年史』に拠って書いたものである。(付)ペレイラ・パレットス郡の一九五八年における日系人日は三千五百四十六人で、そのうち一世は千百九十三人。

市街地の日系人は千四百二十四人、農村二千百二十二人であった。『ブラジルの日本移民』資料篇、一一ページ。

38 多くの障害をのりこえて

建設したバストス移住地

バストス移住地

ブラジル拓殖組合の創設・経営によって成ったバストス移住地は、パウリスタ延長線イアクリー(Iacri)駅から一〇キロ、サンパウロ市から車道で約五八〇キロの地点にある。かつてはソロカバナ線に属し、はじめはクアター駅から五七キロの山道を通ってはいったのが、やがてランシヤリア駅から移住地への道路が、ブラジル拓殖組合の手で入植一か年後に開設され、駅から移住地の入口まで二八キロ、中央部まで三八キロに距離が短縮された。

パウリスタ延長線イアクリー駅からはいるようになった

たのは一九四九年末からであった。

バストス移住地は、一九二八（昭和三）年六月十八日、海外移住組合連合会―十二組合の連合―によって土地が購入され、この日が移住地創設記念日と定められた。ところである。一九二八年四月から連合会の現地代行機関としてのブラジル拓殖組合（略称ブラ拓）によって経営されることになり、同年六月十八日に、日本からの第一回入植者を迎えたのであった。

バストス移住地の総面積は、最初一万二、〇〇〇アルケールであったが、のち隣接地九三二アルケールが追加購入され一万二、九三二アルケールとなった。最初は九、〇〇〇アルケールの高燥地が九〇〇地区（一地区一〇アルケール）を三年間に売りだす計画のもとに出発した。移住地バストスの名は地主六名中の一人エンリツケ・バストスの名からとったものである。

移住地の経営方針

バストス移住地は、同一経営者ブラ拓の植民地として同年に開設されたチエテーと同じように、はじめは日本からの直来者を主として入植させるつもりであったが、現地の事情に基づき、在伯移民をも入植させるように方針があらためられたのであった。最初の移住地事務所主

任には、ノロエステ線平野植民地の開拓者の一人、畑中仙次郎（はたなか・せんじろう）が赴任した。

バストス移住地は、チエテー移住地と同じように、すべてが計画的に、万端の設備をととのえながら経営が進められた。

たとえば、「バストス移住地計画施設経営案」中の「へ」の項をみると――、

「移住地の管理並に産業、教育、衛生のため、昭和五年乃至六年度に、左記の諸施設を実施し、必要なる職員を置き、かつ必要なる資金を供給してこれを運営すること。事務所、移住者収容所、倉庫、商店、自動車庫、精米所、製材所、レンガ工場、医局、隔離病院、小学校、職員住宅（1）」とある。

そして、これを後日自治的移住地のものとするために、「を」の項には――

「本移住地は最終入植者がその土地代金完納の時期即ち昭和十三年までブラ拓（即ち連合会）これを経営管理し、その後は入植者の自治管理にうつし、（略）一切の施設は入植者と合議の上、無償にて本移住地の自治団体に譲渡すること（2）」と規定されたのであった。

開拓の第一歩

開拓者として原始林にはじめて斧をうちこんだのは、植民者ではなく、カマラーダを使って道路開設にたずさわったり、中央予定地四〇アルケールを伐採し、焼き払い、従業員合宿所および住宅兼事務所用の建物四棟を建設した人たちであった。この仮事務所建設に前後して、移住地の地区割の仕事に測量師たちがはいり、つづいて事務所の職員たちが来たのである。そのとき、家族もちのものも二、三世帯あった。

百人に近いカマラーダたちは、それぞれ仕事場に近いく所ろに仮小屋を建てて寝起きしながら働いた。道路開設、森林伐採、その他測量にたずさわった日本人は、みな開拓のベテランであって、キャンプ生活をしながらカマラーダたちを指揮して働いた。当時は、カマラーダも指揮者もみなピストルとフアツカ（刀）で武装していた。カマラーダたちの武装を解くために奔走したある日本人の親方は、そのためにカマラーダたちのうらみをかい、闇うちをくらって落命した事件もあった。彼は豪胆な青年で、ピストルの名人でもあったが、闇うちにはほどこす手がなかった。しかし、まもなく警察隊の手で武装は

解除されたのであった。

開拓に着手した一九二八年の暮れから翌年三月上旬にかけて、はげしい雨期を迎えたことはチエターの場合と同じである。ペイシエ川 (Rio do Peixe) が氾濫して先発隊は外部との交通を断たれ、物資の供給も自由にならず仕事の進捗を阻害されたことは一通りでなかつた。

しかし、五月ころになると大体の準備もとのい、日本から視察に来た梅谷光貞(うめたに・みつさだ)連合会専務理事を迎え、入植者の収容所建設に拍車をかけた。収容所はトタンぶき四〇×八メートルの木造平屋二棟および九二×八メートルのもの一棟で、これを一家族に対し四×八メートルの間を区画し、さらにこれを寝室と炊事場に仕切り、新来者が一、二か月の仮住まいには不自由を感じない程度のもとした。そのときすでに医局も仮設され、医者も来ていたのである。

六月には日本からの直来植民、および前年いち早く連合会本部との連絡もまたずに渡伯していた、愛媛県組合員で契約移民としてコーヒー農場に働いていた人たちも在伯入植者として迎えることができた。

この年は三回の直来者(六十八家族)およびブラジル在住の入植者(十四家族)をあわせて、八十二家族であつ

た。

（「発展史」下巻、七一ページには総計九十六人とあり、この数は当年の退植者を含まず、とある。『バストス二十五年史』一八ページには九十七人とでている）

植民地の動き

入植者は、まず収容所の仮住まいから、抽選で与えられた自分の地区へ通い、すでに伐採され焼き払われたところへ住宅をつくり、井戸を掘るのであるが、これがなかなか大仕事であった。ブラジルの生活を経験してきたものには、それが当然のことと思われたが、日本からの直来者には、手も足もでないふうであった。しかも大半は純農の人たちではなかった。夢のような理想郷を想像して来た彼らは、「荒漠たる山野の大自然に圧せられ、一時は茫然自失」したのであった。

しかも、県の代表責任者と称して、ブラ拓の総括的管理権に不服をとなえる「口達者な連中」があらわれて、抽選的な地区割当てに不服をとなえだした。なぜ、このようなことが起こったかというと、移住組合連合会の現地代行機関としてブラ拓が総括的な管理権をゆだねられていることが県の海外移住組合に徹底しない前に乗船して

来た県代表なるものが、当然発言権のあるものとしてブラ拓の経営方針に口をだしたからであつた。むろんそこには別な理由もあつた。土地の良し要しがひどかつたので、どう考えても抽選では腹の虫がおさまらなかつたのである。

これら口達者な連中の言に動かされて、第三回入植者の十四家族などは、入植一か月余をすぎても仕事に着手しようとしなかつた。彼らもまた移住地内の地区を自由選択で得ようと計つたのであつた。だが、こうした計画的な大移住地においては、自由選択が不可能であることを知ると、まず六家族が移住地を退去し、つづいてまた三家族が購入地区を放棄して他の地方へ移動するようになり、その一般への影響は「移住地開発への意欲を半減させるものがあつた」と「二十五年史」は記している。かくて、農家の一年を左右する蒔きつけどきの十一月に入つても、まだ收容所にがんばって抗争をつづけているものもいたのである。

初年度の暮れのせまつた十二月十四日、梅谷専務が再度渡伯、移住地に現われると、彼らは専務を收容所内にさそいこみ、「俺たちをだまして貴様はこんなところへ連れこみやがったんだな」とどなりたてるもの、喧嘩問答のすえは「梅谷を殺してしまえ」と掴みかかるものもある有様。専務はほうほうの態で逃げ帰つた（3）といわ

れている。

こうして、ブラ拓の事業に服従しかねて抗争をつづけるものがあつたので、ブラ拓では、福岡、和歌山の組合から入植した二家族を移住地から追放することにした。

ところが、ふるっているのは、彼らは「祝マンダ・エンボーラ（追放）」と大書したのぼりをおしたてて街をねり歩き、えのき旅館に陣どると、見送り人にビールをふるまうて氣勢をあげ、労働争議の弁士よろしく、腕まくりで大道演説をぶつたといわれる（4）かくて入植一年度は暮れるのであるが、おそらく開拓史上、バストス移住地のこの現象ほど特異なものはないだろう。

ところで、第一年度の入植計画は直来二百家族の予定であつたのが、たつた六十八家族、これにブラジル在住の入植者をあわせても九十六（あるいは九十七）家族にすぎなかつたため、伐つて焼き払つた山で入植者を見ず、雑草のおいしげるまま再生林（カツポエイラ）と化した面積が一二二アルケールもできてしまった。だが、各地区に残つた第一年度の入植者七十四家族は平均してもみ四十六俵、フェイジョン豆四俵をとりいれ、半数量を売却してもなお食料には事欠かぬ収穫ぶりであつた。そのほか、コーヒーも全体で二十六万七千八十本、一戸平均にすれば三千六百余本を植えつけている。これは、同年に開拓されたチエテー移住地よりも好成績だといわれて

いる。

初期移民者の生活

ヤマきりがすんだところへ入植してきた第一年目の入植者たちのあるものは、ただちに住宅建設にとりかかり、七、八月ころにはすでに完成して引っこしにとりかかるものがあった。レンガ工場はすでにできていたが、製造はまにあわず、これらは移住地本部の諸施設にやっとまにあう程度のものであったし、移住者たちには金目のものでもあったので、多くは椰子の木を割って囲いをつくり、あるものは壁を塗った。屋根は木つ端（タブイーニヤ）、サツペー、あるいはトタンでふいた。椰子のたくさんある区域のものは椰子の木を二つに割り芯の部分をくりとって、これを瓦のようにたがいちがいにならべて屋根にした。地面（シヨン）はおおかた土間のままだった。日本から直来のもものは板敷の床をあげて、これを寝台にするものもあったが、当時はまだ製材所ができていなかったなので、レトニア人の植民地から購入した（製材所は三〇年五月以後作業を開始したので、それからは板が自由に入手できるようになる）。

ブラジル式家屋は、三十一家族の旧移民がはいったことと、指導者がブラジル生活のベテランであったことに

よつて、いろいろくふうする道がひらけたのであつた。

食物などは、直来者ははじめはほとんど日本式であつた。それに自分の土地にはいったのであるから、菜や大根の種子はすぐおろした。古い蟻塚に生えるきのこはたいへんおいしかったというものがいる。朽木にはえる木くらげなども食用にした。旧移民にならつてピツコンの若草やセラリアなどの野草も野菜のかわりにした。この地方にはトレス・バーラスのようなおいしいパルミット（椰子の芯）はなかつた。

満一年の保健状況

三〇年六月末までに植民者は百二十一家族、六百五十三人を数えたが、この一年間の罹病者は、医局診療の延人員として、消化器疾患百八十六人、眼科百七十三人、皮膚科百四十九人、流行性感冒・湿疹を含めた伝染性疾患（内科）八十一人、外科六十三人で、その他特殊な病氣としてアミーバ赤痢一人、ほかに風土病はなかつた。消化器疾患、ことに胃腸カタルの多かつた原因は、食物の変わったことによるし、眼病で急性結膜炎の意外に多いのは、土質が砂であつて、ほこりが多いことによると見られた。マラリアがなかつたことはさいわいであつた。

市街地および小学校建設

一九三〇年（入植二年目）には精米所、医局、小学校などが建ち、市街地もできて、理髪店、洋服店、菓子屋、野菜屋、豆腐屋、呉服屋など、ブラ拓事務所経営の売店以外の個人の進出があつて、開拓初期の移住地に活気をもたらした。こうした点は、いかにも駅から遠い大移住地の特長をあらわしている。

三〇年二月十一日の紀元節には、植民者の自治機関であるバストス会も発足する（これは三三年にバストス自治会となつていつそう自治的色彩を発揮するようになる）。とにかく、日本人がもつとも深い関心をよせた小学校と日本人会が、入植後一年後にできあがつたことは、植民地がブラ拓の事業であることを思わせる。この年の六月、設立された三小学校の児童数は、第一小学校四十三名、第二小学校二十六名、第三小学校二十四名で、計九十三名、教師四名であつた。むろん、まだ日本語だけの学校であつた（5）。

十一年間の入植者家族数

いま一九二九（昭和四）年から十一年間のバストス移
住地入植状況をみると――、

	直来者数	ブラジル在住人数
一九二九（昭和四）年	七五（六四）	二一（一五）
一九三〇（五）年	三八（二三）	三九（六五）
一九三一（六）年	六（七）	一六九（二五八）
一九三二（七）年	二三（三二）	二四八（二八八）
一九三三（八）年	一八〇	一五
一九三四（九）年	四	二五
一九三五（十）年	六	二八
一九三六（十一）年	六	一五〇
一九三七（十二）年	一	二
一九三八（十三）年	三	二一
一九三九（十四）年	五	三二
計	三四六	七五四

（この表に示した数字は、毎年の入植者家族数であつて、当該年度における退植者は含まれていない（「発展史」下巻、七二ページ）。カッコ内の数字は『バストス二十五年度史』より）

右の年次入植者表に見られるとおり、初年度に直来者二百家族を入れる日本側の計画からみれば、物の数ではなかつた。三年目からは在伯者が多く入植している。こ

これは初期直来植民の「わがまま」にてこずった現地主任以下従業員の懇望により、独立自活の気風に慣れている在伯日本人を迎えることにチエテーより一步先んじて全力をかたむけたことによるであろう。

しかし直来移住者を迎えるにせよ、ブラジル在住者を迎えるにせよ、時期が悪かった。日本からの直来者の少なかった理由として、現地の事情が日本側によく通じていなかったこと、入植資金を得ることに困難だったことなどがあげられているが、一九二九（昭和四）年からの世界恐慌に次ぐ三一年の満洲事変などで、資金が得られなかったという事情もあろうし、ブラジル側でも、三〇年のジェツトーリオ革命、三二年の護憲革命、さらにその年の十一月のコーヒー植付禁止令などもあって、ブラジル在住者の入植にいろいろ影響しているにらがない。

失敗した土地選定法

チエテーの場合でもそうであるが、バストスもまた、コーヒーを主作に選び、一〇アルケールを単位とする小農集団地を形成するという点で、従采の在伯同胞が行なった植民地建設方針と別に変わったところがなかった。ただ、直来植民を主として導入しようとしたために、それらの人たちの便宜をはかって、道路をひらき、収容所

を建て、その後、産業施設をととのえ、組合創立に助力をおしまなかつたというにすぎない。

ところがこの土地は、砂質土壌（アレイア・ベルメリヤ）で一般に肥沃ではなかつた。そして、サツペザール（茅原）や、植民者が鋼鉄椰子と名づけた堅い椰子の木が多いやせ地もかなりあつた。一万二、〇〇〇アルケールという広大な、しかも安い土地の購入（一アルケール二五〇ミル・レイス以内）を目ざしたところに、そもそも無理があつたといえよう。しかも、一九三一年と三二年には降霜があつて、コーヒー樹の三割は枯死する有様であつた。そのうえ値段もまるつきり安かつた。サンパウロ州全体が生産過剰に悩んでいた時代である。かくて、三二年の護憲革命で不安におびえたのちは、十一月二十二日發布の法令でコーヒー植えつけは、むこう三年間禁止ということになってしまったのである。かくてコーヒー栽培を基本として計画された営農法は無残にもくずれ去つたのである。

こうした打撃のあと、一九三三年には、一九二九年の入植者七十一名が「土地代不払同盟」を結んだりしている。植民者は三年間支払い延期、一九三二年度から年賦支払いを開始するよう、ブラ拓本部に申請したのであつた。むろんこれは成功せず、首謀者の追放でけ（、）り（、）がついたようなわけであるが、ブラ拓側も、止むを

えない窮状にあるものに対しては、滞納土地代金は、貸付金にふりかえるなどの方法でとりたてを行なわないことにした。

やせ地に栄えた産業

バストス移住地がなんとか活気を示したのは、一九三二年ころ綿作がおこってからであった。

コーヒーに代わる産業として、養蚕と綿作が考えられたのであるが、綿の生産は躍進的に増加して、三二年度は前年度の三倍一四万四、〇〇〇アローバに達した。そこでブラ拓本部では三三年十二月、一日に一、二〇〇アローバの精綿能力のある繰綿機三台をそなえる工場をつくり、三四年三月から運転を開始した。かくて、三四年度には、四八万アローバの産出を見たのであった。

さらに一九三三年からは、バストス産業組合も誕生し、販売方面を強化する一方、一九三五年からは、日伯合資の工場が追加建設されると、さらに鏡ヶ江繰綿工場ができるなど、はなばなしい綿景気時代が現出した。

こうした綿景気は三九年の第二次世界大戦（ドイツのポーランド進撃）とともにヨーロッパへの輸出がとまり、四〇年には日本の綿花買い付けが止み、やがて一九四一年の太平洋戦争勃発とともに、植民地は綿作から養蚕へ

転換せざるをえなくなつて、綿作は衰微するのであつた。

バストスの養蚕は一九三一年ころから、カンピーナスの蚕種をとりよせて試みられていたが、一九三三年三月末、ブラ拓によつて蚕糸工場ができ、十一月一日より操業が開始されてから本格的になる。すなわち三三年度は前年度の約三倍で、養蚕家族は百五十にもなつたのである。しかし、綿景気に圧倒されてめざましい発展はなかつたし、三五年には百家族ほどに減少する。だが、この年の十月三日、イタリアの対エチオピア開戦の影響をうけた生糸好況期が到来し、綿織物工場もあらわれてかなりの活況を呈した。そして一九四四年ころの最盛期には、七か所の製糸工場が操業していたほどであつた。

だが、一九四五年の太平洋戦争の終息とともに、繭の価格はガタ落ちとなる。一九四六年などは繭の下落に加えて地力減退がはなはだしく、エスペランサ区などは五分の一以下の人口になつたといわれる。一九四七ころは、いよいよ蚕価は底をつき、冬期がくると、養蚕小屋が野火にのまれて消えていくのを人々はただながめていた。人口の減少で小学校は閉鎖され、かつては繭を満載して走つたトラックは、いまや移住地を退去していく人たちの荷物を積んで、つぎからつぎへと通りすぎる。そこには、植民地戦線における敗退の悲惨な姿が見られたのである。

組合は戦時中の連邦政府下の管理で運営は停滞していたが、今度は繭価の下落で破産の一手前まで来てしまった。そして、債権者であるバンコ・ド・エスタード・デ・サンパウロ（聖州銀行）の監督下に断末魔のうめきをあげている状態となっていたのであった（やがて復興される時はくるのであるが……）。

一九五〇年ころから、ふたたび養蚕業もよみがえり、また養鶏の植民地としてバストスは復興する。その他養鯉、ポンカン、西瓜で名を売るようになるが、移住地の人口は最盛期の半数以下となる。

バストス移住地は、綿作、養蚕、養鶏と三度大きく転換している。コーヒーは霜のあとの植付禁止令がとけても、ほとんど栽培への希望はもたなかった。コーヒーのない移住地だったといえる。一九三五年ころの綿景気の時代には、多少成金ができて、錦衣帰国者も出たといわれるが、地力減退のために多くの移住者は、土地を放棄（安くブラジル人や日本人に売って）移動していった。バストスほど浮き沈みのはげしい移住地も少なからう。

バストス移住地の特色

いうまでもなく、バストス移住地の特色は、これが日本政府のお声がかかり（拓務省のあと押し）で、各県海外

移住組合連合会ができ、その現地業務代行機関としてのブラ拓の経営によってできあがった移住地であるところにある。この点はチエテー移住地と双生児的に酷似している。

ブラ拓は一九二九年から十四年目の一九四二年、すなわち太平洋戦争勃発の翌年四月、連邦政府の管理下におかれるまで世話をやき、大部分の施設はバストス産業組合を中心とするバストス自治会の管理に移していた（ただ、法的手続きに不備があつて問題が起つたのであるが……）。とにかく、ブラ拓事務所の庇護のもとに、産業、保健、教育その他の施設をかかえた模範的植民地であつた。

それから、初期にはいった直来植民たちがブラ拓の職員たちを、まるで自分たちの使用人のように考えて、彼らに難題を申し込むことはあつても、彼らの意見を容れて、積極的に協力しようとするとはあつた点などは、他の在伯移民たちが自力でひらいた「植民地」とまったくちがった点であり、チエテーよりもひどかつたようである。

彼ら直来者は、ブラジルの事情がわからないので、当時ブラジル奥地においては最少の土地所有者としての自作農でありながら日本的な頭で「二十五町歩の地主さま」になつたと思ひこみ、日本で「千七百円を組合に供託し

た」ことにより、ブラジルへ渡れば、居ながらにして開拓ができるような甘い考えで入植したのであった。ところが、野獣の声を聞きながら原始林にいどむ開拓者の生活を目のあたりにみて、たちまち幻滅を感じてしまったのであった。しかもブラ拓は、援助はするがそれは自治的植民地を建設するための初期段階のことであって、学校を建てるには便宜をはかるが、教師の給料は植民者の負担であることを知らされると、まるで裏切られたようにさわぎたてたのであった。

こうした初期の傾向は、あとまで長く植民者のうえに影響をおよぼし、自治をおくれさせた。彼ら直来者には農業に経験あるものが少なく、もと代議士、村長、軍人あがりなどの「口達者なもの」がいて、自分たち直来者は「植民」だが、フアゼンダからはいったものは「移民」だと在伯入植者を見さげる傾向があった。「移民」たちが未明に起きて山の仕事にはげみ、夕ぐれ星をいただいて帰宅するような労働にはげんでいたとき、「植民・地主さま」は「午後三時頃になると仕事を切り上げ、一風呂浴びてから浴衣に着かえ、ウチワ片手にベランダの籐椅子にねそべって蓄音機をかけて（6）」いるような、在伯の移民たちには想像もつかない生活をいとなんでいたほどであった。植民者たちは、おおむね、これら「口達者な」直来者に牛耳られることになった。だが、標高や地味の

点でコーヒーがでしなかつたことは、ブラ拓の農業指導方針をくつがえし、植民者をまごつかせたので、多くの退植者をだした。

奥地における農業協同組合の先駆的立場にあつたバストス産業組合も、植民者の自発的団結心でできたものではなかつたので、精神的結合力が弱く、ただこれを利用してしようとする気持ちが先にたつていた。組合創立当時「抜け売り、抜け買いを認めてもらいたい、という虫のよい提案がでて、しかもなかなか（この）勢力が強かつた（7）」というから、その組合精神たるや、もつて知るべし、ということである。

コーヒーのない植民者たちが、綿花好景気時代、どんどん山を伐つて歩合作者に土地を渡したことは、土地を早く荒廃させ、また地力減退と一九四〇年ごろの市価下落により、歩合作者たちがより肥沃な土地を求めて、まっ先に移動したため、土地はますます荒れて、ついには植民者自身も他へ移動せざるをえないような場合もあつた。歩合作者の数は不明であるが、カスカッタ区などは、綿花景気の最高時（一九三六年）ごろは、百四十五家族の植民者で「綿作契約者（歩合作者）がほとんど各地区毎にいた（8）」といわれるから、植民者の数と同等、あるいはそれ以上いたことも想像される。綿花時代もつとも景気によかつたサウーデ区のごときは「開拓後

間もない区に綿作契約者（歩合作者）がおしかけ、区はたちまち全域伐採地となり、綿畑は収穫期になると、見渡すかぎり白銀一色にぬりつぶされた」ほどであったという。この区からは綿成金で帰国したものもあったのである。

養蚕景気の時きも、やはり歩合契約者がかなりはいつた。

こうしてコーヒーのない植民地は、コロノのかわりに歩合作者の労働によって金を儲け、また土地を荒廃させたのであった。これもバストスの一特長であった。

植民者の精神的傾向

バストスの直来入植者は、ほとんど一九二九年から三年にかけてはいつている。このことは、日本の国粹思想の影響をうけて渡伯したものが多かったことを意味する。しかも、この先頭には、もと代議士、村長、陸軍士官というような人たちがいたのである。彼らはブラジルへ着くとたちまち当国のナシヨナリズムと感情的に対立することになる。仕事には慣れず、幻滅によって精神的動揺を来たしていたところへ、経済的にめぐまれなかつた彼らは、ジェットリオ政府のナシオナリザン政策に会い、ますます日本主義的感情を強めていつた。

戦争直前から戦時中の日本語教育の禁止などによって反動的に植民者たちが日本精神を高揚し、それが後日臣道連盟活躍の地盤となったことも、彼ら直来移民たちの思想的影響が強かったことによると見てもいいだろう。

同化的傾向のおくれているところへ、アジア共栄圏への再移住思想などがはいりこんだので、ニセ宮様の称のあった加藤某の野心に動かされて、サンパウロ郊外のシポー村に移り、日本からの迎えの船を待って、財産のすべてを使いつくして裸一貫になるようなものも数人でした。桜組挺身隊サント・アンドレーの合宿所には、一時数十名のバストス出の婦女子がいたといわれる（9）。

スポーツのバストス

だが教育やスポーツの盛んな植民地としても、バストスは戦前から有名であった。ブラ拓事務所は、直営農場のカマラーダに雇うと称して、植民地のベースボール選手に日給七ミルを支払い、午前中はコーヒー園の除草、午後はベースボールの練習をさせた、というような話も残っている。かくて、バストス選手の名を世間にひろめた多くの有名選手を出すに至ったなど、ブラ拓の植民地でなければできないことだったろう。

郷土愛

日本人がかたまつてこしらえたバストス、しかもながいあいだ、わずかなブラジル人だけとつきあっていたバストスの生活は、一面でキスト化をおそれたブラジル官憲の監視がするどかつただけにバステンセ（バストス人）としての郷土意識を強めた。たびたび対外試合をもよおしたスポーツなども、この郷土意識を強める役をつとめたことだろう。戦後サンパウロ市に「バストス会」なるものが生まれ、出聖したものと郷土バストスの人たちがかたく結束して、在聖のものは移住地からでてくるスポーツ選手たちの世話をしたり、親睦会をひらいたりして郷土愛に結ばれていたことは、バストスの一つの特長のように思われる。この、出身地をめぐって親睦会をひらくことは、バストス人にかぎったことではないが、バストス人は他にぬきんじているような感を一般に与えた。

現在のバストス市

バストス市を今日（一九六八年）おとずれると、ほとんど日本人の創立した町だという印象をうけない。家屋

建築も初期には木造二階建てのものがあつたりして、どこか日本的な感を与えないでもなかったが、その様式はとくに日本式だといふのではなかった。今日レンガ造りになつてからは、そんな感すらなくなつた。

食物にしても、どこの家でも日本式米飯、味噌汁、漬物などは欠かさないが、ブラジル式のフェイジョン―アロース（飯と豆）は二、三世の好物だし、副食物はほとんどブラジル式である。

かつては、「バストスそば」で有名だつたところだ。鯉の料理はいまもある。しかし、これは日常の食物ではない。

一九四五年、郡として独立してから、バストスではすでに数人の日系郡長を出している。彼らは模範郡長として評判が高い。

バストス市の街頭には長髪（男）と、ミニ・サイア（女）の若者が見られ、土曜、日曜の午後には二世たちのナモ―ラ風景も見られる。むかしの青年会や産青連（産業青年連盟）の伝統をうけついで青年たちの訓練の場としての青年講習会がひらかれ、農村の将来について研究し、思索している二世青年の群れがあるかと思えば、トランスビアード（ヒッピー族）もでているといわれる。

バストスは、植民者の日本主義とブラ拓側指導者の同化主義とが対立あるいは並行したところといわれるが、

日本主義は物質文化の面では、ほとんど表面にあらわれず、いまや心理的な面では二世層によって、急激にブラジル化のほうへ動いているようである。

ただ、ここの町の墓地をのぞいてみると、入口（墓地の外）に観音・不動の二像がたっており、内部の墓標は九〇パーセント以上仏式であるのは、日本的バストス人の内的生活を象徴しているかのようなようである（10）。

注

(1) 『バストス二十五年史』七ページ。

(2) 同上。

(3) 『よみもの』中の“対談・バストスむかしばなし”（一九五一年八月号、五三ページ）。

(4) 同上、五五ページ。

(5) 一九三六年には、日本語教師が全バストスで二十三人いたし、三七年の日語教育が廃止になるころは、八校に千百九十一人の就学児童がいた。

(6) 前掲果『よみもの』対談、五四ページ。

(7) 同上、六〇ページ。

(8) 『バストス二十五年史』二二七ページ。

(9) 『コロニア戦後十年史』三一〜三三ページ。

(10) 本章はその大部分を水野昌之著『バストス二十五年史』をもとにして書きあげた。なお、『バストス週報』の発行者・織田守男氏のお話も参考にしたこと感謝とともに付記す

る。

39 旧移民の多い

トレス・バールラス移住地

トレス・バールラスとアサイー市

パラナ州の北部（北パラナ）のトレス・バールラス移住地は、一九三二（昭和七）年からブラジル拓殖組合（ブラ拓）が売りだした一万八、三四〇アルケールの土地である（1）。この植民地の中心市街地を、アサイー（As sai）という。

一九四五年この地に郡制がしかれ、アサイー市となった。アサイー市は北パラナの雄都ロンドリーナからバスで約一時間（四八キロメートル）である。ただし、パラナ州サンタ・カタリーナ鉄道（R. V. P. S. C）のジャタイジーニョ駅からは二八キロメートルの地点にある。

トレス・バールラス移住地は、一九三二年にサンパウロ州政府が、州内にコーヒー植付制限令を布告したのち、売りにだされたところである。テーラ・ローシヤ（2）地帯でコーヒー栽培者の垂涎おくあたわざる地帯であるベきだったが――実際は緯度、地勢などの点から必ずしもそうではなかったが――、まだ当時は鉄道も開通したば

かりであり、またロンドリーナの先の国際植民地（3）も前年から土地を売りだしていた関係上、入植者数は予想どおりではなかった。しかし綿花栽培の不適地と評されていたこの地方が、植民者たちの研究によって、適地の評をとるようになってから、入植者が急増したのであった。

一九三二年から一九三九年までの入植状況を示せば、左のとおりである（4）。

年次	日本直来者	ブラジル在住者
一九三二（昭和七）年	—	六
一九三三（八）年	—	一五
一九三四（九）年	—	五〇
一九三五（十）年	—	六二
一九三六（十一）年	三	六四
一九三七（十二）年	—	九〇
一九三八（十三）年	四	四三
一九三九（十四）年	—	二四
計	一一	三五四

（ただし、この数字は実際の入植者数と一致しない。土地を購入した不在地主は請負契約者を多数入れたからである）

なお、一九三九年まで七、三一・二・七七アルケール、すなわちその三九・四パーセントを売った。さらに、一九

四一年末における分譲総面積は一万四、八〇〇アルケール、全移住地在住者は千六百十四家族で、その全人口は八千六百六十六人を数えた（5）。

この移住地の最初の支配人（主任）はモジアナ線クラビーニョ駅のブラジル人農場に監督をしていた斎藤幸（みゆき）であった。一九三二年四月に就任し、この年の十一月までつとめて、あとは第一回移民でこの地方の草分けの一人であった臼井介仁（うすい・かいと）が彼にかわった。

第三代目の支配人は平野運平の弟・榛葉彦平で、一九三九年十月から就任したが、一九四〇年一月一日から向こう五年で名実ともに移住地のいっさいを植民者たちの自治にまかせるため、その準備期として自治支配人の名称を与えられた。

移住地の特色

トレス・バーラス移住地が、ブラジル国内からの入植者（いわゆる旧移民）を主として迎え入れたのは、バストス、チエテー両移住地の開拓経営に苦い経験をなめたブラ拓が、新開拓の移住地トレス・バーラスに対する「根本的改革」のあらわれであった。はじめはバストス、チエテー両移住地と同じように、直来移住者をもって当て

るたてまえであつたが、「これは計画どおりの開発に困難をきたしたばかりか、いわゆる組（、）合（、）移民で、やたらに権利を主張し、義務の履行を欠き、成績の上ることが少なかつたので、直来制度を廃し、在伯邦人を入植させる方針に改善したのであつた。

つまり、ブラ拓の移住事務所にすべてを依頼して開拓していく移住者の甘い考えを一掃し、入植者に独立独歩の気がまえを植えつけることにしたものであつた。そしてこの方針にかなうものは、ブラジルの生活を経験している旧移民以外はなかつたからである。

はじめて原始林に斧をおろす

斎藤支配人が日本人会計一人、ブラジル人労働者三人をひきつれてサンパウロ市のブラ拓本部から現地へ向かうべくコルネリオ・プロコピオ駅まで到着したのは、一九三二年四月十四日であつた。当時鉄道はここまでしか開通していなかつたのである。ここからトレス・バラスへ行くジャタイジーニョ（当時は単にジャタイ）駅へは臨時に運転される貨物車で行かなければならなかつた。

彼ら一行は十五日の夕刻、はじめてジャタイ駅に乗りつけたのであつた。



原始林への道開闢

一行の最初の仕事は、植民地を貫通していた古いサン・ジェロニモへの細道を、幅三メートルに改修する仕事であった。彼らは請負師を雇って、その仕事をはじめるところにした。それから、現地における仮事務所を設置するために、その地区を選定し森林伐採の斧を下ろすことになった。それは一九三二年五月一日で、斎藤支配人はこの日をもって入植記念日と定めたといわれる。

そのころ植民地には、すでに測量隊がはいつていて、基本測量をやっていた。

やがて五月四日、鉄道はジャタイー駅まで開通し、同九日からは旅客車が通うようになった。だから、トレス・バーラスにいたるジャタイー（のちのジャタイジーニョ）駅は同植民地の創設と同時に機能を発揮したことになる。最初の土地購入者は六人であって、まもなく五家族の入植者を見た。すべてブラジル国内の日本人であったことはいうまでもない。

ブラ拓本部ではさつそくトラックを動かして、彼らの荷物を無料でジャタイー駅から山まで運び入れた。仮事務所の近くには、すでに入植者収容所ができていたので、彼らはここを本拠として、山伐りの仕事にとりかかった。

ところが、ここに突如として、予期しなかった障害があらわれた。七月十二日から、サンパウロを中心とするいわゆる護憲革命がここにも波及して鉄道は不通となつてしまったのである。かくて移住地は、サンパウロのブラ拓本部とも連絡が断たれたのであった。さいわい、十月三日になって、革命はサンパウロ軍の和議申入れとともに終わったが、その間、事務所のものをはじめ、植民者たちは食料の入手に苦心した。このとき危険をおかしてコルネリオ・プロコピオと連絡をとるものがあり、また彼の地の邦人商人のなかには百数十キロメートルの遠方から牛車を動かして山道を食料輸送に尽力するものもでて、植民者一同を感激させた。

こうした交通遮断にもかかわらず、遠方から馬車で入植するものがあり、革命終息とともに、市街地建設のために、大工その他大勢の日本人およびブラジル人労働者もはいつてきたのであった。ブラ拓本部発表の入植者年次表には一九三二年六家族とあるが、実は九家族くらいであった。土地購入者としてではなく、別な資格で共に入植したのもいたからである。

入植初年度

初年度（一九三二年）は雨が多かったことと、革命さわぎで仕事も思うようにはかどらず、雨期にはいつてから山伐りや山焼きがつづいたため、第一期入植者は相当苦勞した。

草分けの一人、筒井徳次郎の「入植当時の思い出」を『開拓廿五周年記念』トレス・バーラス移住地』から転載しよう。

「昭和七（一九三二）年、トレス・バーラス移住地が開設されると間もなく、ここに入植することに決心し、私一人さきに来て、請負仕事（6）の契約をし、家族の住む仮住宅を見つけておいて、家族同伴で引越して来たのは、ちょうど護憲革命の真最中の九月中頃であった。

貨物自動車で引越し荷物全部を運ぶことができず、半

分だけ運び、残りは革命終熄を待って汽車で運搬することにして出発した。

コルネリオ・プロコピオ駅へ来たとき、赤旗をひるがえした警備の自動車に出会ったので、荷物を貨物自動車ぐるみ警備隊に徴発されるのではないかと思つたが、幸い運転手の知り合い（7）だったので無事通過することができた。

そのころ、移住地の収容所は、地ならしをしただけで材料も集まっておらず、よしできあがっていても自分の仕事をする場所は、そこから七キロも離れた市街予定地の付近なのである。当時市街地には、唯一軒、小屋掛け同様の山口商会の支店があるのみで、こことて狭い家中に多くの人びとが住んでいて、頼んで住むこともできず、市街地を伐採した時分、人夫の寝た半分木片葺の半分椰子葉で屋根をふいた囲いもない小屋があつたので、私たちは一時、ここにはいるつもりにしていた。

夕方人の顔が漸くみえる頃にこの小屋についた。さっそく薪をあつめ、焚火をはじめた。その明りで伯人労働者が使用した寢床を利用し、それに横に細木を渡して臨時の寢台を作った。この辺はオンサ（豹）が住んでいと土人たちに驚かされたので囲いのない小屋に寝るには、夜通し焚火をきらすことができなかつた。

屋根をみれば、椰子の葉の隙間から星がきらきら光るの

がみえる。夜中ビリグイ（ヌカ蚊と日本人はよんでいが（8））の襲撃を受けて、みな毛布を頭からかぶって寝た。そのうちに枕辺から鹿の鳴声におどろいて眼をきます。焚火が全く消えていたので起きてたきつける。燃え上ったところには東天が白んでいた。夜が明けるときつそく竈（かまど）をつくり荷物を運び入れて屋根の椰子葉を修理して第一日目は終わった。

第二日目よりトウモロコシ播を始めた。種子は一俵しかもって来なかった。播いた種子は見事に芽生えたが、こぼれ種子を食べて味を知った小鳥が、こぼれ種子がなくなる、今度は生えたトウモロコシを抜いて食べ始めた。一アルケール足らず播いたのを無数の小鳥に抜かれたのでは全くやりきれたものではない。

これより先、家族を連れて行くとき、移住地事務所から『革命のため輸送機関が途絶して今日米を移入する術がない。来ても米の供給を約束することはできないからその覚悟で来い』と言われ、耕地から分けて貰ってこようと思っただが、此処でも『この革命がいつまで続くかわからないから、米の分配はできない』とのことで困惑していたとき、伯人から『フバ（トウモロコシの粉）を三、四俵用意して行け、米は無くともフバさえあれば大丈夫』と教えられた。こんな事情で米は一日に一度しか食べぬことにしていたが、僅か一七リットルしかなかった米だ

からたちまちなくなり、フバばかり食べなければならなくなつた。革命の終つた十月から毎日のように雨が降つて仮小屋の床から水が湧いて流れる始末、斎藤支配人が来られて『衛生上悪いから高い処に家を建てなさい』と度々いわれたが、何しろ種播きに忙しいのと屋根板を割る人がないので、どうすることもできない。請負師の西村氏の来るのを待つて家を建ててもらふことにした。トウモロコシの種子も次ぎつぎと運ばれたので、毎日七、八人の人夫を使って牧場及び市街地を創るために伐採した処に約二十アルケール播いた。そのうち西村組も来たので早速手伝ってもらつて家を建てて引越した。この頃事務所や住宅をたてる丸野組大工も来た。毎夜のように獣がでて、八十羽の鶏がほとんど喰われたのもその頃であつた（9）

どこの植民地でも開拓初期の入植者は苦勞しているがさすがに一九三二年ころは、もうブラ拓も多くの植民地経営の経験をもつていたので、着々と仕事は進んだ。ただ革命という外部からの災難がふりかかってきたので、これが大分番狂わせとなつていのである。しかし、入植者はすでにブラジル生活のベテランである。人夫小屋に焚火をしながら一夜をあかすこともできるし、フバーをなめて働くこともできた。しかも、請負師に頼んで小

屋を建てることもできる時代になっていたのであった。また事務所のほうでは、植民者の衛生を考えて、早く高いところへ家を建てるようにすすめている。この年は雨が多かったにもかかわらず、マラリアもでなかった。

「移住者の移住地に対する感想は、稀にみる健康地であるのと土地肥沃なのに改めて魅了され交通不便な深山にありながら、不満の声は少い。ただ革命騒乱の余波を受けて食糧が極度に欠乏し困窮したが、山口商会支店建設で消費物品の購入販売は円滑に行われるに至り、食糧への不安は一掃された。世間には入植者を評して、聖州邦人の落武者という者もあるが、過半数はコロノ生活で腕を練磨して来た一騎当千の拓士にして、開発への意気込み凄じきものあり」

これは三二年五月下旬から約半年を経た十一月中旬までの事業報告として、現地事務所からブラ拓本部へ送られたものの一節である。幸先よろしきものといえる。

この十一月には、斎藤支配人のチエテーへの転任があり、臼井介仁が二代目の支配人となった。彼もまた移民あがりであり、ブラジル生活の辛酸をつぶさになめた一人であった。

彼は着任と同時に、いかにして多くの植民をここに誘致するかを考え、そのために、市街地の整理をはじめた。

実は、地勢がわるく水の便もよくなかったので、市街地移転説もあったのであるが、本部のいれるところとならなかつたために、水道設備をいそいだ。また視察者の便宜を考えて、ホテルに使用すべき家屋の建築もはじめた。さらに市街地分譲に当たっては、これに命名する必要も生じて、「旭」としたが、これはアマゾン地方にあるアサイ椰子のアサイにも通じる綴字になる関係から、どちらと解釈してもいいように命名したといわれる。一時は、旭の地、すなわち日の出る国の人たちがきずいた町という意味も含めてアサイ（ヒ）ランジアともいつていたが、一九三七年ころからアサイーとよばれるようになった。今日、トレス・バラスは植民地の名、アサイーは町および郡の名となっている。

開拓二年目からの植民者の動き

一九三三年十二月、すなわち開植二年目の暮れには農作物研究の急務をさとした植民者の家長十数人が集まって、トレス・バラス農会を結成した。このころは、綿花栽培が盛んになりだしたときであって、まだコーヒーの成樹をもたない植民者たちは、いかにして経済生活を豊かにするかを考え、そのためには、テラ・ローシヤの新開地は綿花栽培に向かないという定説をくつがえす

べく、その栽培法を考えようということになった。その方法は各自がその所有地で試作した結果を研究会で発表し、協議研究することであった。さらに、研究のためにお互いが集まれば、親睦にもなるから、この機関を植民地の秩序と発展のために利用することにしようということにもなったのである。いわば、一種の自治機関が、相互研究を契機として生まれたわけである。そして、この研究会はやがてその成果があらわれ、翌三四年には通種を見出すことに成功し、そのために三五年度の入植者二百余家族（10）が綿作を第一主眼とする農場経営にとりかかりコーヒーの結実をみるまで綿作が農家の経済を支えてきたのであった（11）。

さらに農会では、コーヒーの研究もし、ブルボン種を適作として選んだりした。

この農会は、さらに産業組合を生み、精米所をつくるどころへ発展する。べつに農会を解散したわけではないが、産組のほうは経済面が主で、農会は依然として農業技術の研究や会員相互の親睦というような目的のもとに存続したのであった。こうして、植民者が増加してくるにしたがって、一九三五年ころからは日本人会が設立され、各区にもそれぞれ日本人会が生まれて、中心のアサイー町には、連合日本人会が生まれることになるのであった。

ブラ拓の指導方針

植民地の経営者側としてのブラ拓事務所は、はじめは農会を通じ、のちには組合または日本人会を通じて、農業技術の向上や、衛生・教育の面で尽くしたことはいうまでもないが、さらに植民者の定着を進めるために「愛土・永住」を目ざしたガット運動を起こした。これは、ブラ拓経営のすべての「移住地」で行なわれたものであるが、トレス・バールスにおいては、ちやうど創設されて三年目であり、農会が生まれた翌年であったから、時宜にかなったものといえよう。

ガット運動とは *G o z a r a t e r r a* の *G*、*A*、*T*、をとったもので、土に親しむ運動、先に示した愛土・永住を目ざしたものであつて、その根本理念は『ガット青年隊』に引用してあるタンポートのつぎの言葉だといわれる。

「農業は事業ばかりが唯一の目的ではなく、生活様式なのだ。或る時は豊かな稔に感謝し、或る時は凶作の憂目に苦痛の惨と戦う。地上により好ましい生活を求むるならば、手頃な土地を有ち、そこで働く耕人の生活こそそれであろう。慎（つつま）しやかと勤勉とは充分な酬いを

得る。農こそは立派なる市民を生み教養を与えるのだ」
シチアンテ（自作農）を中心とする中産階級の育成思想であつて、宗教的色彩をもったピューリタンのロマンチズムともいえる。

これを、ブラ拓本部から示された具体策の各条項において調べてみると、産業組合を中心として多角農をいとなみ、自給自足的要素を多くし、耕作のうえでは品種選択、農薬の使用等によつて合理化をはかり、一方養豚・養鶏等の副業をいとなみ、農業簿記を利用して計画的生活をいとなむものであつた。

しかし、輸出産物を主として、綿花栽培からコーヒー栽培へ移ろうとしていた植民者たちに、この根本精神を納得させ具体案を実行させることは難中の難であつたにちがいないが、そのなかに含まれている農業の合理化、教育・衛生・スポーツなどは、愛土思想とどう関連するかは別として、それぞれ発展していった事実は見逃がせない。そして、綿の買いつけや輸出が盛んになり、日本の綿花会社すら進出してきたそのころは、多角農の思想を無視して、綿作のモノクルツーラ（単作）に植民者たちは、とうとうとおもむいたのであつた。

トレス・バーラス移住地も、日本人の集団地として日本人会が生まれ、小学校が建ち、青年会が生まれたことは、他の集団地と変わらない。しかも二十区を含む大植

民地であつてみれば、そこには中央機関としての連合会ができるのも当然である。それらのことは、ここでは省略し、この植民地の特色についてふれてみたい。

テーラ・ローシャ地帯の植民地

ここは土壤の性質からして、サンパウロ州の多くの日本人植民地と違って、砂質土壤ではなく粘土質の紫赤土であつた。雨が降るとつるつるすべつて、馬車や自動車はもちろんのこと、人間さえころびそうなところ。もし日照りがつづく、自動車が通つたあとなどは、黄塵ならざる赤塵がもうもうとたちのぼる。開拓当初はまだ自動車も少なかったが、やがてこれがふえてくると、北パラナ特有のポエイラ（埃）が、まず旅行者をおどかす。開拓後二、三年間は、レンガ製造に適当な土が見つからなかつたので、市街地は商店も住宅もみな板壁であつた。さすがに瓦だけは、はじめはオウリーニョスの遠方から、次にはジャタイー方面から買つてきた。板壁は埃まみれで、みなどす黒くなり、わずかに屋根瓦だけが血のように赤く見えた。衣服でも、白っぽいものは向かなかつた。シャツなどは一時間もすると襟はまっ赤になつた。商店では、店先に商品をかざつておくことができなほど埃がとびこんだ。まったく外観は見ばえのしない町だつた

のである。

だが土地はよかった。窒素分が多くて綿には向かないといわれていたが、そのかわり、野菜などは不足しなかった。キャベツがよくできた。ただし、大根やごぼうは掘るときに苦心した。マンジオカなどは、人間のももほどの太さになるのであるが、これを掘り取るには並み大抵なことではなかった。土がかわいてくると堅くなるからである。

それから、パルミッタールという区名があるとおり、パルミット椰子はいたるところにあった。この木の芯は食糧にもなったし、木は割って小屋がけに使った。

土地がよく、森林がしげっていたせいか、先に記したドリグイは名物であった。蚊帳の目を通すほど小さい虫で、羽根の透き通った小さい蚊の一種で、うるさいことこのうえなしだ。これがうんとでるときは、雨の前兆といわれた。それから普通のぶゆ（ブト）、あぶ、蚊というように虫が多かったので、女たちはスカートの下に長いズボンのようなものをはいていた。ブラウスもシャツも袖長のものを用いた。

毒蛇も多かったので、各区ではみな血清と注射器とをそなえていた。これは、コーヒーを植えつけたあと、その穴にかくれていることが多かったので、コーバ（穴）掃除にはよくよく注意しなければならなかった。

住宅はほとんどパルミット椰子でつくった。入植時には、事務所のほうでこしらえた收容所があったので、山伐り前に、まず掘立て小屋をつくるという手間ははぶけた。

住居の囲いは、パルミットを四つ割りにして芯のところをけずりとったものを、なるべくすきまのないように（実際「なるべく」であったが）ならべる。なぜなら、砂気のない土は、たとえすきを入れても、壁土にならないからである。ある人は、パルミットを二つ割りにして、背中あわせに、たがいちがいにならべて二重壁にしたといっている。このほうがすきまがなくなるわけだが、パルミットは普通の椰子より芯のほうがやわらかなので、その部分が腐ってくることがある。

屋根はほとんど木っ端ぶきであった。ただし木っ端といっても、長さ六〇センチもある割板であって、日本のこけらぶきとはよほど趣きが違っていた。資材には、マルフィンとかセードロとか、もったいないような木が家の近くにゴロンゴロンしていたのであるから、釘をよけいに使わない、という見地からも、大きな板に割って使ったものであった。柱などはペローバ、床は土間である。

これは水をまいて突きかためれば、カンカンにかたまる。寝台もやはりパルミットを割ってならべれば立派な棚が

できた。これをタリンバといった。直来者の少ない植民地であったから、板の寢床をつくって、ときには、ここにあぐらをかいて休まなければ、落ち着いた気分にならないなどというものはまずなかった。テーブルも腰かけもいつさい割り木でももらえる。ただ苦心したのは、井戸水がなかなかでないことであった。乾燥期になると、土はすごく堅くなることはすでに記したが、一度岩盤にぶちあたると、もうどうにもならなかった。井戸を掘りかえる人や、あきらめて何百メートルも遠い谷のほうへ水を汲みにおりていくものもあった。健康上、みな高いところへ家を建てるようにしたからであった。植民地史を見ると、どこもここも井戸で苦心したことが語られている。

食物については、旧移民が多いだけに、とくに日本食でなければならぬということにはなかった。どこでもそうであるように、日本式の白い飯にフェイジョン、ブラジル式とも日本式ともつかない煮物、それに味噌汁と漬物というとりあわせで、イタリア式マカロンやサラダは入植してから十年近くにならないとはいってこない。味噌は入植後まもなくつくったし、醤油まがいのももてきた。それに、とうもろこしができると豚を飼いだしたし、またその豚が砂地よりも成績がよかったので、バーニア（豚脂）、トウシーニョ（脂身の塩漬け）、リングイツ

サ（腸詰め）等もつくったから、不足はなかった。

植民地の第二期、コーヒーが生産されるころになると（入植五、六年ころ）、家も新築されだしたが、やはりレング造りよりも板壁にすることが多かった。屋根はむろん瓦でふく。床は相変わらず土間である。もし板敷きにでもすれば、雨期は靴についた赤土の泥が床板について、掃除がたいへんだった。鍬で泥をけずりとするようなこともしなければならぬほどである。寝台も板にするし、テーブルもかんなのかかった良材を使って食堂の中央にでんとすえる。バンコの代わりに椅子も何脚か買うということになるのである。

教育は、事務所のほうで敷地をとって来ていたため、すぐ学校をつくった。むろん、その建物も、はじめは植民者の家と同じ、のちに板と瓦でつくったが、まあ、質は上等といえないまでも「先生」も雇った。のちにブラジル人の教師がくるようになったときには、日本人教師と同じように住宅を建てて供し、政府からくる月給以外に、植民者から謝礼を月々だしたから、あまり問題はなかった。ただしパラナ州におけるこのころの教師は、正式に学校をでたものではなく、いいかげんな代用教師だったために、学力も日本人教師と比べるとグンと落ちた。

算数などは日本人教師が手伝った例も少なくない。

スポーツは、青年のベースボールが主であったが、コーチするもののない区はおくれて普及した。

その他文芸方面の運動は、直来者の多い移住地に比べて数年おくれて現われたことはやむをえなかつたろう。だが、さすがに日本人の多い集団地だけあって、二世で短歌や俳句をつくるものが多く、今日（一九六〇年代）でもなお、そうした文芸運動をつづけているのは面白い点である。

アリアンサ移住地に長くいて、一九四〇年ころ、トレス・バラスに移ったある人の感想を聞いたが、「アサイーを中心としたトレス・バラスは、アリアンサなどから比べると、なんとなく雑然とした感をうけた」そうである。直来植民の多いところは、人間の質も同じようである。その生活程度もやや一定して、そこには物のいい方、挨拶の仕方、隣近所とのつきあい方、そうしたものに特殊な傾向が生まれるのであるが、トレス・バラスのよいうな旧移民がブラジルの各地から集まってきたところではなにか、ちぐはぐなものを感じさせたにちがいない。

アサイーは日本人の町だという。そして一般に町は日本的な雰囲気にあふれているといわれた。しかし、それは日本人の数が絶対的に優勢だということがいえたし、商店などは、ブラジル人の店でさえどこかに日本文字を書き入れた看板をかかっているほどであるが、それは町

全体のブラジルの雰囲気を変えるほどではないし、建築様式なども、めだつて特異なものは、中心街をそれたところにある寺院建築くらいなものである。「会館」のようなものも、木造であるうちは、玄関（あるいは車寄せ）というようなところに、日本的な様式が見られたが、レンガ造りに新築されるころは、そうしたものが失われるのが普通である。また屋根の形にも、それらしいものが見られた。これはアサイー市内ではないが、パルミッターの青年会館などは、そのいい例を示している。しかしアサイー市の新築家屋には、ほとんどそれらしいものも見あたらない。

戦時中からアサイーは二世の進出がさかんであつたが最近のブラジル化の速度は急速で、一般ブラジル人と日系人の社交クラブもあり、フットボール・チームもある。むろん中学校（二）・師範学校があり、教育の方面でもブラジルの色彩が優勢である。街上で耳にする言葉もブラジル語のほうが多い。日本人の町アサイーもめまぐるしい変化をとげている。ただこの植民は、比較的歴史が浅いこと、そして地味がいいために移動性も少なく、したがって各区の人々の生活をのぞいてみると、言語や趣味のうえで、まだまだ日本的なものが見られるのである。

(1) 最初は一万二、三四〇アルケール。追加分六、〇〇アルケール。

(2) 片麻岩や玄武岩の風化してできた土壌の俗名、紫赤土で、コーヒーの適地とされている。

(3) 当時、ロンドリーナを中心として、氏原彦馬が売りだしていた英国系シンジケートの土地を指す。

(4) 『日本人発展史』下巻、七二ページ。

(5) 『トレス・バーラス移住地』三二ページ。

(6) 山伐りを指す。

(7) 隊長が運転士の知人であったことを指すのであろう。

(8) ビリグイは学名フレボトムスという小さな蚊の一種で、日本人は「ヌカ蚊」とよんでいた。

(9) 『トレス・バーラス移住地』七〇八ページ。

(10) ここでは、不在地主のところへコーヒー樹仕立ての請負者やその他の分益農ではいったものが相当あったとみられる。

(11) 『トレス・バーラス移住地』一三ページ参照。

40 北パラナ（パラナ州北部）への発展

一九三〇年以前の北パラナ

北パラナ（パラナ州北部）が世の注目をあびたのは、一九三二年以後のことである。この年の十一月二十二日、サンパウロ州では、コーヒー植付け制限令のために、小農たちは、向こう三年間、新規コーヒー植えつけから閉めだしをくらった。多くの小農たちは、このとき、制限令の圏外にあった北パラナへ目を向けるようになったのである。

北パラナの開発は、一九二九年まで、ソロカバナ線オウリーニョス駅から三〇キロメートルの地点カンバラ一駅までバルボーズ一族の資本によって鉄道が敷設されていて、ここまで進んでいた。

だが、「北パラナ土地会社」が一九三〇年に三〇万（のちには五五万）アルケールの分譲地を売りだしたときからその発展は、ようやく緒についたといえるだろう。

ただし今日（一九六八年）、北パラナの雄都とよばれ、人口二十万を擁し、高層ビルの林立するロンドリーナにはじめて鉄道が開通したのは、一九三五年六月十四日のことで、ふりかえってみれば、わずか三十三年前のことにはすぎない。だから、北パラナにおけるわが移民の歴史も、ほぼ三十年ほどのものだといっていだらう。すなわちロンドリーナの先駆者は三十七年、マリンガーは三十年、そしてパラナバイーは十七年である。しかも、現在では、都市と農村の日系人口の比例は、ロンドリーナ

からマリンガーにかけていわゆる旧地帯では、市街地二
に対して農村一とも見られ、パラナバイーから奥の新地
帯では、これが逆になっているところもあるが、往時、ほ
とんど農業者として原始林開拓に向かった日本移民のそ
の後の生活の変遷を暗示するものとして興味深い。

いま全パラナ州の日系人口九万五千と称されているな
かの大半を擁する北パラナに、筆者は、日本移民の現代
の営農形態とその生活（「現代の奥地シテアンテ」として
後述）を見たいとおもい、そのままぶれとして、一応北
パラナの歴史をおおまかに記述する。

私の立場から見た開拓初期の生活は、ノロエステもソ
ロカバナも大差はないし、すでに北パラナの一部である
ブラ拓移住土地「トレス・バラース」のなかでも書いて
おいたので、ここでそれを反復することはさけない。た
だ北パラナ発展の端緒を見ておくことは、今日この地方
の状態を考えるうえに便利であろう。

北パラナの開拓史は、一九三〇年、英国シンジケート
「北パラナ土地会社」がロンドリーナ以西（くわしくは
ジャタイーからマリンガーにわたるやや帯状の五五万ア
ルケールの土地）を売りだすまで、長くカンパラ止ま
りとなっていた。

カンバラーの開拓は、バルボーザ一族の主力アントニ

オ・バルボーザによって一九〇〇年にはじめられ、彼のうちに、九十万本のコーヒーを植えつけて、そのすばらしいできばえにより、ここがコーヒーの適地であることを証明した。むろん、テーラ・ローシヤ地帯である。

北パラナ鉄道が、バルボーザ一族の資本から一九二九年に英国シンジケートの手に移ると、一九三一年にはバンデイランテスからコルネリオ・プロコピオに敷設工事は進み、一九三五年にはロンドリーナへのびるのであるが、これより前、一九二九年十一月にはカンバラーからの車道がひらけるので、そこから西方は、つぎつぎと原始林が耕作地にかえられていくのであった。

まず一九三〇年以前の北パラナ同胞の歴史をながめてみよう。

カンバラーにはじめて日本人がはいつたのは一九一三年からで、バルボーザ農場にコロノとして就労するものであり、一九一七年には小土地所有者シチアンテの集団もあらわれ、ビーラ・ジャポネーザ植民地などと称した。さらに、一九二三年には日本人の雑貨・食品店もカンバラーの町にあらわれる。ビーラ・ジャポネーザには一九一八年日本大会が創立され、一九二一年には日語小学校もあらわれる。

バンデイランテス是一九二七年野村農場の開拓にはじまる。

コルネリオ・プロコピオの日本人先駆者は一九二八年にはいったもので、シテアンテとして数家族が「植民地」をきずき、一九二九年後宮農場その他もできる。

ウライー（戦前はピリアニット）が南米土地株式会社の手でひらけたのは一九三六年であり、トレス・バラスの入植は一九三二年であって、ともにロンドリーナよりもあとになる。

ロンドリーナ地方の開拓

ここでは、北パラナ日本人発展の中心地となったロンドリーナについて、ややくわしく述べよう。

この地方は、戦前日本人によつて「国際植民地」とよばれていたところであるが、それは別にブラジル人の間に通用した固有名詞ではなかった。いわゆる「植民地」などによぶにはあまりに広大な地域で、英国シンジケートの五五万アルケールがその主要なものであり、ジャタイーからロンドリーナを経て、同会社の鉄道敷設とともにマリリングア方面までやや帯状にひろがっていたところのものである。むろん鉄道よりもさきに車道が通じた。ロンドリーナは会社事務所の所在地で、この地方開発の拠点であった。

この地方が日本人によって国際植民地とよばれた理由は、土地会社が英国系であるうえに、入植するものは、ブラジル人はもちろん、ドイツ人、イタリア人、日本人その他合計三十三か国（一九五〇年調査）の移住者たちがそれぞれ独立小農のシチアンテとして入植したからであつた（1）。

日本人は、一九三〇年、ここが会社によって売りだされた年の三月、代理人氏原彦馬に連れられて第一回視察団として十一名が、カンバラーからロンドリーナヘトラックで乗りつけている。そして一九三一年十月には、第一回入植者三家族をみたのであるが、その三家族こそ全植民地の入植第一陣であつた。つづいて、氏原が日本人視察者のために肥沃な土地を選び、彼らを満足させたことなどで日本人入植者は続々とこの地に集まつてきたのであつた。全体の数からみれば、日本人の入植者は、ブラジル人、イタリア人、ドイツ人に次ぐ第四位でありその購入面積は一九五〇年において、全植民地の七・九パーセントであつた。

むろんこのパーセンテージは、必ずしも人口の比率と同一のものではないし、ことに都市においては、ブラジル人その他の商工方面の人口がふえるに反して、農業者としての日本移民の商業方面への進出は少数者によって徐々に行なわれ、工業方面はずっとおくれるので、七・九

パーセントという比率は、たとえ初期には人口的な意味をもっていたにせよ、かなり変わっていくことはやむをえない。

近年日本人都市居住者がとみにふえたというロンドンリーナ市を例にとつてみると、市の総人口は二十万といわれるが日系は二千五百家族といわれ、一家族五人と概算すれば一万二千五百人である（十年前は五千百四十三人）、六・二五パーセントにすぎない。マリンガー市は人口七万に対して日系千二百家族の約六千人（十年前は三千三百十八人）で八・六パーセント弱となっており、ここではふえている。かつての農家の三分の二が（必ずしも農業を放棄したのではないが）都市移住者となつていゝる現状では、このような比率も見られるのであろう。

ここでこんな算数をやつてみたのは、北パラナ方面にどのくらいの日系人がいるかの目安であつて、日本移民を主とした地方史が、まるで日系人だけのものとして錯覚されないための「ただし書き」である。

だが北パラナにおいて、日本移民が先駆者の地位を占め、また、その後農業上の発展において大きな役割を果たしていることは、ブラジル人も認めているところである。

さて、ジャタイー以西の北パラナの先駆者を、ロンドン

リーナの初入植者三家族およびそれにつづいてはいった人たちの生活から見ると、一九一〇年代にイグアツペやノロエステ方面の開拓に従事した人たちの生活がしのばれる。

一九二九年十一月に、カンバラからロンドリーナに車道が通じたとはいっても、これは原始林中に、やっと馬車、牛車、トラックなどが通れる程度の道ができたことで、今日の平坦な車道とは比べものにならない。雨がふれば赤土のぬかるみに車の輪がめりこんで動けなくなったり、森林中の大木が道を横断して倒れたりするので斧や鋤を携帯しての交通であった。

ロンドリーナでは一〇アルケールの森林が伐採され、ここに木造の仮事務所と宿舎ができていて、シャーカラとよばれていた。今日でも残っている公園の一角のペローバの大木を見ても想像がつくように、テーラ・ローシャ地帯の鬱蒼たる大森林のただ中に、ぽつねんと人間の住みはじめた一点が出現した程度であった。彼らはそこへトラックで運びこまれ、それから各自の地区へピカード（測量用の細道）を通って、夜具、農具、食料等をおかつぎこんだのである。さいわいシャーカラから三キロメートルという近距離であったし、道もよかったので森林中への運搬には割合苦勞が少なかった。

それ以後の数か月間は、生木と椰子の葉の掘立て小屋

のキャンプから、あるものは自家労働だけ、他のものは一、二のブラジル人日給労働者を雇って、山伐りの仕事にとりかかったのであった。食料はもちこんだわずかな米、副食物はパルミット（椰子の芯）であった。たん白源は、ときたまとれる鹿や猪の肉にあおいだ。

鹿なくやパラナの森はパルミット 南瓜

パルミットは食料・建築用として大きな森林中の資源であった。ぼつぼつ山伐り人夫もはいつてくるので、資力のあるものは仕事がかどった。

山伐り、山焼きが終わると、開拓地のあと片づけが行なわれ、米、豆、とうもろこし等の食糧生産をいそいで蒔きつけが行なわれる。当時は、すでにプランタデイラ（日本人はプランタ・マキナといった）ができていたので、一家全体が終日カタコン、カタコンと播種機をあやつる音を焼野にひびかせた。

蒔きつけが終わると、まだ除草はいそぐ必要がないから、家建てということになる。材木は近くにいくらでもころがっている。早く家の近辺から、建築用材を集めることは土地の整理ともなった。ここでいちばん利用されたのは、いうまでもなくパルミットであった。これを四つ割りくらいにして、芯を削ぎおとし、上皮の部分だけにしてならば、山のかずらで横棒にからげつけて家の囲

いをつくる。かずらは、大木についているガインベーという「やどり木」の根であって、高い木の又から地上まで、たれている。日本人は「万年かずら」といった。これを下からひっぼると、やどり木とともに地上にすべりおちる。五〜六メートルの長さのかずらが一株から四、五本とれるのである。

柱にはペローバその他の整い木を選ぶ。屋根はセードロ、ときにはピーニョ（パラナ松）を割って木っ端（タブイーニャ）をつくる。いま考えてみれば、もったいなような材木を、おしげもなく鋸で三〇から三五センチくらいの長さに切って薄く割るのである。寝台はパルミットがよかったが、テーブルや腰掛けは割り木を用いた。ちよくななどはもたなかったから片面を斧でたいらに削った。戸などは最初の一年間は、ジュートの空袋をたらしただけ。まるで「のれん」をくぐって家へ出入りするようなものであった。さいわい井戸は深くなかったので、トレス・バーラスの人たちのような苦労はなかった。

作物は順調に育った。意外であったことは、ここでは米がとれたことであった、国際植民地では米がとれる、ということが評判になると、事務所の人たちはもちろん外部からの視察者もつぎつぎとのぞきにくる。日本人にとって、米がとれるということは、たいへんなよろこび

なのであった。むろん、コーヒ―は「金のなる木」だ。しかし、食糧に米がとれるとなれば、安心して生活ができる。

先駆者たちの荒山で「米たたき」がはじまるころは、仮事務所を中心としたロンドリーナもつぎつぎと開拓が進み、二年目の八月ころからは、山焼きの煙が四方の原始林をつつみ、終日、太陽は黄色い顔をして、すさまじい人間の開拓ぶりをながめる季節となる。ムダンサ（引っこし）のトラックが、つぎつぎと事務所の前にならなは、また四方の森林の道へ消えていく。開拓当初あらわれたのは、日本人の顔、顔であった。

「日本人がどんどんはいりこむぞ、景気の前兆だ、さあみんな続け！」というので、ブラジル人も各国移民もあとを追う。まだ乾燥期である。トラックはたちまち北パラナ名物のポエイラ（埃）に包まれて姿を消す。

農村地区の売りだしと同時に市街地も売りだされたので、商人たちも入りこんで、掘立て小屋で商売をはじめた。小さなポテキシ（居酒屋）やアルマゼン（食料・雑貨店）があらわれる。それは米一俵、豆半俵という商品をならべた小さな板小屋の店だった。むろん日本人の「うどん屋」もできる。原始林のまっただ中にあらわれたトッコ（切り株）だらけの町、鉄道駅の予定地も決まっている。

しかし、この当時、だれが三十年後の大都市への発展を想像しえたらう。

ここは、土地会社の事務所から四キロメートルほど離れた国際植民地入植者第一陣が落ち着いたところである。

（その初入植者三家族中の一人が往時を回顧して語る言葉を、いま筆者はロレドリーナ市内にある彼の住宅の客間で聞いているのである（2））

「ここに当時の写真があります」

　　といって見せられたものは、パルミットで囲いをつくり、セードロの木つ端で屋根をふいた開拓者の家である。窓が小さいのが特長だ。家のまわりはまだ焼けだされた枯れ木が立っている。うしろは森林だ。空袋の布でつくったらしい労働着のままの家人が、家の前にならんでいる。そのなかの一人（すなわちこの話し手）はりっぱな馬に乗っている。

「これは、開拓後丸一か年ほどたったころのものです。英国の大使が視察に采たときにとつてくれたもので、私の乗っているのは大使の馬でした。写真をとるとき、ちよつと失礼したものです。私がこの植民地の初入植者の一人だというので、非常によろこんでくれて、英国へかえってからは家族のもの五人に洋服地を一着ずつ送っ

てくれました。この写真もそのときうけとったものと説明してくれる。

このときから三年後に、やっと北パラナ鉄道の初列車がロンドリーナ駅へ乗りこんだのであった。

（そのときの写真は、中西周甫著『北パラナ国際植民地開拓十五周年史』にのっているが、機関車の前面には、ブラジルと英国との国旗が交差してかかげられている）

「その写真のことですが……」

と古つわものは語りつづける。

「交差して先頭にかかげられた国旗のあとには、日、独、伊と入植順に、それぞれの国籍にしたがって三か国の国旗がひるがえっていました。やっぱりわれわれ日本人がこの植民地入植者の第一陣であったことを会社もみとめてくれている、と思って、この日の丸をながめたときはまったく目頭が熱くなるおもいでした」

かくて、一九三五年六月に北パラナ鉄道がロンドリーナに達すると、一九三二年のサンパウロ州におけるコーヒーの植付け制限とともに、北パラナへの小農の流入は、ひとしおさかんになるのであった。ちなみに北パラナ鉄道は、一九四五年連邦政府に買収されて今日の「パラナー||サンタ・カタリーナ鉄道」となるのである。

北パラナ土地会社は小独立農シチアンテの入植を主眼

として、一戸最大限三〇アルケール（約七十五町歩）とし、各市街地から四キロメートル以内は五アルケールを標準として大農場の設置をさけたので、シテアンテの増加とともに都市の発達をうながし、ブラジルではめずらしい急速な発達をとげたのであった。しかも大会社が売りだす土地であったため、それまで各地で小土地所有者がなめた地権争いの面倒がなかったことなど、安心して小農が定着することを可能にした。さらに植民地開設と同時に、日本人代理人として会社の人となった氏原彦馬の功績を見逃がすことができない。

彼の仕事熱心は有名である。

かつてロンドリーナを訪問した赤松総領事の歓迎会の席上、氏原は歓迎の辞として一席ぶちはじめたのはよいが、「わが国際植民地は、邦人発展の最適地、地味よし、気候よし、この機を逸しては禍根を永久に残すことは、火を見るよりもあきらかである。……諸君！……」とうとうとして説き去る言葉の一言一句、みなこれ北パラナ国際植民地の宣伝となったのには、列席の官民みな目をむいてしまったという。

仕事熱心、そのうえ親切でまた口の悪いことも天下無類。しかも彼は熱心なカトリック信者で、朝起きると一日の無事を神様に祈る。

「どうか、きょうも多く土地購入者があらわれますよう

に、聖母マリア様の御名によつて、われらの主イエズス・クリスト様におねがい申しあげます……」(3)

「とにかく、氏原さんがいて、いい土地をわれわれに選んでくれたので、北パラナの日本人もこうして発展するこ
とができましたのさ……」

毀誉褒貶は世のならい。しかし、彼の功績を否定するものは一人もない。

だが、それもむかしの話。今日、国際植民地の名も忘れられた北パラナは、パラナ河沿岸からパラグアイ国境まで開拓の手がのばされ、さらに南西方面へはアルゼンチンとの国境、フォス・ド・イグアッスー町の方面へ伸びている。

ノロエステ、奥ソロカバナ、パウリスタ延長線へと移動した日本移民は、三十年来、ここに新しい営農地を見出した。今日の奥地農業を語るには、ここ北パラナを
いて他にいい例を見出すことはできない。「ブラジルの同胞農家はいま何をしているか？」の問いに答えてくれるものは、北パラナの独立小農たちである。それは、

「現代の奥地シチアンテ」に後述される。

注

(1) 「国際植民地」の話は、中西周甫著『北パラナ国際植民地開拓十五周年史』を参考として書いた。

(2) 古つわものは風早慶味(俳号南瓜)氏である。ちなみに、先駆者三家族の家長の名は、風早氏以外は、早坂幸太郎氏および原国次郎氏である。

(3) これは土地の人から聞いた話。朝のお祈りにまで土地売りの熱心があらわれていた、というので評判であつた。

第6部

全盛期の植民地

(一九三〇～四〇年)

41 全盛期のコーヒー地帯

一望千里といってもいいだろう。視線のとどくかぎりの大地はゆるやかな丘陵をなして、黒々とした縁一色。約三メートル半に一株という間隔で碁盤の目にうえられているコーヒー樹も、一〇〇メートルさきは直線の畝目だけになって目に入る。そして、それから向こうはもうコーヒーの樹海にはいる。遠く赤土の車道だけが地平線近くまでつづいている。ところどころ、原始林の名残りをとどめるペローバの枯木が立っているが、あの大木も黒い小さな杭ほどの大ききで、点々とこの樹海につきたっているにすぎない。

カフェーランジア！

コーヒーの地！ いかにもその名にふさわしいながめである。昔、原始林の間を、文明の利器としていさましく走り出した汽車も、いまはただ広いコーヒー園のなかを巨大な蛇のようにうねうねとぬっていく。

このあたりは大農場のあるところで、必ずしも日本人の農場というわけではないが、コーヒー全盛時代のノロエステを感じさせるところだ。

駅はもう人口万を数えるりっぱな町となっている。中央のカトリック教会が高い塔をみせて、町のながめをひきしめている。

一九二七年ころからバスが町と植民地とを連絡するようになった。地方の人はジャルジネイラ（ジャルジンという町からとった名だという）と呼んでいる。これは、トラックを改造して客用のバンコ（腰かけ）をとりつけたもの、五人ずつ横にかけるものが五、六個ならんでいる。横から乗るのである。一〇キロメートル以内のところは二、三ミルの運賃だ。他にミストといって人間と荷物を両方はこぶものがある。これは後方半分が荷物台になっているものだ。ここには豚や鶏の「おり」も積める。米や豆なら十俵くらいはこべるだろう。荷物をもって町へ出るものには便利な乗りものである。

まだ道路はアスファルトになっていないし、必ずしも

手入れがいきとどいているともいえないから、でこぼこが多い。ことに雨水で道がいたまないように、コーヒー園のなかへ水はけの堀をつくってあるところなどはひどい。むろん、もうポルテラ（道路いっぱいについている門）はない。そのかわり、ところどころにマッタ・ブーロ（1）がとりつけられている。トラックもおる。たまにはコーヒー成金の自家用車も黄塵をあげて走っていく。

あれが日本人の植民地だ。もう町から八キロメートルほどはなれている。エスピゴン（分水嶺）になっているあたりは、コーヒーだけの大地であるが、小川に近い低地は、車道が横切っている。

ロッテ（地区）が帯状に細長く割ってあるので、みな車道に近いところに住居をかまえている。二〇〇メートル・おきくらいに並んでいるので、ちよつと大農場のコロニアのようにみえるが、もうほとんどレンガ造りの白壁であつて小さなベランダのようなものもついている。わきのほうにレンガ丸出しのやや小さい家屋が三、四軒ならんでいるのがコロノたちの家にちがいない。マンガやみかんの木も家の近くにみえ、小さいながらもコーヒー乾燥場があり、倉庫もできている。それが型のごとくどのロッテにもみえるので、植民地の遠望は、かなり整然としたものだ。低地のほうには牧場もところどころ

に見え、ときには二、三頭の乳牛らしいものが静かに牧草をはんでいる。ぜんぜん草のみえない地面むきだしの豚の囲い（マングロン）では、数十頭の豚がうごめいているようだ。たいがい道の下がわが住宅区域になっている。

植民地の中央にいくと、突然道路の上側に門がまえのある有刺鉄線でこまれた広場があつて、その奥にひときわ大きな建物がある。ベランダつきの玄関があつて、その両側には四、五個ずつ、大きな窓があいている。むろんガラス戸が上下にあけたてするようになっている。これが植民地でいちばんりっぱな建物、小学校である。

校庭は、ふみかためられた芝生なしの広場である。学校から二〇メートルほどはなれたところに、少し小さな建物がある。学校ほど新しくなく、窓にはガラスがはまっていない。小学校新築前からある青年会館だ。ここは校庭の一方が野球場になっていてスパイクではいりするため、あたりの土がかさかさになっている。

会館とは反対側に、花壇にかこまれた家がある。先生の住居である。同じような建て方の家がもう一軒あるがここはブラジル人の先生がとまっている。ときどき転任するので花壇はできていない。いまの先生は町から通っている。

カーン、カーンと先生の家の軒下にぶらさがった鐘が

なる。年後二時。生徒がいつせいに校舎をでて、庭へながれだす。男女四、五十人いるのである。ブラジル人の子供もまざっている。教室が二つにわかれていて、ポルトガル語のほうも同時間にやっているようだ。男の子は半ズボンにスポーツ帽子、女の子は紺の短いスカートに白いブラウス、おかつぱの頭髪に白いリボンを結びつけている。廊下のほうで、二、三人ずつかたまつてバシコにかけているのは、ランチを食べようとしているのだ。

サンドイッチをもってきているものもある。

先生が二人裏からでる。一人はブラジル人の若い女性で、一人は中年の日本人だ。女の先生は日本人の先生のところ、いま先生といっしよに家でほうへ歩いていくところだ。夕方バスで町へ帰る。先生のところへあいさつかたがた寄ってカフェーをご馳走になろうか。

客間兼食堂は、こじんまりとして、一方に本箱があり、それと反対がわに、ガラス戸のついた食器棚がある。壁には、ししゅうの日本風景が額になっていて、そのわきにジェットリオ大統領の写真もかかげられている。この時代は、まるでお守りのように大統領の額をかかげたらしい（一九三〇年以後）。

本箱の上段には、教育学とか、教授法とかの部厚い本

がならば、下段のほうには少年少女の絵本らしいものがつまっている。

先生にあいさつして、特別用事もないのに立ちよったぶしつけをわびる。

「そうですか、遠いところをわざわざ、さあカフェーをおあがりください」、奥さんが新しい客用のシャーカラ（茶碗）にコーヒーをついでくれる。ポルトガル語の女先生がきよとんとしてるのでブラジル語で「ボアターラ・デ・コモヴァイ・プロフェッソラー」と手をさしだす。「オージエ・ムイト・ケンテ（今日はあついですね）」とかなんとかいっている間に女の先生もだんだんうちとけてくる。

植民者からもらった特別コーヒーらしく、なかなかおいしい。女の先生は「日本人の子供は従順でおしえいい」とか、「算数がうまい」とか、「絵を上手にかく」とか、お世辞をいいます。

「エ・オ・ポルトゲース？（ポルトガル語は？）」

ときくと、ちよつと微笑をもらして、

「よくよめるし、字も上手にかきますが、なにしろ、家へ帰ると日本語ばかりでしょう？」

とあととはなにもいわない。

「すると日本語のほうはらくですね」

と日本語の先生のほうへむきなおる。

「らくなはずですがな、日本のことをしっている子供はただよろしいが、ここ生まれのものは、読むことはよんでも、どうも内容がピンとこないらしいですなあ。おうむみたいにペラペラやるだけですよ。それに、学校でならった日本語が、家へ帰ってそのまま役にたつというわけではないし、なにしろ、親たちのつかっている日本語ときたら、ひどいもんですから……」

温厚な先生らしくみえたが、ブラジル語はあまり得意ではなさそうだ。それでも、

「トード・ジフイーシル、トード・ジフイーシル」

とポルトガル語の先生にも同情するように入った。

筆者は、ただ植民地の風景を叙述するだけが目的なので、先生方や奥さんにおいてまして学校の門をでた。

もう、この植民地にも森林といえるものは全くない。ただ、低地の一部に若々しいユーカリプトがこれからおおいにのびようとしているのがみえる。たきぎ補給のためにあわてて植えたものであろう。

これから少しさきの四つ角に、ポルトガル人のベンダ（店）がある。そこは必ずバスが停車するところなので、コーヒー園の道をゆっくりあるくことにした。午後の日が頭の上で照りつける。

(1) マッタ・ブーロとは「ラバ殺し」という意味だが、牧場のある土地の境界を横切るとき車はとおれるが牛馬はとおれない木の格子になった橋。

42 初期植民地全盛時代の生活

植民地の気風

一九二七年から一九三四年まで、渡伯移民全盛時代をむかえた。そして、一九三三〜三四年には年間二万余を数えたのである。これは一九二四年から開始された日本政府の渡航費全額支給により、従来の若いものを主とした出稼ぎ移民から、一家をあげて、子供も老人も、ともに移住する傾向に変わっていったからである。

また、一九二九〜三〇年における経済パニックとその結果として起こったジェツーリオ革命を経たのちは、日本移民は単なるブラジル人の大コーヒー農場ばかりでなく、いわゆる「植民地」の日本人小農（シチアンテ）のもとへも、一家族、二家族とはいり、そこで契約労働者として働くようになる。こうして、植民地では、シチアンテと同数、あるときはそれ以上の新移民コロノがふえて植民地の気風をより日本的なものにかえる力となる。

日本人会は、むろん、自ら地主とした自作農が牛耳っていたが、多くの植民地では、コロノも日本人会員となり、場合によっては、会長以外の役員にもなった。小学校の教師には、たびたび新移民がえらばれた。

この時代は外国へ移住したことを、ほとんど意識しなかったほど、ブラジルの日本移民は、同胞社会のなかに不自由なく生活することができた。のちにある新聞記者が「あのころの邦人社会を考えると、日本人の世界にブラジルがあった。いまはそうじゃない、ブラジル人の社会のなかに日本人がいるんだ（1）」と述懐しているのを見ても、その間の消息はわかるだろう。

移民二十五周年を迎えた一九三三年ころは初期の植民地が全盛時代にさしかかったところで、旧移民たちは、一応生活の安定をえて、小さいながらも「パトロン」とよばれる身分になっていた。

こうした時代の一九三五年には、同胞社会の文化伝達機関としての新聞は日刊となり、教育普及会は、児童教育の指導と援助をめざして全植民地と連絡をとるようになった。移民たちの生活が、つよい日本色を呈するようになるのも当然であった。

しかし、その半面では、このころからブラジル政府のナシオナリザソン政策も、そろそろ本格的となり、外国移民の文化生活に、いろいろ制限が加えられて、移民の気

持ちに、つよい緊張感をもたらすことになる。だから同胞社会には――、

旧移民の（とくに植民者自作農をさす）実際生活におけるブラジル化、二世の成長。

新移民（とくにコロノ）による新日本文化の輸入（日本の中国大陸進出による、軍国主義的イデオロギーをともなったもの）。

ブラジル政府のナシオナリザン政策（急激な外国移民の同化政策）。

日本語教育問題を中心とする移民の反同化的傾向（いわゆる“民族の苦悩”）。

などの問題がかさなりあい、一面では新日本文化による新しい気分にひたりながらも、それを否定する同化政策にみまわれ、それへの反抗気分をやしないつつあった時代でもあった。そして、この新日本文化には、必ずしもなじみきれない二世たちも、この時代には成長しつたあったのである。

彼らのなかには、植民地から都会へでて勉強にいそしんでいるものもあったが、大学に学んでいるものは、ほとんど準二世といわれるブラジル育ちが主で、二世はまだ中学程度のものがその大部分であった。

彼らの意識は、必ずしも日本人的なものを離れてはいなかったが、ブラジル人であることの自覚をもつように

なっていた。また、学校生活において、彼らはつねに、その自覚をうながされていたのである。

彼らのこうした自覚は、植民地の日本主義者たちの気持ちに反発するものがあつた。植民地の父兄たちは、子弟たちがブラジルの学校に学んで、ブラジル式になつていくことにかなり不安を感じていた。それは、古い移民たちが、まだ永住を決しかねていた事実によつてもうなずけることである。

新移民がどんどんはいりこんで植民地の空気を一新したとき、日本へのあこがれを強めていた旧移民たちは、それだけブラジルに同化することのむずかしさをしらされたのだともいえる。旧移民が、かつては先輩としての自信をもち、また尊敬されていた時代に比べると、彼らはブラジルの生活にやや疲れをみせてきたようである。このとき、ナシオナリザソンの嵐は、彼らの心を、いつそうつよく「日本」のほうへ向けることになつた。日本語教育問題は移民たちの不安をつよめ、やがて反同化運動にかりたてることになるのである。

この章では、一応初期植民地の全盛時代に移民たちの生活がどのようなものであつたかを叙述し、最後に「日本語教育」の問題がいかに深く彼らの心をゆすぶり、永

住か、帰国かの岐路にたたせたかを記してみたい。

小パトロン気分（住居、食事）

まず個人、あるいは家庭の生活からはじめる。そのころ初期の植民地は、創立から約十年くらいの年月を経過した時代にあった。コーヒー生産もやや軌道にのり、各植民者も、それぞれ、二、三家族のコロノあるいは「契約者（2）」をかかえて、小パトロンの生活にはいったときであった。住居もレンガづくりとなって、あるものは、ベランダつきの玄関をかまえた。たとい木造の場合でも、正面の入口は、農家の便利よりも、むしろ外来の客のために体裁をつくろったようなところがあった。日本直来の植民は別であるが、ファゼンダを経てきた移民たちには、意識的、あるいは無意識的に、ファゼンデイロ（大農場主）の住宅を小さく模倣するような傾向がみられた。「末は百万本のファゼンデイロ」という夢の、百分の一でも実現したことを、自ら確信したかったのであろう。今日でもそうであるが、植民地の住宅が、家族員の労働を中心とした農業者の便利を考えるよりも、小資本の経営者が住まうような様式が目だった。「あこがれ」がさきにて、「機能」がわすれられたような具合であった。だから、玄関のほうは、なんだか空家を訪れたような感じがす

るのに、裏のほうへまわってはじめて、ここは働く農民の家であるということ、実感としてうけとるような場合もあったのである。こうした点に、コーヒー成金の生活とその心理がうかがえるのであった。

しかも、彼らが家父長的家族主義をまもり、使用人といえども、気心の知れた日本移民コロノをやとい、家長が日本人会や組合の仕事で家をあけてとびまわっているときでも、主婦以下、子供たちまで、使用人以上に働いていたのである。

住居の外観がりっぱになつたわりに、考えられなかつた点に住宅の不備があつた。ここには、炊事場の便利が伝統的な日本農家の機能性はなく、といつてファゼンデイロの主婦が、多くの使用人を使ってきりまわしていた広さもない。井戸はブラジル式巻きあげ（クールダ（3）、バルデ（4）、マンニベーラ（5））でポンプはごく少なく、水タンクなどはほとんどみられなかつた。

要するに、家が大きくなり、床板が張られ、各家族員が部屋をもち、ベッドやテーブルをそなえ、あるときは客間が食堂と分離し、日常の食事が、炊事場でないときは隣接のコツパのほうで行なわれるようになったことが特長だといえる。

食堂は来客接待や特別なフェスタ（もよおし）の日だけに使用するので、普通は家族たちの「居間」といったほうがいいかもしれない。

ここには、ふだんは使用されない客用の食器棚があるが、はじめはガラス戸のついていない観音びらきのものだが、だんだんガラス戸棚が使用されるようになる。そして、日本式の食器もかざられることになる。戸棚の上に、ブラジル人がよくかざっていた赤いペンキ塗りの石膏の家の置物があるのは、なにかのコンクールに賞品としてもらったものであるだろうか、その隣に日本着の人形が並んでいる。新移民からもらったみやげ物といった感だ。

サーラの真ん中に十人、二十人とならんで向きあえるようなテーブルが置いてある。ピカピカにふきこんであるが、テーブルかけ（模様づきの織物やししゅうのあるもの）は使っていない。長いバンコ（腰かけ）が両わきにおいてある。椅子も伺脚があるが、腰かけるところが細い植物性のひもで網のようにあんだものだ。蒲の葉であんだ安くて丈夫なものもある。戸棚のわきとか隅のほうには、台の上に蓄音機がのっている。五、六年前までは、大きなラッパがついていたが、いまはかなりシツクなもの。

むろんネジまきである。夕食後のしみの流行歌をきくためになくってはならないものだ。壁には、おじいさん、お

ばあさん（家長の父母）のひきのばし写真や、家長がかつて軍人であった当時をしのぼせる、勲章を胸にぶらさげたひきのばし写真が額に入れておさまっているが、あまり高いところにあるので、見上げると首がいたくなる。額を傾斜させるために下方を釘でおさえられているが、そこには小さな三角のまくらがついている。こんなところだけに、いくらか日本的な伝統がのぞいている。ずつと下のほうの手のとどくところには町の店からもらってきた「ひめくり」の暦がかけてある。まだ大きなカレンダーなどはやらなかった時代だから、部屋のなかは案外すつきりしている。それでも入口の上のほうにえびす大黒の額がかざつてあるのは昔もいまも変わらない。「えんぎがいい」となれば、多少不細工なものでもかけておく。それから、たまにはジェットリオ大統領の額がかかっていることがある。なんの目的なのかわからない。このころはまだ天皇陛下の「御写真」をやたらにかかげることはなかった。そんなことをするのは、もったいないことだと思っていた。

寝室には、ベッドに白いシートが目だつ。仏壇があったり、神棚があったりするのは家長の部屋である。しかし、各自がまだ土を相手に働いていた時代であったから都会人の部屋のように、なにもかも片づいているというわけにはいかない。壁の衣服かけには、灰色にいろあせ

た労働服がかかっている。女ものといえどもはなやかな色彩はみられない。きれいなのはレンソくらいなものだ。電気アイロンがないから労働着のたぐいは、さつと一とおし炭火のアイロンがかかっていると行った程度。これは衣服についているかもしれない害虫の卵を殺すためにもぜひ必要なのである。冬は家であそんでいる子供たちが、ネルのズボンのようなものをはいているのは、この時代の農村の流行であった。労働する婦人たちも、たまにはモンペをもちいた。

床は板であるが労働靴であるくため、いつも砂でじやりじやりしている。一週に一度水であらう。普通の日はほうきではくだけだ。

日常使用している食事場は長い食卓にバンコ。食器棚は戸のないただの棚である。さじなどは缶詰の空缶にさしこんである。

下は、セメントのたたきか、レンガ敷きである。炊事場のほうをのぞいてみる。フォゴン（かまど）は、第二期のものより、いつそう大きく、レンガで積んだうえに、今度はセメントで上ぬりがしてある。三つか四つ穴のある鉄板がのっている。しかし、油がしみついているから真黒だ。いちばんうしろに煙ぬきの穴ができているから火はよくもえる。この長方形のフォゴンの下部には大きな空間ができていて、そこにたきぎがつまっている。ま

だフォルノ（天火）づきの鉄製フォゴンはあまりつかわれていない。鉄釜は日本製のものではなく、パネーラ（6）、カルデイロ（7）カッサローラ（8）といったもの。ここで使用する水は大きな樽や、二〇リットルのブリキ缶をつかっている。ひしゃくをつかうときもあるが、たいてい二リットルの丸い空缶に「手」をつけたもので代用している。フォゴンの上には、トウシーニヨ（豚の脂身の塩もの）がぶらさがっているのはファゼンダ時代からの伝統である。

流しは日本式に木の浅い箱で、壁に穴をあけて水は外へながれるようにしてある。流しの上方に食器棚があつて皿などはふかずにさしこめるようになっていて、ところもある。

家のものが食卓につくとしよう。むろん、一方のはし（奥まったところ）に主人ががんばり、その両側に息子や娘たちがかける。あるいは日本人使用人も息子たちといっしょであるが主人と向かいあつて主婦がかかる。しかし、女たちはいつでも立ち上がれるほうに席をとる。そして彼女たちが席につくのは、食物が全部卓上にならべられてからである。

料理はなんといつても白いご飯と、夜なら味噌汁がつくが（昼もつくるところもめずらしくない）、これはブラジル製チジェーラ（どんぶり）に入れる。昼ならフェイ

ジョン、野菜物の油煮、醤油をかけた漬物といったものが主である。これに牛肉の煮つけや塩鱒の焼いたものなどがでることもある。ブラジル式干し肉などは、ときたまフェイジョンのなかに入れるくらいで、独立の料理となることはまずない。もう干鱈はあまり食べない。日曜日など、ときたまマカロニが試みられる。どんなに新移民がはいつてきて、植民地に日本的気風がさかんになつても、この様式はほとんど変わらない。むしろ「ブラジルではフェイジョンを食べないと体がもたない」などと、旧移民たちは、ブラジル人と同じようなことを新移民に對していう。しかしフアリーニヤ（9）はたべない

食器は深皿のかわりに浅い皿を使うところもあるが、一般には依然としてほうろうびぎの白い深皿で、これでスープものめばご飯もたべる。フォークよりもさじを主に使う。このさじだけというのは長い期間つづくし、今日でもそのままのところが多い。マテ茶が普及しだす。あおいシユマロンであるがこれを日本式にいらてのむ。もちろん、食後コーヒーをのむものもある。一度にたくさんいられたコーヒーがかまどの後のほうに、ブルーレ（10）に入らてのせてあるので、いつでものめるのである。砂糖はいらっている。砂糖はもうあの真っ黒いマスカーボではなく、レドンドと称する赤っぽい粗糖だ。食卓に水がでていないのは食物がまだそれほど油っこくないから

でもあるが、日本人は元来、食事に必ず水をのむという習慣がないからでもある。夕食にはたいがい味噌汁をつくる。

風呂はもう露天風呂ではない。板ばりの流し場をつけてどんだん湯をつかえるようにする。そのころは地方都市も発展しているので日本式の釜もできていた。釜のないときはドラム缶の五右衛門風呂だった。燃料は薪である。

便所はいわゆるカジーニヤ（小屋）で、家から少しはなれたところにある。きんかくしだけが日本式だ。穴はふかくはる。

家のまわりには、年寄りのいる家のほうが草花や植木が多い。少しはなれたところに一、〇〇〇メートル平方くらいのコーヒー乾燥場がある。レンガ敷きの上にセメントが流してある。その様にツーリヤ（倉庫）があつてこのシチオの家を遠望するとファゼンダのミニアツーラを思わせる風景となる。家の近くには、みかんやマンガの木が年ごとに大きくなっていくし、ジャボチカーバも日本人は好きだ。低地のほうにはバナナもうえてある。

ブレジョン（湿地）は整理して野菜畑になっている。このごろでは、なす、きゅうりは夏のものとして必ず植える。大根もねぎもある。シュシュー（はやとうり）棚もできている。これは漬物にもなるから野菜の少ないとき

には便利である。

蓮根もあるが、どうも日本のようにやわらかでない。花がきれいだから仏壇にそなえる。

つきあい（お産とお葬式）

植民地における社会的生活といえば、近所隣とのつきあい（だが、朝晩顔をあわせるようなことはない）。日本人会や青年会、それから新年や天長節のよりあい、結婚式、出産祝い、葬儀など。

娯楽としては祝祭日の運動会、演芸会（のど自慢はまだない）、その他巡回映画もあった。映画についてはあとでかく。

いままでふれていないのはお産とお葬式。

まずお産について。

うめよふやせよ、と期待する植民地において、お産は一家のよろこびである。もうエンシャーダが一丁ふえたとはいわなかったが、身内の人間がふえることは力づよいことであった。初孫を得てよろこぶ植民者もいた。だが当時は、まだ、ブラジル人が一人ふえたとはいわなかった。

どこの植民地にも産婆さんがいて、いろいろな注意を与

えてくれた。開拓当初は、若いものだけの場合もあり、すぐ相談にのってくれる女の人が近くにいなかったり、医者には迎えに行っても、なかなかきてもらえなかったりして、出産の不安は大きかった。「山のなかで子供を生む」ということは女たちにとって一番気にかかることであった。亭主にとりあげてもらったという話はめずらしいことではなかった（レジストロ植民地のところで産婆のことはくわしく記した）。

いまはすっかり事情がちがう。ことに新移民がふえてくると、コロノしながら産婆をやれば生活のたしになる。お産についても、ブラジルのと日本的な差が論じられるようになる。それは、日本的な産婦は、どんなに難産のときでも、たいがい歯をくいしばって、決しておおげさにわめきたてたりはしないということであった。ところが、二世はどうもそういったがまんがなくなるというのであった。

うれしいときも、くるしいときも、自然な態度をとらないことが日本人の美德だとそのころの一世は考えていたのである。

お産みまいには、主として女たちがでかけた。むろん祝いの金を包んでいく。あとから名づけ祝いと称して、みまいに行った人たちのもとに、羊かんがくばられたりする。町には菓子屋ができているから世話がない。

誕生日がきたら、隣近所、友人、知人の家族をまねいて盛大に祝う。主として女、子供がよばれる。長男の出生をとくによるこんだのは、家族主義の日本人としては当然であつたらう。

つぎはお葬式。

この時代はまだカトリック式がほとんどなかった。だから、すべて仏式だったともいえるが、坊さんのいないところが多かったから、誰かがかわって、まず死人の枕もとでお経をあげた。宗派はとわなかった。お経をあげるものさえいないときは、お線香をあげて各自がおがんだ。

お線香さえない時代には、ろうそくをとすだけであつた。

このころでは、お通夜るときは枕もとにろうそくをたて、お線香をあげた。香典をそなえるのは日本人社会の習慣であるが、金額は五ミルとか一〇ミルとか、きまつてはいないが別にきばる必要もなかった。線香代だ。

町に葬儀屋があれば、葬儀車をたのんでくを。ブラジルの古い葬儀車は黒ぬりの馬車であつたが、これはほとんど日本人植民地へはいらなかった。あとで葬儀自動車はあった。あの当時は、葬儀車があつたりなかったりで、多くはトラックで会葬者ともに墓地の入口まで

送った。お棺はすべてカトリック式のを葬儀屋あるいは普通の店から買った（初期には、ほとんど手製のものだった）。

卒塔婆はないから、特別にあつらえてつくらない限りできあいの白木の十字架をもちいた。これに「南無阿弥陀仏」あるいは「南無妙法蓮華経」とかく。むろん、なにもかかないときもある。ただし、俗名、生・没の年月日は必ず入れ、行年何歳と記す。みんなが一握りの土を墓穴になげこんだあと墓掘人が土をかけ最後に長方形の塚をつくる。十字架は塚の後方にたて、その前に花をかざる。当時はブラジル式のブリキ製ペンキ塗りの花輪をそなえた。塚の手前のほうにろうそくをともし、線香をたてる。ここでも、できればお経をあげた。それから、親戚か友人代表によつて会葬者一同へお礼の言葉があつて、葬式がおわる。

親しいものは、もう一度死者の家へもどり、仏壇に線香をあげ、死者の思い出話を語りながら精進料理の「葬式ご飯」をご馳走になる。むろん、こんなときにも植民地の慣例として必ずピンガがでる。駅に遠い植民地ではお葬式も一日仕事であつた。

それから初七日や四十九日の法事もやった。このときもお経をあげるが、お墓まいりだけですませることもあつた。遠くからやってくる人もあるので、墓参のあと

では来てくれた人たちを家へまねいてお茶や菓子をだし、ときどきは精進料理をふるまう。精進といってもむろん名だけであった。

できれば、宗派によって、いろいろやりたいところであるが、戦前はお寺もなく、坊さんのいないところが多かったから、すべてが超宗派で略式であった。そして、だれもそれをあやしまなかった。

以上の例はクリスト教徒以外の日本人の場合であるが、アリアンサ、チエテー方面では新教徒がかなりいたので、彼らははじめから新教徒的葬式をいとなんだ。牧師もいたし、牧師にかわる人も不足しなかったから、全然不便はなかった。

墓がふえることは、移民にとって、この国にうごかすことのできない生活の根を残すことであった。「おやじの墓」「わが子の墓」をおき去りにして、どこへ行こうというのか。永住を決心する一つの理由となる。しかし、ほんとうにりっぱな墓がたつのは、もっと心の落ち着いた戦後の時代をまたなければならぬ。

新しい日本人会

植民地に新移民がふえ、「新日本の気風」がみなぎったとき、どんな変わったことが起こったろうか。

日本人会を中心とする天長節の祝賀式などでは、領事館から送られてきた「御真影」がうやうやしく高所にかかげられるようになり、式順とか、祝辞につかう言葉がやかましくなる。そして、会長、学務員、教師たちが格式を重んじるようになる。

どこの植民地にも、物知り、あるいは一種の「うるさ型」の人物がいるもので、こういうものを顧問にまつりあげ、その都度、いろいろな注意をうけるようになる。もし、こういう人物に相談せず「独断」で事をはこぶと役員たちは新聞に除名広告をだされたり、ときには謝罪広告までできなければならぬことになる。

植民地内に「地主」と「コロノ」というような階級別があらわれると、利害関係から、顔役をかつごうとする人間もでてきて「ポリチカ（11）」も昔のむじやききを失ってあくどいものとなる。

青年会とスポーツ

青年会を中心とするスポーツ（主として陸上）もさかんになり、各駅合同の大会がもよおされるようになる。

一九三〇年ころ、はじめてスパイクを使用するもので、地方の青年たちをおどろかせたというから、新文化の導入も大きな刺激だったわけだ。「四十年史」三六一

ページ以下の記事を左に転載する――。

「邦人最初の陸上競技大会は、第一回汎ノロエステ陸上競技大会と銘打って、プロミツソンでひらかれた。

(略) 聖市から安養寺が審判長として出向いて、いろいろ世話をした。もちろん、その際の記録は、現在からみて低調きわまるものであったが、その果した役割は実に大きい。記録も低調なはず、その当時の一挿話をここに紹介しよう。

この大会で、どこかのチームの選手が日本から持参した「スパイク」をはいて出場したが、これが他のチームの俄然苦情の的となった。その言い草は「飛び道具とは卑怯なり」というのであった。「スパイク」を飛び道具としたところに、一概に笑えないものがあるではないか。しかも競技場が作りたてのばさばさであったので、事実スパイクは何の役にもたたず、かえってぬかりこんで、はだしが逆に飛び道具となったというナンセンスな話も伝えられている」

という具合だった。

弁論大会

青年会が中心となってやったもよおしごとに弁論大会があった。これも新しい移民たちに刺激されて盛大に

なったものである。

大会は審判員によって採点され、参加した会の対抗コ
ンクールになるため、いよいよ熱があがり、閉会後は話
題をゆたかにしたので植民地における新日本ムードをあ
おりたてた。

「立て板に水を流すごとく」というのが青年たちの賞賛の
的であった。永井柳太郎とか鶴見祐輔とかの名が青年た
ちの口にのぼった。青年たちは、夜、会館に集まって先
生から充分添削してもらった原稿を、朗々とよみあげと
どこおりなく暗誦せねばならなかった。ときには、自分
の手におえないテーマになると原稿は他人に依頼して自
分はその暗誦をつとめるだけでいい。質疑応答などは行
なわれなかったから、うまくよみあげればよかったので
ある。もし野次にあった場合などは、ちよつと休んであ
たりをみまわし、いちだんと自信ありげな態度にもどつ
て、また暗誦をつづけるのであった。

「満場の諸君！」ではじまり「諸君の自覚ある努力にま
つ次第であります」とみんな型のごとく言葉を結ぶ。

テーマは「大和民族の世界的使命」「明日の世界は青年
諸君の双肩にあり」など、でてくるものは大同小異で
あった。たまには、「ブラジルにおける第二世の使命」な
どというのとびだす。しかし、内容は、ほとんど日本
の雑誌『キング』や『雄弁』から抜粋したもので、ブラ

ジルの社会や歴史にふれたものは、ほとんどなかった。サンパウロ日本人学校父兄会が編纂して、各地の日本人小学校へ配布した「ブラジルの地理」「ブラジルの歴史」は、一九三五年ころのものである。それも、どれだけ読まれたか疑問である。

青年会の会則中の「目的」の条には、「親睦」とともに「修養」という言葉がみられた。教養という言葉がつかわれずに、もっぱら修身教育に関係の深い「修養」がさげられたのである。そして、「自覚ある青年たらんとす」とか「青年の自覚に資す」とかいうことまで会則のなかにみいだされた。むろん、この修養において、青年たちは日本の美風である家族制度も「研究」するてとが約束されたために、家長たちには、青年たちを手もとにひきとめておくためのたいせつな「修養機関」であったし、そのため援助もしたのであった。自覚とは、こうした制度を日本人本来のものとして自らさとることであった。しかし修養を目的とする青年会であっても、別にそんなことをテーマとする研究会ができたり、読書会が永続的に行われたわけではない。弁論大会によって競技的にさげられるのが関の山であった。しかし、この弁論大会を機会に青年たちの日本語が上達したことの意義は大きかった。青年たちはそのために「ふりがな」をたよりに、『キング』や『雄弁』をよんだのであった。

この弁論大会は、のちの「のど自慢」に比すべき盛大さを示すことがめずらしくなかった。このとき、青年たちは多くの知りあいをつくり、父兄たちは婿さがしや嫁さがしに大会を利用した。まだ、ダンスは植民地にはいっていないかった。

ところで、こうしたときの花形は、なんといっても新移民の青年たちであったところに、やはり、新日本文化ブームが特長づけられるのである。

巡回シネーマ

植民地に日本的気風をもたらす役目を果たしたものに巡回シネーマ（映画とはいわなかった）があつた。しかしこれを記述するまえに、電力のなかつた植民地では、どうしたかを説明しなければならぬ。

「上映は、いまのように自家発電なんかしている家はないので、すべて、植民地のカミニヨン（トラック）が使われた。一方の後輪を上げて動かし、ベルトをかけてダイナモをまわすのである。一キロワットの発電機が六、七〇キロもあつた。したがって移動はたいへんな労力を必要とした（3）」

という。このカミニヨンが植民地にあらわれたのが一九二六、七年ころだったし、斎藤政一の「日伯シネマ社」

ができて地方巡回をはじめたのが一九三〇年であった。だから、それ以前は、こんな巡回シネーマすらなかったのである。

植民地で上映されるときは、一方に白い布を張り、その前に収穫用の布を敷いて観客全部がその上にすわる。後方からトラックのモーターをドツドツとうごかして前方の幕に映写する。これを「弁士」が声色まじりで説明するわけだが、たいせつなところへくるとフィルムがぶつつり切れる。これをなおすあいだ、観客はもってきたピングの壘をあけ、一杯ひっかける。短いフィルムだったら、たいがい二回上映。そして料金はハナであった。

「封筒に入れた五ミル札。それをいちいち、ハナのお礼を申しあげます、とよみあげた。少ないところで六〇ミル、多いところで七五ミル、これでけっこうやっていたのだ」そうである。

映画よりいちだんと古いものに浪花節があつて、これは「会館」以外に個人の家でもやった。個人の家でやる場合はご馳走もするので、ちびり、ちびりやりながら聞ける。これももちろんハナであったが、謝礼の「寸志」も出した。

しかし、時代の先端をいくものは、なんといっても流行歌である。むしろ、レコードがこれを広める役をつとめたが、新移民が宴会の席上でうたってトップをきった。遠く一九一八年ころ「流浪の旅」がうたわれ、二四、五年ころの「籠の鳥」はブラジル人でもおぼえたほど流行した。当時は、満洲事変後の大陸ものがはやっている。これは軍国的イデオロギーとは似ても似つかないような哀調をおびたものであるが、移民たちの郷愁をそそるには充分であった。

軍国調の歌のほかには「波浮の港」とか、ハア小唄といわれた「島の娘」などの民謡調があった。また、「影を慕いて」のビオロンうたに、青年たちは、ギターをかきました。こうした流行歌も日本語を伝え、日本的センチメントを、植民地の青年男女の胸にきざみつけた。ビオロンは地方のブラジル人が好む伝統を日本の流行歌にかえたものである。「浪花節」をカンタ・ブラーボ（訳して「りきみうた」とよんで、「外人」の前でうたっては恥ずかしいものとした若者（必ずしも二世ではない）たちにとって、このビオロン歌はとくに歓迎された。

新移民によってもたらされた民謡舞踊も多くの植民者から歓迎された。簡単な日本着に日傘をさしたおどりは学芸会にまでとり入れられ、親たちの郷愁にうったえ、青年たちのあこがれをつよめた。

その他、新移民たちのなかの女性の日本的なめらかな言葉づかいや「しな」をつくったもの腰など、旧移民の心を日本的なものに向かわせるフアクターはいろいろあったにちがいない。

こうして、新来移民の増加とともに、植民地のみならず、一般同胞社会は、全く、ブラジルのなかでありながら、そのブラジルを同胞社会のなかから外部社会せしてのぞいているような時代をむかえたのであった。それは一面、自由で幸福な時代であったが、自分たちの住んでいる現実の社会にあつて、生活の設計をたて、着々とこれを実現するというような堅実性を失い、つねに祖国日本に、また遠いアジア大陸に想いをはせるという移民としては将来性を失った、浮草のような生活態度にながれるおそれも充分あつた。いわば、三十年の歴史を経て、ようやく永住の根を張りだしたときに、再び出稼ぎ気分になりまいもどるといふ不幸を、無意識のうちにつちかうものであつた。

東亜共栄圏の夢と棄民思想

「祖国日本の繁栄」「東亜共栄圏」「アジアの指導者日本」などという言葉は、どうしてもこの国の生活に同化しきれず、新移民に対しても「頭の古い日本人」となつてし

まった旧移民の心につよく「棄民思想」をうえつける役目もはたした。

棄民思想は、二つの時代にあらわれた。その一つは、契約移民としてファゼンダへはいったとき、言葉がわからず、事情にくらく、これでは囚人の生活同様ではないかと感じたとき、自分たちは日本政府からみすてられた人間であると考えたのであった。そのとき移民は棄民だったと思った。

いまはまた別な意味で棄民を感じているのである。自分たちはブラジルでカボクロのような子供たちをかかえて「のん気」にくらしている。だが、それは、八千万同胞が勇ましく行進していく方向とは全く無関係なところへ落ちこんでいく。ブラジル移民は祖国日本からのけものにされてしまったという感である。海外発展という言葉は、自分たちに与えられた国家的使命であると思っていたのに、実はアジア大陸への進出こそ本当の海外発展だったのだ。ブラジル移民などは、なにか、ある時代における日本政府の気まぐれから行なわれたことで、すでにすぎさったはかない夢であった。われわれのブラジル移住はまちがいであったのだ。われわれは世界の果てにすてられた一握りの無用な民にすぎない、という考えである。

ブラジル育ちは気がきかない

しかし、ここまで到達するためには、べつな理由があった。それはブラジルにおける外国移民の子供に対する外国語による教育の制限であった。人はパンのみにて生きるものにあらず、あんなに金もうけ一点張りにみえた移民でさえも、自分たちの子供が、これによって日本人としての資格を失うのだ、ということに考えおよぶと、自分たちのこの切実な希望が全くききとどけられない外国政府のもとで暮らさなければならぬ身の上について、暗い絶望を感じたのであった。

あの禁止にひとしい日本語教育の制限が、かくも移民たちの心にこたえたということは、一面では、植民地内に「ブラジル育ち」の子供たちが、どんどん成長しつつあり、彼らと親たちとの間に、多くの「みぞ」ができてかっていたということである。『パウルー管内の邦人』に現勢調査の結果として述べられているように、当時の植民地人口の「三割五分以上は伯国出生児であり、さらに幼少のころ同伴されて渡伯した、いわゆる準二世なるものを推定合算すると、ゆうに全人口の五割五分に達する」「ブラジル頭」がいたのであり、「今後十年を経過すると、

——すなわち一九四九年になると——その好むと好まざるにかかわりなく、実際問題としては、伯国出生者ならばに、準二世たるブラジル育ちが、邦人社会のあらゆる方面に中心となる」ことが予想されているにあつたのである。

「ブラジル育ちは気がきかない」

「ブラジル育ちはピントがくるっている」

「ブラジル育ちはトロクさい」

「ブラジル育ちは心にしまりが無い」

移民者たちは、自分のこと、自分の俸のことは棚にあげて「ブラジル育ち」や「二世」が、自分たちの気持ちにピッタリこないことをはがゆく思った。そして、ときにはブラジル育ちが目の前にいることも知らずに「ブラジル育ちは気がきかない……」と口走って、ブラジル育ちから、「あなたの息子はどこ育ちだったんか！」とやりこめられてどぎまぎすることもあつた。

「ブラジル育ち、ブラジル育ちってばかにしなさんな、ブラジル人がくると、言葉もわからんもんで、すぐ逃げ出すくせに……」とやられる。「わしら好きでブラジルへ来たんじゃない、パイたちがつれて来たんじゃない」とどなられる。「わしらをこんなに働かせんで学校へやんなさい！」と追撃はますます鋭くなる。

「ブラジル育ち」や「ブラジル生まれ」は植民地内の少な

いブラジル人につきあい、学校のブラジル語の時間にはブラジル語を学び、ブラジルの歌をうたい、けっこうブラジル語も上手になり、ブラジル人の気心も理解するようになったのである。よろこんで町へ使いにでものもブラジル育ちの青年であり、かえりがけには、フットボールの試合にたちより、時間をつぶしてくるのもブラジル育ちやブラジル生まれであった。

一九三五年ころになると、植民地へもブラジル式ダンスがはいりこむ。むろん、このころになると、植民地内のブラジル人もふえてくるし、これとつきあう二世、準二世（ブラジル育ち）も多くなるからであった。

初期植民地崩壊のきざしと

青年会の反同化的傾向

一九三二年の末から、サンパウロ州におけるコーヒーの植付けが禁止されて、パラナ方面へ移動する植民者がふえてくると、ときたまブラジル人が、日本人のロッテ（地区）を購入して日本人植民地の住民となるような現象もあらわれてくる。それが一九三五年以後になるとかなり目だってきて、旧植民地崩壊のきざしが見えてくるのであった（4）。

こういう時代に、ブラジル育ちがどんどんブラジル式

になってくるのもまた当然である。するとこれに真正面から対立するのは、新移民を中心として、国粹主義的思想をもって、スポーツに、修養に、弁論大会に活躍している青年会の連中であつた。

「ダンスは亡国的だ。二世の魂をたたきなおせ！ 日本人の精神を注ぎこめ！ 毛唐のまねをさせるな！」というのであつた。

どこの娘がブラジル人のカマラーダと逃げたとか、青年会にも顔を出さないと思つていたら、カボクロの娘とナモーラ（15）していたとか、たといそれが例外的な事件であつても、大げさにふいちようして噂のたねをまくのであつた。これが植民地人口の五割五分がブラジル頭となつた時代の傾向であつた。

新日本文化ブームに活気づく植民地内部には、こうした反同化的傾向と、ブラジル育ちと、ブラジル生まれに対する疎外的傾向もだんだん表面的なものとなつてくるのであつた。

父兄たちがいちばんうれえたのは、こうした子弟たちのブラジル化によつて、家庭内の家父長的雰囲気が見だされることであつた。すでに記したように、衣・食・住におけるブラジル化は、この国に生活するうえに、便利でこそあれ、排撃する理由はなにもみいだされなかつた。

妻に対する夫の立場にしても、十数年苦勞をともにしてきたことを思えば、やたらに夫の権力をふりまわすわけにもいかない。

「あんた一人でつくった財産か、朝から晩まで、日曜も祭日もなしに働いたのは、このあたしじゃないか」といわれれば、あんまり大きな顔もできなくなる。だが、伴らまで親のいうことをきかんとなればがまんできん……と
いうのである。

「これじゃ「父母に孝に」も何もあつたもんじゃない。だいたい日本精神がぬけておるんじゃない！ 日本をみい！ 若いものは雪の満洲で戦つておるじゃないか！ うちの野郎どもときたら、親の目をぬすんで、毛唐の女と抱きあつておどることばかり考えとる。魂が腐つとる！ たたきなおきにやならん。「忠孝」の道をつぎこまにやならん……」といらいらするのであつた。

「おとつつあんよ、安心しな、わしらがうんと働いて、そのうち楽させてやるからなあ……」といつてくれる息子たちが、どうも現われてきそうもないと考えられるからであつた。

おやじたちの不満

親たち自身、そろそろつかれぎみだつた。新移民から

「頭が古い」といわれるように、日本のことといえば、二十年前のことしかしゃべれないし、ブラジルの事情といえば、サンパウロ州だけのこと、いな厳密に言えば自分たちのはいったファゼンダのこと、それからこの植民地のことしか知らない。そして、衣・食・住など、米の飯と味噌汁をはぶけば、みなブラジル式だ。動作のにぶいことも年のせいばかりではない。ものの考え方も「アマニヤン（16）」的で、こせこせしないことを旧移民の本領だと思っている。こうして、いつのまにか自分たちも「ブラジル頭」になっていながら、心のどこか片すみで「おれこそほんとうの日本人だ！」と力んでいるにすぎない、コーヒーが高く売れだしてからは、もうエンシヤードを引く日も少なくなった。

しわくちやばばあ（女房）の顔をながめている退屈さをまぎらすために、若い妻君のいる新移民コロノの家へ、おしゃべりにでかけて時間をつぶす。もし、どこかに若後家でも現われたとしたら、なんとかならないものかという下心から、あれこれと世話をやく。若いとき遊ぶ機会をもたず、金、金で夢中に働いてきた中年のおやじどもの心の底には、どこかにみたされない空洞があった。

日本人会の役員にでもなつて、こんな人間同士がよりあつて飲む機会もふえてくる。時局談に花がさき、若いものに対する不平をならべてみるが、心の空虚はみたさ

れない。そこで、ここが日本だったらなあ……と
思ってみる。彼らの頭には、移民の郷愁だけがえがくこと
のできる特殊な幻想的日本人が生まれてくるのであ
った。

一〇アルケールの「地主」になり、いまではコロノ
を四家族もかかえこんでいるシチアンテ、いな、小パ
トロんだ。自分だって成功者の一人だ（そう考
えてみないと気持ちが悪くなる）。だが、いま財
産を全部整理して日本へ帰ったとしても「利子で食
える身分」にはほど遠い。

そのうえ、カボクロみたいに気のきかない子供
たちを、ぞろぞろひきつれて帰ったら、世間の物笑
いの種子となるだろう。とにかく、あいつらに、も
う少し「日本精神」をたたきこまにやらん。ぐずぐ
ずしておれんわい。東亜共栄圏が確立したら、わ
しら、ブラジルの開拓精神をそこで生かすことが
できる。アジアの指導は、わしらの手でやる！

ブラジルに長くいたら、子孫がカボクロにな
って亡びてしまう。かわいい娘が、クロンボと結
婚するなんていざしたらどうするか。第一言葉の
通じない嫁だ、孫だなんてできてきたら、わし
のいる場所がなくなる。それに、たまに町へで
て、広い世間の空気を吸いたいと思えば、「オー、
ジャッポーン！」とくる。どうも気に入らん。
たとい百万長者でなくとも、共栄圏へ行けば、「日
の丸」

のたっているところで、大きな顔をして働けるじゃろう。やっぱり日本じゃ、日本精神じゃ。

このような移民たちの心をあおりたてる空気は、そのころの植民地にはどこにもあふれていた。それは新日本的文化ムードであった。一人で考えていればめいるようなことが多くとも、二人、三人と寄って話していると、つい景気のいいことばかりになる。「自分たちは世界に冠絶した大和民族である」「今世紀の使命をになってアジア大陸に進出している日本人である」ということになる。

民族の世界的使命は、自分たちの、もやもやとした不満をとりのぞく、比類のない清涼剤なのであった。移民としてのあらゆる不満が、いまこの使命のまえに、消しとんでしまったようである。

注

(1) 『よみもの』一九四一年七月号、一二六ページ。

(2) 四年、あるいは六年の間コーヒー樹を仕立てながら作物をつくり、契約満期になるとコーヒー樹一本いくらずで仕立て賃をうけとる。

(3) 網。

(4) バケツ。

(5) ハンドル。

(6) 深鍋。

(7) 鉄製の深鍋。

(8) 長い柄が横にでている鋳物鍋。

(9) タピオーカの粉を単にフアリーニヤともいう。

(10) コーヒー入れ。

(11) ポリチカは政治のことであるが、ここでは策謀、そして策謀家をポリチコという。

(12) 安養寺頭三(あんようじ・けんぞう)。

(13) 『コロニア五十年の歩み』一一七ページ。

(14) コーヒー樹の盛衰とともに植民者のいれかわりがおこる。

(15) 恋をかたる。

(16) アマニヤン||明日。「あしたにしよう」「あしたこそ」の明日主義。

43 地方都市の出現と発展

今日でも新開地のパトリモーニオ(市街地あるいは、その予定地)などへ行つて、いちばんさきに目につくのは、区画された街頭の一点に、ポツンとたっているポテキンまたはベンダと称するバー兼食料・雑貨店であつて、ときには、アルマゼン・デ・セツコス・エ・モリヤード

スと壁に大書したところもある。

セッコス・エ・モリヤードスは「かわいたものとぬれたもの」であるが、ここでは飲物・食料・雑貨という意味だ。アルマゼンは商品倉庫だが、店のことでもある。辞書によると、こうした言葉の使い方は、ブラジルのなものだという。いわば「なんでも屋」である。

（パトリモーニオというのは、昔、植民地時代に、ゆうふくな地主が、ある「サント」に寄進した土地のことであった。

この土地の中央にカッペーラ（小会堂）がきずかれ、カボクロたちはその周囲に住居をかまえた。

寄進者はこれらのものから、わずかな金を徴収して、そこに家をたて、居住することをゆるしたのであった。

この金は名目的にはすでに所有者となったサントに対して支払われるものであった。

このパトリモーニオは、だんだん宗教的な意味をはなれて俗化し、市街地として地区割りをする土地のことをパトリモーニオと呼ぶようになった。つまり、パトリモーニオができることは、都市が建設されることを意味する。

P i e r r e P n o n b e i g : N b v o E s t u d
o s d e G e o g r a f i a H u m a n a B r a s
i l e i r a , p . 1 1 8 (脚 注) , E d . d e D i f u
s o E u r o p e i a d O L i v r o , S . P a u l o

なお、ここでは地方都市出現の正確な叙述はなされていない。たとえば、まず建築材料を目的としたセラリヤ（製材所）ができるとか、市街地の地図の上では、はじめから教会や学校その他官庁の敷地が予定されているとかいう点は、はぶかれ、ボテキン、あるいはアルマゼンをもってきたのは、これを中心にして、いろいろな商業の分化をみたかったからである）

とにかく、ボテキンやベンダよりもアルマゼンといったほうが商品をたっぷり用意しているところのような感を与える。

住民の少ない新開地では、ときによるとボテキンやアルマゼンは村の娯楽的な集会所のようなおもむきがあつて、はいつてみると食料・雑貨店というよりも、飲み屋という感がつよい。だが、ここは近代都市の飲み屋とちがつて、テーブルも椅子もない。あるのは、飲みもの壘や壘詰のならんでいる商品棚とお客との間を区切るようにできているバルコン（長い台）だけである。店のものは、バルコンの内側にいて客にサービスするのである。客はバルコンの前に立って店の者が小さなコップについでくれるピング酒をぐつとひといきに飲んでご満悦である。あとは、バルコンによりかかったりたたき土間にただ突っ立って店の主人やあとからはいつてくる客と語

りあう。ブラジルのカイピーラ（田舎もの）は風刺的なばかつ話の名人である。みんなで笑いあう。主人は一般にぶあいそうである。まるで客になめられることを警戒しているようだ。でも集まってくる連中はそれがあたりまえだと思っている。土間には鶏がはいってくる。犬がとびこむ。ときには豚もまいこむ。客たちは「サーイ・カシヨール！」（犬、出ていけ！）、「オー・ポルコ・センベルゴニャ」（この、ずうずうしい豚めが！）と片足をもち上げておいまくる。日本人みたいに手はうごかさない。とにかく、ここは原っぱの一軒家、わきのほうには梢のしげった大木があつて、根元に馬がつながれている。

もし移住者があつて、宿がほしいような場合は店の主人に相談すれば、ここで食事もだしてもらえし、また泊めてももらえる。旅人もこの地点で日が暮れるようだったら、とうもろこしを買って馬にやり、自分もまたここに泊まるのである。寝台がたりない場合は、ハンモックにねる。

もしこの地方の土地に生産力があつて、どつと植民者がおしかけてくるようであつたら、たちまちペンソンやホテルが生まれる。それまでいっさいがっさいを一手にひきうけていたアルマゼンからホテルが分化して出現する。アルマゼンでは収容しきれなくなるからである。

そのうち、ボテキンやバーがまた独立に生まれる。今

度は、もうアルマゼン式のものではないのである。飲み食い専門のところ、カフエーも出す。バルコンはあるが、その前にテーブルや椅子がそなえつけられる。そうすると、客はそこで一杯飲んで時間をつぶすことができる。

人がふえれば食料・雑貨店の方では品物を大量に仕入れなければならぬから、いままで飲み物などをならべていたところにも食料品をおく。広い土間は整理して、袋にはいったものを積みあげる。農具その他の荒物もおかなければならないから、バーやホテルの仕事が他にうつつてもけっこう商売になるのである。

今度は薬局ができる。それまでアルマゼンのおやじにたのんで買ってきてもらったかぜ薬、キニーネ、下剤などは、ファルマツシア（薬局）がひきうける。薬局のドーナ（主人）は医者そのままならば傷やおできの治療（クラチーボ）もやる。蛇にかまれたときなどは、注射をしてももらえるから安心だ。アルマゼンやボテキンのおやじよりもインテリで村の顔役になる。

こうなつてくるとバルベイロ（理髪師）も店をはる。いかがわしいペンソン（下宿屋）もできる。いや、それよりも早く、このへんの地主たちによって、教会（というよりもカッペーラ——小会堂——程度のもの）ができるかもしれない。そして、カッペーラができるころは、

どこか町の片すみに女郎屋もできるだろう。善男、善女のためには教会、それから、渡りもののカメラードたちのためには、「おぼさんの家」が必要だ。これがなければ、土地の女たちは安心できない。

こうしてパトリモニーオがビーラ（町）になれば、住民がふえ、小学校もたつ。

農産物がでるころには仲買人が入ってきて活躍する。はじめは食料品を掛け買いしていた関係上、農家では生産物もアルマゼンに引きとってもらっていたが、量がふえると独立の仲買人がでてくる。専門の馬車ひきがはいる。トラックも動きだす。

鉄道のないところへはジャルジネイラがおるようになる。トラックの荷物台を改良したバスで、あいかわらず小さい荷物台も後方にとりつけてあって、のちには本式のバスに対してミストという名も与えられた。

日本人の集団地だったら精米所が必要だ。やがてコーヒー精選所もできるだろう。

こうして、ただ一軒のアルマゼンから、どんどん商業は特殊化して独立に行なわれるようになる。

精米所、コーヒー精選所ができるころは町の人口も一千、二千となり、近い将来には、この町にも「市制」がしける可能性ができてくると、そろそろ政治運動もおこる。

こうした地方都市の出現と発展が、日本人の大集団地ではまず日本人の手でおこなわれる。だが、パトリモニー才は、すべての人間に開放されているもので、日本人だけが町をつくるのではない。いの一番に将来をみこしてはいつてくるのは、シリア・レバノン系の商人である。彼らは俗に「トルコ」とよばれるがトルコ人ではない。シリア・レバノンがトルコの勢力下にあったころブラジルへ渡来した関係か、あるいはフランスの保護国となつてからも多くの人間がトルコ人とみなしていたものか、ブラジルでは「トルコ」とよび、今日でもシリア・レバノン人の別名のようになっているのである。

彼らはブラジルに着くと同時に、まだろくに言葉もわからないうちから、商業に従事した。彼らはどんな未開地へでも、身にふりかかる危険をもともせず（ちょうど日本人がセルトンへはいったように）大きなかばんを肩につるして行商（マスカッテ）にでたのであった。だから、彼らは、どういうところに将来性があるか、それを見こすことができた。日本人は、トルコ人に利用されたという。シリア・レバノン人は、日本人を信用して協力したというだろう。

とにかく、商売のうえでは、彼らは日本人より数歩さきを歩いていったといえる。とくに、アルマゼンやバザールは彼らの独壇場の感があった。

旧コーヒー地帯をはなれたノロエステやソロカバナなどの地方都市の発展をうながした原動力は、何と云ってもシチアンテを中心とする小独立農の活躍であった。大農場が多く土地を持っているところでは、農場内にアルマゼンがあることにもよるが、生産物が町の商人を刺激しない。年々人口が増加して金が活発にうごくこともない。ファルマツシアもコーヒー精選所も、みな農場内にあった。

地方都市では、それらがみな独立で経営され、その地方の小農に利用されたのである。だから、地方都市の発展は、独立小農たとの動きとともに、ノロエステやソロカバナから、さらに北パラナ地方へと動いた。ロンドリーナのすばらしい発展が世に喧伝されたのは、もう十年も前のことである。発展はマリンガーからいまやパラナイへへと向かっている。

むしろこうした動きは日本人ばかりのものでなく、ブラジル人やその他各国の移民も同じような傾向をとったのである。ロンドリーナを中心とする、いわゆる国際植民地がそのいい例であるが、こうした地方で日本移民の活動が、断然、他にぬきんでている事実是指摘されていだろうか。

ただ一つ注意しなければならぬことは、ブラジルの経済は、いままで農業が中心であったために、輸出向き

の農産物を中心として、都会もまた盛衰をともにしてきたという事実である。だから、ノロエステ、ソロカバナから北パラナへと発展していったのもコーヒー生産のおかげであった。ブラジルの大農場主たちもこの地方へ事業を拡張していった、量のうえでも大きな成果をあげていることはみのがすことができない。だが、彼らファゼンデイルたちだけの進出であつたら、今日の北パラナ諸都市の発展はなかつたろうということである。大農場のコロノたちは、シチアンテその他の農民のように、購買力もなければ、精米所やコーヒー精選所を必要としない。だから都市との交渉も少ないわけだ。したがって、地方都市の発展に寄与するものは、主として小農（今日の言葉でいえば小商品生産者としての農業者）である。

日本移民が農業生産者として、はじめは、ほとんど植民地の独立農をめざしたことは一般的な事実である。ただ少数の、しかも言葉のできる人たちが、地方都市に進出して、主として日本人農家相手の商業をいとなんだ。しかし、集団地の人々を相手にする商売が、いかに危険なものであつたかは、「日本人はなぜ農業に執着したか」のところで述べる。

ペンソンの役割

ここでは、植民者と最も大きなつながりをもっていたペンソン（宿屋）のことにふれてみたい。都市出現の基本となったアルマゼンはすでに記したように日本人集団地においてさえも日本人の独占的な仕事ではなかった。しかしどこの町にも必要であったのは日本人ペンソン、あるいは木賃宿であった。

植民地へはいるものは、一度はここに足をとどめた。すでに植民地へはいったものは、ここを足場として町での用事をたすことが多かった。病人がでた場合は、ペンソンのおやじさんにたのんで、医者へつれていってもらった。また、このおやじさんの口ききで医者を動かし、サンタ・カーザ（慈善病院）へも入れてもらった。

もちろん、これは地方都市の場合ばかりではなく、サンパウロ市でもそうであった。ペンソンとか木賃宿とかいうと、なにか重みがたりないような感がする。だからコロニアの歴史のなかで、ときには人物論でその主人があつかわれたことはあっても、ペンソンそのものの大きな意義は問われたことがない。しかし、考えてみると、移民たちの生活にとって、こんな大きな役割を果たしたのも少ない。

今日りっぱなホテルがたっている。それは日本人の経済力の伸長のシンボルとして誇るにたるものである。しかし、初期のペンソンや木賃宿のような役割はもう果

たすことがない。

植民地開拓当初の、まだ電灯もない町の日本人ペンソンを考えてみよう。

「移民宿」といってもいいだろう。人によっては、なにかきたならしい、そしてそうぞうしいところのように想像するかもしれない。しかし、ここへたどりついたものは、すっかり肩の重荷をおろしたような安らかさをおぼえて、移民たちに、外国にいることをわすれさせたのであった。

棒ぐいをならべた土間の山小屋でペンソンをやったような時代は早くすぎて、日本移民がさかんに植民地を建設したころは、もう、本式の宿屋ともなれば、少なくとも木造であったし、レンガづくりの家も多かった。

その様式は、決して日本式ではなく、ブラジル人のホテルかペンソンを模倣したもので、共同の食堂があり、各部屋には金属の骨組に金網のベッドがすえつけてあった。コルシヨン（いわば敷きぶとん）は牧草（カピン）でみな薄くひしゃげていた。金網もたるんでいた。小さな部屋に、多くのベッドをおしこんだためにテーブルや椅子がはいらなかつたから、みんなベッドに腰かけたせいであった。それでも枕には白い（？）カバーがしてあったし、敷布もつぎはぎだらけではあったが一枚だけコルシヨンにかけてあった。かけるものは毛布であった。まだ日本人のふとん屋はなかつた時代だ。

食堂兼応接間には、大きな共同食卓があつて、広い壁のところには食器棚がでんとひかえていたが、必ずしもガラス戸つきのもではなかつた。食器はすべてブラジル式だ。ただ味噌汁用のどんぶり（チジェーラ）がならんでいた。ここだけは、さすがに瀬戸物の皿を使つていた。

スープのないときでもさじにフォークをだした。だしたといつても、さじはテーブルの上にある空缶のはし入れにさしこんであつただけだ。植民地からでてきた人が、さじでも食事ができるようにそなえてあつたのである。そこには漬物用の「取りばし」もさしてあつた。

食事は日伯混淆で、白いご飯にフェイジョン、味噌汁に漬物、それをお皿とフォークかスプーンでたべるのである。

食堂の壁には、昔もいまも、えびす大黒の絵か彫物の額がたいがいかけてあつた。ときには乃木大将の写真とか東郷元帥の書の石版刷りの複製「皇国の興廢此の一戦にあり」などが額にしてかけてあつた。ただ、今日のように、えげつないカレンダーが壁面をうずめているようなことはなかつた。まだ「日めぐり」の時代だったからである。

食器棚の上のほうには、古いボンボン時計がかけてあつた。

それから、ときには家の主人の若いときの写真なども片すみの壁にかかっていた。村の役場につとめていたころのもの、あるいは伍長、軍曹時代の軍服姿のもの。宿屋のおやじも、もとはこんなになりっぱな男だったのだと自慢しているかのようだった。しかし、われわれの見方からすれば、村役場の書記よりも、軍曹時代よりも、いまはもつともつと重要な使命をはたしているようだ。いまの姿はもつとりっぱなものだといいたい。

ひとかどの「一言居士」であり、ブラジル語はトンチンカンだが、押しがつよく、ブラジル人とのかけあいも経験の賜物で、けっこうものになる。

そのうえ、サンパウロからはビアジャンテ（店の注文とり）や新聞社の集金人がときどきやってくるので、「みやこ」の噂にも明るくなる。おかみさんも気さくで、みんなから親しまれる。彼らはやがて、パイ、ママイの愛称でよばれるようになるのである。

パイの仕事は客とのつきあいで飲むこと（ピングは安かったから、そなえつけのところが多かった）、それから将棋や碁の相手。しかし病人でもあれば立ち上がって医者へつれて行く。旅行者には汽車の時刻表を教える。場合によっては荷物をかついで駅へ見送るし、切符も買ってやる。

銀行へも案内するし、夜の街へも、おこのみとあれば

つれて行く。

学校の先生の世話もすれば、仲人もやる。なにしろ植民地のものよりも世情にあかるいし顔も広いので、百姓の相談役にはもってこいだ。

町へ出てなにか仕事をさがそうとする青年には、おやじはなによりたよりになる。植民地ではバガブンドとさげますれても、おうあじにいわせると、若いうちはまじめくさって歟にしがみついているものより、少しは世の中を渡りあるいて、広い世間を知っておくほうがのちのちのためだという。

宿のおやじは、少しは義侠心がないと人気がない。おかみさんには、おおざっぱなところが必要だ。パパイもママイも、バガブンドが宿賃がなくなったといえ、心配しないで食っている、そのうち儲けたら払うさ、と安心させる。居候みたいな客でも悪い顔もせずにおいておく。人間は時がくれば、なにかの役にたつものだから。事実当時のインテリ・バガブンドたちで宿屋のおやじに世話にならなかつたものも少なからう。彼らは時がくると、それぞれ植民者のために一役買ったのである。

ペンソンの常客にビアジャンテ（注文とり）と新聞社の集金人がいることはすでに述べた。両者ともサンパウロの世情伝達者として、その役割を果たした。むろん、日本語新聞は週間ごとにニュースを伝えてはいたが、「真

相」はビアジャンテや集金人が伝えた。集金人はときどきレポもやるので、地方の人は新聞記者とよんだ。

パイはこの人たちと親しかったから、植民者の知らないことも知っていた。だからサンパウロの事情はペンソンのパイにきけばわかる、ということになっていた。

ペンソンのパイは汎日本人会や連合青年会の結成にも骨をおった。ことにスポーツの普及には努力した。彼は会長にはならなかったが、かげの力となってまとめ役をかってでた。各植民地から出てくる人たちがたちよるから、連絡係にはいちばん適任であった。

こうして人の世話でとびまわっていれば、宿屋商売のほうは、しぜんママイの手一つということにもなる。人氣はでもぼろい儲けはない。だから地方で旅館業をして成功したという話は、あまりきかない。しかし、彼らの存在は日本人の発展に欠くことのできないものであった。

町の青年会の役割

地方都市で活躍したものに、町の青年会がある。その代表的なものはノロエステ線リンス駅の汎リンス青年会であった。

一九二五、六年ころ、この地方でコーヒー生産が盛んになりだすと、いわゆる「料理屋」ができ、また、ぼくちが盛んになりだした。ブラジル人経営のぼくち場は別として日本人の経営になるものが二か所もできた。この「良風を、乱すような職業がびまん（一）」したことに憤慨して、風紀肅正を叫んで立ち上がった七名の青年によってまず組織されたのが、町のリンス青年クラブ。これがたちまち植民地の青年たちに共鳴者をえて、十四支部三百六十名の会員を擁する汎リンス青年会となったのだといわれる（二）。

この青年会の仕事として継続的に行なわれたのが郵便とりつぎであった。この仕事は、ところによつては日本人会がやったし、のちには産業組合などでもひきうけた。

郵便は昔からあった。しかし、地方の町には郵便局というものがなかった。個人の商店が片てまにひきうけ、郵便物は店のすみの箱の中に、みないっしょになげこまれていた。それを、ブラジル人も日本人も、一人一人行ってかきまわし、自分のものや知人のものはだまつて持って帰ったものであった。郵便物が失われることは別にめづらしいことではなかった。これはどうにかならないだろうかというのが日本人一般の気持ちであった。その整理をひきうけたのが、汎リンス青年会の事務所であった。

「管内二千二百家族の邦人から一家族年額十ミルレイス

つを郵便物取扱い費として徴収した。そして、月給二五〇ミルで係員を常置し、事務の整理、事務の遂行に当らせた（3）」のであった。

そのうち、町には郵便局（らしいもの）ができたが、町の商人などには役にたっても、二千数百家族の日本人のためには、ほとんど役にたたなかった。風呂屋のげた箱のようになったカイシャ・ポスタール（郵便箱）をそなえるようになっても、数が少なかったから、もしこれを利用するとすれば、各植民地が、共同で借りることになるのだが、日本人は新聞もとっているので、はいりきれなかったし、郵便箱番号のないものは、あいかわらず、片すみの箱の中に、全部、いっしょくたにつみかさねられて、さがしだすのに苦心した。また書留や現金封入などは、いちいち、町の有力商人の身元証明サインが必要だったので、これなども一定の責任者があってとりあつかってくれるほうが便利であった。

いま（一九六七年）でも小さな町には郵便配達はない。電報さえ配達のないところが多いのだから、なおさらのことである。植民地などは問題外である。

こうした状況のもとで郵便物とりあつかいは地方の日本人会や青年会の重要な仕事になっていた。昔、日本人の集団生活を批判しようとするものは、よく日本人は政府の仕事にちよっかいをだす、といってこの郵便物とり

あつかいを、よけいなことと判断するものもいた。しかし町の郵便局で、これをみんなひきうけたとしたら、青年会や日本人会でこの方面の仕事をやっている人数か、あるいはそれ以上の事務員をふやしても、なお仕事はスムーズにはこばなかつたろう。そうすると、この郵便事務は、ブラジルの国費を節約したことにもなった。

青年会、日本人会などは、郵便局で郵便箱代を支払って、ひとまとめに、日本人宛の郵便物をうけとり、これを会場の事務所にもってかえり、各植民地あての箱の中へおさめた。これを植民地からでてきたものがもって行き、彼の帰路にある家には直接くばったが、多くは学校へもって行き日本人の先生にたのんだ。学童たちは学校のかえりに、これをかばんの中に入れて家へもちかえるのであった。

青年会や日本人会は、郵便局（あるいは郵便物とりあつかいをひきうけている店）から、切手を買ってきておいて、植民地から送られてくる郵便物にはって町の郵便局へとどけた。もしローマ字のかけないものがあつたとすれば上書き（アドレス）もかいてやった。電報なども、はじめは駅からうけとってきて受信者へ渡した。のちには郵便局からもらって、責任をもって配達した。むしろん、発信のときもめんどろをみた。

こうしたことも、第二次大戦後は、郵便局の建物が拡

大されるとともに、郵便箱も多くなり事務員もふえた。また、地方都市でも配達されるようになって、すべてが国家の仕事となったが、それでも小さな町では、いまでも組合などが自分のところの郵便箱からひとまとめにうけとって組合員にくばっているところがある。

人間の生活にコミュニケーションがどんなにたいせつであるかを思えば、ラジオもテレビもなかった時代、ブラジルにおける移民の生活に、こうした仕事がどんなに大きな役割を果たしたか、もう一度かえりみられていと思う。

学生寄宿舎、裁縫学校

日本人会の仕事の第一が教育事業であることは植民地の章でもかいたが、地方都市においては寄宿舎を営んで、主として、小学校以上のブラジルの学校に通わせたり、共同生活のなかで団体訓練をほどこしたり、日本語を教えたりした。

むろん、この寄宿舎の建設と維持には、個人有志の寄付行為もあったろうし、必ずしも日本人会員全体の出費によったものではなかったかもしれないが、なお、その事業は町の日本人会、あるいは、その地方の連合日本人

会の主要な仕事となっていた。そして、寄宿舎の建物は日本人会も青年会も利用することができた。

寄宿舎といっても、はじめは舎監夫婦が二人ですべてをやった。男の先生は日本語を教え、体操をやらせ、遊戯やスポーツを指導し、はき掃除の監督もした。それから奥さんは料理から寢室の世話、小さい生徒には洗濯もしてやったし、ときには寢小便のあと始末もしなければならなかった。

しかし、寄宿生十人以上になると、まず炊事を独立させるために、ひとりものの「おばさん」を雇い入れる。もし夫婦ものをたのむとすれば、「おじさん」には食堂や庭の掃除をしてもらい、炊事場のほうの買出しもやってもらおう。このようにして寄宿舎は少しずつ大きくなっていくのである。

生徒たちは、小学校の上級生（主として四年生）、それから中学の予備科（プレパラトリーオ）、さらに中学生といるところである。はじめは年齢も十二、三歳から十五、六歳くらいまでで、朝はみな一定時刻に起きるようにし食堂でカフェーを飲む。むろん、先生も奥さんもみないっしょである。それから生徒たちは、それぞれブラジルの学校へでかける。午前の組と午後の組があるから、午後の組の子供たちのためには、午前中一時間か、二時間、勉強の時間をもうける。勉強のあとでは、遊戯か体

操をやらせる。午後は午前ブラジルの学校へ行っている生徒を指導する。土曜日は、植民地の親もとへ帰るものもあれば、残ったものは夜シネーマへ行きたいというものもあるだろう。小遣は、先生からうけとる。先生は親たちから託されたかねを生徒にわたし、これを帳面につけておく。日曜日は自由に外出をゆるす。

洗濯や、部屋のそうじは、生徒たちが各自にやる場合と、「おばさん」にたのむ場合とあるが、年上の生徒には自分でやらせる。植民者の負担を軽くするためには、寄宿舎の人件費をふやさない工夫をしなければならぬから自然そうなる。また田舎では親たちがみな鋤をにぎって労働している時代で、十二歳以上は一人前だといわれているのであるから、できるだけ自分で自分のことをやらせることを、親たちも賛成したのであった。

この時代は二世でも日常会話は日本語をつかった。それでもブラジルの学校に通いだすと生徒たちは、おたがいブラジル語をつかった。ただ、先生や「おじさん、おばさん」とは日本語だ。また夜の日本語勉強のときは必ず日本語でしゃべるようにした。

寄宿舎は、はじめは男の生徒が主になるが、女生徒も少しずつふえてくる。

中学校へ行かない女子は、町の裁縫学校へ通う。むろん、裁縫学校のほうでも寄宿制をとっているところもある。

り、ここでは裁縫を主として教え、その余暇にブラジル語や日本語を教える。料理もたいがい裁縫学校のほうで週に何回かきめて指導した。

ただし、女子の裁縫学校が地方都市にできだしたのは第二次大戦後の傾向である。戦前は、どこの植民地でも労働の主体は家族員であったから、女の子といえども町へでて、ゆうゆうと裁縫をならっているようなことはゆるされなかった。もちろん、男子の場合も、よほど家族に労働力のあかところでないとい子供を町の寄宿舎へ出して学校へ通わせるようなことはできなかつたのである。

だが、今日では、どんな小さな町へ行っても、もし日本人の集団地であれば、裁縫学校のないところはめずらしいくらいである。ブラジル人は一般に裁縫——コールテ・エ・コスツ—ラ——といえば、職業教育と考えている。

日本人は主婦となるべき女性には、欠かすことのできな心得（教養）だと思っている。裁縫学校が花嫁学校と呼ばれるのはそのためである。

これは日本人の伝統であるかもしれない。昔から日本では嫁入り前の娘たちに裁縫を教えた。明治・大正時代もそうであった。今日でも婦人雑誌などは「洋裁」の記事で見たされている。おそらく、日本の婦人雑誌くらい「洋裁」と「育児」に関する記事の多い雑誌も世界中で珍

しいのではないかと思う。

うどん・しるこ屋

昔、日本人の多い新開地の町へ行つて、まず目につくのは、日本式の「飲み食い屋」であつた。今日では、多くの点でブラジル式のバーになつてしまつたのであまり目につかないが、開拓初期の田舎町には、どこにも日本人の「うどん屋」があつた。「しるこ屋」もあつた。食事時間外に、町で用をたしてお腹がすいたとき、ちよつと一口たべるには、うどんやしるこがいちばん手軽であつた。

サンパウロ州の田舎では、あまりブラジルの伝統がなかつたせいも、家庭でも、ほとんどメレンダ（おやつ）の習慣がなかつた。だから、ポテキンやバーへ行つても、当時はサンドイッチもなかつた。むろん、パステイスやカシヨール・ケンテ（ホットドッグ）はずつとのちのものである。しかも、その当時はまだまだ日本式であつた移民たちには、もしそうしたものがあつたとしても、一般には口にあわなかつたろう。食べたいのは、もつとあつさりしたものであつた。結局あまり油っ気のない「うどん」とか、甘党には「しるこ」ということになつたのである。

地方都市日本人の職業別

さて、日本人が地方都市で、どんな生活をしてきたかということをしるためには、その職業別をみることが便利である。

ここでは鉄道開通後二十五年目のリンス市と、たった四年目の新興都市マリリアにおける日本人の職業別について調べてみよう。

日本人がリンス駅へおりたつたのは、一九一四年か一年のころであった。バルボーズの開拓は一九一五年からとなっている（4）。ここではかりに一九一五年としておこう。しかし、『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』によるとリンス町の日本人は一九二〇年代に九家族であったのが一九三三年に調査が行なわれたとき百六十二家族となっていた。このころリンス市の全人口は一万余と数えられていた。

マリリアは鉄道敷設前からひらけだし、一九二五年ころから日本人の姿がみられ、一九二九年に鉄道が開通し、一九三三年には、日本人家族数百十七家族。ちなみに同市の全人口は当時二万と称されていたのである（5）。

古道具店	一	一	一	修繕業	四	?	?
旅館業	五	一	一	ペンキ職	一	一	?
パール	五	一	一	時計店	一	一	?
医薬	五	一	一	製靴商	一	一	?
薬剤師	二	二	二	写真館	二	一	?
?	?	七	一	カローセイロ	一	一	?
理髪業	四	三	一	貸自動車業	五	一	?
(仲買業)	二	三	一	新聞社員	六	一	?
(測量師)	一	一	一	著述業	一	一	?
?	?	一	一	(出版業)	一	一	?
(コーヒー精選場)	一	?	一	代弁業	一	?	?
教師	一	三	一	営善会代理人	一	?	?
書記	二	一	一	果物商	二	一	?
製菓商	四	五	一	野菜業(農家)	一七	?	?
製麺業	一	一	一	養鶏	二	?	?
洋服店	三	四	一	農業	一	?	?
(豆腐屋)	一	一	一	(鍼灸業)	七	?	?
洗濯業	四	二	一	(伝道師)	一	?	?
建築並びに家具製造	八	一	一	無職	一	?	?
?	?	三	一				
?	?	四	一				

◇リンス市
 雑貨商 八
 商業 三
 店員 二

◇マリリア市
 雑貨店 六
 商業 九
 店員 七

（上段の「リンス」と下段の「マリリア」とは、記念鑑からつたものであるが、職業別の名称がちがっているので筆者は推測して、これとこれは同じものだろうという判断のもとに上下にならべてみた。かつこ内のものは、『伯刺西爾年鑑』からつたものである。カロセイロは馬車ひき（運搬業）である。医業のなかには医者も病院も含まれている。薬剤師は薬局を営んでいるから薬局と同じである。

時計店は、たいがい時計修繕をかねていたし、むしろこの時代の時計店は修繕業のほうが主であった。写真館と写真屋は、あるいはちがっていたかもしれない。区別しようがないのである。貸自動車業は自分の車をもっていたがおそらく「運転士」もそうだったと思う。いちばんわかりにくいのは「商業」の内容であるが、このなかには農産物仲買、周旋屋、小さなバザーもあつたろうし、ときによるとばくち場の経営者もいたかもしれない、また、ブラジル人の商店員も含まれていたろう。「店員」とでているものの数があまりに少ないので、そう推察するわけである。

おおざっぱな調査なので、同年に行なわれた『伯刺西爾年鑑』を参照してみても結果は同じである。数も正確なものではなく、だいたいの傾向はこんなものだったということが見られる程度のものである）

日本移民の都市進出は、農家との直接連絡のある商売

をもとにして行なわれるものが多い。二つの「年鑑」の調査において「雑貨商」とでているものは、町の有力な商家であつて、ほとんど食料・雑貨店である。いわゆるセツコス・エ・モリヤードスの発展したものであつて、ただ小さな田舎町にあるようなバー（またはボテキン）的な要素はすでにはぶかれていた。しかし、いぜんとしてアルマゼン・デ・セツコス・エ・モリヤードスと呼んでいた。こころみにこれを「広告」のうえでみると、日本語では「日本品・小間物・内外洋酒類ならびに食料品いっさい」となっており、さらに、農産物売買がつけ加えられている（6）。お得意先は日本人農家が主である。むろん、人口が一、二万の都市であるから、こまかな買物には、市民一般が利用したが、大きな商売は、なんといつでも植民者のまとまった買物であつた。

リンス、マリリアばかりでなく、当時は、日本人経営の有力商店はほとんど食料・雑貨店であつて、植民者とのつながりが密接であつたために、農産物の取引きもした。この点は古い村のアルマゼンと同じである。また掛売りが多く、ときには手形の裏書などもしなければならぬことになつて、負債者とともに自分もまた苦しい立場におちいることもあつた。だから食料・雑貨店は、一面でははなやかな商売もしたが、浮き沈みも多かつたのである（戦後はこういうことはなくなる）。

たいせつな旅館業は、リンスもアリリアも同じく五軒となつている。パールまたは飲食店が、リンスの五に対してマリリアの十四軒は新開地のにぎやかさを示している。小さな「うどんや」から、いわゆる「料理屋」までふくむものであろう。

リンスには建築業と家具製造業をあわせて八であるのに、マリリアは家具製造に大工を加えて四である。古い町と新しい町の差であらう。

リンスに新聞社関係の人がいたのは、当時リンスはノロエステ線の雄都であつたばかりでなく、ブラジルにおける日本人集団地のなかでも重要な都市であつたため新聞社の支社があつたからである。

医業関係のものが、マリリアに比してリンスに多いのはすでに日本人の病院があり、医者も数人いたからである。

それから、日本人の都市進出の経路をみると、当時の日本人の性格と小資本によってやりやすかつた商売があつた。その第一は理髪業であつて、日本人の少ない町へも進出できた。写真屋もそうである。洗濯屋もそうであつた。

職業別種目にはみえないが、リンスにはすでに寄宿舎があつた。マリリアにもあつたかもしれない。まだ裁縫学校はなかつた。

「リンス郊外に野菜栽培者がマリリアに比して断然多かったのは、やはりここがマリリアより歴史が古く、日本人家族も多いうえに、ブラジル人も野菜をたべるようになったこと、さらにここから、季節ちがいの野菜をサンパウロへだせたせいもあった。

地方都市の生活

サンパウロ州の地方都市における日本移民の生活を叙述していると、ここであつかっている地方都市なるものが、まるで日本人だけのもののような錯覚を与えるかもしれない。チエテーやバストス（ソロカバナ線）のように日本人だけがきざいた都市は別としても、リンスやマリリアなどは、ブラジル人や各国移民をふくめた全人口のパーセンテージはリンスでさえも八パーセント、マリリアが三パーセント以内だったのである。しかも、この場合は郊外の野菜作りもふくめられていた。

だから、たとい郡内では、日本移民の数が断然多いような場合でも、一九三三年ころの日本人の都市人口はごく少なかった。おそらく全日本移民の都会生活者は、まだ一割にも達していなかったと思う。

ノロエステ線の日本人最大集団地としてのリンス市もその生活程度は、町の最低層のものは少なかったとして

も、中、あるいはそれ以下であったろう。だから、その町の上流階級のものと同様でできる日本人は、ほんの二、三人にすぎなかったように思われる。

ことに、当時はまだ都市の日本人が、社会的にも経済的にも、植民地農村としっかり結びついていたために、町の一般市民止の交渉はうすかった。ことに、社交面では、日本人は彼らから孤立していた時代であった。日本人とブラジル人および一般市民との関係は、医者や役人との間柄をはぶけば、商店や農産物仲買人および精米所とかコーヒー精選所関係のものが主であるから、経済的な面での結びつきだったといえる。

そうした日本人は、個人的にはどんな生活をしていたのであろうか、それは、首府のサンパウロ市でも昔はそうであったように、植民地の生活の延長だったことである。

むしろ有力な商人たちは自分の所有になる住宅をかまえていたが、多くのものは借家ずまいをしていた。地方都市の日本人は、農家に比して職業上、身軽に移動できるものが多かったから、家具なども、そろっているものが少なく、「セット」として買ったものより金ができ次第あれやこれや買い集めたものであった。

子供たちははだしでとんであるいていたし、家の裏には、ねぎや大根をうえて半農的生活を楽しんでいた。

女性の服装が、若い人をのぞけば、家庭内では植民地にいるものと変わりなく、しかも、まだまだ洋装は身につけていなかった。この時代は、もうブラウスとスカートが別々になったジプシー女のような服装はなく、ゆったりした腰まわり（シンツラ）を下のほうにとったワンピースになっていたが、あるき方が「うつむいて、内股にあるく」日本式であったために、珍妙であり、いかにも田舎くさい感を与えた。

こうしたおかみさんたちが町の中で、ていねいに頭を下げ合って、日本式なあいさつをかわす光景がみられた。だが、さすがに子供をおんぶして歩くものは、たまに植民地から出てくる新移民の女くらいなもので、ごくまれにしか見られなかった。ただ、当時は女でも植民地からでてくるものは、家の入口などで不用意にしゃがむ習慣がぬけなかったもので、これが若いものたちの間で問題になった。

みんな日本語を話していた。むろん、各出身地（県）の方言とブラジル語をまぜたもので、大きな声で話しあうのがきかれた。

食物は、ペンソンの食事を述べたときにかいたように日伯混淆、このころでは「おかず（7）」にブラジル式なものを工夫していた。イタリア式マカロンがとり入れられだした。

日本人の旅館で日本食をだすところが増えて、そこでは茶碗とはしがつかわれた。おそらくこの時代になると夜などは、日本式食器で、日本食をとる家庭もあったにちがいない。一般にこうした二重生活は、移民たちがブラジルの生活に慣れた、ずっとあとにおきる現象であった。生活が一応落ち着いて、主婦が専心家事にたずさわるようにならないとできないことであった。

二世間に、そろそろダンスが流行しだす。ダンス流行を墮落のきざしとみて、憤慨する一世たちもあらわれる。同化が一世たちの道德感と衝突する一例である。だが、まだまだ一世を中心とする青年会ががんばっていたので青年会館は、弁論大会、名士講演会、農事研究会などにより多く使用され、カルナバルなども、まだそれほどにぎやかなさわぎにならなかった。

スポーツでは、ベースボールが第一位、ついで陸上競技がさかんになりだす。汎ノロエステ陸上競技大会は、第一回が一九二八年にプロミツソンでひらかれ、一九二九年の第二回がリンスであった。一九三三年はビリグイでひらかれた(8)。

マリリアでは一九三一年になってはじめて汎パウリス
タ延長線の第一回陸上競技大会がひらかれ、翌一九三二年度の第二回、さらに一九三三年度の第三回も、ともにマリリアであった。

文化活動の面で、当時汎リンス青年会でだしていた謄写刷り、月刊一〇〇ページ内外の機関誌『共鳴』は注目されていいだろう。これが、かれこれ十年間もつづいたというから、歴史に記録する価値がある（10）。

これがどんな性質のものであったかといえ、会の成立動機が「風紀肅正」にあったように、青年たちの純真な気持ちを世につたえて、明日の清い明るい社会をきずこうとしたものであった。いわゆる「青年始頭運動」も若者たちが、今後のコロニアに対して、ものをいう権利のあることを主張したものである。青年たちは、構成家族、連れ家族で渡伯した昔から、家長たちの出稼ぎ根性に対して批判的立場をとっていた。それが、成金どもの脱線によって一種の義憤となったのであった。

主張あり、感想あり、文芸の方面では短歌や創作（小説）があつた。しかし、感想や創作は、論文に対して、いささか感傷的にすぎるくらいがあつた。それは当時の青年たちが、一面ではスポーツに傾倒しながらも、その他の娯楽機関や自由な男女交際が少なかったので、孤独を感じたことによるだろう。広いブラジルの社会にとけこめないで日本人だけがかたまっていた物足りなさも、心のどこかにあつたかもしれない。それはともかく、まだまだ若い女の少ない時代であつた。

注

- (1) 『コロニア五十年の歩み』一三二ページ。
- (2) 同上。
- (3) 同上。
- (4) 『移植民廿五周年記念鑑』二八九ページ。
- (5) 同上、二二三ページ。
- (6) 『のろえすて年鑑』広告欄、一九二八年刊。
- (7) ブラジル人の観念にないもの。
- (8) 『移植民廿五周年記念鑑』六二二ページ。
- (9) 同上。
- (10) 『コロニア五十年の歩み』一三二ページ。

44 戦前の植民地における二世の性格

太平洋戦争直前、すなわち一九四一年ころまでの二世は、ほとんど日本語が話せし、年齢も平均して若かった。サンパウロ市で大学に通っているものは、片手で数えられるほどの少数で、いわゆる準二世とよばれるブラジル育ちのほうが多かった。

よく、われわれは、二世に対して、ものを考えるとき

ブラジル語で考えるのか、それとも日本語で考えるのかとたずねたものであった。一世にとって、二世たちがだまってものを考えるとき、どうするのかということが、なにか不思議でたまらなかつたのである。二世たちのなかで、本当にブラジル語だけで育つたものは、むろんブラジル語で考えると答えたが、日本語で考えるときもあれば、ブラジル語で考えるときもある、と答えるものも多かつた。なかには、日本語で考える、しかし、ブラジル人からならつたことや、ブラジル人とのつきあいのことを考えるときは、しぜんブラジル語になる、というものもいた。あれから二十七年後（一九六八）の今日、おそらく普通のブラジル人と同じようにブラジル語を話す二世で、日本語で考えるなどと答えるものは例外的に少ないだろう。

いま筆者は、植民地にそだつた戦前の二世を問題にするのであるが、彼らはほとんど日本語で考えた。そしてブラジル人からならつたものや、ブラジル人とのつきあいのことを考えるときだけ、ブラジル語で思いうかべる程度のものであった。

家庭内で、親子がブラジル語で話したのはごくまれで、それはほとんど都会のものか、農業以外の職業のものに限られていたといつていい。自ら鋤をにぎって働いていたシチアンテやコロノたちの家庭の一世たちは、自分の

子供である二世たちに対して、ブラジル語で話しかけ、また子供たちが、ブラジル語で答えるなどということはずなかつた。

むろん、家庭内でつかう日本語は、ブラジル語の名詞や、日本語化した動詞（たとえば日本人の人が英語の動詞を日本語化して“ストップする” “カットする” などというのと同じもの）をつかつていたが、それは決してブラジル語が上手になつたからではなかつた。

ただ、彼ら一世たちは、ブラジルの生活のなかでしぜんにブラジル語をまぜながら、むりのない言葉づかいをしているにすぎなかつた。植民地内には、家庭的につきあえるようなブラジル人はいなかつたから、そこで育つていく二世は、こうした家庭的環境のなかで、一世の性格をうけつぐところが多かつたと想像されるのである。

だから、これが本当の二世だというタイプをえらびだしてみると、これがその当時はむずかしかつた。国籍的にはブラジル人であり、またブラジル人としての自覚をもつていた二世も少なくなかつたとはいえ、一世の立場からみれば、日本人ではないとしても同民族であり、今日われわれが使っている二世という言葉でよぶには、性格的にもあまりに日本的だつたといえる。

しかし、一世たちは彼ら「第二世」たちのなかに、自分たちとはかなりちがつた性格をみいだすようになって

いた。ことに自分の家庭のものがみな日本生まれの新移民たちは、遠慮なしに他人の家の二世を非難した。いちばん普通の評言は、二世は気がきかない、二世はピントがはずれている、ピメンタ（辛味）がたりない、などということであつた。自分たちの気持ちとぴったりしないものをみいだしていたわけである。

気がきかないということは、一世の期待にそわないことであつた。

家庭教育の貧困ということがあつたらう。いつも年寄りやその他の年長者がいて、子供のしつけをおこたらなような日本の家庭とはちがつて、一家総出で畑へでて働く移民の家庭では、子供の教育などかまっていられなかつたということもあつたらう。あるいは生活様式が変わったために、エチケットなどは気にならないような環境にそだつた子供たちが、日本のやかましい家庭にそだつた一世の目には、なにもかも気がきかないように感じられたにらがない。

ピントがはずれているということも、ピメンタがきいていないということも、同じように、一世の通念、期待にそわない人間だということである。広いこの国の新開地で、「世間の目」などからほとんどかけ離れた生活をしていれば、気分がのんびりして動作もよくなる。ピチ

ピチしたところはない。いつも世間体を気にしながら神経をとがらして生活した経験のある一世からみれば、植民地にそだった子供たちはおっとりしすぎていた。こまっしやくれたところがないから、性格にしまりがなくように感じられたのである。

学友や一般の友だちづきあいなども、日本ほど社会的にもまれることがないから、年ごろになっても頭の働き方がどうしてもにぶい。

十四、五歳になると、仕事のうえではもう一人前だ。従順で骨身おしまず働く。しかし世間知らずであることはやむをえない。彼らは外界の広い社会から隔離されているようなものだった。つきあうブラジル人はカマラーダ（人夫）やコロノ階級である。たまには町へでるが、それは買物をしたり、アイスクリームをなめるくらいのものである。シネーマは少なかったから、その影響はあまりなかったといっている。ブラジル語だってカマラーダやコロノとしゃべる分には不足はないとしても、教養のために本を読むというようなことはなかった。親たちはサンパウロ市で発行される邦字新聞をよんでいた。その三面の雑報欄は、日本近信でうまっていた。今日、戦前の新聞をひらいてみると同胞社会（コロニアとはいわなかった）に関する記事のあまりに少ないことにおどろく。ニュースは日本のものが主であった。せつかく日本語を

ならつても、彼らの興味をひくものはほとんどなかった。しぜん日本からくる少年雑誌をふりがなをたまりによむか、親たちがたのしみに行っている大衆雑誌をのぞいて漫画、挿絵、その他わかるものだけをひろいよみするよりしかしかたなかつた。

このように、教育を身につける機会が与えられていない二世について、一世たちは「ブラジル育ちはなつたらん」と軽蔑するのであった。

日本人が教育に熱心であつたこと、どこの植民地でもまず小学校をたてたことと、二世たちが一世の気持ちにしっくりしない性格のものとして育つていったことの間には、あまり関係がなかつたようである。

教育の効果はあがらなかつたのである。日本語の本を読ませ、むずかしい漢字は教えていたが、子供たちの精神のかてとなる教育は植民地の学校では困難なものであつた。一人の先生が何組かの生徒をいっしょに教えた。学力は一人一人ちがつていた。生徒が少ないほど教え方がめんどろな場合もあつた。先生は教室で、一度に十数人の生徒に教えるかわりに、程度のちがつた生徒一人一人にちがつたことを教えていたのである。先生は日本語（言葉と文字）を教える機械であつた。児童たちの精神活動を刺激する教育ではなかつた（この点では、アリアンサ植民地あたりのクリスト教的日曜学校の活動は、高く

評価されていいものであるう)。

こうして教育されたカイピラ二世に対して、一世たちは、彼らに「進取の気象の欠けている」ことを指摘した。新移民の少年少女とくらべて、はつらつとした気持ちや夢がないということであった。ありえようがなかったのである。

彼ら二世たちは、植民地の日本語小学校で一応小学校程度の本をよみあげ、ブラジル語もなんとか「よみ、かき」できるようになるという一人前の人間として働かされたのである。営農のことは父兄が考えた。ただ機械的に働かさねればよかった。肉体労働ができるということ、ときにはカマラーダをつかうた(、)し(、)になるということくらいで、青年期をむかえても世間しらずであつたから、夢を追つて日本の社会からぬけだしてきた青年とは全く氣質がちがつていた。

団体的訓練のたりないこともいわれた。彼らにその機会がなかつたから、それは当然であつた。「軍国日本」に育っていない二世に、そんなことがわかるはずがなかつた。

青年会で音頭をとるようなものは、たいがい日本で教育をうけてきた青年であつた。教育といつても、せいぜい村の中学ではあつたが、彼らも二世を軽蔑した。われ笛ふけども汝ら踊らず、二世はたよりにならないといつ

た。

二世たちには何がなんだかわからなかった。彼らには日本における小学校や青年団の教練がイメージにうかばなかったし、兵隊の団体行進もみたことがない。彼らの目に印象づけられているものは、青年会員の共同作業とベースボールの試合における団体行動くらいのものであった。しかも、ベースボールは主として一世青年のあそびであった。少年野球は、一部ではさかんであったが、どの植民地にも指導者がいて二世の青少年を訓練しているわけではなかった。

植民地は、広いブラジルの社会からみればかなり孤立した特殊社会を構成していた。しかし、一世家族の歴史からみれば、彼らの生活にブラジル社会の影響がなかったとはいえない。新来移民で日本人植民地にコロノとして直接はいったものは別として、植民者の多くは、すでにフアゼンダ生活をしてきたはずであるから、幼少のとき、ブラジル人と遊んだ経験のある二世も多かったと思う。しかし、植民地生活の十年から十五年くらいの間はかなりブラジル人の社会から遠ざかっていたことは事実であって、その意味で、彼らの性格形成は、親たちから影響された部分が大きかったにちがいない。親たちというかわりに植民地の社会的環境といってもいいだろう。だから、あの当時の二世の性格を、ただブラジル社会の

影響下に形成されたものだけでなく規定したら明瞭性を欠くことになる。

そこで、当時の二世の性格を解明するために、親たち一世がどんな心がまえで、どんな生活をしてきたかについて考えてみる必要がある。

たぶん一九四一年ころ書いたものと思うが戦前の筆者の古いノートに「マカーク・ベリーヨと第二世」と題するものがあつた。移民の歴史をかきだしてから、これを読みかえてみると、当時筆者が二世の性格の由来を親たちの生活態度にありとし、その親たちのいかにもブラジルのタイプを、いうところのマカーク・ベリーヨ（老猿）にみいだしたものであつた。

移民たちはブラジルの生活に慣れるにしたがつて、せこましい日本の気持を清算し、落ち着いて長期戦的心がまえをやしない、なかずとばず、五年、十年と働きつづけることによつて、現在の自作農に落ち着くことができたものとみた。彼らの多くは、日本から来た当時の、あせりにあせつた気持ちを反省して、いまでは新移民に対しても、ブラジルではせつかちな感度は禁物であること、辛抱して働けば必ず儲かるときがくると説教するまでにいたつた。しかし、植民地に新移民コロノがふえて、日本的性格の青少年をみせつけられるようになること、自分たちの子弟がいかにものんびりしすぎているこ

とがあきたらなく感じられだしたことも事実であった。

新来の青少年には、一世の郷愁をかきたてるものがあつたからである。移民たちはここで、一面では新移民の、せっかちな生活態度を批判するとともに、反面では青少年の日本的にテキパキした性格をたのもしいものと感じたのであつた。

マカーコ・ベリーヨの生活態度に破綻が生じたわけである。では、かつて彼らが身につけようとしたマカーコ・ベリーヨの生活態度とはどんなものであつたらうか。

ここで、マカーコ・ベリーヨについて、少し解説しよう。

字義的には「老猿」であるから、あるいは「山猿」ということになるかもしれないが、もともと初期移民の通訳連中が言いだした言葉で、ブラジルの熟語としてあつたものではないそうである。だから一般には「古強者」の意味につかっている。

ところで、どんなタイプの人間がブラジルの古強者かといえ、そこには、彼らがあこがれたモデルがあつた。初期の通訳たちは、これをブラジル農村の上層階級である農場主や支配人のタイプをまねたものにちがいないというのが戦前からの定説（？）になっていた。少なくとも筆者はそう思っている。いわゆるブラジルの大人（たいじん）の風格である。

通訳たちは、移民をひきつれてファゼンダ（コーヒー農場）にはいったとき、まず日本人の性急な島国根性をあきたらなく思い、どっしりとこの国に腰をすえることがたいせつであることを学んだ。彼ら通訳たちは、元来、出稼ぎを目的として渡航したものでなかったから、そういうことを理解するのも早かった。だれでもはじめは、この国のアマニヤン（明日）主義に気をいらだてる。しかし移民の指導的地位にあったものは、ブラジル人のいう「カルマ・ノ・ブラジル」ブラジルでは落ち着け」をいちばん早くのみこんだ。どんなにあせっても、時期がこなければなんにもできない。三か月ごとの支払いがめずらしくないのが、旧コーヒー地帯のファゼンダの制度であった。コーヒーは一年に一回採取する。コロノの生活は二、三年目になって、やっと儲けの見通しがつく。働いてすぐその日から金をため、半年たったら故国へ送金するなどという生活は、ブラジルにはなかった。

あせらずのんきにかまえることが必要だ。のんきにかまえるということは、大事と小事をみきわめ、小事に対しては無関心、無感覚になることである。しかし、時期がくれば思いきって決断力を発揮しなければならぬ。のるか、そるかでやる。大ばくちでもいい。ただ失敗してもくやまないことだ。今日のすかன்பിんも、明日の百万長者。失敗して人間がしよげこんだら再起はのぞめな

い。武士は食わねど高楊子式に、どんな苦境にあってもあわてず、身だしなみをくずさないことがたいせつだ。

その点、ファゼンデイロ（大農場主）などは、その懐具合はいざしらず、常に悠々とかまえている。腹の太さをよそおっている。人と応対するときなど、もし相手が自分より目下のものであるとみたら、できるだけ口数を少なくして要点だけを主張し、たとい間違つたことがあつても、それがささいなことなら、前言をひるがえさない。ただし人情にはもろい。

こうした観察のもとに、通訳連中をはじめとして古強者たちは、大人の風貌をやしなつてきた。そのころのブラジルは、中間層のない国であつて、移民やカマラーダの下層労働者と地主や農場の支配人階級から成る社会であつて、まなぶべきは上層の生活態度だと考えたのも当然であらう。

ところがもともと彼らは大地主でもなければ政界の有力者でもなかつた。ただ風采をまねる亜流にすぎなかつた。大人の風格も、むりによそおつてみるとなかなかかけひきがある。事態がわれに利あらずとなれば、とぼけることも必要だ。ときには非人情もやむをえない。大人は感傷的になつてはいけないと思う。こうして、マカーコ・ベリーヨたちは、人、の世の有為転変を味わっているうちに、世渡りの「こつ」をのみこむ。すなわちブラ

ジル語でいう「ジェイト」を心得る。官憲にわいろをつかうことも上手になる。これも一つの投資だから損にはならないと思う。ところが、大人の亜流である彼らは、ときによると「世は万事かくのごとし」というようなお山の大将になることもある。

彼らはブラジル生活の大筋はのみこむ。しかし、いつの間にか生活がルーズになる。どっしりとした一面はできて、もともとお山の大将であれば、精神活動が停止するから、外面的なパトロン・タイプにとどまる。ゆっくりかまえているうちに、明日は明日はで日が暮れる。向上心がなくなり、自己反省する生氣にとぼしくなることすらある。

ところで、旧移民の性格のなかには、どことなくこうしたマカーコ・ベリーヨ的性格がある。だから、マカーコ・ベリーヨとはすなわち旧移民と同義語にもなっってしまったのである。

むろん、戦前のシチアンテが、すべてこういうタイプの人間ばかりであったとはいえない。しかし、自分が小さいながらもパトロン（主人、旦那、地主）になったのだと意識したとき、彼らがどこかでパトロンらしくふるまおうとした一面があったことは事実である。彼らの住居が、ファゼンダのミニアツーラの感じがするもの、そのあらわれであるといえないこともない。

また、パトロンらしく鍬をにぎらないようになってからは、村のポリチコ（政治家、策士）になるものもあつた。

かくて、一度顔役にのし上がれば、やはりパトロン・タ
イプをよそおうことになる。きちょうめんにたちまわる
のはしたっぱの態度であつて、上にたつものはこせこせ
してはならない。多少のへまはやつても、とりまき連中
にのませておけば、支持者はなくならないと思う。その
うち領事館と交渉して学校建築の補助金でもうんと下付
してもらえば男があがる。むろんこういう生活態度は大
人（たいじん）の原型からみれば亜流の亜流である。

村の顔役や策士たちの生活は、一つの極端な例だとも
いえるが、とにかくブラジルの自然的・社会的環境のも
とで、一応生活のこつをわきまえ、自信をもつてがん
ばつてきた植民者は、その家庭生活のなかで、きりきり、
しやんと敏捷な行動をとつて人をよろこぼせることがで
きるような、そんな子供のしつけをしたものは、おそら
く例外的に少なかつたのではなからうか。「いいよ、いい
よ、ブラジルでそんなやかましいことをいつてもしよ
うがない」

と父親は母親をさとし、また世間でも、人の顔色をみ
て気をきかせるような子供など、むしろ、こまっしやく
れたものとしてよろこばなかつたのではないか。

おやじが、日本人会だ、組合だといって家をあとにとびあるくときでも、妻以下子供たちは、無報酬の重労働をつづけていた。ブラジル人のカメララーダを指揮するのは、やがて二世青年の仕事となる。気がさかないという点で、田舎のカメララーダなどはその筆頭である。

また、わかっていても、命令があるまでは手をくれないのがあたりまえと思っていた。いわれないことをやって精力を消耗するなどということは彼らの気性にあわない。たまに老人で、仕事はさっぱりはかどらないが、はじめからきめられていることなら、はたからかれこれいわれなくとも、じゅんぐりにやってのけるものもいた。しかし、そんなものは例外だった。

そういうわけで、カメララーダを使う二世は、まず先頭にたつて彼ら以上に働いた。無肥料、無消毒時代の農業である。頭はつかう必要がない。ただ暑さ寒さに無感覚になり、機械的に体をうごかしていさえすればいい。しかし、終日カメララーダを追いつかい、朝晩は家畜の世話までしなければならぬ青年たちに、夜は早く寝るだけが休息であった。本を読むなどの気力はもうない。こうした二世が日本からきたての青年のように、せせこましい社会の姿を反映させて、てきぱきたちまわることができないのは当然である。

二世は気がきかないといっても、それは対世間的な場

合であつて、日常の生活ではなにも不足にならなかつた。ピメンタがきいていないといつても、炎天下に黙々と重労働にいそしむ人間にとつて、ピリツとしたところなど必要でないばかりか、そんな神経を働かせたら、労働の妨害となる。ポーツとして物に動じないタイプでこそ、カマラーダとともに働ける。だから、あの当時の、まだかなり自作農的なシチアンの世界では「気のきかない二世」こそ、たいせつな生産の担い手だったのである。

彼らの性格は、マカーコ・ベリーヨ的な家庭内で、ブラジルの生活にむくように、しぜんに形成されていったものとみることが当を得ているのではなからうか。ただそれが問題になったのは、そこに、一九三〇年以後、日本からの新移民が植民地に多数流れこみ、旧移民たちの興味の対象となり、また新移民たちの感覚からはとらえどころのないような二世の性格が、非難がましい目で指摘されだしたことによる。

しかし、このころは、前にも記したように大部分の二世は日本語が話せたので、今日の二世とはかなりちがっていた。親たちや学校の先生から民族意識をつぎこまれ、一世と同じ気持ち、場合によっては、ブラジル生まれとあなどられることにコンプレックスを感じ、それを克服するために、意識的により日本人的になろうとするも

のさえあった。彼らは「二世らしくない」とほめられることに安心感をえていたのである。彼らは青年会員としても優秀なメンバーとなることができた。極端な例ではあるが、戦後の「特攻隊」のような過激な思想をもった青年もでていのである。これに反して、気のきかないピントのはずれた二世たちは、青年会でものけものにされる傾向があった。

こうした青年たちも、いまではすでに三世の親となつて、昔の二世タイプは影をひそめてしまった。あるものは、日本語のできる二世として、一世と二、三世をつなぐ重要な社会的役割をはたしている。それは、わがコロニアが、ブラジルの発展と歩調をあわせてすすんできたところにあるが、あの時代の二世たちのなかには、今日のはつらつとした二世にくらべると、全くカイピーラ的、カボクロ的の一面がかなり強かったのである。ただ、カボクロのように非生産的な生活に停滞していなかったおかげで、過渡期的なタイプとして、今日はその姿がかえりみられるにすぎないものとなったのである。

そういうわけで、戦前における植民地の二世タイプは、われわれ移民の同化過程における一産物ではあるが、具体的には、マカーコ・ベリーヨ的タイプにもらわれているブラジルの性格と、そうしたものを身につけながら単調な、低文化的生活をいとなんでいた旧移民の生活、換言

すれば、日本人植民地が生みだした一つのタイプであった。だから、原始林がなくなり、田園が鋤耕作から機械耕作にすすみ、地方都市にまで大学が年々増設されていくような時代となれば、古い戦前のカボクロ的二世のタイプもきえていくのであるが、彼らは、移住者としての一世と苦勞を共にしてきた関係上、その後、広いブラジルの社会に生活して、一面ではマカーコ・ベリーヨ的タイプのより洗練したものを身につけると同時に、若年から直接生産にたずさわってきたものの心がまえを失わずにいる。すべてのものがそうだとはいえないが、彼らのなかの大多数は、「骨のある二世」として現在のコロニアの中堅層に加わっているのである。さらに戦争中の転換期に成人し、戦後はブラジルの学校で正式に学ぶ機会をもたなかったことを痛感している連中なので、子供をブラジルの学校へだすことも熱心である。女性でも現在、家庭の中心となっっている層で、日本語は不自由なく話せるし、新聞くらいはよめるが、ポルトガル語は、話ができるわりに、読むほうはあまり得意ではない、という人たちがかなりいる。彼女たちも、新しい時代に処して、

二、三世の育成にはげんでいる。

45 ノロエステ線における日本人の勢力

ノロエステ線は、日本移民の発展地としては歴史も古く、その後、サンパウロ州における最大集団地として、一時はすばらしい繁栄ぶりを示した。

移民二十五周年をむかえた一九三三年ころは、バウル市にあつた『聖州新報』社の調査によると、マツト・グロツソ州をふくむノロエステ全線の在住日本人は（ブラジル生まれをもふくめて）四万八千四百十九人で、家族数によつてみると八千九百九十五戸であつた。そして、そのうち土地所有者（自作農）は二千九百八人、所有総面積は四六、三五七アルケール、すなわち十一万五千八百九十二町歩ほどになる（1）。

さらに、それから五か年後の一九三八年に調査された『バウル管内の邦人』によると、この年のノロエステ同胞の総数は四万五千六百三十七人、家族数にすると七千六百六十四戸、そのうちで土地所有者は三千九百六十九人で、総面積は六一、九〇九アルケール、十五万四千七百七十二町歩ということになる。

一九三三年

総人口 四八、四一九人（八、九九五戸）

土地所有者 二、九〇八人

総面積 四六、三五七アルケール

一九三八年

総人口 四五、六三七人（七、六六四戸）

土地所有者 三、九六九人

総面積 六一、九〇九アルケール

なお、総人口が減って土地所有者がふえたことは、それまで借地農、コーヒー樹仕立ての請負農、およびコーヒー園労働者コロノであつたものが、土地を購入したり、ソロカバナやパウリスタ延長線、またはパラナ州北部などの方面へ移動したことを示すものであろう。

さて、ノロエステにおける一九三三年の二千九百八の土地所有者の平均所有面積が一六アルケール弱になるのに比べて、一九三八年の三千九百六十九人では、平均一五・六アルケール強で、所有地はふえても平均面積はいくらか減っている。小面積でもいいから、早く独立農にはいりたいと思つたものが多かつたことを示すようである。

ちなみに、一九三三年ころの在伯同胞の総人口は十四

万ほどであったが、一九三八年になると二十万となえられていた。すなわち一九三三年ころは全在伯同胞の三四パーセント強がノロエステ線にあり、一九三八年には二三パーセント強になってはいるが、土地所有者はふえているのである。そして、一九三八年ころはノロエステ日本人自作農の全盛時代ともみられたのであった。

また、一九三三年から一九三八年ころにかけてはリンスがノロエステ線の中心地であって、一九三三年にはリンス郡内の日本移民は一千六百八十七家族、九千百七十三人をかぞえ、リンス市内にも百六十二家族の日本移民がいた。

一九三八年には『パウルー管内の邦人』によると、かなり減って一千二百九十二家族で、これもその後自作農として他へ移動したためであろう。ただし、リンス市および近辺の日本人は二十六家族が調査されているだけで詳細は不明である。ただし、この時代（一九三八年）になると、サンパウロ州内ノロエステ線の商業の中心地としてアラサツーバがリンスをしのぐいきおいで発展しはじめていたことと思う。総家族数からみれば、リンスの農業家族一千二百九十二家族に対してアラサツーバは五百六十三家族にすぎなかったが、都市生活者の模様はずっとくわしい。人口もリンスよりずっと多い。ただし、アグア・リンパ町をもふくめているので厳密な比較はで

きない。

ノロエステ全線にわたる都市在住日本移民の活動をみると、一九三八年ころは、マット・グロツソ州のカンポ・グランデが最大集団地となっている。ここは、同市が南マット・グロツソの雄都となったために日本移民の都市近辺への集中があり、これはむしろサンパウロ市に比較されるべき傾向であつて地方都市としては例外に属する。

さて、まえおきが長くなりすぎたきらいがあるが、筆者が「ノロエステ線における日本人の勢力」としてとりあげたかった問題は、一九三三年当時、日本人発展地として、全同胞の三四パーセントを擁し、ノロエステ線といえばリンスというように、日本からの視察者も新任の大使や総領事も、必ずノロエステに足をのばし、リンス駅に下車したために、ノロエステの発展は日本人の力によるもの、また、ノロエステの日本移民の努力が、他国移民、いなブラジル人に比較してさえ、頭角をぬくものとして錯覚されるかたむきがあつた。これに対する反省のために筆をそえることにしたのである。いまでこそ、略奪農による地力の減退と、他地方への移動のために人口のうえでも経済力のうえでも、衰退の一途をたどり、現在（一九六八年）ではノロエステ線の同胞を云々するものは少なくなっている状態であるが、一九三八年ころまでの盛況は、いつまでも片よった姿のまま記憶に残つ

ているように思えるので、ここにブラジル人の立場から考えたノロエステの発展と比較して、日本人の考えを訂正したいと思った。

原始林の開拓からはじめたわれわれの頭には、すでに挙げたような同胞の人口と土地所有者の数と、その総面積とは、まるで日本移民こそ、ノロエステ開発の代表者であるかのような錯覚をおこすことがあった。その理由は、この地方の発展をわれわれは日本人だけについて考えていたからである。

サンパウロ州の近代農業は、はじめは巨大土地所有者の大農場によって発展させられていったが、今世紀初頭におけるコーヒー生産過剰からきた不況後、小土地所有者による農場経営がさかんになった。そして、ノロエステ鉄道沿線は、一九二〇年ころから、すばらしいいきおいで小土地所有者が増加していったのである。

日本人のノロエステ入りは、すでに他のところでも述べたように、第一回移民のときにはじまり、植民者（自作農）としては、一九一五年に、カフエーランジアの平野植民地、およびビリグイ駅のビリグイ植民地にほとんど同時に入植しているので、先駆者として多くの辛酸をなめたことは事実である。その後新開地ノロエステの評判は、多くの日本移民をこの地に誘入した。しかし、時代の波は、日本人ばかりをこの地方にまねいたのではな

かった。それを数字のうえで、ここに示そうとするのである。

しかし、それにさきだつて、面積による小・中・大・巨所有地別を、セルジオ・ミリエーの著書を参考にしてみらべてみると、小所有地というのは一アルケールから二五アルケールまでで、そのつぎは中所有地で、三六アルケールから一〇〇アルケールまでである。大所有地は一〇〇アルケール以上五〇〇アルケールまで、さらに五〇〇アルケール以上が巨大所有地（ラチフンジオ）と考えられる。これは、当時のブラジル事情を少しでもしるものにとっては合理的な分け方であることがわかる。

ところで、日本人所有地は、一九三三年には平均一六アルケール弱、一九三八年には、一五・六アルケール強ということであった。日本人植民地は、たいがい一〇アルケール（二十五町歩）を単位として売りだしていたのであるから、この平均面積は、おおむね一般的なものとみることができると。例外として二〇〇アルケール、あるいはそれ以上の大所有地もないではなかったが、片手で数えられるほどの少数であつたらう。しかも、ブラジルでは自作農として最低面積にも等しい二十五町歩でさえも、初期移民たちの頭には、日本の所有地と比較して広大なものと感じられたのであつた。ここに錯覚のおおもとがあつた。

セルジオ・ミリエーの『ロテイロ・ド・カフエー』によると、一九三〇〜三一年度におけるサンパウロ州内ノロエステ線の小所有地は六、五〇五であったが、一九三二〜三三年度、すなわち日本移民二十五周年当時は、二七、一八六になっている。このとき日本人所有地は、マツト・グロツソ州をもふくめて、なおかつ二、九〇八にすぎなかった。すなわち、これをサンパウロ州内だけにきぎってみれば、ノロエステ線における日本移民の土地所有者数は約一〇パーセントにすぎなかった。そして、そのパーセンテージは小所有地に対してだけのものであることを、あらためて注意しなければならない。さらに、一九三五〜三六年度は二八、六四一であるが、日本人は一九三八年においてさえ三、九六九であった。一四パーセント弱である。しかも一九三五〜三六年度の中所有地は五、一五二で全日本人所有地数よりも多く、大所有地は一、二二四、さらに巨大所有地は二一二というふうな数字を示している。

ただ人口の密度からみると、ミリエーは、ピラジューとペンナポリスを例にとって、この地方は外国移民の五〇パーセントは日本人であるといっているから、外国移民の割合の二三パーセントの半分、すなわち一一・五パーセントが日本人ということになる。まあ、どこへ行っても日本人の顔がみられるということであった。

以上は一九三五〜三六年ころのノロエステ日本移民の最盛期ころの状況である。だからノロエステは日本人の開いたものだという錯覚をおこしてはならないということである。ただ、日本人自らが誇りとしていたところは、日本人の耕作地は、どこへ行っても手入れがいきとどいていたという点であった。これは自作農が多かったことにもよろう。だから面積にくらべて生産量も多かったと思われる。ただし、数量的に比較する材料がないので、客観的に証明できないのは残念である。

注

(1) 『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』挿入「ノロエステ線邦人植民地統計表」による。

46 日本人はなぜ農業に執着したか

太平洋戦争の直前まで、ブラジルにおける日本移民の九〇パーセントは農業に従事していたといわれる。しかも、それはすでに三十年の移民史をけみしたあとの傾向だったのである。これを、その極端な対照としてのシリア人などくらべると、彼らはブラジルに着いた日から商業を考えていたし、やがて工業方面にも進出して、移

民の数からみれば、日本人より少ないにもかかわらず、いわゆる成功者の数はおそらく日本人の比ではないだろう。戦後進出してきた中国人も、多くは商業やサービス業に向かっている。

日本人は、農業国としてのブラジルに移住して「まじめに」農業にいそしんでいるというので、一方では「不同化民族」のレッテルをはられながらも、一部からは、おほめにあずかってきた。日本人は、なぜかくも徹底して農業に執着してきたか、それは農本的な日本国民の伝統によるものだ、と行ってしまえば話は簡単であるが、われわれは、もっとこまかい説明がほしい。この移民史をかきだした筆者は、それを痛切に感じだしたのであった。そこで、太平洋戦争勃発までの、ブラジルにおける日本移民の歴史のなかで、その理由をさぐってみることにしたのである。

日本移民の多くは、家族的契約労働者として、コーヒ―農場へはいったものであるが、彼らには、日本において、農業から離れていた者が多かったとはいえ、農業がきらいだったわけではなく、日本の農村の生活が苦しかったので都会へとび出していった者であって、農業移民となり、農業に従事することが、少しも不服ではなかった。

初期移民たちの移動性がはげしかったことは、農業方

面に出稼ぎの目的にかなった金もうけの仕事が少なかつたからで、農業そのものがきらいだったからではなかつた。

だから、腹をきめて長期戦のかまえをとったときは、植民地を建設して本腰で農業をいとなんだのである。それは、日本移民が、祖国において、しっかりと農業に結びつけられていた人間であったことを物語っている。だから、日本において、すでに農業をはなれていたものや、都会でサラリーマンをしていたような、いわゆる「文化移民」でさえも、一時は農業によって新生面を開拓しようとして決心したし、その後農業をつづけたものも多かった。また、体力、生活様式および文化の面で奥地農業にたえられなくなってサンパウロ市へでてきても、必ずしも商売で身をたてようとは思わなかった。シリア人のように、マスカッテ（行商人）になって、ブラジル中を歩きまわるようなものは、例外中の例外といえるほど少なかつた。あるいは中国人のように、こぞってパステイス（肉パイ）店をひらき、料理店を経営するようなこともなかつた。

これに反して、農業と直接連絡のあるフェイランテ（自由市場の商人、とくに野菜売り）になった。

日本移民にとって、金儲けは、鋤をとって土をたがやすことであつた。体力のかぎり働くことであつた。働いて働いて、結果は商人に儲けさせた。しかし、自分から

商人となって儲けようとは思わなかった。商人になるものは、ほとんど日本人相手の商人になった。そのほうが気楽に商売ができたからかもしれないが、シリア人たちは言葉がろくにわからないときから異民族の間に突進していったのである。そこには、言葉とか生活様式とかの差だけでは割りきれないものがあつた。農業国民にとっては、土をたがやすよりも、商売はめんどろに思われたのであつた。鋤をうごかすほうが気楽だつたというところにも、伝統的な農業国民の行き方があつた。畜産に向かうこともおそかつたし、いまだに畜産家の少ないのも日本移民の特長である。そのかわり、農業方面では、いろいろな作物をこころみ、成功もしているし、技術のうえでも多くのものをブラジルの農業に貢献した。

また、中間商人によつて農産物の売価が左右されることをいさぎよしとせず、協同組合をつくつたが、中間商人の仕事を、日本人の手におさめようとする動きはほとんどなかつた。あつたとしても一般的な動きとはならなかつた。商人になるためには、言葉ができ、ブラジル人の気心をよくのみこみ、そのうえ、この国独特のかけひきをのみこまねばならないことはわかっている。だからもし日本人がほんとうに商業を好み、この方面で才能を発揮する国民であつたら、はじめからこれに努力したにちがいない。シリア人などはこの経験を積むために、小

間物のかばんを肩にかけて、山野を跋渉したのであった。

日本人の一部に、商売をいやしみ、毎日金をかぞえる生活を下等なものと感じる人間のいたことは事実である。昔の武士が、商人を自分たちより下の階級とみなした習慣が、どこかにこびりついていたことも事実であろう。

しかし、金儲けを目的として出稼ぎにやってきた日本人が、もし商人になる気持ちが強かったとしたら、必ずその方へ向かったにらがない。商売をいやしんだのは、むしろ商人になれない理由が、別にあったからである。

農業国民としての伝統には、金儲けの早道である商業へ向かわせることにはばむなにものがあったとみなければならない。

それは、ブラジルのファゼンデイロが、なかなか産業資本家に轉身できなかつたことと、なにか似たものがあつたのではなからうか。

それでは、農家で生活してきた人間が商人に向かないのは、どんな点であつたらう。

もともと農と商とは別々に発達してきた。厳密にはまづ農があつて商がたとみられないこともないが、農業生産の技術と交易の技術は別なコースをとつて発達してきた。

農家は土を相手に闘ってきた。そこに人間関係があるとなれば、日常的には家父長的な関係であつた。商にお

いては、はじめから対外的な人間関係が主であり、この関係——取引き——にあたっては両者は平等であった。等価物の交換に命令は入りこめなかった。たえず、平等な人間づきあいにおいて、商人は農夫にみられない対人的交渉——ネゴシオ——のテクニクを獲得していった。

そこには土を相手に闘っている人間にはみることのできない別な経験がつまれていった。

こうして、交換において、農は、どうしても商に一步さきんじられて、被搾取的な関係におかれがちであった。農は商と対立した。農が商を見る目は、しぜん敵対的なものとなる。また、直接生産にたずさわらないで利益を得る人間として蔑視する傾向を生んだ。

封建制度内における農は、生産物を主として領主へおさめていた点で、資本制時代にくらべると商との関係はうすかったが、生活の面では、決して農家だから商人よりゆたかであったのではなかった。むしろ逆の場合が多かった。日本の支配者は、この苦しい農家にたよっていたので、社会的な身分としては、農を商の上において、農民の不平をおさえようとした。農業立国は封建制の本質である。人民の大部分が、まだ農家であった明治時代においても、農民は国の宝として賛美された。修身教育などでも、農業を賛美することが多く、商業を賛美するこ

とは少なかつた。国民はいつのまにか、農業こそ、もつとも道徳的な生き方だというふうに感じてしまった。

ブラジルへ渡航するときも、「大地をたがやす」「原始林を伐りひらく」夢はえがいてきたが、一銭を二銭にかえ、一円を二円にかえ、やがて百万長者になってみせるという意気ごみできたものはほとんどなかつた。

日本移民は農業生産のうちこむことはできたが、商売の面では子供であつた。商人たちは、日本人を生産者として信用した。日本人に目をつければ、商売が成りたつたのである。移民たちは、だんだん自分たちが商人階級に利用されていることに気づきだした。百姓ほどこの世の中で損な立場におかれているものはない、となげきながらも、いぜんとして百姓にとどまっている。こうして、商業にのりだすものもあつたが、成功者はいぜんとして少なかつた（その理由は後説する）。

農業が自然を相手にしながら、自然の不安定さを克服する技術をもたなかつた戦前の長い時期において、天候による失敗には、あきらめをもって対処するよりしかたがなかつた。闘う相手は無言の自然であつた。忍従は農



植民地内売店

家の人々の心の底にうえつけられていった。生産物の価格の変動で予期した成果がえられない場合でも、商人のように、経済界のうききを広くながめ、利益を計算するようなことはなく、丁（ちよう）とであれば半（はん）とかけるといふように、ただめくら減法な態度をとるよりほかに、いい知恵はなかった。しかも、あたれば一年でも、すばらしいもうけがえられるというブラジルの農業を経験しだしてからは、トストン、トストン（あるいはクルゼイロ、クルゼイロ一銭、一銭）の商売にうつる気持ちをもてなかった。しかも他の国の移民が商売で儲けているのを、うらやましく思い、それなら自分も商業

へ進出して、ひと儲けしようと思うものもでてくるが、これは動機がまちがっていた。日本人相手の商売をしていると農家の経済に支配されてしまつて、共倒れになる。日本人の店ができたというので便利がられ、客もつくが、それだけ「情実」がからまつてきて、掛け売りが多くなる。一度農家のふところ具合が悪くなると掛けはもうこげついでしまつてとれなくなる。どれだけ共倒れした日本人商家があるだろう。日本人社会では、長いあいだ、農と商との行き方がはっきり区別されていなかった。しかも、日本人の社会で、商人が農家のおしつけてくる情実をはねかえそうとすれば、もう、その土地では商売がでなくなつてしまふのである。

このようにして、農業国民のあいだでは、商業は、いよいよむずかしいものとなつてくる。だから、はじめから、農家と運命をともにすることをたてまえとして出発した協同組合だけが存続してきたのであつた。

そこで、農業のなかで生きてきた人間が商業に進出するまでには、数十年の歳月が必要だったわけである。その間に、少しずつ商人としての資格を身につけていったし、移動の結果、古い農村共同体的きずなをたち切つていったからである。しかし、今日にいたつてもなお農家の経済に密着した商人たちは、あいかわらず、農家とともに「七ころび八起き」をくりかえしているのである。

もう一つ、農業を中心として生きてきた移民たちが、これをぬけだすのに数十年の歳月を要したということとは、長いことブラジル人の社会と直接交渉をもたずにきた植民地生活において、一面では無理な同化過程をたどらずに、ブラジル人としての二世、三世を育成してきたのであるが、そのため広いブラジル社会で活躍して金を儲けようとする機会にであわなかった。もつとも対照的なシリア人の歴史をみると、彼らははじめから異国的環境に勇敢に突進した。商業国民として、そうせざるをえなかったのである。彼らも同化過程における様々な苦しみをなめたし、大都會では、ブラジル人からキストとよばれる集団区域をなして生活した。しかし、生活戦線での第一歩がすでに他国人相手であった。そこに「人情の限界」をさだめることができたし、その点でも伝統の力強さがみられた。

こうして、農業国民としての伝統は、移住者としての生活形態（植民地）を決定し、そのため、再び商業への進出をおくらせ、第一期の植民地（約二十五〜三十年間）の解体をおわったところから、次第に商業方面へも進出することになるのであった。

（第6部終り）